

富山大学薬学部七十五年史

昭和40年





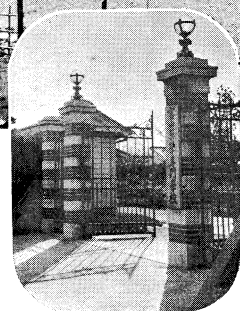
中山大学系部七十五年史



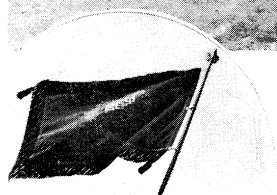
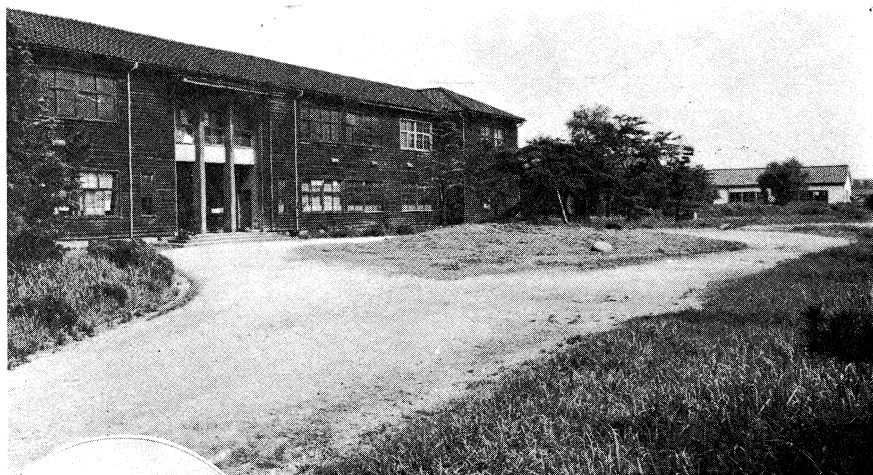
富 山 県 立 薬 学 専 門 学 校
— 明 治 四 十 三 年 創 立 —



富山薬学専門学校
— 大正九年創立 —

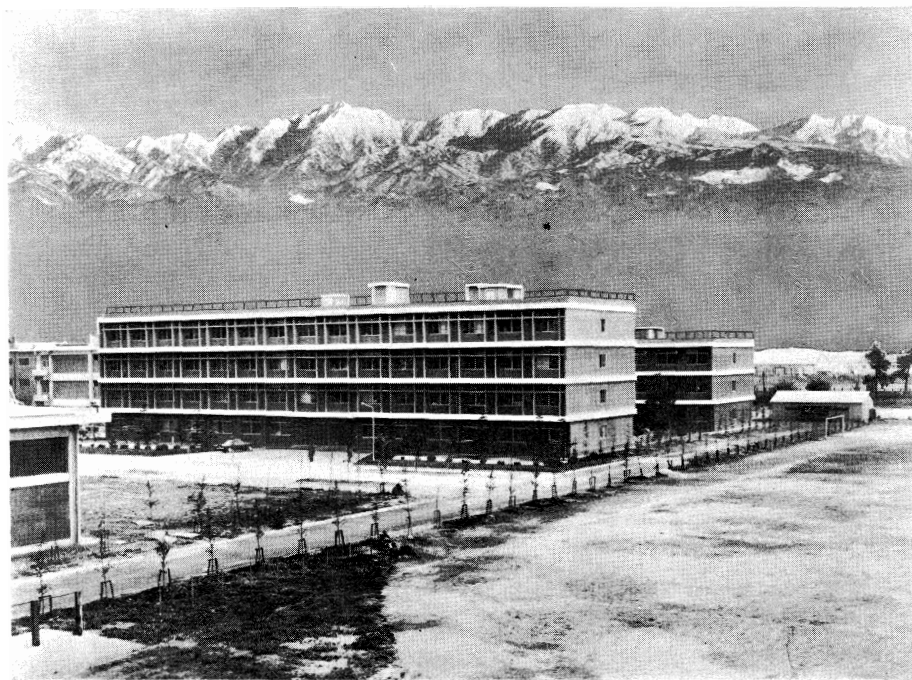


正 門



校 旗

富 山 薬 学 専 門 学 校
 — 昭和二十三年復元 —
 昭和二十四年以後
 富山大学薬学部となる



富 山 大 学 薬 学 部

— 昭和三十九年落成 —



富山薬学専門学校開校式に列席された

日本薬学界の諸先生

丹羽藤吉郎博士

丹波敬三博士

山田 董博士

長井長義博士

平山松治博士

池口慶三博士

朝比奈泰彦博士

高橋三郎博士



共立富山薬学校長(初代)
 坪 沢 金 広



富山市立富山薬学校長(二代)
 日 野 五 七 郎



富山市立富山薬学校長(初代)
 桜 井 勘 六



富山市立富山薬業学校長（初代）
堀 大 次 郎



富山県立薬業学校長
富山県立薬学専門学校長（初代）
中 西 司 馬



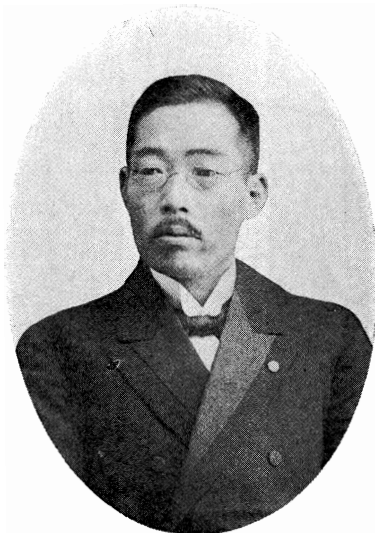
富山市立富山薬業学校長（二代）
堤 従 清



富山県立薬学専門学校長（二代）
薬学博士 平山増之助



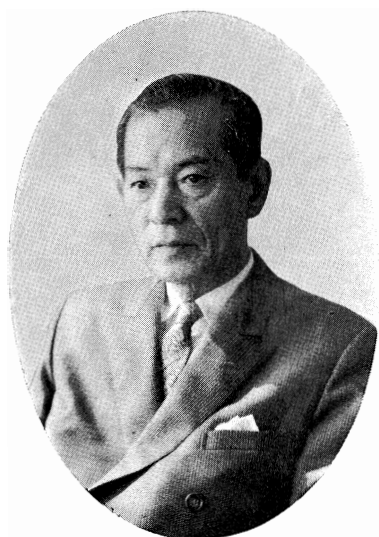
富山薬学専門学校長（二代）
薬学博士 平山松治



富山県立薬学専門学校長（三代）
富山薬学専門学校長（初代）
薬学博士 小野瓢郎



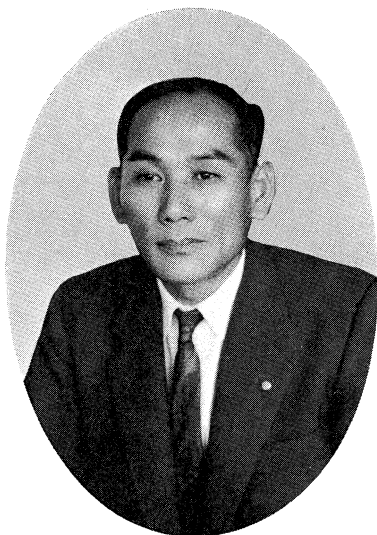
富山薬学専門学校長(三代)
薬学博士 高橋隆造



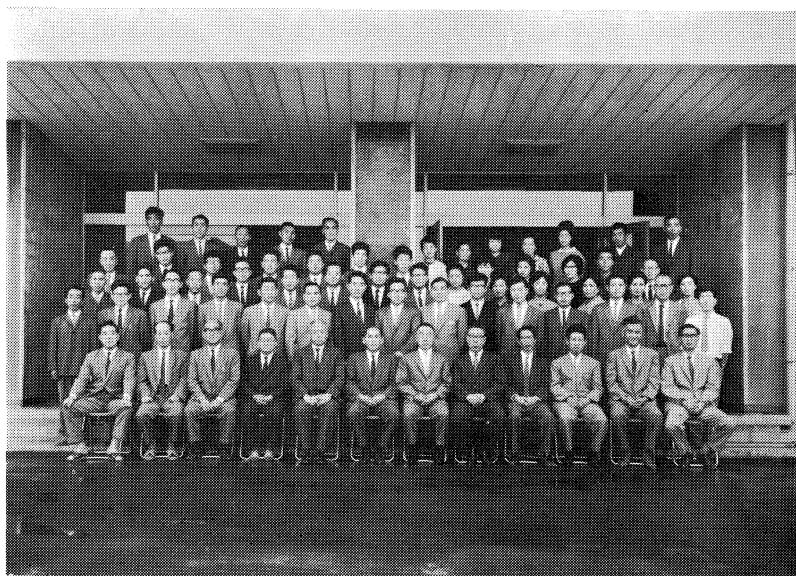
富山大学薬学部長(二代)
薬学博士 中沖太七郎



富山薬学専門学校長(四代)
富山大学薬学部長(初代)
薬学博士 横田嘉右衛門



富山大学薬学部長(三代)
理学博士 志 甫 伝 逸



富山大学薬学部職員

(昭和40年9月現在)

序

富山大学長 横田嘉右衛門

沿革をたどると本学部は明治二十六年に富山のくすり関係の子弟養成を目的に薬学校として発足したことに始まり正に四分の三世紀の長い歴史を経たことになる。この長い伝統とそれに四、〇〇〇名に垂んとする出身者の数はひとしく大きな誇りであるが、それにもまして大事なことは質の問題で全国いたるところ本学出身者に対する不動の評価こそ母学最大の栄光と言えよう。

学校の名称も所管も所在地もいくたびか変遷をとげ、今やここ五福の土地に富山大学の重錘として永遠の基礎を据えた。物的にも人的にもかなり整備をとげ、まさに大飛躍前のウオーミングアップに専念している。

出身者の結集団体である富山薬窓会も堅実な歩みを続け、その目的である母学に対する関心と援助とは常に心温まるものがある。

今回錦秋を期して薬窓会を中心に創立七十五年の多彩な記念事業が展開されることになった。

本史も記念事業の一環として計画され、その編集には幸い適材を得てここにこの種記念史としてはけだし出色のものとなった。

私は長い七十五年の最後段の二十年余を即ち戦災、復興、大学転換、五福集中等に関係した。これだけにて思い出は尽きない。時に苦悩の中にも常にやりがいを感じて、終始できたことは生涯の幸福で感謝に堪えない。ここに一文を草して序とする。

序

富山大学 薬学部長 志 甫 伝 逸

昭和四十年十月本学部創立七十五周年記念祝賀式典が举行されるに当り、七十五年にわたる発展的変遷の経緯を現わす本学部沿革史の刊行をみるに至ったことは、まことに慶祝に堪えない。

富山大学薬学部七十五年史の刊行に当っては、その編さんは容易ならざる困難な仕事で、散在せる資料の蒐集は、全国にちらばっている卒業生の方々のご協力やら、往時の地方新聞の記事を見出すことなど、極めて困難な仕事であった。これを多年にわたって乗り越えることが出来て、着々と進み、ここに七十五年史が刊行されるに至り、編さんに当られた諸氏のご辛勞に對して深く敬意を表する。

富山大学薬学部の歴史の始まりは、富山売薬に端を発している。一六九〇年（元禄三年）富山藩二代藩主前田正甫侯が千代田城内で、某大名の急病に際し、青貝の印籠の中にある「反魂丹」を出し服用させたところ、病が平癒し、その奇効に列座の諸大名おどろき、これを機に売薬業者汎く諸国に行商し、富山売薬の名声はいやが上にも天下にひびいたわけである。

このような富山売薬の大きな後ろだてをうけて、売薬業の有力者たちの手によって、共立富山薬学校が創立され、富山市立富山薬学校、富山市立富山薬業学校、富山県立薬業学校、さらに富山県立薬学専門学校、ついに官立に移管して富山薬学専門学校となり、戦後の学制改革により富山大学薬学部となって今日におよび、日に発展の経過を辿っていることはまことにご同慶に堪えないところである。この七十五年の内面には全く

苦闘があつたればこそ、今日の発展があつたわけで、その伝統こそ富葉の精神であり歴史であると思う。

富山大学薬学部七十五年史は先人の活躍と苦闘のあとを辿ると共に、そこにみる不撓の精神をくみとり、いささかでも今後の発展に役だてたいと考えてなされたもので、過去の懐旧に浸るとか、単なる記録として終らしめたくないものである。

この輝かしい七十五年！今日の発展の歴史を造り上げた崇高な富葉の精神、伝統は今や実社会へ送った多くの卒業生の素晴らしい大きな原動力となっている。

この七十五年史を読まれて、その苦闘の歴史をお知り願ひ、認識を新たにして今後共当薬学部の発展のためご支援、ご協力を賜わらんことを切にお願い申し上げます。

発刊の辞

富山大学薬学部七十五周年記念事業委員長

会長 石 黒 七 三

創立七十五周年記念事業の一として本史を編さん刊行することになりました。富山県における薬学教育は富山薬業と歩みをともに伸びて来たもので、人材をつくることが富山薬業百年の大計をなすものとして明治二十六年富山の売薬業者みづからつくった共立富山薬学校を出発点として私立が市立、県立となって進んで来たその時勢に対応して明治四十三年には富山県立薬学専門学校にまで発展し、大正九年には官立に移管、終戦後の学制改革により昭和二十五年富山大学薬学部となりました。この間育成された人材数今ではひろく全国各界各層に進出され、よく変転する時代の風雪に耐えて薬業の隆昌、国民保健の向上に尽瘁され、また現に貢献されつつあります。学舎またいく度か移転されましたが、その都度施設内容が充実され、教授陣と相俟って現在全国屈指の偉容を整うるにいたしました。古きをたづね新しきを知ることが人生行路に深い意義をもつとともに将来への道しるべとなると信じ、敢てご一読をねがう次第であります。刊行にあたりつぶさに労を惜まれなかった編集委員の方々に深くお礼申し上げます。

昭和四十年十月

目次

一、題	富山大学長 横田嘉右衛門筆
一、写	富山県立薬学専門学校
真	富山薬学専門学校及正門

〃 (復興後) 及校旗

富山大学薬学部 (五福校舎)

富山薬学専門学校開校式に列席され

た日本薬学界の諸先生

歴代校長並びに学部長

富山大学現職員

一、序	富山大学長 横田嘉右衛門……………	一
-----	-------------------	---

一、序	富山大学薬学部長 志甫伝逸……………	二
-----	--------------------	---

一、発刊の辞	富山大学薬学部七十五周年記念事業	
--------	------------------	--

委員 長 石黒七三……………	四
----------------	---

第一章 概

史……………	一
--------	---

第二章 前 史……………四

第一節 売薬の始め……………四

第二節 富山売薬の沿革……………四

第三節 売薬の信用保持……………六

第四節 富山本草学……………七

第五節 明治時代の医薬制度……………九

第六節 明治初年の薬学と薬学教育……………一〇

一、大学教育……………一〇

二、大学以外の薬学教育……………一三

第七節 明治初期の売薬と薬学校設立運動……………一四

一、西洋文明の移入と売薬……………一四

二、大学東校の売薬取り締り……………一四

三、文部省の売薬取り締り……………一五

四、舎密学校設立の請願……………一六

五、新川県権令の告諭と薬学校設立計画……………一八

六、売薬無視の規則と富山売薬業者の努力……………一九

七、売薬印紙税規則の発布による打撃——

売薬の改良と薬学校設立の決議……………二〇

八、丹波敬三教授の来富——

薬学校の設立を強調……………三三

第三章 薬学校・薬業学校時代……………二六

第一節 共立富山薬学校……………二六

一、創立経過……………二六

二、創立記念式……………三三

三、卒業式……………三三

四、維持及び状況……………四〇

第二節 富山市立富山薬学校……………四〇

一、移管経過……………四〇

二、明治三十二年の大火による類焼……………四三

三、富山市会の廃校決議……………四六

四、「富山市経営策」よりみたる富山市と

売薬並びに薬学校……………四一

第三節 富山県富山市立富山薬業学校……………四三

一、維持及び状況……………四四

第四節

富山県立薬業学校

四〇

二、校舍再築運動

四〇

一、移管運動

四〇

二、創立

四〇

三、開校式

四〇

第五節

組織と維持

四〇

一、校則

四〇

二、養成目的と科別制

四〇

三、職員

四〇

四、職務分掌

四〇

五、生徒―募集・入学・在学・卒業

四〇

六、校舎

四〇

七、経費

四〇

第六節

教育

四〇

一、教育一般

四〇

二、学科目、教科書

四〇

三、教授法、実習、施設

四〇

四、植物採集と薬草園

四〇

五、図 書	八
六、校友会と課外活動	八三
七、成績品の出品、展覧	八四
八、生徒の生活	八七
第七節 同 窓 会	八八
第八節 名士の視察とその講演	九〇
第九節 対 外 活 動	九二
第十節 業業諸団体の活動	九六
第十一節 新聞と薬学校	一〇〇
第四章 富山県立薬学専門学校時代	一〇三
第一節 専門学校昇格	一〇三
第二節 設置と維持	一〇五
一、概 史	一〇五
二、開 校 式	一一三
三、敷地・校舎	一一三
四、経 費	一二四
第三節 組 織	一二五

一、専門学校規程……………	二五
二、職員……………	二七
三、生徒—入学・卒業……………	二三
第四節 教 育……………	二五
一、学科目、実習、卒業試験……………	二五
二、課 外 教 育……………	二四
卒業生の活動状況……………	二四
第五節 対 外 活 動……………	二五
第六節 全国薬業大会、日本薬学会総会……………	二五
第七節 売薬業界の支援……………	二六
第八節 視 察 者……………	二六
第九節……………	二六
第五章 富山薬学専門学校時代……………	二七
第一節 官立移管運動……………	二七
一、官立移管の声……………	二七
二、北海道薬学大学問題……………	二七
三、松浦専門学務局長来富と移管の決定……………	二七
四、移管費寄附……………	二七

第二節 設置と維持……………一七

一、概 史……………一七

二、開 校 式……………一八

三、敷地及び校舎……………一八

四、経 費……………一九

五、戦災後の状況と復興……………一九

第三節 組 織……………一九

一、規程及び校則……………一九

二、職 員……………二〇

三、生 徒……………二〇

第四節 教 育……………二〇

一、環境と教育方針……………二〇

二、学 科 課 程……………二一

三、実 習……………二一

四、課 外 教 育……………二一

五、研 究 生……………二二

六、思い出の数々……………二二

七、戦争と教育……………二三

第五節 研 究……………二三

一、研究論文……………二三

二、海外研究……………二三

三、内地研究……………二三

四、研究奨励費及び補助費……………二三

五、学 位……………二三

六、学 会……………二三

第六節 卒業生の活動状況……………二四

第七節 産 学 協 同……………二四

一、売薬改良研究……………二四

二、外国売薬研究……………二四

三、講習会・講演会……………二四

四、図書館の公開……………二五

五、薬業界の支援……………二五

第六章 富山大学薬学部時代……………二五

第一節 薬学部沿革……………二五

一、大学昇格運動……………二五

二、戦後の教育と新制大学……………	二五
三、富山大学の発足と薬学部への転換……………	二五
四、記念の校庭と資料館……………	二五
薬学部が目標・組織・維持……………	二五

第二節

一、教育目標……………	二五
二、学則と学部規定……………	二六
三、学部の組織……………	二九
四、校舎及び設備……………	二九
五、財政並びに援助……………	二九

第三節

学生、学生補導並びに

厚生施設附課外活動……………	二七
----------------	----

一、学生部と学部学生係、補導協議会……………	二七
二、入学志願者と入学生……………	二七
三、学生の健康管理と奨学援助……………	二九
四、学生の厚生とその施設……………	二九
五、就職斡旋と学生アルバイト……………	二九
六、学生の課外活動……………	二九
講座学科目の変遷……………	二八

第四節

第五節

一、学 科	二六
二、コース別科目	二八
三、専 攻 科	二九
四、大 学 院	二九
研 究	二九

第六節

一、教官の論文	二九
二、機 関 研 究	三〇
三、留 学	三〇
四、研 究 費	三一
五、表 彰	三一
六、産 学 協 同	三二
研究室並びに設備	三二
一、医薬資源研究室	三三
二、和漢薬研究施設	三五
三、放射性同位元素研究室	三七
四、動 物 舎	三八
五、研 究 設 備	三八

第七章	葉草園	三二
第八章	図書館	三八
第九章	同窓会	四五
あとがき		五
参考文献		五
重要事項年表		六
索引		七一

第一章 概 史

富山大学薬学部は昭和二十四年に他の学部とともに設立されたのであるが、その前身学校は遠く明治二十六年（一八九三）売薬業者によって創立され、それ以後七十有余年の長きにわたって、富山売薬業の歴史と全国民の保健とに深い関係をもって変遷し発達してきた。さらに、富山藩二代の藩主前田正甫時代に発生したといわれる富山売薬の改良の努力の中に、富山本草学を生み、その研究と教育に生涯を捧げた十代藩主利保時代にさかのばれば、百有余年の長い年月を数えることができる。

わら等は、まず思いを明治の初期にはせて、先覚のたどった道をたずねよう。

西洋文化の移入の影響をうけ、漢方薬時代から、西洋薬を中心とする売薬への政府の転換方針に苦しんだ明治初年、売薬印紙税規則が公布された明治十五年（一八八二）以後の苦難の戦いの中に、売薬改善を目的とし、薬学校創設への努力がつづけられ、ついに明治二十六年に共立富山薬学校の創立にとたどりついたものの、前途には、長いいばらの道がつづいていた。

私立時代の経営難から明治三十年、市立富山薬学校へと移管に成功したものの、生徒の募集難に加えて、明治三十二年八月の富山市大火による校舎の全焼と市の財政難のために、明治三十三年市会において廃止決議をもたらした。売薬業者、薬剤師会員および薬種業者等の熱心な努力によって、行商人養成を主とする薬業学校に転換してようやく存続にきまった。

しかも校舎は、仮校舎を転々とし、たえずいれかわる教師の陣容の整備に悩まされながら、ようやく明治四十年富山県立薬業学校とし、明治十四年東京大学製薬科卒業の陸軍二等薬剤正、中西司馬校長を迎えて教師陣容にも明るさを増し、安心を得たかのようであった。

しかし、これを迎えいれた県議会は快くこれを取り扱わなかった。校舎建築案も一度は否決した。明治四十一年、県会にたいする県当局の苦心の策が功を奏し、校舎建築とともに県立薬学専門学校昇格を決し、四十三年十二月四日新校舎に、東京大学薬学科教授日本薬学会々頭長井長義博士を迎えてはなばなしく開校式をあげるにいたった。ながいいばらの道を歩いた薬学校はようやく固まりかけたかのようであった。

されど、ここにもまだ難関が横たわっていた。富山市の指導者階級および富山県会議員の中には、売薬にたいする将来への不安と、教育にかけられる県財政過重という理由から、薬学専門学校にたいしても、決して積極的ではなかった。時には県議会議員の一部分から廃止の声さえも聞えた。この困難の中に学校をもりたてたのは、売薬業者を中心とする薬業界の力であった。薬専移管早々県議会は、国立移管の決議をした。これは学校の充実は表面の理由であって、実は内側に複雑な理由があったのである。

真の国立移管の声は、前述の県立薬学専門学校開校式において長井博士のなされた強い要望と激励の言葉であった。このような経過で、大正四・五年頃から国立移管運動が薬業界の大きな課題となり、ついに大正六年富山市民及び薬業界の経費負担の決議によって、国立に移管することにきまり、大正九年十一月（一九二〇）官立の富山薬学専門学校が誕生したのであった。

ここに、明治以来の苦難の道に一応の終止符が打たれ、三十二年にわたる官立の富山薬学専門学校時代を現出した。かくて良き校長、良き教官をえて、奥田の地に業者多年の念願であった富山売薬改良の「薬学」が、

そのつぼみを持ったのである。

人生は七転び、八起きのたとえにもれず、昭和二十年八月一日（一九四五）第二次世界大戦における空襲によって書庫と薬品庫とを残して全部焼失した。敗戦という国民全部の苦難の中に、一時は再起も疑われ、時には廃校の声さえも聞かれたが、横田校長を中心として、職員、生徒、同窓生は、母校の復興に、実に真剣にとりくんだ。復興は着々と進み、昭和二十四年（一九四九）を迎えた。新学制による大学昇格が眼前にあらわれた。単科大学としてゆくべきか、総合大学としてゆくべきか、いろいろと論議もあつたが、大勢の赴くところついに総合に決し、審査員は、復興の努力と成果に感激し、難なく大学昇格に決した。それから奥田の里に十六年、大学としての充実にあらゆる努力が捧げられた。五福への集中も、学部にとつて、大きな課題であつたが、昭和三十九年四月（一九六四）見事に建った新校舎に移り、若手の教官の陣容充実に加えて、大学院修士コース、全国の薬科大学に例のない和漢薬研究施設が創設され、内容、外観ともに充実を誇りうるようになった。しかし富山に三百年の伝統を誇る売薬を礎にした「薬学の華」が開き、実を結ぶのは、これからである。

地下に眠る先覚の人々は、この開花、結実の日をどんなにか待ち望んでいることであろう。

第二章 前 史

第一節 売 薬 の 始 め

富山売薬行商人が取り扱った形式の既製方剤がいつの時代から始まったかは明かでないが、医師の少ない時代から、国民の簡易な治療薬として医師、神官、僧侶などによって早くから作られ発売されたものであろう。殊に普通人の入り得ない地方にも通行が許された僧侶によって各地に拡まったこともうなずけることである。

この売薬が隆盛になったのは、江戸時代の後半期からとされている。全国各地に種々の売薬が売出され、互に競争をしていた。その中であって、幕府は享保年間（一七一六—一七三五）頃から医薬の生産を奨励し、販売には幕府自らこれを「町触れ」で広告し売らしめたこともあった。

また、戯作書、養生書、衛生書等にも広告がのせられ、売薬はしだいに大衆にひろまった。しかしまた盛んになるに従って種々の弊害も現われ、幕府も種々と制限を加えた。

第二節 富山売薬の沿革

富山藩の二代藩主前田正甫の時代に始まったとされる富山売薬は、商品貨幣経済の発展期に入り、商業圏の

全国的な拡大がみられ、地方的特産品が全国的に著名になって売買される傾向が強くなった時代に発生し、昔から行なわれてきた他国の売薬行商と共に、時運に乗って急速に伸びたものと考えられる。

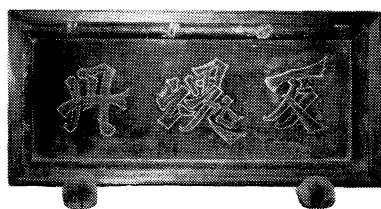
もっとも、富山売薬が最初に取り扱った反魂丹及び同種薬品はすでにそのころ、市販されていたもので、富山売薬の反魂丹は備前岡山の医師万代常閑が天和三年（一六八三）富山二代藩主前田正甫に調製法を伝授したのが始まりとされ、かつその後富山の薬種屋松井源右衛門に伝授し諸国へ販売しよう命じたことによって富山売薬行商が行われるようになったとされている。

しかし、各藩では、自己の領内の産業を保護するためと、また領内から貨幣が流出するのを防ぐために他国からくる売薬行商人を禁止することがたびたびであった。

また交通が不便で、行商人自身の旅にも危険があり、また、多量の荷物を旅先に送るにも多くの困難があった。

このような困難とたたかって、行商をつづけるためには、もちろん富山藩の保護援助もよくなされたが、自ら仲間組という業者の協力態勢をつくり、旅先の藩に交渉をなし、また売薬の重複配置を禁止するとか、また行商人同志の助け合い、あるいは薬の定価を割引しないこと、不正行為の取締りなどを行なって、売薬業の発展をはかってきた。

このようにして、行商地域もしだいに広がり、江戸末期には、行商人の数は二千五百人にも達し、富山藩の財政を補うに大いに役立ち、富山の住民の生活をもうるおしてきた。



「反魂丹」の額
— 前田正甫筆 —

第三節 売薬の信用保持

富山売薬が初期に取り扱った売薬は反魂丹と奇応丸の外二、三の品にすぎなかったようであるが、行商領域の拡大と共に薬方もしだいにその種類を増加し、幕末頃には薬方も約百二、三十種類に達したといわれる。したがって藩及び売薬業者等は、その信用保持のために、種々努力を重ねてきた。ことに、薬方の吟味、原料生薬の入手、薬剤の調合にとくに注意を払ってきた。

もちろん薬方については、漢方医学書、薬方書等を参考にしたことは、現存する薬方の内容によって想像できるのであるが、原料薬である生薬の鑑別は、当時の本草学的研究の状態ではなかなか困難なわざであったようである。原料生薬の仕入れ先を、信用のおける薬種商に求める方法を一つのおきてとしたのもそのためであった。また、幕府は、享保七年（一七二二）六月市販の和薬取調べのため、江戸、大阪、京都、堺、駿府等の薬種問屋仲間の代表者を江戸に招集し、江戸の問屋仲間を加え採薬使丹羽正伯を中心として会議を開き和薬の真偽を検査すべき基準及び方法の統一などを協議し、その結果、江戸、京都、大阪、堺、駿府の五ヶ所に「和薬改会所」という薬品検査所を設け、和薬の買入は問屋仲間に関り、かつこの会所を経由せしめて品質の統一をはかった。

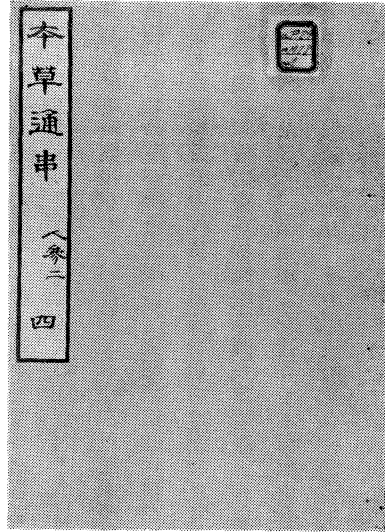
富山売薬の原料生薬の入手先に信用ある問屋を規定したのも、おそらくこれらの問屋をさしたのではなからうか。

第四節 富山本草学

先に述べたごとく、売薬の原料である生薬の真偽鑑定は、売薬にとって大切なことであつた。ここに当然「薬学」が生まれねばならなかつた。三代の藩主利興（一六七八—一七三三）の時代に、当時の本草学の權威であつた稻生若水の弟子、内山覚仲を生んだ。覚仲には「草木弁疑、宝曆八年刊」の著があるが、大きな仕事は加賀五代の藩主前田綱紀の依頼により着手した稻生若水の「庶物類纂」の大事業をたすけたことであつた。

覚仲の研究が富山売薬に影響を与えたことは、小柴直矩の「越中の本草研究」に記されているが、富山本草学の本流は富山藩十代の藩主前田利保（一七九九—一八五九）の本草学的研究で、富山売薬の研究の礎石に「薬学」を打ち建てた唯一の人といつても過言ではなからう。

利保は寛政十二年誕生、天保六年三十六才にして封をつぎ、安政六年（一八五九）六十才で死去したが、幼にして植物に興味をもち、長じて岩崎常正に本草学を学び、宇田川榕庵について蘭学を学び、さらに、当時、産物学に名の高かつた設楽市左衛門、田丸六蔵、馬場大助、飯室庄左衛門、佐橋節翁、黒田斉清、武蔵孫左衛門等と共に赭鞭会を作り、研究を怠らなかつた。一方、家臣を派し、また自らも植物、虫魚を採取し、江戸不忍池の端の邸内に数千歩の薬草園（萬香園と称した）を作つた。弘化三年致仕して富山にかえるや、益々本草学の研究にはげみ、深山幽谷を跋涉して草木虫介を採集した。また千歳御殿の庭園に、さらに東田地方村に数千歩の薬草園をつくり、その中央に大小軒と称する楼屋を建てた。薬草、薬石、その他珍品奇物を陳列し、薬品会と称し、士民に親しく縦覧させて新智識の啓蒙につとめた。さらに毎月、日を定めて近臣に蘭学を授け、



本 草 通 串

本草学を講じてこれをきかしめ、また日新会なる月次品評会を開いてその優劣を批判させた。

利保の著述は多数に上るが、公刊されたものに、**本草通串**九十四卷五十六冊——これは和漢書から、甘草

を始めとする
八十八
種の生
薬につ

いての文献を集めたもの、**本草通串証図**五冊——本草通串に記載した生薬の原植物をお抱えの絵師に写生せしめて木版としたもの、**綱目袖珍鑑**等がある。その他筆稿本が多数あるが、現在国立国会図書館に保存されている**萬香園裏花壇綱目**五冊は——本草通串に記載された生薬の原植物及び類縁植物と思われるものを、越中の領内（新川郡、婦負郡）及び立山、江戸附近及び全国各地で採取し、萬香園、田丸寒泉園、飯室楽圃、馬場資生園等において栽培したものと比較し、また各種の和漢文献を参照しつつ研究したもので、本草通串証図はこれらの研究からう



本 草 通 串 証 図

まれたものと思われる。これらは利保の近代科学者であることを立証するものである。

この利保の研究こそが、富山壳薬原料の真偽鑑定のための大切な基礎をなしたものである。牧野富太郎博士の植物図鑑に「えきさいぜり」の名があるのは、利保の発見したもので、「益斉」の号によって命名せられたのである。

第五節 明治時代の医薬制度

明治維新となり西洋医学の普及と共に、洋薬の需要が急激に増加したが、輸入される洋薬には贋造品がはなはだ多かった。当時取り締りの方法もなく、薬業家には鑑別の知識もなかった。

明治二年（一八六九）石黒忠恵は「贋薬鑿法」を著わし、ついで何冊かの試験法、分析化学の書が出版された。明治五年二月政府は文部省に医務課を置き、同六年三月医務局と改称した。医務局の最初の仕事は、まずこの贋造品を駆逐することにあった。そこで大学東校の独逸教師にたずね、その報告によって、「薬品取調の法」を具申した。同年六月文部省令第九十号をもって全国の薬種商を調査し、その履歴によって薬舗なる称号を与え、薬品の取扱いを許した。

翌明治七年八月十八日（一八七四）わが国初めての医薬制度ともいうべき「医制」が公布された。（本令は東京、京都、大阪の三府にだけ施行）医制は翌八年五月改正、公布された。

この改正法に基づき、明治九年一月一日から薬舗開業は試験をうけることに改められた。

試業科目 甲、算術 乙、物理学大意、化学大意 丙、薬物学大意 丁、処方学大意

内務省は明治七年三月、東京に、また明治八年大阪に、司薬場を設け、薬品検明に当らしめ、さらにしばしば布告も発したが、なかなか目的を達することができないので、ついに明治十年二月十九日（一八七七）毒薬劇薬取扱規則を公布し、さらに明治十三年一月十七日、薬品取扱規則を公布した。このように薬品取締の規定を設ける以上、その薬品の基準をたてる必要がおこり明治十四年一月「日本薬局方」制定に着手した。

この後、薬舗開業者と薬品販売を主とする薬種商との外に、別に薬品を製造する免許製薬人なるものが生れたので、明治九年製薬免許手続を定めた。しかしこの三者は、後年薬剤師、薬種商、製薬者を区別する源をなし、明治二十二年（一八八九）法律第十号薬品営業並びに薬品取扱規則（いわゆる薬律）の発布となり、さらに内務省令第三号薬剤師試験規則の公布となり、ここにわが国薬事制度の基本が定まることになった。

薬剤師試験科目

学説Ⅱ物理学、化学、植物学、生薬学、製薬化学

実地Ⅱ分析術、薬品鑑定、薬物製煉、調剤術

かくて同二十三年東京、大阪で新規則によって試験が行なわれた。

第六節 明治初年の薬学と薬学教育

一、大 学 教 育

明治維新において、政治の大綱を定めた政府は、民心を安定せしめるのに多忙であったが、その間国民の教

育に心を用い、明治五年「学制」を定めた。大学教育についても、種々変遷したが、明治十年東京大学をつくり、医学も、和漢医学から、独逸医学に移り、学生を独逸に派遣し、また独逸人教師を聘し、西洋医学興隆の基礎をつくった。和漢医学は最初大学に講座があったが、ついに大学から姿を消した。

薬学もこの大勢と共に進歩し、明治二年大阪に舍密局を設け、外人を聘して理化教授の任に当たらしめ、明治五年医学校となるや、独逸人を招聘し、また学生を独逸に派遣し、明治六年初めて医学校に製薬学教場を設けたが、薬学教育の要望に程遠いものであった。明治六年長与専斉が欧米視察から帰り、医務總裁の任につくと、薬学は医学と共に進まねばならない学問であるとの考えから、同年六月文部省に「製薬学校設立の儀」につき伺書を提出した。こえて明治七年七月二十五日東京医学校に製薬学科設置の件が公布、同年九月三十日に製薬学科本科が開校せられ、生徒を募集した。これが大学薬学科の始めで、同年四月、東京医学校と東京開成学校を合併して東京大学となり、翌十一年製薬学科本科第一回の卒業式が行なわれ、九名の製薬士を社会に送った。その後、明治十九年学制の大改革が行なわれ、東京大学は帝国大学と改まり、製薬学科を薬学科と改称した。

下山教授は製薬化学、植物学、薬品試験法、生薬学、薬舗業務を担当し、

丹波敦教授は植物学の内解剖学、裁判化学、衛生化学を担当し、

丹羽助教授は、調剤学、有機化学、薬草分析を担当した。

その後同二十四年（一八九一）久しく欧洲に留学した長井長義帰朝するに及んで、薬学科講師（同二十六年教授）となり、薬学科の規模が略々定まった。同三十二年（一八九九）始めて下山順一郎、丹波敬三、長井長義、田原良純の四氏が薬学博士の学位をうけた。

二、大学以外の薬学教育

大学以外の薬学教育は、明治初年から、その必要を感じ、二、三の試みがなされたが、全国的に私立薬学校の設立を見るに至ったのは、明治十五年五月二十七日（一八八二）の文部省布達により「薬学校通則」が定められてからである。

この通則は薬学校を甲種、乙種の二種にわけ、甲種は尋常の薬学科を教授し、薬剤師の具成を図るものとし、教員中少なくとも二名は東京大学卒の製薬士の学位を得たるものをあてるとした。

甲種薬学校の学科目

物理学、化学、動物学、植物学、金石学、薬用植物学、分析化学、薬品学、製薬学、毒物学、薬品試験法、調剤学、

その他、英、仏、独語中の一語

乙種薬学校は、簡易の薬学科を教授し、薬剤師の速成を図り、教員中少なくとも一名は東京大学製薬学科卒業生をあてるとした。

かくて、東京（東京薬科大学の前身は明治十四年、明治薬科大学の前身は明治三十五年）、大阪（大阪大学薬学部の前身は明治十九年）、京都（京都薬科大学の前身は明治十七年）、金沢（明治四年金沢医学館を設立、同七年薬学を併置したが、後廃止）、名古屋（明治十七年名古屋薬学校を設立後、愛知薬学校と改称し、母学の小野瓢郎校長も明治三十年前後、同校長として尽力されたが後惜しくも廃校となった）、熊本（熊本大学薬

学部の前身は明治十八年で、母学の中西司馬校長、平山増之助校長も明治二十年代に校長として尽力した）、福岡（明治二十年福岡薬学校が設立されたが後廃校）、岡山（明治二十年岡山薬学校設立後廃校）、新潟（新潟医学学校附属薬学校は明治十八年第一回卒業生を出し、廃校）の各地に薬学校が設立せられたが、処方箋による調剤権は、明治二十二年三月公布の薬律においても依然として医師の手にあり、薬剤師は有名無実で薬学校教育は全く振わず、各地とも困難で、たえず盛衰があり、廃校となるものが多かった。

薬学教育はこのように振わない情勢下にあったので、明治二十三年に文部省は全国五つの高等中学校医学部に附設薬学科を設け甲種薬学校に相当するものとした。

第一高等中学校医学部薬学科は千葉に設けられ、明治三十四年千葉医学専門学校薬学科と改まった。

第二高等中学校医学部薬学科は仙台に設けられたが、入学生はなく、明治三十五年入学生の募集を延期し後廃校となった。

第三高等中学校医学部薬学科は岡山に設けられ、全国の薬学校の中でも優秀校とされていたが、明治二十七年の高等学校令発布の際惜しくも廃校の運命にあった。

第四高等中学校医学部薬学科は金沢に設けられ、明治二十七年第四高等学校医学部薬学科となった。

第五高等中学校医学部薬学科は長崎に設けられ、その後長崎医学専門学校薬学科となった。

第七節 明治初期の売薬と薬学校設立運動

一、西洋文明の移入と売薬

明治維新においては諸制度がすべて改革せられると共に、西洋の文明が各方面に新たな施策となつてあらわれた。しかも、政府の基礎固まらず、各方面から種々の意見が提案され、朝令暮改もひんばんに行われ、庶民の苦悩もなみたいていではなかった。

しかしながら庶民の保健薬として、全国民に親まれてきた富山売薬も、西洋医学への転換と洋薬の採用という政府の方針にあつて、売薬業者並に富山市民として、全く顔色なきまでに、あわてふためかせ、苦難のどん底におとしいれた。

二、大学東校の売薬取り締り

明治三年十月大学東校において売薬の取り締りを行なうことになるにおよび、時の政府が大学東校にたいして発した訓令を見れば明かに当時の売薬取締方針をうかがうことができる。

「売薬取り締りの儀、東校所轄仰付候については、従来売薬の中、有名無実の分、且つみだりに勅許御免等の文句を用うることを禁じ、神仏の名をかり、あるいは秘伝秘法などとなえ商民をあざむき分外の高料を

むさぼり候惡へきをのぞき、向後大有益の奇藥發明の者へは年限をもつて専売の利を与え候様のご規則に定められ度きご趣意につきその趣意の方法、検査、規則、手続等詳細取調べ申し出すべきこと。」
これによって、同年十二月大学東校（当時、東校には、オランダ人、ドイツ人、蘭法医等が取り締りにあたつた）より、つぎのごとき売藥取り締りについての布達が出された。

売藥取締規則

一、売藥類自今大学東校において名実、効否、検査の上、免状を与え^{賣藥}を許すべき事

一、従来売藥に勅許、御免等の字を用いた神仏夢想、家伝秘方などの称を用い候儀自今一切禁止の事

一、新規売藥發行致し度き者は、藥方、功能、定価（目方何程に付き）等明細記し東校へ願ひ出で免状を受くべき事

一、拔群有益の藥方又は製藥類新たに發明する者は七ヶ年の間当人の専売を許し發明の賞とす。七ヶ年の後はその藥法を明細に記し、諸国一般に布告し広く發行するを許すべき事

一、諸売藥藥品原価巨細に相^{あは}れし東校に於て相當の定価を極め、免状へ記し相渡候条定価の外いささかたりとも増価の儀堅く禁止の事

富山の売藥業者は、この規則によって検査に手間とらばと、手をつくした結果、同四年六月、熊胆丸、奇応丸、感応丸、一角丸、紫金錠、万金丹、反魂丹の七種にたいし、免状が下附せられた。

三、文部省の売藥取り締り

明治五年、官制の変革により大学東校を文部省所轄とし、大学東校における売薬取締を廃止し、さきの免状を返納させ仮りに県に取り締りに移した。

売薬業者等は、漢方薬廃止の声におびえて、代表者をつぎつぎと東京におくり、漢方薬の維持と、漢方薬に
かわる洋薬方の伝授についても嘆願書を提出した。

洋 薬 授 与 願

私共儀

数百年來売薬渡世仕^リ候処、今般蒙^ル御検査^ヲ薬方奉^レ入^ニ御覧^ニ候、以後尙更薬品吟味相調べ精製仕^リ売^リ弘^メ申^ス姿^ニ仕
向罷^リ在^リ候処、只今ニ到^リ世間一同、漢方売薬御廃止ニ相成^リ可^キ申^ス哉之世評承^レ之^ヲ数千人ノ者共昼夜痛心會議仕^リ候
得共、ニワカニ活計之工夫モ相立^テ不^レ申^ス、左候得バ從來売^リ弘^メ來^リ候反魂丹代薬ニハ何薬、奇応丸代薬ニハ何種ト、洋
薬方ニ振^リ代^エ、可^キ然^ル奇方以^テ御慈悲^ヲ、官ヨリ奉^リ願^ニ御授^ケ、爾來売^リ弘^メ申^ス訳ニハ至^リ不^レ申^ス哉ト、一同至願^ニ御
座候、斯遮^{カク}テ奉^リ願^ニ候儀、重々奉^リ恐^レ入^リ候得共、数千人之者共、忽^チ失^シ活計^ヲ候儀、何共歎^ケカワシキ次第、何卒格
別之御慈悲ヲ垂^レサセタマイ、右洋薬方御授^ヲ被^レ為^シ下^サ渡世永続仕^リ候様、不^レ願^ミ重謹^一一同伏^テ奉^リ歎願^ニ候、以上

四、舍密学校設立の請願

さらに、従来の漢方薬廃止のうわさに、おどろき、種々協議するも自らの力にてはいかんともしがたく、先
のような「洋薬授与願」を提出した。また、松本軍医頭の指導による資生堂会社の製剤を富山売薬業者で配置

するようとの話もだが、その不可能なことを訴え、富山に舎密学校をつくり、教師を備い学校で方劑を研究し、旧方劑と共に発売すれば数千戸のものの生計も何とかたてることができるとつぎの訴えをなした。

これが、富山に売薬改良のための薬学校の設立を訴えた最初のものである。時に明治六年（一八七三）であった。

舎密学校建設ノ儀ニ付願

御管下四郡売薬商業ノ者オヨソ四千八百人バカリ、ソノ他右ニ属シ候薬店ヲ始メ物品製造ノ者等数多有^レ之、然^ル処一昨辛未年大学東校ヨリ御布令ノ趣キモ御座候ニ付キ、旧来ノ弊習一洗仕リ、薬品ハ勿論方法等改正仕リ候得共、固ヨリ人命ニ関シ候品ニ仕キ、今一層勉勵不^レ仕^ツ候而ハ、当^今ノ時勢ニ不^ニ相^{アイカナワザルヤ}協^{マカリアリ}一哉ト深ク心配^モ罷^ハ在候処、文部省中ニ於テ御選舉ノ薬法有^ル之^レ由伝承仕^リ候ニ付キ、右法劑御授与ノ儀奉^リ懇願^一、尚仮総代ノ者出府仕^リ候処、不^レ斗^{ハカラズモ}資生堂会社ノ引合筋ト相成、同社調劑ノ薬品ヲ当売薬人へ相授^テ候示談振^リモ有^レ之^レ候得共、総代ニオイテモ決議モ難^ク相成^一候ニ付キ一先ズ引取^リ、売薬方一統へ段々及^ビ説諭^一候得共、当^今ハ九分通り旅^ニ出^レ罷^リ在^リ、留守居妻子女アルイハ親族ノ者申聞^キ候ハ、方劑ヲ御授与被^レ下候儀ト一途ニ相心得^レ旅出^デ仕^リ、殊ニ留守中日要雜費ノ手当ハ仕^リ置^キ候得共、彼ノ社則ノ金高中々出^ト道無^レ之^レ候間、何卒方劑御授^テニ相成^リ候様仕^リ度、若シ其儀相成不^レ申候ハバ、来春帰国迄猶予ニ預^リ度、段申立^テ、迎^トモ人氣相繼^マリ不^レ申ニ付、無^レ抛^{ミンドコロナク}其段彼社へ断^リ置^キ候、然^ル処、頃日ニ至リ着目ノ次第モ有^レ之候哉、先般東京医学校中ニ製薬学一科ノ教場附属ニ相成^リ、ソレゾレ御規則^ヲ被^レ為^シ立^テ一候由謹承仕^リ、旧来許多ノ製薬販売ノ土地ニ於テ、徒ニ手ヲ束^ス罷^リ在^リ候儀ハ実以テ慷慨ノ至^リニ付キ、右御趣意ニ基キ当所ニオイテ舎密学校相設ケ、教師備イ入^レ、別教場ヲ附属シ、製薬学生徒ヲ取^リ、且ツ諸家ノ薬方ヲ集メ教師ノ検査ヲ受ケ、饒益ノ方法ヲ以テ、普ク弘通仕^リ度奉^レ存^ジ候、

尤モ是迄相弘メ候製藥ノ儀ハ旧來人氣ニ服シ望ミノ者モ有^レ之候ニ付^キ、兩様ノ方劑ヲ學校ニ於テ調劑仕リ、漸々ニ旧法相改メ候得^ベ者、数千戸ノ者共活計ノ道モ相立^テ可^レ申^ス候間、何卒文部省ヨリ右學校御許可ニ相成候様、御上達被^ニ成^シ下^一度此段偏ニ奉懇願候、

以上

五、新川県権令の告諭と藥學校設立計画

一方売藥業者は仲間規約を改め、新時代にそわんと努力する一方、東京へ代表を派遣し、政府当局と交渉の結果、ようやく、資生堂会社のこと立消えとなった。また明治八年には、新川県権令宛に、新規売藥免許出願に關し嘆願書を提出した。

また新川県権令山田秀典は、明治八年三月、県下の売藥行商業者総代を県庁に召喚し、營業に關し、次のような告諭をした。

「管下反魂丹等の売藥は全国に普及し營業者は数千人の多きに達し、実に物産の第一に位すれど、惜しき哉旧慣を墨守し草根木皮をもつて調製するに過ぎず、座して将来の衰頽を待つもののごとくなり。今の時におよびて泰西文明の良法を採取し、互いに協同結社して益々売藥の振興を図るべきなり。」

かくて業者等はそれぞれ自主的に結社し、広貫堂、師天堂、精寿堂、弘明堂、振声堂、保寿堂等続出し、売藥業の再建に努力した。さらに新川県監督の下に当業者および藥種店、医師より寄附金を募り「藥學校並びに附屬病院」の設立の計画をなしたが、程なく新川県廃止のためにその実現を見ることができなかった。

六、売薬無視の規則と富山売薬業者の努力

さらに、一般庶民の間には、家伝売薬の信用強固で、政府の力をもってみだりに抑止することができないものがあつた。かくて、明治十年一月二十日に至り、大政官布告第七号を以て、「売薬規則」を公布した。この規則は多少の修正加除があつたが大正三年「売薬法」の制定まで約四十年に近い間つづいた。政府がこの規則を制定した本旨は、売薬の改良発達を期する意志でなく、ついには、これを廃滅せしめようとの考えであつたようである。

明治十一年内務省達を以て各地方に発せられた売薬検査心得書の冒頭中に

「本邦に行わるる所の方劑或は古人の成方に出するものありといえども無稽の方劑十中の八・九に居り、これに加えて奸商、香具師の輩、劇薬を配合し、敗薬を修飾し、夢想と唱へ託宣と称し、愚夫愚婦をまどわして暴利の具と爲し、かつてその利害を顧みざるもの比年都鄙に充滿す、人民のこれを購求するもの、またもとよりその良毒を弁識するに由なく、漫服妄用早晚貴重生命を損うもの少なしとせず、辺陬臨時の急を救い、愚民一夕の心を慰するが如き復た欠くべからざるに似たりといえども、その功もつて其害を償うに足らざること明か也。然れども今日断然禁止すべからざるものは、人智未だ明かならず、衛生の方法未だあまねからざればなり。ゆえに今薬味、分量、用法等を検査し、その宜しきを失わざるものは発売を免許し、有害の方劑はもちろん、危険のおそれあるものは、これを禁じ、無害のものは無能と雖当分これを許可し」

とあるによつてもうかがえる。

このような取り扱いを受けたにもかかわらず、売薬業者の熱心な努力によつて、売薬の需要は年々と増加し

てきた。すなわち、新たに洋薬十余方を製し漢方薬と共に販売し、しだいに改良を施したために、富山売薬の信用次第にたかまり、明治十四年（一八八一）には製産高三百五十万円に、明治十五年には、六百七十二万円に上った。

七、売薬印紙税規則の発布による売薬の打撃

—— 売薬の改良と薬学校設立の決議 ——

当局は、売薬取締規則によって期待した売薬の淘汰改正は全く裏切られたので、当局の売薬に対する思想は一変し、ついに酒、煙草等のしこう品と同一視し、印紙税を附加するに至った。すなわち、明治十五年十月に大政官布告第五十一号を以て売薬印紙税規則を公布した。

売薬印紙税規則公布理由書

「売薬の儀は酒、煙草と同じく日常生活の要品ならざるは言をまたざる儀に候え共、営業を全く禁圧するはまた決して成し得べき事にあらざれば、これが検査を成してその有害を除き税則を設けて徒手暴利の徒を減制せられ候え共、営業上の景況は規則発行以来、日に月におう盛におもむき最初の目的を達するあたわざるのみならず、かえってこれが勢力を増し候姿に至るゆえんのものは、その因種々あり、なかんずく細民の貧困にして売薬をも用うる事あたわざる者、近來多くは富裕となりてこれを購入するの資力を得るもの増加すること、三府そのた繁華の都市における遊民の浮利を射るもの増加し、売薬業者流に帰すること非常に多き等其の最たるものとす。

元来売薬は、その元資の割合に比すれば、利益最も多くことわざにいわれる薬九倍の巨利を得るものにしてわずかに二円の直税あるのみ。これを酒、煙草の薄利にして元資の多額を要するものに比すれば、その課税の厚薄権衡を得ざるのみならず、到底衛生上の目的を達するあたわざる義と存じ候間、現行の規則を増補し直接税の外、更に不直税を附課せられ取締相成度……」

この売薬印紙税規則の公布は、腦天を石にて打たれた以上に大きな打撃を業者に与えたのであった。すなわち明治十六年（一八八三）には、にわかに製薬高は前年に比し八分の一たる八十五万圓、行商人は九千七百人の多きより六千人に減少し、翌十七年には製薬高六十五万圓に減少したのであった。

かくして二百年の歴史を誇る売薬業も衰退その極に達し、業者の悲惨は見るに忍びないものがあつた。ただ手をこまねき、いたずらに印紙税のむごさを訴え、政府の措置を待つだけでは富山売薬の滅亡を見るだけになると言うので、各業者が奮起し、苦悩の間に処しながら資金を投じて事業各般の方面に大革新を断行したのである。

かくして、明治十八年十一月十七日（一八八五）おもだった売薬業者、すなわち邸沢金広、古山調次郎、阿部初太郎、石井義春、古山正人、志波久次郎等の主唱により梅沢町大法寺で売薬者大会を催した。

その会の模様を「中越新聞」明治十八年十一月十九日の記事から抄録して見よう。

「富山町たるや二百年来売薬を以て一大産業となし一万余戸の活路と頼み来たりしも、売薬印紙税発布以來該業者の困難慘状実に譬えるものなきのみならず、外には行商者の犯則相継ぎまた内には従来売薬掛場帳を抵当として借用せし金圓の債主痛く督促し、家計の維持に苦しむもの滔々皆是なり。それ該業に関する諸商工幾千となくその方向を失し手を空しうし、徒食するに至れり。斯くありては地方の衰退日に増し、停止する

所を知るべからず、よって、売薬者たるものは今や奮発もって従来の弊風を矯正し、世の進歩に随伴し、一大会社を設立し専ら売薬の改良をはかり、行商人等に至るまで売薬の何者たるを知らしめこの産業の衰退をばん回せん。」

ほぼ右の主意に基づいて協議せられた結果、次のような決議となつて現われた。

第一、売薬は社会に有効なるものを諸大医の方剤を以て調製販売すること。

第二、薬学校を設け卒業したる者を以て漸次会社の行商人となし、調剤師に従事せしむること。

第三、司薬場を設け、製薬の事業を起し、これを行商人（卒業生）をして広く販売の路を開かしめ、もつて

売薬の弊害をきよう正し、さらに将来越中の利益を増進せしむること。

十二月十三日には、邸沢金広等が調査研究のために上京し、翌年四月二十四日に報告を兼ねた売薬人演説会を大法寺で開催した。

翌十九年七月七日わが業者の苦衷いれられ大蔵省令第二十三号を以て売薬印紙交換規則發布せられ印紙税が緩和された。さらに十月「売薬は無害ならば免許す」ることに改令されたのでようやく活気を生じ、同年の県下における行商人は九千七百人、売上高六百七十二万円に達した。

八、丹波敬三教授の来富

——薬学校の設立を強調——

明治二十三年八月三十日（一八九〇）東京帝国大学丹波敬三教授が来富せられ、中田清兵衛、邸沢金広等の

案内で広貫堂を視察し、売薬業者のために一場の講演をなし、売薬改良の必要と薬学士養成の急務を強調した。

富山日報に掲載された講演筆記をつぎにかかげる。

「富山県富山市は古来売薬をもって著名なる土地にしてこれより収むる利益の多寡について言えば実にばく大なる産物と言わざる可からず。

そもそも当県においてかくまでに売薬の販路を推し広めたるは如何なる原因に因るものなるや。余は從來このことについて研究したき考えなりしも長くその意を果たさざりしに、今回京阪北陸地方巡遊のついで、ここに当市に來遊するを得て宿望を満たすの端を開きたるは余の大いに満足するところなり。

売薬業のごとき單に表面上より視察するも、余のごときしろうとにてはけつて充分の調査をなすことあたはず、また長く当市にとり留して深くこのことを取り調べるの余暇もなし。さりとて多年の宿望をむなくして帰京するもはなはだ遺憾と思ひおりしに、幸いにして武庫川光任君（富山日報社員）、中田清兵衛君（薬剤師）、池辺棟三郎、山田岩次郎、松江房雄の三君（市民病院）、邨沢金広、志波久次郎の二君（広貫堂役員）の懇篤なる指導に因り、不充分ながらも当市売薬の隆盛をいたせし原因の一斑をうかがひ知るの便を得たりき。

富山市の売薬にして本邦古来無二の盛況をいたしたるははたしていずれに基因するなるや。余の今回聞知せる所によれば、その原因中当県旧藩主の周到なる注意に因つて大いに本業者を奨励したるは当時において最も有力なる原因の一たりしならんといえども、また当市の売薬に限りいずこの売捌店にもこれを預け置き翌年に至りて始めて勘定を立つること、すなわち売捌人にたいして寛大の信用を贈りたることをその販路を広めたる一大原因ならんか。古来の慣例に因れば一カ年見積り千円の売れ高にたいし売薬価格五千円のことを預け置くを常としたりしが、今日は印紙貼用の失費あるにより売れ高の三倍を預け置くを通例となすに至れり。これがた

め当市の売薬は近来に至り、ややその販売高を減じたるの傾きありという。けだしかくのごとく当市においてようやく売薬の売れ高を減少したるは前述のごとく隆盛をいたしたる原因の転変若しくは減少したるに因るやまた争うべからずといえども、そもそもまた他に原因なくんばあらざるなり。

今試みにこれを論ぜん。特に当県にかかわらず、古来吾国の医師はすべて漢方医にして、その医師も草根木皮のみを用いたるに、かの売薬の材料もまた等しく草根木皮なれば、医家の応用する薬物と売薬家の供使用する薬剤も多く同一の物質より成り、したがってその薬効の現わるる所、しろうとの感触においていちじるしき差異なかりしならん。しかるに今日世の開明に際し各地著名の市町には少なくとも二三の大学卒業医師あることとなり。しかしてこれら新医学者の応用する薬品はことごとく峻力性の精製薬石にして古来漢方医師の慣用せる草根木皮の比にあらず、その奏効においても数層の差等を見るに至れり。これに反して売薬は依然として旧時の草根木皮をもつて原料となし、今日医師の応用することとき精製の薬品を使用することあたわず。したがってまた、その効力を現わすことは医用薬のごとく著明ならず。これ法律上の禁止と普通売薬者の不学不注意とよりきたれるやむを得ざるの結果にして、今日医用薬の信用は益々厚く売薬の信用は益々減退する一大原因ならん。

もしこの勢いにして挽回することあたわざれば売薬の信用はついに全く地におつるに至るべし。事実かくのごとくなりとせば、当市のごとき売薬をもつて一大産物と頼みきたれる土地がらにありては、今日この売薬に改良を加えてその信用を保持するにあらざる以上は、他日当市の富裕を挙げて烏有に帰せしむるの不幸に遭遇することなきを保すべからず。今この信用を維持して著効の売薬を製出せんにはその製剤中劇薬を始め峻力性薬物の配合を必要とす。この例は当市有名なる売薬の一名「妙振り出し」のごとき昔時非常の需要ありしも、

今日大いにその需要の途をふさぎ、これにかわるに「アンチフェブリン」を購買して自服する者多しとは余のしばしば聞くところなり。すでに当市中のしろうといえども寒冒にかかるときは昔時にありて常にこの「妙振り出し」を用いたるものも近來は往々これにかわるに「アンチフェブリン」を服用する者ありと。ひとりこの一薬剤のみならず、当市二百幾十種の売薬ことにかの反魂丹のごとき世上広大の信用を得たるものといえども今後益々その販路をおし広めうとは思はれず。いわんやその他これよりも著名ならざる売薬においてをや。これ他なし、売薬中に有力薬の配合なくその薬効顯著ならざるに因るものなり。ある人売薬は医術の進歩するにしたがって廃滅すべきものなりと言うものあれども一概にしかりとなすべからず。かえって世の開明におもむき医学の進歩するにしたがって益々旺盛するの状なきにあらず。かの欧米諸国のごとき医師の診察料高価なる所に売薬の益々盛なるを見て知るべし。

わが国殊に当市のごとき売薬をもつて物産の上位を占むる場所柄にしてこれ迄全国中に販売の根柢を占めたるこの一大富源の廃滅するにとんじやくせざるはけつして良策と言うべからず。いわんやこれに匹敵すべき他の国産を興すのはなはだ困難なるにおいてをや。ゆえに余の愚考によれば、従來の売薬に改良を加えあくまでもその販路の減少を防止せざるべからず。その方策他なし、当市の市民一致して売薬の原料中有力薬を配合し得るの手段を講ずべし。けだし目下政府にも禁令あり、一般衛生上にも劇薬の注意を怠たるべからざるの際、このことを実行するきわめて困難の業なりと言はざるべからず。いかんとなれば、わが国売薬家の最多数は薬学の智識を有せず、これに劇薬等有力物の配剤取り扱いを許すはあたかも小児に利刀を授くるに等し、これ現在売薬家に劇薬の配合を許可したわざる一大原因なるべし。ゆえに今日の売薬家たるもの一層奮励して薬学上の智識を得ることに注目し、充分この学の教育を受けたる者をして配剤取り扱いのことに任せしむるに至ら

ば自然に有力の薬剤を発売して世上の信用を回復するのみならず、政府の禁令にも影響するところなしと言うべからず。当市のごとき、前にも述べたるごとく売薬をもって最第一の富源となせる場所に在りては特に本業に従事するところの諸君のみならず、当市全体殊に市会のごとき最も懇切に売薬改良のことに尽力し前述の主意につき充分の熟考あらんことを希うなり。

当市のある売薬家の談話に、富山は売薬をもって物産の高位を占むる土地がらなり。ゆえに小学校の学科中に薬学の一科を設けることを政府に請願せしことありとこれ農業地には農業の初歩、商業地には商業の初歩を学校課程に加うると同一にして、当市の産業振興より論ずればけつて道理なきの考案にあらず。当某売薬家はその望みを果さざりしも今自治制に適応する学校令の改正ありと聞く。憶うに各地方の教育上ことさらにその地方に必要なりと認むる学科を学校の課程に加え得べきの便を生ずること疑いなければ、当市の学校において薬学上の初歩の智識を与うるの便を聞くが如きは決して成しあたはざることにあらざるべし。ひとりこのことにかかわらず当市において一般薬剤師を養成するの目的は最も目下の急務ならん。ただしこれ等の薬剤師たる医薬分業論のごとき諸他薬剤師の熱心に計画する事業のほか、殊に当市において最も急務なりとする売薬の改良に尽力するよういたしたき者なり。しかるに人あるいは言わん、今日急務と信ずるところを行なうに後進の薬剤師を養成するがごときうえんの方便によらず、既成の薬学士を雇聘してこのことに当らしむればかなりと。これけつしてしからず、今の薬学士たる者は専ら薬学的學術の研究を目的として成学したるの人なれば、当市のごとき特別の実業には縁遠きのみならず、その人員も少なく官途会社等に雇聘せられてなお大いに欠乏を感じつつあるのときなり。ゆえに当市のためには当市と離るべからざる感情ある子弟を養成して薬学士とならしめ、当市固有の実業ただに前述の売薬の改良のみならず富山をして日本薬業市場の一大要地とならしむる

に尽力せしむるを望むものとす。これ等の計画たるひとり当市の藥業家にまかすべきことにあらず。殊に市会市参事会のごときも實際の問題としてこのことに注目し、ついには年々若干名の藥学士を養成するよう尽力せられんことを希望することなり。

前段申陳ぶる所の外、なお数日本市にとり留して公衆の意見も叩き且つ地方官にも面謁して余の意見を開陳したき考えなりしも、東京より至急歸京すべき電報に接し、余の素志を果たすことあたわざるはなはだ遺憾の至りなり。充分の準備なき一場の演説、もとより余の意衷を尽くすことあたわずといえども、当市の盛衰に利害を感じらるるの諸君には充分に本題のことを考究せられんことをすすむるものなり。」

第三章 薬学校・薬業学校時代

第一節 共立富山薬学校

一、創立経過

明治六年売薬界の非常時にあたって、「舎蜜学校」の設立を請願してから二十年、ようやく具体化の機がやってきた。時に明治二十六年五月十九日（一八九三）八清楼で設立発起人会が開かれ、七月設立の協議がまとまった。八月三日私立薬学校設置の認可がくだり、共立富山薬学校と称することとし、創立事務所を広貫堂において準備を開始した。

注…共立富山薬学校の敷地百七十五・六一坪は明治二十六年五月三日、広貫堂社長郷沢金広によって買収されている。おそらく学校建設の準備であったかと思われる。

場所は富山市梅沢町広貫堂の向い側に百七十六坪の敷地をもとめ、約二十坪の校舎を新築することになり、建物および敷地に千円、器械に五百円支出することに決定した。創立経費は、富山市の補助金三百円の外、広貫堂、師天堂、富山薬剂会社、保寿堂、弘明堂、精寿堂等、多数有志の寄附金によってまかなわれた。

注…薬学校を設立した人々の名が、各種資料に種々記されているが、明治初年以來の記録に見られるように、売薬業者、薬種業者、薬剤師会員等の熱心なる協力と、東京帝国大学教授陣のつよい勧めによって設立に至ったとみるのが適当と思わ

れる。

各資料を総合すると、左の人々の名が、代表として創立史の中に見受けられる。

売薬会社 広貫堂、師天堂、富山薬劑会社、保寿堂、弘明堂、精寿堂

売薬業者 卯沢金広、阿部初太郎、松井伊平、密田林蔵、田中清次郎、日南田宇八郎、沢田金太郎、金井久

兵衛、志波久次郎、石井義春

富山県薬劑師会役員

会頭 中田清兵衛、副会頭 横江清次郎、

幹事 桜井勘六、日野五七郎、大久保秀民、福島猪太郎、中村

米次郎

東京帝国大学教授、下山順一郎、丹波敬三、助教授丹羽藤吉郎

開校は明治二十七年一月二十日の予定——新聞広告にみえる——がたてら

れていたが、工事が遅れ一月末小さいが大変美しい新館が落成した。

本館の階上は講堂、応接室、階下は事務、教員、薬品、小使の各室に

あて、本館に続いた平家には、普通教室、製煉、天秤、蒸留、分析、調

剤、衛生、裁判の各室があてられていた。

そして、同月二十七日、学校維持のため次の役員を選んだ。

校 長 卯沢金広

会計監督 中田清兵衛

廣 告

本校ハ明治廿七年一月廿日ヨリ事業開始メ候旨廣告致置候處ニ付來ル二月一日ヨリ授業開始ス

但シ入學申込期日ハ本月廿五日迄延期ス

本科 藥劑師養成授業時間ハ毎日午後一時ヨリ五時マデ分科授業目ノ内二科以下に授業分科地價習ノ學科ヲ撰選セレン

撰科 午後一時ヨリ四時マデ内植物學ハ午後六時ヨリ九時マデ内物理學ハ午後六時ヨリ九時マデ内化學ハ午後六時ヨリ九時マデ内生物學ハ午後六時ヨリ九時マデ

速成科 富山市太字梅原町共立富山藥學校

追テ規則書ハ廣貫堂内本校事務所ヘ郵送ニ候御座ヘ申込ミ大第貳拾ニ

共立富山藥學校生徒募集新聞廣告（明治27年1月）

監督 横江清次郎、志波久次郎、関野善次郎

評議員 密田林蔵、阿部初太郎、松井伊平、金井久兵衛、寺田久

蔵、桑田安次郎、佐伯権三郎、中田太七郎、日南田宇八

郎、桜井勘六

幹事 日南田宇八郎

開校式は二月一日に行なわれた。入学生は本科生二十五名、速成科生十五名で、教員には次の四氏が依頼された。

講師 桜井 勘六（本科…化学・植物学、速成科…化学）

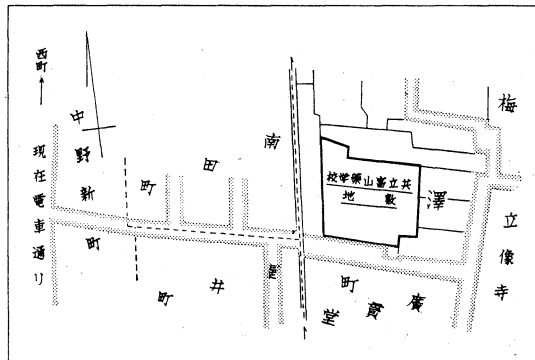
日野五七郎（速成科…植物学・物理学）

嘱託 田村輔三郎（本科…物理学）

佐多 愛彦（本科…独逸語）

右講師の内、田村輔三郎は富山県師範学校、佐多愛彦は富山病院の職員であった。

また桜井勘六は明治十六年東京大学製薬学科別科に学び、明治十九年春卒業、引きつづき東京帝国大学に勉学をつづけ、同二十五年富山県技手となった。日野五七郎は明治二十四年私立東京薬学校卒業、明治二十六年東京帝国大学選科を修了し、富山県尋常中学校の助教諭の職にあった。両氏は富山県人として最初に東京大学に薬学を学んだ先覚者であり、富山に新しい西洋の薬学を植えた人でもあった。



共立富山薬学校敷地（明治26年現在）

二、創立記念式

明治二十九年二月一日（一八九六）は、共立富山薬学校の第三回記念日にあたるので、校前には国旗をかかげ緑門^{アーチ}を設け、午前十時から盛大な創立記念式を行なった。

参列者は市川伯孝富山市長、前田則邦、阿部初太郎、宇津善吉等富山市参事会員、金子富山市会議長代理、富山市会議員、中田清兵衛・松井伊平・横江清次郎・金井久兵衛の薬学校監督評議員、広貫堂員、新聞記者、その他市中有志約百五十余名の多数に上った。

式は校長邨沢金広の勅語奉読について、監督志波久次郎が本校の過去の状態から将来を案じての丁寧な意見を反復述べられ、最後に生徒総代若林常太郎の答辞で終った。

それから、職員の案内で来賓一同、生徒のつくった福引室、考え物室、飾物室（植物採取の図）等を巡り、また職員生徒の実験を分析室、化学機械室、物理機械室、顕微鏡室で、見聞し、大いに感動を受けたとのことである。

正午から、祝宴の席を設け、邨沢校長まず開会の趣旨を述べ、さらに講師桜井、武庫川、大久保、岡田の諸氏それぞれ立って、大いに抱負をのべた。酒間また本校の組織について、あるいは売薬拡張のことについて互に胸きんを開いて談話した。午後一時から一般に公開、参観者数百名に達し、実に非常な盛会であったとのことである。

三、卒業式

明治二十七年二月に開校式をあげ、入学生を募集したのであるが、本科生の退学者相つぎ、第二回の応募生十名の内ようやく三名―若林常太郎、島田孫三郎、安田勝太郎―が、第一回卒業の栄冠を得た。時に明治三十年三月十三日で、最初の卒業証書授与式が行なわれた。

校長の告詞

回顧すれば本校の創設は去る明治二十七年にして、じらい本科入学生は三十名の多きに達したりといえども、今日まで卒業者を見ざりしは誠に遺憾に堪えざる次第にてありき。しかしてあるいは病氣その他の事情に依りて休学あるいは退学者多くなりしにかかわらず、在学諸氏の熱心勉強によりて今回第二回の入学者にしてこの好結果を得られたるは祝賀すべきなりとす。しかれども卒業生諸氏はなをかつ今日の位置に安んぜず更に奮励して、是非共内務省の免許を得て独立独歩の位置に立ち、大いに社会の公益を増進せられんことを希望す。終りに臨んで来賓諸君に寒天中特に多忙をもちとわせられず臨式の栄を贈わり本式を盛んならしめられたるを深謝す。

答 辞

本日をはくして本科第一回卒業証書授与式をあげられ諸大賓の貢臨をかたじけなうす生等何の幸栄かこれにまさるものあらんや、顧みれば本校すでに二才余、今この盛典に遭遇するはこれ校長閣下始め講師諸君の優渥なる薰陶によるにあらずんばいずくんぞよくここに至らん、かつまた式に臨んで校長閣下より訓誠を賜う感謝に堪えず。

回顧せば生等本校本科卒業生の卒先にして、挙動校位に關する一層大にして責任いよいよ重し、加うるに薬学は最も蘊奥の精密なる研究と熟練を要しその学識の深淺、技術の優劣、貴宝の人生に及ぼすや喋々弁を待たず。また然るに身を省慮すれば不敏短才いかにして責任を尽すべきかあたかも斧を磨し針を作るに似たり、いわんや前途尙多難の境遇にせまるにおいてをや。しかれども厚恵の教訓を受けいやくも等閑にして任務の一片もつくさざれば豈何の面目かあらん。生等不肖といえども精勵努力し斯学を研究し斯学の暢發を補企し他日恩義の万一に酬ひんとす。ここにいささか蕪言を陳べて答辭となす。

明治三十年三月十三日

共立富山薬学校本科第一回卒業生總代 若 林 常 太 郎謹白

つぎに、職員總代武庫川光寧、生徒總代選科長野英之助、市内有志長沢米次郎三氏の祝辭があつて式を終えた。

式後化学実験室で、裁判化学上のミツチェルリッヒ氏の燐檢出法の実験を來賓にみせたが、暗室の実験のため、燐光を放つまでマグネシウムを燃やして燈用に供した。このような実験もそのころでは珍しがられ大変感激をあたえたとのことである。

本日の参列者、桑原師範学長、服部富山中学校長、市川富山市長、大垣助役、関野市會議長、市會議員、市参事會員、神山富山商業学校長、西田高等小学校長、市立病院正副院長、市役所吏員、他有志、新聞記者、旧講師、卒業生父兄、選科・速成科卒業生、広貫堂員、評議員等七十余名。

第二回卒業式は同年九月三〇日行なわれた。卒業生は次の四名（関野英之助、吉田和平、金子清藏、尾谷健太郎）であつた。

四、維持および状況

売薬業の振興のために、業界あげての協力によつた薬学校であつたが、創立早々前途憂慮すべき状態になつた。それはわずか半年もたたない間に、生徒はつぎつぎと退学し、在学者わずかに二十三名となつた。されば薬業家の心痛も大きく、一ケ年を二期にわけて入学生を募集しても、少なくとも五、六名、多くても十名に満たなかつた。先にあげたごとく本科第二回募集生の内三名が、ようやく明治三十年三月に卒業するという状態であつた。このため学校の維持の上に大困難をもたらし、職員にも充分の待遇を与えることもできず、かつ種々の事情の下に交迭ひんばんとなり、生徒の入退学も朝就暮去の状態であつたから、有志の内には、極端に廃校を唱えるものもあつた。あるいは、わずかに十名内外の生徒のために年々千三百余円を支出するよりもよろしく廃校し、相当の補助金を与えて、東京へ、留學生の三十名もだす方がよいのではないかというものさえ、あるという有様であつた。その上、二十七年から三ケ年の経続支出も満期となり、この上、つづけて有志の寄附金を仰ぐこともできないため、薬業有志は大いに熟議をこらした結果、市当局者にはかつてついに三十年十月三十日をもって廃校とし、十一月一日から市に移すこととなつた。

第二節 富山市立富山薬学校

一、移 管 経 過

私立学校として発足した薬学校は、業者の努力にもかかわらず、維持困難なため、売薬業者、薬剤師会ならびに市会議員横江清次郎等によって、富山市および富山市議会に対して、市立移管の運動を行なった。かくて明治三十年五月十九日（一八九七）、富山市会は市立薬学校―公立薬学校の始め―とすることに決定し、十月三十日認可を得て十一月一日、富山市立富山薬学校とした。邨沢校長は十月末で退職し、講師桜井勘六が校長兼教諭に任命された。

これと同時に程度においては従来の本科二年の下に更に予科一ヶ年を増して速成科を廃し、学科を高めて中学程度となす等、諸般の規則を改正し、すべて公立学校制度に準拠した。

翌三十一年三月三日、広貫堂の發起で、大谷派別院において、市内有志者と薬学生徒募集について協議会を開いた。

同年三月八日、薬学校拡張のため、市長より、左記のとおり薬学委員十（？）名を依頼した。

邨沢金広、中田太七郎、日南田宇八郎、村田権次郎、金井久兵衛、山中半蔵、中井久次郎等。

さらに同年五月にいたって、薬業者の市公民中から互選をもって、薬学奨励委員二十名が選挙せられ、奨励委員一名につき入学生二名以上を推薦することにした。

同年十二月九日校長兼教諭桜井勘六が依願退職となり、大阪府立医学校教諭に就任した。同氏は共立富山薬学校創立以来滿五ヶ年間本校の経営と教務とに公私を問わず尽力され、富山における薬学の指導啓発に貢献することはなほ大きなものがあつた。同月二十七日、嘱託講師であつた日野五七郎は富山中学から転じて校長兼教諭に任命された。

翌三十二年四月一日、市立富山薬学校としての第一回の卒業式が挙行せられたが卒業生僅に二名であつた。

二、明治三十二年大火による類焼

創立以来六年、困難ななかにも実験器具機械の整備がなされてきたのであるが、なんとという悪運であつたらうか、明治三十二年八月十二日（一八九九）富山市中野町より出火し本校はそのため類焼のやくにあった。職員生徒等の非常な尽力で、ようやく書籍箱、非常持出簞笥三個、天秤、薬品機械棚一組を運びだし、その他はことごとく焼失してしまつた。（書籍は、共立富山薬学校、富山市立富山薬学校の蔵書印の押されたものが今日まで保存されている）

日野五七郎校長は当日の模様を

「十一日朝まだきより、南方より軟風強風にて夜に入りますます烈しくて人々警戒怠らざりしが、前項のごとき有様にて職員生徒の非常の尽力にてようやく書籍箱、非常持出簞笥三個、天秤、薬品機械棚一組にて、その他悉く烏有に歸した。本校はさる明治二十七年の二月の開校にかかるものにして（有志者設立）、三十年九月市税をもつて経費を支出し、あらためて市立薬学校と称し、学校の建物小なれどもその美麗にして都合善きことは、東京の薬学校のつぎに位するなり。その他書籍、標本、器械等は市税をもつて経費の許す限り年々その完備を計るに怠るなかりしが、今や亡し嗚呼無慘なる哉十二日午前三時に焼失す」と記した。

校舎類焼後は直ちに富山市総曲輪小学校に仮事務所を設け、火災後の始末とともに、九月一日より授業開始の準備にとりかかったが、通常経費千三百円ぐらいで、市も火災の損害がばく大で貧弱な本校にたいし充分な準備をすることができない悲惨な境遇になった。日野校長以下職員等が数回にわたって市役所と交渉した結果

梅沢町円隆寺の堂宇を借り受け、十一日、
かろうじて形許りの授業を開始した。各教
室の境は障子または幕だから隣同志の講義
が漏れる。生徒の机は寺子屋時代のような
長飯台で畳の上にすわり、分析室は暗くて
昼でもランプをともしねばならない。その
上分析製煉の機械に至っては、唯一人分だ
けの備えつけよりなく、一人の試薬を二、
三人で使うという有様であった。このよう
に教室は狭く暗く、器械、標本はなく、金
はなく、教員は少数で二人前働いてもなお
及ばず、実に不完全窮まる授業を施した。
その為に、生徒から不平が起り、学校は市
役所に事情を訴えてもとりあげてくれない
ので、日野校長始め部下職員等は殆んど板
ばさみの姿でその困難なことは、実に言葉
に尽くしがたい有様であった。

この年、東京帝国大学医学部薬学科教授



富山市立富山薬学校卒業記念（明治32年2月）
前列中央は日野五七郎校長

日本薬学会々頭長井長義博士を迎えて盛大な県下薬学大会を開催するため八月十二日準備委員会を開くことになったところ、富山市大火のために、実現の運びに至らなかった。

三、富山市会の廃校決議

明治三十三年三月六日、檜垣知事自ら会長となって、教育諮問会を開催した。同会に出席した日野校長から左記の発言があった。すなわち、氏は富山薬学校の件につき、先ず薬学なるものを説明し、そのますます改良し拡張しなければならぬ理由を述べ、つぎに、「現今この学校の不振なるは主として高等学校薬学科と連絡を欠くにあるが故に、これが課程を高尚にし設備を完全にして適當なる教員を備聘せざるべからず。しかるに富山市の経済は本校の経費を増加せしむることあたわざるをもって県税補助を仰ぐの必要あり。なおかくして適當なる衛生技術者を養成するに至らば、一方において衛生試験所を設置し、県下の衛生事業を発達せしめうべく、また富山市の産物たるのみならず、県下の産物として年額百五十万円の収入ある売薬改良発達についても同校の拡張は最も急務なり」との意をのべ、県税をもって補助すべきものと決定した。

三月十五日(?)富山市が薬学校委員、薬学奨励委員を招集して協議した。出席委員はつぎの諸氏であった。

薬学校委員…横江清次郎・山の中半蔵・古山調次郎

薬学奨励委員…石井義正・中村時政・中川久正

翌十六日、富山市会は、その教育費査定中に、江守議員の動議により市立富山薬学校の廃校を決議した。その理由として

「就家生徒が少なく、かつ大火災の善後策のため数十万円の市公債を起こす場合において、義務教育でない薬学校の経営はもちろん、校舎を新築するようなことは、市の経済の及ばないところである」

この廃校の決議は、全く晴天の霹靂で、薬学校史上の大騒ぎとなったのである。

各新聞はこぞりて廃校の否をとき、学校側は、全国薬学校の状況・統計表ならびに将来薬学の発達するゆえんの材料を調査した参考物を市会議員および有志者に配布し、あるいは、日野校長および二、三の職員は当時の視学官高田種雄を訪問して、現在ならびに将来の薬学教育につき学校存続の必要を強調した。

三月十九日、富山県薬剤師会は、薬学校で臨時会を開き、横江清次郎副会長議長となり、日野五七郎提出の「薬学存立動議」につき討論し、建議案を市参事会、市長、市会議長に提出を決議し、福島猪太郎、高桑定太郎、島田治三郎の三氏を提出者とし存立運動を展開した。

三月二十一日、富山日報紙の社説欄に「薬学校を復興すべし」を載せ、市の反省を促した。

「―各地の薬学校に就てこれを見るに、かの名古屋、熊本のごときは、ただに学期を増加したるのみならず。熊本のごときはその税額わずかに富山市の三分の一五分の一なるに、ますますその規模を拡張して、三十三年度にはさらにその学科を高尚にし、県税より一千円の補助をなし、もって文部省の許可を得んとするに至れり、しかるにわが富山市はただにこれを拡張せざるのみならず、かえって萎縮退歩の挙に出で、ついにこれを廃するに至りたるは、何等の暴挙ぞや。

もちろん従来のごとき設備にては、たとえ同校を卒業するも、進んで高等なる学校に学ぶあたわず、退いて独立の製薬に従うあたわざるをもって、何等の効能なきがごとしといえども、はたしてしからばよろしくこれを革新すべきのみ、これを廃する理由は毫々あるべからず。いやしくも、六万の人口中、その三分の一は売薬業、もしくはこれに関連して生計を営みつつある富山市にして、最も必要なる一薬学校の維持に苦しみ、これを廃止するがごときは、あに富山市の良計な

りと言うを得んや。ゆえに余輩は速かにこれを復興して、もつてますます完全の域に進め、富山特有の売薬と共に、兩々相對して時世の進運に遅れざらんことを、希望してやまざるものなり。」

三月二十一日、市内薬業者ならびに関係有志は、売薬界前途の安気にかかわる大事なことからして各所に集会して善後策を講じ、あるいは檄を四方に飛ばし、長文の薬学校継続設置請願書を市参事会に提出し、また知事を訪問して存立の意見を具陳し、知事の援助を要請した。

三月二十三日、薬剤師大菅昇平、売薬家水上喜平、長沢米次郎、畑亀次郎、村尾定保、金山庄太郎、横山直太郎、広田竹太郎、中田秀太郎、佐藤菊次郎、土田真雄、布上亀太郎、村田藤太郎、中村時正、石井義春、駒宮熊太郎、吉田常次郎、村尾小平、長田金次郎、水野正太郎、久郷米次郎、高島兵次郎等、市内青年薬業家有志五十余名が売薬青年会を組織し、四月五日発会式を挙行した。かくて役員を選び、薬学校存立の運動を展開し、各市会議員を歴訪し、廃校の不条理と復活の必要とを力説して止まなかった。

副会長 高島兵次郎・大菅昇平（会長欠）

幹事 布上亀太郎、水上嘉平、水野正太郎、畑亀次郎、中田秀太郎、久郷米次郎

三月三十日、富山市会は関野議長の下に開会せられ、第七号議案三十三年度予算案歳出部の第三次会に入るや、拾五番（横江清次郎）は緊急動議ありと叫び左のような提案をした。

「さきに薬学校費を否決せしは富山市の狀態より察すればなほだ不穩當の決議と認む、もつとも從來の組織は適當ならざるものあり、本市売薬の慣習として十四、五才に至れば行商見習をなさしむるものなれば薬剤師を養成するの主旨にあらず、ゆえにむしろ当業者の子弟にして尋常小学校卒業位のもの入学せしめ簡易なる薬学の一班を授けもつて富山売薬の改良發達を期するを可とす。はたしてかくのごとくせば生徒も多数を得

べきのみならず、よく実情に適すべし。かつ他市と異なり本市のごとき売薬をもって唯一の産物とせる地においては、その信用上存立の必要ありと信ず。よってその組織方法を改め、さらに発案あらんことを参事会に求めんとす、しかして当業者より右経費のなかへ本年度より二ヶ年間三百円宛を寄付せしむる考えなり」との建議を提出した。ここで議長はこれが採否をはかったところ、いったん否決したことをいまだ数日もたたないのに再び議會自ら提出するようなことは輕卒に失するだけでなく、将来議會決議の信用にも関するとの議論がおり種々討議の結果、結局議長は、慎重に熟考を要すとして後回しとした。

その後、関野善次郎議長と横江清次郎議員（藥劑師会副会長）との間に種々協議をなし、四月二十一日の市会において、横江委員の報告どうり可決され、課目を簡單にした富山市立富山藥業学校の設立となった。

四月二十四日、富山日報の社説に、「藥業学校をして藥学校たらしむるなかれ」をのせて藥業学校の前途を激励した。

同三十三年三月二十八日、市立富山藥学校としての第二回卒業式を挙行したが、卒業生わずかに四名であった。

四、「富山市経営策」よりみたる

富山市と売薬ならびに藥学校

売藥業者が真剣に藥業の發展のために、育成してきた藥学校が創立以来、非常に困難な立場に苦悩してきた。そしてその後にも様々な困難がたちだかっているにもかかわらず、売藥業者等はあくまでもとりくんで

一步も引こうとしなかった。

ここに、当時の富山市民の指導者等が富山売薬をどのように見、かつ富山市の経営の困難をどのように乗りきろうとしていたか、そのため薬学校に対してどのように対処していたか、当時富山市の実業家によってつくられていた富山実業協会の「富山市経営策」をひもといてみよう。

「ながらく富山をささえてきた富山売薬は、維新以前藩主がなしてきたような保護奨励もなく、同時に西洋の医薬が大いに増加してきた結果、昔の盛大をなすことがむづかしくなってきた。ことに明治十五年売薬印紙税規則が發布されてからますます退歩し、毎年七百万円近くの生産をあげていたものが毎年八拾五万円もしくは五拾万円の生産となった。行商人も一万人近くから、五千人ゝ六千人となり、おどろくほど衰えてきた。明治十九年になり、売薬印紙交換規則が發布されてからやや回復したものの、到底今後の発展は望まれないと考へるに至った。

しかし一つの生きる道として、中国、朝鮮等に販路を拡める方法が考えられるが、勇断果決の気性がなければ容易にその目的を達することができない。したがって今後は、工業に重点を置いて進まなければならない」と強調している。

一方富山市の財政はどうであつたらうか。

「―近年中央政府の財政がはなはだしく膨脹したため、すべての財源をとりあげ、各地方の財源が大変枯渇するようになっただけでなく、自治の発達に伴って、地方自営の事業が日に増加し、したがって、歳出に多大の要求をなすようになった結果、地方財政がまた非常に困難を極めてきた。

ことに富山はしばしば、火災、水害に見舞われ、民力は昔のようではなく、商業は衰え（主に売薬をさす）工

業は振わず、したがって、財源の困難ははなはだしく、その上復旧設備のため、歳出の膨脹は大変なものである。したがって、平凡普通的手段ではどうして市民の進歩発達を期することができないだけでなく、むしろ危急に陥るだけである」と

この解決のため「経営策」は四百三十頁にわたって、政策をのべている。

とくに将来の財政の支出の項でつぎのようにのべている。

「……今日の富山市は社会の進歩に伴うて新設備の疊々たるものと同時に大火災の大瘡痍を被り民力大いに枯渇し、これより以上の負担はもはやたえ難きの傾向あり、これをもって今後数年間は民力養成のために節約的財政をなすべきと同時に、また税法改革を断行してなるべく商工業の発達を害せず、かつ比較的公平なる税法となすの必要あり。しかして本協会の意見としてかの病院を廃止もしくは県立とし、また薬学校を県立もしくは売薬業者の私立に移すとし……」

すなわち、売薬の将来の発展に不安とかつ財政不如意のため、薬業学校を市から除こうと考えた。

一方、教育の項では、一、商業補習学校、一、商業高等教育、一、工芸徒弟学校、一、工業高等教育の必要を強調している点を見のがしてはならない。

今後の売薬業者の売薬振興と薬業学校充実への努力は、このような環境の中でなされてゆくことを見るのが大切である。

第三節 富山県富山市立富山薬業学校

一、維持および状況

市内薬業界に大波乱をまきおこした薬学校の廃校決議は、薬剤師養成を主眼とする薬学校から、売薬業者の養成を主とする薬業学校に転換することでおさまったかのようなものであるが、前節に述べたような状況の改善は、にわかに望みようもなく、多くの問題をあとに残した。

明治三十三年五月二日、県知事の認可を得て、富山県立富山薬業学校(?)と改称し、組織を改めて、修業年限を本科三年、別科二年とし、本科は売薬の子弟に薬学の大意を授け、別科は薬剤師受験科目を授けるを目的とし本科卒業若しくは高等小学校卒業者を入学せしめた。

これよりさき、売薬青年会の副会長大菅昇平は、売薬同志会の勧誘員とともに、市内小学校を卒業せる子弟の父兄に対し、入学勧誘書を配布し、一方市内の旧役場下の分区にしたがい、それぞれ毎戸に、学科の課程その他教養方法等丁寧に説明し、熱心に勧誘した。そのため、五月六日の入学にさいしては、六十八名の多きに達したとのことである。

共立富山薬学校の創立以来、桜井勘六と協力し、さらに薬学校の廃止決議の復活に活躍した日野五七郎校長は、富山薬業学校の校長に任命されたが、大阪府堺市第二中学校へ転任のため退職した。その後任として県立福井病院薬局長であった堀次郎(第四高等中学校医薬部薬学科出身)が新校長として着任した。

明治三十四年三月二十九日、富山市立富山薬学校第三回卒業式を円隆寺で挙行、卒業生六名であった。

明治三十四年六月一日、市立富山薬業学校と改め(?)七月十日富山市星井町にある富山南部高等小学校の



富山市立富山薬業学校卒業記念（明治35年）
前列中央は堀大次郎校長（星井町の仮校舎）

一部に移転した。

明治三十六年三月三十日仮校舎の雨天
体操場で薬業学校第二回卒業式挙行、卒
業生別科七名、本科三十八名であった。

明治三十六年七月二十日、従来の校舎
では狭くなったので、山王町小学校跡へ
移転した。

明治三十七年三月三十一日、堀大次郎
校長が退任したため、市立富山商業学校
長長野恵太校長が兼任を命ぜられ、翌三
十八年三月兼務をとかれた。同年四月一
日、五番町尋常小学校訓導兼校長稲垣茂
校長心得を命ぜられ、一ヶ月後の四月二
十九日解任、同日、堤從清が校長兼教諭
に任命せられた。

明治三十九年三月市立富山薬業学校の
規則改正のことが、市会で話題となり、
市参事会で審議中のところ、薬業学校を

中等程度とし、売薬業者養成から再び薬剤師養成にきりかえ、さらに研究科をも設けることにしたが、実施を明治四十年とすることにした（市立薬学校と改める考えもあったようであるが明らかでない）

注・薬業学校の校名についての記録は種々あり、決定しがたいものがあるが、一応校印をもとにきめた。

明治三十九年三月二十七日、第五回卒業式挙行、卒業生別科八名、本科十九名であった。

明治四十年三月二十七日、富山市立富山薬業学校最後の第六回卒業式が行なわれた。

式 辞

本日を卜し本校第六回卒業証書授与式を執行し諸彦の貴臨を辱うしたるは大いに光榮とする所なり。

抑も本校創立以来卒業生を出せしこと別科四十八名、本科百三十六名、計百八十四名、今回の卒業生は別科十五名、本科十九名、計三十四名にして時恰も本校を県立に移さるの時に際し、市立学校たる本校最終の卒業生たり。卒業生諸子能く其研鑽したるところにより、前途大いに社会に貢献するを期すべし。然れども薬業界の前途は益々多望なると同時に複雑なる問題に接すること愈々多かるべく、將た薬業の進歩は年を逐うて較著なると共に薬業に従事する者は、修養が益々精深なるべきは贅を待たず、諸子切に茲に留意し毫も其既に研鑽したる所に甘んぜず、今後幾層向上の意気を鼓して我学識経験を進め、以て有為の薬剤師となり、以て有望の薬業家となり能く其品位を高くすることを努む可し。而して市立当時と県立当時との別なく同窓互に相忘れず将来各自の境遇縦ひ参商相距ることあるも、常に切偲の情を存し以て友誼を全うすること亦是れ諸子に切望する所なり、茲に卒業証書授与式に臨み所懷を叙して式辞とす。

明治四十年三月二十七日

市立富山薬業学校長 堤 從 清

二、校舎再築運動

長い苦心のなかから生まれた共立富山薬学校の校舎は日野校長が「建物小なれどもその美麗にして都合善きことは東京薬学校のつぎに位するなり」と述べていたように、よい校舎であつたらしい。写真の一枚でも見つかつたらと残念でたまらない。

この美しい校舎も明治三十二年の大火で焼け、梅沢町の円隆寺の堂宇に仮り住まい、その後三十三年に廢校決議があり、三十四年に星井町の南部高等小学校にうつり、さらに三十六年に山王町小学校跡にと転変した。

この間、校舎の新築に対する薬業界の運動は、活発に行なわれたが、明治四十三年、富山県による建築まで実現に至らなかった。

明治三十三年十一月二日、売薬青年会は円隆寺に役員会を開き、薬業学校々舎建築に関し市長に建議することをきめ、同志会の意見をきいた。

同月六日、売薬同志会は、会合を開き、校舎建築について相談し、売薬青年会とともに市を訪問、建築についての意見を述べ、請願書を市長および参事会に提出した。

同年十一月、富山県薬剤師会は、同会の決議により、校舎新築についての建議書を会頭中田清兵衛、副会頭横江清次郎、幹事総代吉野新兵衛諸氏より市長に提出した。

謹而書を富山市長市川伯孝閣下に奉る。今や文物彬々都鄙学校の設けあらざるはなく。山村僻地咿唔の声を聞かざるなきに至りしは実に国家のために慶賀すべきなり。その然り而して学校は子弟の品性を陶冶し、智識を開発し、技能の熟練

をはかり身体の健康を保たしむべきものなれば、善良なる教師と適當なる器具とを要するは理の当然なりといえども、しかも完全なる校舍なくんば、とうていその目的を達することあたわざるなり。これをもつて富山市災後の経営多端なるにもかかわらず、閣下はまず学校の再築を計画せらる。誠に感謝せざんばあるべからず。しかれどもここに生等の最も愛する富山薬業学校を見るに、いまだその設計を耳にせざるはなんぞや。そもそも同校は当市の富源たる薬業に大関係あるのみならず化学的工業衛生的技術にもまた関係少なかれざれば、その必要あえて他学校に譲らざるを知る。同校現仮舎は最も不完全にして品性上の害毒、教授上の不便はもちろん、採光宜しきを得ず、通風度を失し生徒の健康を害すること大なり。嗚呼閣下は種々なる事情のため同校を顧みること遲滞するなるべしといえども、もし一日これが建築を遅らすれば一日の害あり、数日遅るればその害やまた数倍す。加うるに薬剤師たる生等の業務拡張上に影響を受ける少なからずとせず。伏して願わくはすみやかに富山薬業学校々舎を建築しもつて同校生徒をして完全の授業をうけ身体の保養を全からしめ、かつ市内実業をして益々隆盛の運命に達せしめ、間接に生等薬剤師をして仲臂^ひの機を得られんことを 恐惶再拝

同三十四年一月十日、富山売薬倶楽部は妙国寺事務所にて薬業学校建築等に関する交渉について協議した。

同三十四年四月十二日、売薬青年会第二回定期総会を総曲輪大谷派本願寺別院に開き、薬業学校々舎建築についての売薬倶楽部の宣言に加入することを決議した。（出席者百三十七名）

同三十四年七月、富山薬業倶楽部所属市会議員の間で、校舎の建築を速成するため委員を選定し、市参事会に交渉することを可決したので委員に選ばれた横江清次郎、日南田宇八郎、若林元四郎、長谷川伊三郎、中谷善次郎等は市長助役と面談交渉を行なった。また七月十日に妙国寺内事務所でこれが交渉委員会を開いた。

同三十四年六月二十七日、富山売薬青年会の役員会を開き、校舎建築速成について協議した。

同三十五年五月、市会において横江清次郎議員の建議を可決し、本年中に再築にきまる。

同三十五年六月十一日、富山市の有志阿部初太郎、大間知円兵衛、若林元四郎、橋本孝、日南田宇八郎、横江清次郎、中谷善次郎の七氏は、富山市役所へ出頭し、薬業学校新築のことについて加藤市長と面談した。（同校は近々新築に着手するとの回答があった由）

同三十五年七月五日、富山売薬青年会は、梅沢町円隆寺に第三回総会（出席者八十六名）を開き、一、薬業校工事費の方へ寄附金の可否（役員会一任）二、薬業校々舎復旧工事の速成を期するため政談演説またはその他の方法をもって当業者を興奮せしむる件（可決）を協議した。

同三十五年、七月七日、富山実業談話会は、南新町清源寺に例会および総会を開き（出席者四百名）富山薬業校建築速成を期する件を売薬青年会と交渉運動することにきめた。

同三十五年八月三日、富山売薬行商会は梅沢町妙国寺に発会式を行ない、（出席者二百余名、發起人佐藤、泉、福田、室川、金盛、太田）「富山薬業学校の完成」を決議した。

同三十五年九月三十日、中田太七郎氏等の発起にかかる富山売薬協会は発会式を行ない（来会者三百五十余名）富山薬業学校の建設速成を期することを決議した。

第四節 富山県立薬業学校

一、移 管 運 動

私立の経営困難の事情から、市立への運動が功を奏し、明治三十年富山市立富山薬学校となった。しかしな

がら、その市も経営に困難を感じ、明治三十三年の教育諮問会における日野五七郎校長の発言にあるように、県税補助が考えられるに至った。さらに不幸なことは、明治三十二年八月十二日の大火による校舎の焼失であった。薬業家が一致して校舎の新築を訴えたが、なかなか実現の運びに至らなかった。（校舎は一時、円隆寺つぎに星井町の南部高等小学校に移り、さらに山王町小学校の跡に移った）したがって、薬業界の世論は、ただいに県立移管に変わっていった。

明治三十四年十月十三日、売薬青年会は、梅沢町妙国寺で役員会を開き、大菅、高畠副会長等二十一名出席して薬業学校を県立となす可否について協議した。

同三十四年六月二十三日、富山市会においては、かねてより市立富山薬業学校を県立となさんとこれが調査委員を設け調査していたが、県立移管の建議書を県へ提出することに決定した。

同三十九年三月、富山市会では、市立富山薬業学校を県立にするため、敷地、校舎およびその他の器械を寄附しようとする機運になってきた。

同年七月三日、富山売薬倶楽部では、理事評議員会を開き薬業学校県立の件を協議し、委員を設けて運動することにきめた。九月三日の役員会では、この委員会を売薬同業組合事務所におき、陳情委員をだすことにした。

同年七月二十四日、富山売薬同業組合では、市立富山薬業学校を県立とするための請願書の調印をまとめるため、本年の始めから邨沢、土田、中川の三役員が郡部各方面に奔走していたがこの日、中田組合長ならびに県下の重なる売薬業者二十四名の連署をもって知事へ請願書を提出した。同年八月十八日、県参事会へも薬業学校県立の請願書を提出。

同年八月十三日、富山売薬倶楽部所属市会議員ならびに理事等十余名県庁におもむき、川上県知事および山村事務官に面会し薬業学校県立の件につき陳情した。

同年十一月十五日、富山県会開設せられ、県内薬業者の多年の念願であつた市立富山薬業学校の県立案が提出せられた。

ここにおいて、富山売薬同業組合、富山売薬倶楽部、売薬青年会、富山青年商工会等は市当局、ならびに県会議員を訪問して活発な運動を展開した。また富山市当局も種々協議し、県立の目的を達するに努力した。

かくて同年十二月十四日、県会において富山市薬業界待望の富山市立富山薬業学校の県立移管が四十年度的ら実施に決定した。

富山薬業時報第四十一号（明治三十九年十一月）に薬業学校県立について左のような社論をにかけて県会の可決をうながしている。

「そもそも県内各都市の薬業者を代表せる諸士がさきに薬業学校県立の事を請願したる当時に声明せるがごとく、古来帝國唯一の薬業地たる富山県にして工芸学校のごとき、はた農学校のごとき実業教育機関の具備せるに似がなく、独り薬業智識を養成するに適當なる教育機関すなわち完全なる薬業学校の設立を見ざりしは遺憾の極にしてこれがために地方薬業の進運遅々たりしはまた掩うべからざる事相にあらずや、しかして時運の進展と共に薬業智識の養成は日に急要を告げ、薬剤師の供給は常にその需要を満たすことあたわざるより、今や政府はますます薬業教育を拡張せんとし、現在医学専門学校の薬学科を分割して新たに薬業専門学校を設立するの議ありと言ひ、あるいは医科大学内の薬学科をさきて別に薬科大学を設立するの議あるやに伝へくる。これみな事宜に適したる施設にしてかの年来の宿願たる医薬分業の期に接するもまた遠きにあらざるが故に、もしたして現在医学専門学校の薬学科を分割し、薬学専門学校の設立を見るに至るも、

なおかつ前途薬剤師の不足を感じるは歟々を待たず。とくに富山県のごときはその薬業地たると同時に薬剤師の需要最も大なること何人も確認するところなれば、今日において完全なる薬業学校を設立するはまことに急務にして今回の提案理由に薬業の拡張をたすけ薬剤師養成を急要とするゆえんを言明せるはまた少しの異議をいれるの余地なき者と言ふべし。もしそれ戦後各般の経営に急にして刻下いづれの地方も実業振作に全力を傾注しもって国家の富強に貢献し、地方の福利を増進せんと企図せるにかかわらず、不幸にも富山地方の実業教育その歩を進むるによしなく、古来唯一の薬業地方と称揚せられながら、その教育機関の完全ならざるがために前途かえつて他の地方の薬業のあとに踵着たるがごときはただに地方の体面を損すること大なるのみならず、結局地方の重要物産をして悲境に沈淪せしめ、地方の富源を減ずるに至るも昭々として明かなり。しかして本年三月の富山市会もまた薬業学校の県立を希望し、市立薬業学校の敷地建物器具等の全部を寄附して県立学校とせられんことを県当局に建議したり。これまた吾人と同じく地方薬業界の大勢を査察し薬業教育の振作によりて国家の富強に貢献し、地方の福利を増進せんことを企図せるものに外ならざるなり。せつに望む富山県会の明よくここに留意しひとえに地方薬業の情形にかんがみ薬業教育の重きを体して敏速県立案を可決せられんことを。」

二、創 立

明治三十九年十二月十四日に可決せられた富山県立薬業学校の校舎建築および敷地買収費として、富山市から壹万二千元（三ヶ年賦）を寄附することになり、内半額六千元は売薬業者の寄附によることになった。

県会に提出された経常予算は

総額 六千元

内訳 俸給四千六十円（校長給千円、教員月俸四十円六人、書記月俸十五円一人）。雑給四百八十円、

校費千七百七十五円。退職賜金四十円、国庫納金四十円、修繕費二百円。

かくて同四十年三月二十八日（一九〇七）づけをもって各種学校として認可され、四月一日、富山県告示第四号をもって富山県立薬業学校設置の件布告せられた。同日富山県令第二十八号をもって校則を定め、修業年限本科三年とし、薬剤事業に従事する者を養成し、予科卒業者、もしくはこれと同等以上の学力あるものを入学せしめることとした。予科は二年とし、高等小学校二年修了者に薬学大意を修得させ、もしくは本科に入るの素養を得させることにした。

四月一日には、県事務官山村弁之助校長事務取扱を命ぜられ、二十五日開校式をあげた。

十月二十六日には、山村事務官校長事務取扱を免ぜられ、従五位勲四等製薬士中西司馬校長兼教諭に任ぜられた。同氏は東京大学製薬学科第四回（明治十四年）卒業生であった。

中西校長は着任以来学校の設備教授法等につき熱心に研究せられ、また鋭意薬業の発展に留意し、県当局、あるいは実業家と意見を交換し献策せられることもしばしばであった。さらに、学校には精巧な顕微鏡四台、化学天秤一台を増加し、その他大いに設備の充実に尽力された。また、各種学校として、出発した学校を実業学校の組織に変更する方がよいか、また進んで専門学校にした方がよいか、についても職員と協議を重ね、また、県当局、文部当局、東京帝国大学薬学科の教授とも絶えず打合せを行なった。

三、開 校 式

明治四十年四月二十五日、山王町の仮校舎で、薬業界待望の富山県立薬業学校開校の式があげられた。県知

事をはじめ多数の来賓、業界関係者の来会があつて盛大に行なわれた。また午後には、富山ホテルで富山県売薬同業組合主催の祝賀会が開かれた。開校式の来賓の外、金岡代議士、寺島、正木、松島各県会議員、牧野市会議長、横山政友会支部幹事、富山公同会幹事および青年商工会、各薬業団体代表ならびに薬業学校職員等、百有余名の多数の出席で、たがいに祝意がかわされたが、とくに売薬業者の喜びは格別であつたことであらう。

第五節 組織と維持

一、校 則

共立富山薬学校々則

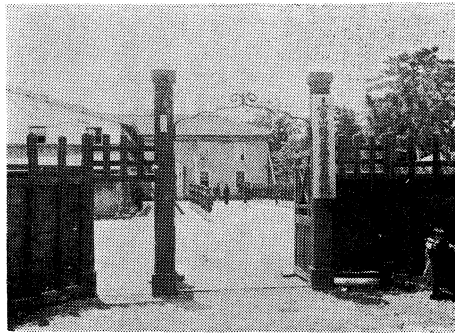
第一章 総 則

第一条 本校ハ薬学ヲ教授シ、薬剤師ヲ養成スルヲ以テ目的トス、尚撰科及速成科ヲ置キ斯学志望者ノ便ヲ計ル

第二章 学年及学科課程

第二条 学課ノ分類及程度左ノ如シ

本科ハ薬剤師タルベキ学力養成ヲ以テ主眼トス



富山県立薬業学校正門

撰科ハ本科課目中ニ於テ学徒ノ選択ニヨリ、二科目以下教授ス

速成科ハ薬学ノ大意ヲ知ラシムルニ在リ、但、授業ハ当分夜中

第三条

本科学年ヲ二ヶ年トシ、之ヲ四学期分ニ分チ、撰科ハ半ヶ年一学期、速成科ハ一ヶ年四学期トス

第四条

学科課目左ノ如シ

本科 学科課目

第一期 無機化学、植物学、物理学、独逸語学

第二期 有機化学、製薬化学、調剤学及実地演習、分析化学（定性分析実地演習）独逸語学

第三期 生薬学、衛生化学、裁判化学、調剤実地演習、分析化学（定量分析実地演習）

第四期 衛生化学、裁判化学、日本薬局方使用法、製薬化学実地演習

選科 学科課目

本科学課目中二課目以下教授シ、裁判化学、衛生化学、調剤学実地演習ハ特ニ一学期内ニ於テ教授ス

速成科 学科課目

第一期 無機及有機化学、物理学、植物学

第二期 生薬学、製薬化学、調剤学

第三期 同上

第四期 同上

第五条

学期々日ハ左ノ如シ

冬学期 自一月十一日 至六月三十日

夏学期 自七月一日 至十二月二十四日

第六条 休業期日ハ左ノ如シ

夏期休業 自七月二十日 至八月二十日

冬期休業 自十二月二十五日 至翌一月十日

日曜日、大祭祝日、本校記念日（二月一日）

第三章 入学及退学

第七条 入学ハ冬及夏学期ノ始メニ於テ許可ス、但、時宜ニヨリ臨時入学ヲ許ス事アルベシ

第八条 本校ハ左ノ資格ニ適スル者ニ限り入学ヲ許可ス

本科 年令満十七才以上ノ男女子 品行端正、身体強健

高等小学校卒業ノ者又ハ之ト同等ノ学力ヲ有スル者

撰科 年令満十七才以上ノ男女子 品行端正、身体強健、築学ノ大意ヲ修メタモノ

速成科 年令満十五才以上ノ男女子 身体強健、略々算術ニ通曉シ且筆記ニ差支ナキ者

第九条 入学志願者ハ左ノ書式（略）ニ準シ、入学願書及履歷書ヲ差出スベシ

第十条 保証人ハ丁年以上ノ男子ニシテ富山市内ニ居住スル者ニ限ル

第十一条 入学許可ノ者ニハ本校生徒タルコトヲ証明スル為ニ在学証ヲ附与ス。生徒登校ノ時ハ必ず本証ヲ携帯シ臨時点検

ノ節之ヲ示スベシ

第十二条 保証人ヲ變更スルカ又ハ本人及保証人転居若クハ改印等ノ節ハ其都度届出ツベシ

第十三条 生徒疾病事故ニテ休課シタル時ハ其翌日マデ保証人ヨリ届出ツベシ

第十四条 生徒退学セント欲スル時ハ保証人連署ヲ以テ願出テ在学証ヲ返納スベシ

第四章 試 業

第十五条 修業試問ハ各学期ノ終ニ於テ其学期ノ学科目ニ就キ試問シ、卒業試問ハ全学期間ノ学科目ヲ試問ス

第十六条 修業及卒業試問共学科目評点百点ヲ以テ満点トナシ、一課五十点以上又ハ一課四十点以上ニシテ全学課平均点七十点以上ヲ修業者又卒業者トナス

第十七条 修業試問ヲ完了シタル者ハ次学期ヘ進級セシメ、卒業試問ヲ完了シタルモノハ卒業証書ヲ与ヘテ之ヲ証ス

第十八条 生徒授業料ハ毎月五日限り分納スベシ

本科 一ケ年 金十二円

選科 半ケ年 金六円

速成科 一ケ年 金三円六十銭

第十九条 本科二学期以上及撰科実地演習学課ヲ履習スル者ハ教場費トシテ一カ月分金二十銭ヲ其月五日限り前納スベシ
第二十条 半途退学者ハ其月マデノ授業料及教場費ヲ徴収ス。又退学者ト雖モ在学証ヲ返納セザル間ハ授業料及教場費ヲ徴収ス

第二十一条 実地試験ニ要スル藥品ハ之ヲ給与スト雖モ、酒精、依的爾、硝酸銀等其他高価ノ藥品ハ生徒ノ自弁トス

第二十二条 実地試験ニ要スル器械ハ之ヲ貸与スト雖モ試験管、濾紙等ハ生徒ノ自弁トス

第二十三条 貸与シタル器械ヲ破損シタルトキハ原品ヲ以テ弁償セシム

第二十四条 本校々則ニ違反シ、又ハ時々ノ揭示ヲ遵守セス或ハ不品行等ニシテ卒業ノ見込ナキ者ハ退学セシム

二、養成目的と科別制

薬学校創立にあたっては、薬剤師の養成を主眼とし、売薬業者の養成をつぎにいたのであるが、学校当局

ならびに売薬業者の勧誘にかかわらず、修学状況はあまり芳しくなかった。それで、明治三十三年度から名を薬業学校と改め、売薬家の子弟の養成を主に変更した。しかし時代は進展し、いつまでも低い薬業学校にとどめることができなくなり、ついに、中等学校程度の県立薬業学校（実業学校令によらない諸学校として）となり、さらに数年にして薬学専門学校に進展した。

しかし、ここまでいたる間に二つの問題がよこたわり、いわゆるいずれが先きか、後かの——高度な薬剤師の養成と売薬行商人養成の——問題が、いりまざって、問題を複雑化してきた。そしてそれは専門学校が完成してから、再び、薬業学校設立の問題となつてあらわれた。

このことが明治二十七年共立富山薬学校設立と同時に一つの問題となつてあらわれた。

すなわち、四月早々、第四高等学校の大島誠治と桜井勘六の両氏との間に相方の連絡について話しあいがあった。

こえて七月十五日、共立富山薬学校幹事日南田宇八郎、講師桜井勘六の両氏は金沢第四高等学校医薬部薬学科主事桜井小平太教授を訪問し、富山薬学校本科卒業生が無試験にて相当の学級へ編入できるよう依頼した。さらに桜井主事の紹介により大島校長にも面会し、かさねて依頼した。大島校長は連絡のことは賛成だが、無試験入学には問題があり、その入学資格をつくるのが大切だと言う返事をした。したがって、本校はなるべく尋常中学校三学年卒業生を募集するように努力することになった。しかし、ついに実行にいたらなかった。

養成目的と科別制の移りかわり

	薬剤師養成	売薬行商人養成	〔予科〕	〔選科〕
<p>共立富山薬学校 明治 二七</p> <p>富山県立富山薬学校 四〇</p>	<p>〔本科〕 年限を二ケ年とし四学期にわたる 年令十七才以上、高小卒、中学二年修了又はこれと同等のもの</p>	<p>〔速成科〕（薬学の大意） 年限を一ケ年とし四学期にわたる 年令十五才以上算術に通じ、かつ筆記に差支えなきもの 年限六ヶ月とし、二学期にわけ、年令十三才以上小学校卒業及び同等の学力を有するもの</p> <p>当 分 休 止</p>	<p>〔予科〕 年限一ケ年の予科をおく （高小四年の課程をおさめ又は年令十四才以上、同等の学力を有するもの）</p>	<p>〔選科〕 本科課程中二課目以下 選修 年令十七才以上、薬学の大意を修めたもの</p> <p>〔研究科〕 実 施 延 期 一課目、半ケ年を一期とする</p>
<p>富山県立富山薬学校 三九</p>	<p>〔本科〕 年限を二ケ年とする</p>	<p>〔別科〕 年限を二ケ年とする</p>	<p>年限を二ケ年とする （高小二年修了者）</p>	<p>〔研究科〕 実 施 延 期</p>
<p>富山県立富山薬学校 三八</p>	<p>〔本科〕 年限を二ケ年とする</p>	<p>〔別科〕 年限を二ケ年とする</p>	<p>年限を二ケ年とする （高小二年修了者）</p>	<p>〔研究科〕 実 施 延 期</p>
<p>富山県立富山薬学校 三五</p>	<p>〔本科〕 年限を二ケ年とする</p>	<p>〔別科〕 年限を二ケ年とする</p>	<p>年限を二ケ年とする （高小二年修了者）</p>	<p>〔研究科〕 実 施 延 期</p>
<p>富山県立富山薬学校 三三</p>	<p>〔本科〕 年限を二ケ年とし、本科出身者又は高小卒業生 年限を一ケ年とする</p>	<p>〔本科〕 年限を三ケ年とし、尋小卒業以上のもの 年限を二ケ年とする</p>	<p>年限を二ケ年とする （高小二年修了者）</p>	<p>〔研究科〕 実 施 延 期</p>
<p>富山県立富山薬学校 三〇</p>	<p>〔本科〕 年限を二ケ年とし、本科出身者又は高小卒業生 年限を一ケ年とする</p>	<p>〔本科〕 年限を三ケ年とし、尋小卒業以上のもの 年限を二ケ年とする</p>	<p>年限を二ケ年とする （高小二年修了者）</p>	<p>〔研究科〕 実 施 延 期</p>
<p>富山県立富山薬学校 三一</p>	<p>〔本科〕 年限を二ケ年とし、本科出身者又は高小卒業生 年限を一ケ年とする</p>	<p>〔本科〕 年限を三ケ年とし、尋小卒業以上のもの 年限を二ケ年とする</p>	<p>年限を二ケ年とする （高小二年修了者）</p>	<p>〔研究科〕 実 施 延 期</p>

三、職

員

すべて創始期には困難はつきものであるが、他国と隔離された交通に不便な地、富山に良き教師を得ることは、なかなか困難であつたろう。その上に私立時代はもちろん、市立時代の待遇の悪さ、ながく教職についてもうことができなかったのも止むを得ないことであつた。

ただ初期において、郷土に桜井勘六（水橋町の出身で、明治十六年上京し、東京大学薬学科の別科製薬学生として学び、明治十九年卒業、引きつづき、薬学科の職員として研究し、明治二十五年、県技手として故郷に帰る。）、日野五七郎（富山市新庄町の出身で、明治二十二年上京、下山博士を訪問し、私立東京薬学校を明治二十四年卒業、明治二十六年帝国大学医学部薬学科選科を終え、故郷に帰り、富山尋常中学校の博物科教師となる。）、武庫川光寧（富山市山王町の出身で、第四高等学校医薬部薬学科を明治二十七年十一月卒業。）

右の薬学専攻者三人を講師として得たことは、何にも増して幸いなことであつた。しかも同氏等はあらゆる困難にたえて創業にあたり、富山薬学の礎をつくったことは特筆大書すべきことである。しかるに、同氏等がながく学校に止まることができなかったことは、何に原因したか、あれこれと思ひめぐらすだけである。

つぎに記録が充分でなく不明確な面もあるが、とにかくにも、薬学校、薬業学校を維持しつづけてきた教職員の名をとどめたい。

その前に各年に在勤した教職員の数を記す。（兼任も含めて）

共立富山薬学校
富山市立
富山薬学校
富山市立富山薬業学校
富山県立
薬業学校

年号	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42
人数	5	7	5	3	3	4	4	4	6	7	7	3	7	11	9	10

共立富山薬学校創立から富山県立薬業学校時代の職員

職員表 (明治二十七年から明治四十二年まで)

姓 名	職 名	就 職 年	経 歴
○ 邨 沢 金 広	校 長	明治二七—三〇	広貫堂社長
○ 桜 井 勘 六	校 長	同 二七—三一	東京大学別科製薬学生 (明治十九年卒)
○ 日 野 五 七 郎	校 長	同 二七—三三	東京帝国大学医学部薬学科選科 (明治二十六年卒)
○ 田 村 輔 三 郎	講 師	同 二七	私立東京薬学校 (明治二十四年卒)
○ 佐 多 愛 彦	〃	同 二七	
○ 武 庫 川 光 寧	〃	同 二八—三〇	第四高等学校医学部薬学科 (明治二十七年十一月卒)
○ 谷 井 寮 太 郎	〃	同 二八	薬剤師
○ 岡 田 亀 蔵	〃	同 二九	薬剤師
○ 大 久 保 秀 民	〃	同 二九	薬剤師
○ 稲 本 保 太 郎	〃	同 二九—三五	

○	○					○	○	○	○		○	○						
堤 從 清	金盛滋次郎	今井義直	南日彙三郎	龜谷芳之助	土田勇義	藤坂友次郎	金谷秀男	金村清蔵	久保田宇市	柳 榮太郎	山村弁之助	日野五七郎	石井則義	松田三郎	中西司馬	数見宗一郎	山 本 繁	今 野 秀 輔
校 長	助 教 諭	助 教 諭	書 教 諭 記	教 諭 (兼)	助 教 諭	教 諭	教 諭	助 教 諭	助 教 諭	兼 助 書 教 諭 記	兼 任 校 長	教 諭	書 教 諭 記	助 教 諭	校 長	教 諭		教 諭
明治三八—四三	同 三八—四〇	同 三八—四〇	同 三八—三九	同 三八—四〇	同 三八—四〇	同 三八—三九	同 三八—三九	同 三六—三八	同 三八—三九	同 三九—四〇	同 四〇	同 四〇—四三		同 四〇	同 四〇—四三	同 四〇—四一	同 四〇	同 四一
石川県甲種医学校	富山市立薬学校 (明治三四年)											金沢医学専門学校薬学科 (明治三八)		金沢医学専門学校薬学科 (明治三八)		金沢医学専門学校薬学科 (明治四〇年)		東京外国語学校
											県事務官	前 出			東京大学医学部製薬学科 (明治一四年)			

注 姓名の上部の○印は薬学担当教師

富山県立薬業学校教員表

職名	分掌事務	免許状	出身学校	受持学科	毎週時間	俸給	氏名
校長			東京帝国医科大学薬学部	裁判化学、衛生化学 薬局方、薬品鑑定	一四	年俸千円	中西司馬
教諭庶務	葉剂師		石川県甲種医学校	製薬化学、調剤学	二一	五拾八円	堤從清

川田以一	教諭	同四一	私立東京專門學校
清水駒造	教諭	同四一	私立東京藥學校
内山幾太郎	教諭	同四一	東京順天求合社数学科
稲田条次郎	助教諭	同四一	富山県中学校
小柴梅次郎	助教諭 兼書記	同四一	私立東京藥學校（明治三四年）
高津武治	教授囑託	同四一	第四高等学校医学部
長沢安太郎	教授囑託	同四一	私立東京藥學校（明治三七年）
高田範国	校医	同四一	東京帝国大学医学部藥学科
岩瀬治兵衛	教諭	同四一	富山師範（明治十六年）
横山康	兼教授囑託		
高畠清	教諭	同四一	
岡本信親	兼教授囑託		

同	教 務	東京帝国大学 医科大学薬学撰科	生薬学、薬用植物学	一五	五拾貳円	日野五七郎
同	図 書	私立東京専門学校	国語、歴史、修身、地理	一三	四拾円	川田以一
同	薬 品	私立東京薬学校	化学、分析化学	二〇	同	清水駒造
同	独 語	東京外国語学校	独逸語学	一四	参拾円	今野秀輔
同	同	東京順天求合社数 学科	数学、物理	一一	同	内山幾太郎
同	同	富山県中学校	博物学	九	貳拾円	稲田衆次郎
助教諭	消耗品			拾七	円	石井則義
書 記	計			八	拾五円	小柴梅次郎
兼教諭				拾	円	高津武治
教授	薬剤師	私立東京薬学校	体操科 製薬化学、衛生化学	二七	円	長沢安太郎
同	図 書	第四高等学校医学部	図 画	三	円	高田 範 国
校 医	医 師					

四、職 務 分 掌

共立富山薬学校当初は、校長、会計監督、監督、評議員、幹事と、それぞれ創立に従事した人々が、運営に
 当り、創立事務所を広貫堂内において出発したが、細かい校務は、桜井勘六、日野五七郎両講師が苦心慘怛さ
 れたようである。

市立薬学校または薬業学校になってからは、書記が任命されて事務的な面が担当されたが、他の職務分掌は
 不明確である。明治四十年県立薬業学校になって初めて、分掌が明確にされたようである。

すなわち、

庶務掛・堤從清教諭、會計掛・石井則義書記、教務掛・日野五七郎教諭、図書掛・川田以一、器械および器具掛（藥品係・清水駒造、消耗品係・稲田桑次郎）

五、生徒―募集・入学・在学・卒業

学校経営の困難さの一つは、生徒の入学者が少なすぎることに、さらに入学したものも、途中で退学するものが多いことであった。これでは、財政的に苦しい富山市が廢校決議する理由もうなづけるものがある。しかし理解ある売薬業者は、この困難にもまけず、あらゆる手をつくした。

明治三十一年、富山市は薬学校委員を任命して振興について協議し、また薬学校奨励委員を委嘱して入学を勧誘した。

同年三月三日広貫堂発起のもとに大谷派別院において、薬学校生徒募集のことについて市内有志者と協議を上げた。

同年五月、富山薬業会から新入生に制帽並びに徽章をおくった。

同年四月一日、市内薬種業組合より市立薬学校へ選拔生として六名入学せしめた。

同三十二年三月、富山薬学会の寄附金でもって、優等生に、書籍、藥品、帽子等を給与し、また授業料免除の特典を与えた。免除者十五名の多きになったとのことである。

同三十三年、富山市長から、本科修学生十一名内三名にオストワルドの化学原理一部、予科修学生四名中一

名に、実験化学一部宛授与した。

同三十三年五月、売薬青年会員は売薬同志会の勧誘員と各家庭をまわり、印刷物を配布して、勧誘をすすめた結果、入学者が、六十八名に達し、仮校舎は狭くなったとのこと。

同三十四年四月、売薬青年会から学業奨励のため、新入生六十余名に教科書、石盤、徽章等を分与した。

同三十五年三月、売薬青年会から新入生七十余名に教科書を寄贈した。

同三十六年四月、新入生（別科四十名、本科四十五名）八十五名に、売薬青年会から教科書一部宛寄贈した。

同四十年二月、富山薬業時報はその社論に「薬業家の子弟」と題し、売薬振興のために入学を勧奨した。

同四十年四月二日、富山売薬俱樂部では売薬業者の子弟を入学せしめるため協議会を開き、勧誘委員を設けた。

明治四十一年三月、富山売薬俱樂部の幹事連が市内の高等小学校に至り、それぞれ調査し、在市中の当業者だけで入学者の勧誘方法を講じた。

生徒在籍数

明治二十七年	四〇名	明治三十三年	七八名	明治三十九年	六九名
同 二十八年	三九名	同 三十四年	九九名	同 四十年	八九名
同 二十九年	四三名	同 三十五年	一四〇名	同 四十一年	三八名
同 三十年	八名	同 三十六年	一四二名	同 四十二年	一一八名
同 三十一年	二九名	同 三十七年	一二七名		
同 三十二年	二五名	同 三十八年	八二名		

六、校

舎

類焼後の再建問題は、解決がつかないままに、県立移管の問題とかわり、明治三十九年の県会で、県立移管に決定した。

同四十年四月富山県立薬業学校として開校、同年の秋の県会で、県当局から土地買収費を予算に計上した。県当局はつぎのような提案をだした。

「義務教育の延長、師範の増員、中学の増加、高等女学校、実業学校に対しては、朝野の世論にかんがみ、全力をあげて整理整とんしてゆかねばならない場合になっている。——有名な薬業に対しては県立薬業学校を設けて、今やこれが発達をはかっている。将来薬業学校を建築せねばならぬがこれも財政の都合を見て徐々に改良拡張してゆきたいと考えているので、数年の間に完成したい——かくて土地買収費を提案」した。

しかも、富山市から寄附金の申入れがなされていたのに、教育費が県費の六分の一をしめており、実業教育（薬業、蚕業、商業、水産業）の充実は、財政を圧迫するとの理由で、県会はこれを否決した。

翌四十一年の県会において、宇佐見知事は薬業学校建築についてつぎのように説明した。

「薬業学校の建築は昨年度校地買入を提案したが、不幸にも否決になった。同校は県立学校中設備最も不完全のもので、本校の改善をはかり、当初設立の目的を達するには、先ずもって設備を完全にするより急はない。種々県立学校に対して費用を要するのでなるべく経済的に、なるべく速に完成を期する方法として、赤十字社富山支部病院の敷地建物を買収し、建物を改築して校舎にあてる。この経費は継続費として要求したい」

かくてようやく、つぎのように決定した。

一金五万円 建築費

二万五千元 四十二年度

二万五千元 四十三年度

ついで薬草栽培の土地が不足しているから、隣接土地買上げを要望する提案が石黒準太郎議員からなされ採決された。

七、経 費

共立富山薬学校時代は、寄附金によってやってきたと言うが、まったく職員等の奉仕的勤務によってかろうじて、維持してきたといわれる。生徒がキップの装置を一つこわすと、東京からとりよせ、これを弁償させてようやく補うという有様だったともいわれている。

富山市立薬学校から、県立薬業学校にいたる間の経費はつぎのようであった。

(市 立 時 代)		(県 立 時 代)	
明治三十年	三〇二円	同 三十四年	一六八六円
同 三十一年	八五七円	同 三十五年	一八七四円
同 三十二年	一〇五六二円	同 三十六年	二三〇四円
同 三十三年	一五七一円	同 三十七年	一八八二円
		同 三十八年	二二四二円
		同 三十九年	二五六一円
		同 四十年	四八八四円
		同 四十一年	六六七五円
		同 四十二年	八三七三円

注：明治三十二年の経費が一〇五六二円となっているが、別の資料では一五六二になっているので、焼失のため臨時費が出たのか、どうか疑問である。おそらく、一五六二円が正しだろう。明治三十五年に県からも五百円の補助が支出されている。

第六節 教 育

一、教 育 一 般

薬学校、薬業の教育目的は、薬剤師を養成し、かつ売薬商人に薬学の大意を教え、富山売薬の振興をはかるにあったことは、ここに述べるまでもないことであるが、明治三十三年、檜垣知事の主催せる教育諮問会における日野校長の発言、共立富山薬学校の校則中に、衛生化学、裁判化学をとりいれ、また明治三十三年に衛生試験部を薬学校に附設し、一般の需要に応ずるなどの様子を見てゆくと、最初の売薬振興から次第に薬学一般の振興へと進展していることがわかる。

ここでは詳細に述べる余裕がないが、明治四十二年皇太子殿下北陸行啓記念として出版された「行啓記念教育一班」なる書籍には、富山県立薬業学校の教育方針およびその内容が詳しく記されている。

二、学 科 目、教 科 書

学 科 目

先にかかげた共立富山薬学校の校則に学科目がかかげられているが、教師が少なく、そのとおりに全科目が行なわれたかどうかは明らかでない。授業時間は当時の募集広告にあるように、本科は、毎日午後一時から五時まで、選科は、午後一時から四時までと、午後六時から九時までの二回にわけて行なわれている。また速成科は午後六時から九時までの間に行なわれていたようである。しかも三ヶ月を一学期とし、三ヶ月毎に新入生を募集していたようである。

明治二十九年には速成科の程度をさげ、しかも午後六時から八時までの授業とし、学科目には、日本薬局方通俗解義、薬物学通俗解義をとりあげた。

同三十年には、予科制をとり、外国語、数学、地理、歴史、漢学を科目とした。

同三十二年には、予科に博物を加えた。

同三十五年には、別科に第二外国語とし支那語を加えた。これは、売薬印紙税のために内地の売り上げが減少し、台湾、中国等への輸出に力を注ぎ始めたために、支那語を教える必要を感じたからである。さらに、同三十三年には、富山実業協会が、ロシアへの売薬進出を考え、ロシア語を教えるようにとの要望を薬業学校へ提出した。これは実現されなかったようだ。

同四十年四月、富山県立薬業学校となつてようやく教師の陣容がととのつて、校則の実施も行なわれ、学校らしくなったように思われる。

予科（一ヶ年）では、修身、国語、数学、歴史、地理、物理、化学、薬用鉱物、薬用動物、植物、生理、独逸語、図画を課し、

本科では、修身、国語、物理、化学、薬用鉱物、薬用動物、薬用植物、独逸語、製薬、生薬、分析、薬局

方、薬品鑑定、調剤学、裁判化学、衛生化学、薬業法規を課した。

教科書

私立時代、市立薬学校時代どのような教科書が用いられていたか、明らかでない。記録にはっきり現われているのは、明治三十九年富山市立富山薬業学校教科書、明治四十二年富山県立薬業学校の教科書である。

ただ教科書が早くから使用されていたことは明治三十三年、三十四年、三十五年、三十六年頃に、売薬青年会から新入生に教科書が寄贈されていることからみて、いくらかの教科書の使用がうかがえる。

明治三十九年富山市立富山薬業学校

本科の部にかかげられたものは、修身、国語、歴史、地理、習字だけの教科書であった。
別科の部にかかげられたものは、

下山順一郎 生薬学

山田 董 化学粹、有機編

下山順一郎 製薬化学 上

山田 董 化学粹、無機編

鹿野猪太郎 製練法

内藤 光 分析化学（百科全書）
藤井 蔵

山田 董	物理学粹
下山順一郎	薬用植物学
高任文毅	日清会話
木常次郎	
鄭永邦	日漢英語合璧
吳大五	

注：明治三十五年(1902)に第二外国語としてとりあげられた支那語は、さらに会話をとりいれたものにかわり、正科となった。
これは日露戦争後の清国貿易の必要性からなったものである。

明治四十二年の富山県立薬業学校教科書

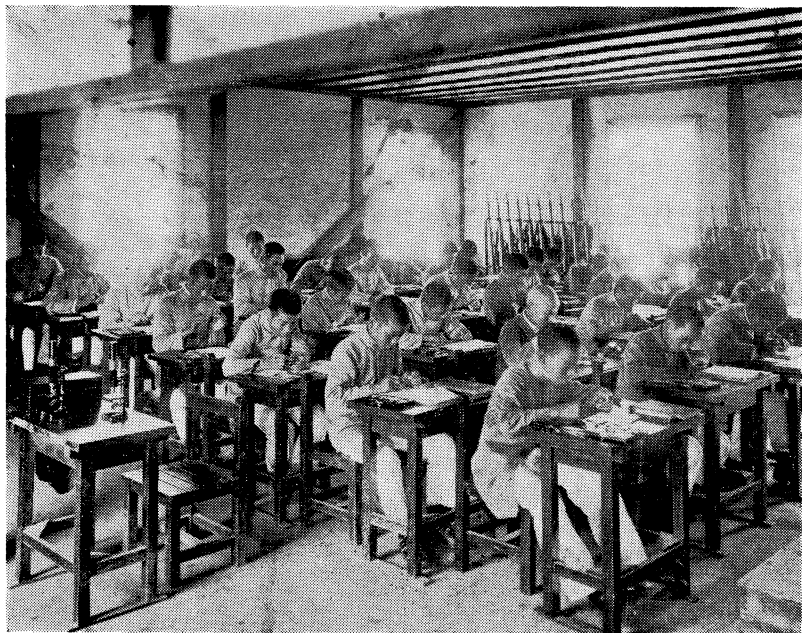
予科では一般教科の外「研究会の物理学教科書」「飯岡の化学教科書」「藤井の植物学教科書」「日野の生理衛生教科書」「大村の独逸語入門および独文読本」が採用された。

本科では、市立薬業学校時代と殆んど変らないものが採用され、新たに採用されたものは日本薬局方だけで他は口授で行なわれた。

三、教授法、実習、施設

教授法

明治四十二年九月、皇太子殿下北陸行啓に際して、特使を派遣して、授業を参観された。その時の教授案を



県立薬業学校 実習室

見れば、どのような内容の授業が当時なされていたか、その一端を知ることができる。

教 授 案

本科三年裁判化学実習教授案

担当者 高 島 清

一、問題 左ノ三種ノ問題ヲ課ス

(イ) 「モルフイネ」ノ検出

(ロ) 「コデイン」ノ検出

(ハ) 「ストリキニーネ」ノ検出

一、時間 二時間

一、教授ノ目的「モルフイネ」「コデイン」「ストリキニーネ」ハ裁判上屢々中毒事件ヲ惹起スルモノナレバ生徒ヲシテ之ガ検出ヲ充分ニ研究セシメ併セテ裁判化学上ニ必要ナル技術ヲ習得セシム

一、教授ノ方針 全級生徒ヲ三組ニ分チ「モルフイネ」「コデイン」「ストリキニーネ」ヲ未知検体トシテ各組ニ配布シ、生徒ヲシテ一般毒物

ノ檢出法ヲ熟知セシメタル後問題ノ解決ニ移ラシム

一、授業ノ進度 生徒ヲシテ各自ニ実習ノ成績ヲ報告セシメ、其成績ノ不良ナルモノニハ數回同一問題ノ解決ヲ繰返サシメ、其ノ良好ナルモノニハ更ニ次ノ問題ヲ授ケ其進度ノ記録ヲ教務主任ヘ提出ス

本科第一学年植物科実習教授案 一時間半

受持教員 日野五七郎

一、課題 菊科特徴ノ実習

二、材料 翠菊 エゾギク

三、実習ノ方法 各生徒ニ翠菊ノ花ノ一枝ヅツヲ分配シ、解剖器械ニヨリ解剖シ、且ツ全形ヲ写生シ各器官ノ形状、位置、數等ヲ調査セシメ、一々描写シテ種属ノ異同ヲ了解セシム。同時ニ花型花式ヲ描キテ更ニ位置、構造ヲ明カニスルニ在リ
四、完全ニ実習シ得タル生徒ノ一人ヲシテ黑板ニ其結果ヲ書カシメ一般ニ自己ノ分ト対照シ其正否ヲ知ラシム
五、次ニ全級生徒ヲシテ本課題ニツキ既ニ習得シタル智識ヲ応用シテ、翠菊ノ特徴ヨリ菊科ノ特徴ニ及ビ且ツ翠菊ノ性状ノ大略ヲ講演ス

本科二年級分析化学実習教授案

担当者 清水駒造

一、科目 定性分析

一、問題 未知体（未知体中ニ銅、亜鉛、マグネシウムヲ含有ス）

一、時間 三時間

一、教授ノ目的 銅、亜鉛、マグネシウムヲ含有スル未知体ヲ化学的ノ方法ヲ以テ之ヲ既知ノ形状（単体若クハ化合物）トナシテ製出シテ未知体中ニ於ケル各種成分ノ存否ヲ確定セシム

一、教授ノ方針 生徒ヲシテ未知体ニ対スル一般ノ檢出法ヲ熟知セシメ且未知体ノ解決ヲナサシム

一、授業ノ進度 生徒ヲシテ、口述、筆記ヲ以テ試験ノ成績ヲ報告セシメ、其不可ナル物ハ再々同一問題ノ解決ヲ繰返サシメ

良好ナルモノニハ新シキ問題ヲ与ヘ其進度ノ程度ヲ記録シテ教務主任ニ報告ス。

実 習

共立薬学校の校則の中には、実習科目として、調剤学、分析（定性、定量）、製薬実習を記載している。県立薬業学校では薬用植物学、分析化学、調剤学、裁判化学、薬品鑑定、衛生化学、製煉法について、実習を行なうことを決めている。

化学実習はどのような状態であつたろうか。

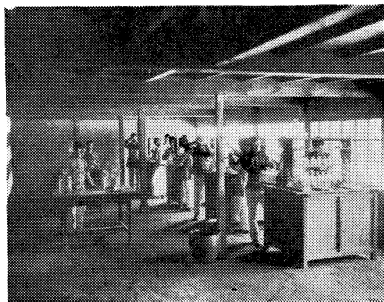
明治二十九年第一回創立記念式当日、分析室、化学機械室、物理機械

室、顕微鏡室で実験し、来賓に感動を与えたということである。

明治三十年、第一回卒業式が行なわれたときには、化学実験室にて、裁判化学上ミツチエルリヒ氏の燐検出法を行ない、暗室中のため、燐光のであるまでマグネシウムを燃して燈用に供した。

明治三十二年八月十二日、大火で類焼したあと、九月十一日授業を円隆寺で再開、十一月初旬、実習を再開している。しかし器具、薬品少なく、一人分で数人が実習していた。

明治三十三年十月八日、別科生一同東岩瀬方面へ実習用海水の採取を行なった。



県立薬業学校 実習室



県立薬業学校 実習室

また、明治四十二年の皇太子殿下行啓記念の出版物にも、実習の一端を記している。

その他、校友会、同窓会、日曜講話会等においても実験を行なって、聴衆に見せていた。

もちろん、当時の設備は貧弱であつたろうことが想像され、かつ非常な苦心が払われていたことが、いろいろの記録の端に伺われるとともに、当時の社会に薬学、化学の重要性を知らせるために大きな役割をしたことである。

施設、備品

創立にあたって、器械に五〇〇円の支出が決定されているが、どのようなものが購入されたか明かない。日野校長が明治三十三年三月の教育諮問会で「……第二本校の不振は設備、教員、薬学科程の不完全……」と述べたごとく、生徒実習は行なわれたとは言うものの設備が充分でなかったことはうかがわれる。

明治三十二年十二月十四日の富山市参事会の決議にもとづき、薬学校に化学衛生試験を行なわしめることになり、これによって、相当薬品機械が購入されたことが報ぜられている。

明治三十四年八月、下山博士の視察が行なわれ、その年の十二月三日に生薬標本三百余种が同博士から寄贈されたことは、当時にとって尊いものであつたろう。

また明治三十五年五月三十一日、高津武治から薬品標本が寄贈された。

四、植物採集と薬草園

生薬学ならびに植物学の授業の一端として植物採取または遠足をかねた植物採取が時々行なわれていた。

明治二十八年七月二十三日―五日、山田温泉、下若鉾泉、八尾地方へ、日野五七郎、武庫川光寧両講師引率のもとに、本科一、二年生が植物採取にでかけた。

同二十九年八月十八―二十六日、日野五七郎講師が、動、鉾植物採取のため、立山に登山、多枝原温泉、松平温泉方面にも採取した。

同三十三年十月頃、職員生徒一同は上新川郡大沢野村八木山地方へ遠足し、植物百数十種を採集し、帰途、富山電燈会社の発電所を参観した。

同三十四年十月十四日、職員一同は生徒一同を引率し、高岡、伏木、氷見地方を経て二上山へ遠足運動をかねて薬草採取にでかけた。

同三十五年六月十九―二十日、職員一同は、生徒百二十名を引率し、中新川郡五百石、大岩山、立川寺方面に、遠足をかねて、薬草を採取した、

市立薬業学校時代の記録によると、植物学の野外教授について次のようなことがのべられている。

本校にては別科一年、二年級共に植物時数は一週二時間宛とす前者は植物形態学植物生理学、後者は植物分類学を教授す一ヶ月一度両級共に郊外に出で教師自ら草木を取り形状、柔剛、脈絡、花等の特徴を口述したる後雑記帳に記入せしむ又材料宿題として之を解剖せしむ、画用紙は「ケント」等を用ひずして普通のものに堅き鉛筆にて画かしむ、解剖器、針「ピンセット」を各自に与へ美的ならず専ら確実な画かしむるを旨とす。

本校卒業生は重に文部省薬剤師試験に應ずるものなれば、植物各科各属の特徴及び薬用植物を知るは最も必要とすることとなり、故に郊外教授せし材料等各自に膳葉を作らしめつつあれども其術至て拙劣なり。

効果

長所

第一、観察を鋭敏にす

第二、自然界につき正確なる思想を得しむ

学校にて各科目を教ふる目的は種々の部分発達を要す。若し夫れ文学上の趣味をのみ発達せしめ児童之に熱中せば感情的人間にて如斯偏寄の教育は中等教育者の取らざるところなり、故に一方理学的の事をも加へ感情に判断力を附加し以て完全となすにあり。

故に文学的思想発達に對し、実物に照し同時に觀察力を養成す。彼の文人墨客園芸家、鮮麗芳香大小を賞するのみは吾人の取らざるところ、充分觀察により粗より細に調査報告するに実物に依りて特徴を知るに至らしむ。故に教科書の挿画掛図よりも野外教授する効果亦尠しとせず。

正確なる思想は博物学研究に直接の功能あり各事物の応用は確實なる思想よりして生ずるものにして其応用至つて必要たり、例へば生物は天然に「ワク」と云うも種々の実験を施し之れが応用の結果其然らざるを知る。彼の日月星辰より草木に至る迄の秩序整然たるも迷信者は卜者の方向、過福運命により左右にせんとす「狐は人をバカス」皆天然の思想「シープ、エツフクト」は如何に知るか、教室よりも天然の青々たる天井と山、海、河の自然物につき正確思想は効外にて受得せられるところ其効果亦至大なり。

尚体育の補助となる。

(短所) 児童身体上の要求に對する合意的の満足を与えるものにして運動、清潔、摂生等規律的生活をなさしめ純潔なる意志を有せしむるも、一カ月数回の野外教授は児童の行為をして粗野に流るる傾向あり。解剖をなさしむる材料は最も容易き簡單なるものを撰択し帰納的になさしむ。尚野山にては一種の興味を起し自然を愛し從て

国家を愛せしむるに至る。要するに野外教授を適度に施行せば益ありて害渺なし。

薬 草 園

薬草園は創立以来設立を見なかった。明治四十二年、皇太子殿下北陸行啓記念事業として、薬草園の設置をとりあげている。

「基礎学科の一科たる薬用植物学講習上薬草園設置の須要なるは言をまたず、薬草を培養して適良なる生薬を供給する端緒を開くがごときも薬草園の設置によりて初めてこれを期し得べし。彼の医治応用上最も貴重せらるるところのデキタリスのごとき普通薬舗に販売するところのものは往々不適品ありて治療を誤ることは刀圭者の常に痛嘆するところ、本園経営によりてこれら薬草培養事業の奨励に資せんとす」

その当時、薬業界でも薬草園の設置の声があり、その設置を促す声もあった。しかし、県立薬学専門学校になって漸く実現の運びになった。

五、図 書

薬学校、薬業時代には参考図書が購入せられていたが、とくに図書室はなかった。県立薬業学校になってから、図書係が初めて設けられたようである。

明治三十二年八月十二日の富山市の大火の際には、職員、生徒の尽力で図書、備品類が運び出されたと記されている。現在富山大学薬学部図書館には、「共立富山薬学校印」「富山市立富山薬学校印」「富山県富山

市立富山薬業学校印」「富山県立薬業学校」の校印を押した図書が保存されている。もちろんその当時どれだけの図書が購入されたか記録がないので不明である。現存している各時代に購入した図書は

共立富山薬学校時代 六冊

富山市立富山薬学校時代 一九冊

富山県富山市立富山薬業学校 二二冊

富山県立薬業学校 一五冊

である。

六、校友会と課外活動

校 友 会

校友会の組織ができたのがいつか記録が明かでないが、市立富山薬業学校になってから会則をつくり、設置されたようである。明治二十九年創立せられた同窓会は、校友会と同窓会の合併したようなものであった。

この校友会も、卒業生（元共立、市立薬学校および本校卒業生）と在校生とから組織されていることからみると名は異っているが、同じようである。

明治三十九年四月、卒業式終了式後、来賓および名誉特別会員五十余名正会員八十名の出席を得て開いた。当日の主な講演はつぎのようであった。

藤坂友次郎 卒業生に願う

中村松太郎 新陳代謝

中林清吉 運動の効用

浅地宗旭 所感

菅沼賢隆 会中における感

朝尾好三 勉強の効

稲泉甚四郎 演題を貴ぶ

早川正直 学について

同四十年一月十二日の校友会には第八十九回と記されていることをみると、相当ひんぱんに会がもたれたようである。会則中の通常会の項をみると、学術に関する演説、質議、討論とある。すなわち、知識の交換が主をなしていたようである。

同四十一年六月十日には、庭球会が開かれたことが記されている。また四十一年二月退職した数見宗一郎が記念として下山博士著第三改正日本薬局方詳解一部を校友会に寄贈した記事を見ると、図書もある程度購入していたように思われる。

同四十三年三月十二日、富山県立薬業学校の校友会の解散式を行なった。来賓の主なる人は、玉川富山連隊区司令部副官、阿部県売薬同業組合長、日南田同事務長、高田校医、魚住薬業誌記者等であって、黒白の幔幕を四隅に張り、天井には、万国旗を十文字に吊り、会場には数ヶ所に種々なる盆栽を配置してあった由、中西司馬校長の下に閉会式を終った。

課 外 活 動

課外運動としては、柔道、擊劍等の課外教授を行ない、遠足もよく行なった。また先にのべたように、植物採取もかねてよく行なわれた。

運動会は、校庭が狭いために、四方の海岸にいつて行なうこともあった。時には、浜で綱引を行ない、捕獲した魚のうち参考になるものは、動物標本とすることもあった。

また金沢方面に旅行したり、病院、学校の見学を行なった。



生徒作品陳列場

明治四十一年三月には、発火演習を行なった記録がある。軍事教練の始めであつたのであろうか。

七、成績品の出品、展覧

明治三十三年七月三十一日—八月六日、関西府県教育品展覧会へ生徒実習になる化学用品、医薬品百余点、薬草、習字、掛図等出品して、二十名が賞品および賞状をうけた。

明治三十六年、大阪で開かれた第五回内国勸業博覧会へ生徒の製作品を出品した。
明治四十二年、皇太子殿下行啓に際し、生徒作品を出品した。

皇太子殿下行啓当時台覧成績品

生徒成績品陳列目次			製薬六十八品
薬名	氏名	薬名	氏名
亜硝酸アミール	浅地 宗旭	アニリン	改井 覚太郎
醋酸エーテル	田村 義治	ヨードコロジウム	荒木 文二
醋 酸	高藤 政一	三硫化アンチモニウム	鷹田 与七郎
スルフォ石炭酸亜鉛	浅地 宗旭	醋 酸 銅	中土 庄之助
硝酸亜酸化汞	河辺 友次郎	硫酸銅アンモニウム	吉沢 初次郎
枸橼酸亜鉛	平野 勝治	枸橼酸鉄アンモニウム	荒木 文二
硝 酸 鉛	横江 義清	沃度 化鉛	田村 義治
アセトアニリッド	中土 庄之助	デルマトール	改井 覚太郎
ウロトロビン	中土 庄之助	カフイーネ	中土 庄之助
ブROOM化アンモニウム	中村 貞喜	焦性磷酸ナトリウム	田村 義治
亜クロール鉄	田村 欣輔	安息香酸ナトリウム	田中 仙三郎
クロール化マンガン	田辺 精三	硝酸ナトリウム	平野 勝治
クローム酸	改井 覚太郎	硫酸酸化鉄	吉沢 初太郎

クローム酸アンモニウム	西野清太郎	クロール化カルチウム	河辺友次郎
クローム酸カリウム	高野久平	重質炭酸マグネシウム	森田義平
神功石	浅地宗旭	クロール含汞アンモニウム	田村義治
明礬	中土庄之助	醋酸カリウム	吉沢初太郎
酒石酸カリウムナトリウム	田中欣輔	黄色血鹼塩	田中欣輔
食塩	阿部又之助	硫化カリウム	同
沸騰枸橼酸マグネシウム	同	沈降硫黄	同
鉄明礬	津野重作	粒状亜鉛	西野清太郎
含糖炭酸鉄	横江義清	重酒石酸カリウム	同
動物炭	鷹田与七郎	重クローム酸カリウム	改井覚太郎
硝酸カリウム	田中欣輔	硫酸銅	田辺精三
硫酸亜鉛	高野久平	塩化銅アンモニウム	阿部又之助
硫酸ナトリウム	田辺精三	蓚酸鉄カリウム	中土庄之助
蓚酸アンモニウム	荒木文二	硫酸鉄	田村義治
蓚酸	田村義治	硫酸鉄アンモニウム	田辺精三
芳香丁幾	中土庄之助	次醋酸鉛	横江義清
苦味丁幾	吉沢初太郎	芳香醋	鷹田与七郎
蓚丁幾	田辺精三	亜砒酸カリウム液	吉沢初太郎
複方ラヘデンル丁幾	野津重作	芳香精	田中仙三郎

過硫酸鉄液
酸性芳香丁幾
高藤政一
高藤政一
ミन्दレル精
発烟硝酸
横江義清
阿部友次郎

生薬顕微鏡的製品

遠志根
キナ皮
カシヤ木
石榴幹皮
マンダラグ葉

独逸習字、図画、作文、習字、合作掛軸

八、生徒の生活

先にのべた課外活動、植物採取の行事によって、正規の授業外の様子の一端はうかがえるが。創立以来、志願者が少なく、薬業界の人々が、募集に苦勞し、入学に際しては、教科書、帽子、徽章等を寄贈し、茶話会を開いて歓迎、あるいは激励し、卒業式、終了式には多数出席して、生徒の奨学に努力したことは、並大抵ではなかった。

授業料は、明治二十九年頃で、速成科一ヶ月二十錢であつたとのことである。明治四十二年県立薬業学校時代の生徒の学資をみると次のようになっている。(年額)

総額	公認下宿舎費			授業料 (本科)	図文 具費書	被服費	雑費	計
	食費	舎費	計					
一一九・四三 円	六六・〇〇 円	一一・〇〇 円	七七・〇〇 円	一一・〇〇 円	九・四七 円	一〇・九六 円	一一・〇〇 円	四二・四三 円

明治四十一年度の入学生中には、北海道、新潟、石川からの生徒があり、それまでは、殆んど県内の生徒だ

けであったようである。

第七章 同 窓 会

薬学校時代の同窓の集りは、早くも明治二十九年に始められた。二月十一日の記念式後卒業生および在学生によって発会式が行なわれた。来賓は、同校評議員、講師等で、発起人総代として在学生尾谷兼太郎主意を述べ、邨沢校長大いに賛成の意を述べ、武庫川講師「総ての会と言うものの性質を述べ、本会も朝産暮死の轍をふまないように」と注意をひき、併せて賛成の辞をのべた。選科生関野は本会員に希望をのべた。

総理一名、会頭、副会頭各一名、幹事三名、会員は通常会員、名誉会員の二種とし、会日は毎月第二土曜日にて、会合は総会、臨時会、通常会とし、会費は当分一ヶ月二銭と決めた。

明治三十年十二月四日、本日の出席者数十名、役員には、会頭邨沢金広、副会頭関野英之助、理事金子清蔵、尾谷健太郎当选、次のような講演があった。

- 1、硫化金属を如何に区別するやおよびその要件
- 2、ヘロンス球とは如何、その応用
- 3、一キログラムの硫黄を燃焼して幾何の亜硫酸ガスを生成するや
- 4、硬水は軟水にて豆類を煮るよりも硬固る理由如何
- 5、暗体の発光体によりて発光する理由

講師武庫川光寧高等学校薬学科在学中「裁判毒殺事件に応じた実験談」があった。

明治三十三年九月二十七日、富山薬業学校の仮校舎にて開催、来賓、特別会員、通常会員四十六名出席、型の如き議事があつて、つぎの講演があつた。

立山薬草に就いて

田中徳藏

共進会場の飲料水性質

金盛滋次郎

市内販売の酢試験成績

柳沢秀吉

役員改選の結果、会長 堀大次郎校長、副会長 岩城栄次郎、幹事 金盛滋次郎・前田九郎、会計 田中徳藏、石野正久、評議員 吉山豊次郎・日水清治・中川治一郎

明治三十九年三月、本日の会の講演は次の様であつた。

1、卒業生に願う

堤 從清 校長

2、鉄の反応

南日 条二郎

3、淘汰に就いて

亀谷 芳之助

4、卒業生に乞う

米田 力次郎

右の外、会合は毎年行なわれ、多いときは年に三、四回も行なわれ、出席会員も四、五十名を降ることが少なかつた。講演も熱心で、研究発表、同窓会および母校の発展に関する意見の発表もあつて非常に盛会であつたようである。来賓には、大管昇平、長沢米次郎、岡村茂平等、売薬青年会員の顔も時々見え、激励されるところがあつた。また母校の先生方も演説に参加し、会員を指導し、また激励せられることも多かつた。

卒業生の活動

共立富山薬学校創立以来の本科、別科、選科卒業生の数は、明かでないが（資料によりまちまちである）、現在までの調査では、二百四十名位の氏名が判明してきた。それらの人々の内、現存している人の人数もはっきりしていないが、十数名の方がいられるのではないか、またそれらの卒業生の活動状況も明かでないが、多くの卒業生は、売薬業者として活躍され、富山売薬の振興につくされ、一部の人は、薬剤師となり、病院、試験場、会社、官公庁等に勤務活動され、とくに、第一回の卒業生若林常太郎は、県外に活動後、富山で薬局を開くかたわら、初の薬剤師として広貫堂に勤務された（明治三十五年）。さらに学界方面では柳沢秀吉は金沢医学専門学校薬学科を終え、金尾清造は東京帝国大学医薬部薬学科選科修了、それぞれ薬学博士の学位を取得された。また富山薬学専門学校の教官をされた吉田和平先生は、陸軍の薬剤官となった人で、共立富山薬学校の第二回の卒業生である。

第八節 名士の視察とその講演

明治二十三年東京帝国大学薬学科丹波敬三教授来富せられ、売薬業の状況を視察し、売薬振興のため薬学校の重要性を強調、薬学校設立の近因をつくられた。薬学校の設立後も東京の有名な殊に東京帝国大学の教授が次々と来富せられ、薬学、薬業の振興のために指導と激励をなし、中央から遠く離れた僻地にある富山の発展史に大きな役目を果たしたことは、特筆大書に価することであった。

注：明治二十年代の北陸線は、西は福井県の柳ヶ瀬まで、東は直江津までで、もちろん高山線はなかった。しかも碓氷峠は約二時間の円太郎馬車で連絡していて、東京へ行くには、東岩瀬から船で直江津までゆき、それから汽車にのったもので

あった。新聞は郵便で、一週間もかかってやっと到着したとのことであつた。

同三十一年八月二十三日、東京帝国大学医学部薬学科丹羽藤吉郎教授は、直江津港から岩瀬港に到着、富山市立富山薬学校長桜井勘六、薬業家有志多数出迎えた。夜は八清楼で懇親会を開き、労をねぎらい、二十四日は、千歳館で、「医薬分業」について講演し、参会者に多大の感銘を与えた。

同三十二年、東京帝国大学教授長井長義博士、田原良純博士が北陸地方の薬学、薬業視察に来られるということで、その機会に、富山で県下薬学大会、薬剤師会臨時大会等を開く予定で富山実業協会、富山県工業会、富山売薬同志会等とも相協力して準備中のところ、八月十二日の富山大火で休止にたちいたつた。

同三十四年八月十一日、東京帝国大学教授、日本薬剤師会々頭薬学博士下山順一郎は、随行員薬学士慶松勝左衛門、日本薬剤師会理事雨宮綾太郎、日本薬学会員鈴木正肥等とともに来富した。今回北陸方面への出張は日本薬局方調査委員として薬物調査が主目的であつた。富山県技手福島猪太郎、薬剤師会員横江清次郎、大久保秀民等は金沢まで出迎え、富山駅には、県並びに薬業関係者百余名歓迎のため出迎えをした。一行は人力車をつらねて富山ホテルに投宿、午後は同ホテル楼上で、富山県薬剤師会員のために講話がなされた。

十二日、一行は午前県庁を訪問、次に市立富山病院、市立富山薬業学校を視察し、同校講堂において同窓会員一同に、「将来薬学研究上有益な講話」をなした。午後市内五番町光厳寺において、一行の講話会が開かれた。聴講者は、檜垣知事、並河警部長、沢原警視を始めとし、市内薬業者は開会前より炎暑をおかして続々集まり、開会頃には、約八百名が入つた。午後二時半邨沢金広開会の辞をのべ

雨宮綾太郎は、「売薬事業の沿革から将来について述べ、薬学の進歩、売薬の改良の必要に論及し、その進歩と改良は他人に依頼することなく、当業者自らこれを実行しなくてはならぬ」というような話をなした。

次いで、慶松勝左衛門は「日本の薬学はこれを欧米各国にくらべて、なお幼稚の時代にある。したがって輸入売薬が多いのは、製薬を改良しないからであるとし、アルコール、醋酸のことなど例にひき、さらに木材から醋酸を製造すれば、利益の大であることを統計によって説明し、大いに国家の富強をはからねばならないと強調した。

下山博士は、まず北陸出張の理由をのべ、凡そ次のような講話をなした。

近來輸入の超過していまだこれを防圧する能はざるは慨嘆に堪えざる所たり、これが策を講ずる果して如何（第一）西洋より本邦へ輸入する物品を製造すること（第二）本邦固有の物産を改良しもしくは新たに製造して海外へ輸出すること此の二策をとらざるべからず、しかして殖産興業の範圍は頗る広きが故に各専門家夫れ／＼之を分担し薬業家は薬学の事業を起さざるべからずと説き起し、県下の売薬業は三百年來最も盛んにして其産額は全国中の五分の一を占め居れり。此の莫大なる事業を拡張し進んで之を海外へ輸出するに至れば独り県下を利するのみならず我国を益する甚だ大なるべし。然るに売薬は煙草と齊しく有害視せられ第一に營業税、第二に印紙税を課せられ居るは頗る遺憾とする所にして、今の売薬規則は明治八年に成り、当時売薬其物は恰も有害物の如く治し得べき病人も医師に就かずして之を飲まば却って不治の症に陥るかの考を以て制定せられたるものなり。然れども欧米諸國に於ては、夙に売薬を許しありて且つ便益の点あり即ち毒薬、劇薬、普通薬の三種に分ちて毒劇薬は医師の処方によりて調査し得ることとなり居れども、我国に於ては普通薬の外は売薬に用ゆるを許されず、是れ我國の彼國に比して不便の点なり。殊に病人其者は悉く医師の治療を受け得らるるものにあらず、たとえば微少の怪我の如きは即功紙一枚にて容易に治癒し得べく、且つ寒村僻地に在りて急遽疾病に罹り医師を迎うるに隙なきとき一服の売薬以て一時の急を救うを得べし。即ち売薬は烟草の如き香水の如き贅沢物にあらざるに、或は印紙税を或は輸入税を徴せらるるは慨嘆に堪えざる次第にして、当業者は政府に対して能く事情を明かにし以て規則の改正を促さざるべからずと述べ、己に売薬の必要を認むれば当業者は益々其改良を講ぜざるべからず、近時売薬を

売弘めんが為め懸賞を為す者あり、甚だしきは何日服して癒らざれば金を遣るなど広告する者あるは実に見るに忍びざる所にして、かくの如き広告を為すが為め政府は却つて有害視するに至るべし。故に同業者は互に相戒め将来諸税を廢せんと欲せば、かくの如き卑劣の広告を為さずして更に改良を加へ大に世間の信用を博せざるべからずと説き、今の規則は法律に抵触する個所ありとて法律第十号には薬剤師の權利を規定し医師の処方により藥品を調合販売するものとなしあるにかかはらず、規則は普通の藥種商人にもこれを許しあり、支那においてすら医師の処方により藥品を調合販売するは薬剤師に限りあるに、我國において一般の素人にもこれを許せるは矛盾のはなはだしきをもって、これが改良の曉は從來許しあるものには既得權としてなお許すべきも相統者に至りては薬剤師に限りこれを許すこととせざれば法律と抵触するのみならず、したがって藥學博士藥學士の信用を減するに至るべしと論じ、それより學問の必要に移り当地のごときは學校を設け、少なからざる費用を投じつつありと聞く、これ誠にしかるべきことにて事業の完全を望まば學問の研究を怠るべからず。かの草根木皮をもつて醫藥となしつつありし時代はただ本草綱目及び傷寒論を知りて當業者はその効能さへ述べ立つれば可なりしと雖も、時勢の進歩に伴うときは決してこれをもつて足れりとすべからず。ことに現今はもっぱら西洋の藥品を用ゆることが故に、益々學問の必要あり。斯學の發達いまだかのごとくならざるにより西洋の藥品はますます超過し來り、ひいて經濟上損失を与うるや大なり。西洋諸國は藥品を製造するに巧みなるをもつて製藥場のごときは他人に見することなく、且つその多くは自己の發明に成るにより我國のごときもまた彼がごとく製藥を發明せざるべからず。これを發明するには姑息なる學問をもつてよくするところにあらず、時にあるいは洋行して研究を積むべきなり。諸君は斯業の擴張を謀ると共に學問の研究を忘るべからずと説き、それより藥品の原料には人工と天產の二あり人工のものは製造し得べしといえども、天產中我國において得べからざるものあり、而かも古來おもに輸入し來れる天產物中龍腦のごとき阿仙のごとき丁香のごとき甘草のごときは我國において製造しもしくは移植するを得、したがって輸入を仰がずして利益を得るものありと述べて龍腦と樟腦のことに移り、樟腦は樟より出する天產にて人工を以て成しがたきものなれども、今や

台湾にはその経済の大部分を補うべき樟樹あること及び樟樹に含有せる炭素水素酸素の分量のことを化学的に示し、また龍腦には梅花龍腦と日の出龍腦の二種ありてその差異あることならびに梅花龍腦は人工にて製し得べからざるも日の出龍腦は樟腦を以て製し得べきことを詳しくボールドに分量を記して示し、樟腦は台湾において多量を得べきを以てこの製法を用ゆればついに輸入を仰がざるに至るべきこと及び阿仙藥は新嘉坡より丁香は印度より多く輸入すれどもこれを台湾に移植し得らるること、また丸藥の土台として最も多く輸入せる甘草もまた移植せば蕃植を見るに至るべしと論じ、しかして藥業家は製藥の改良をはかりて朝鮮支那はもちろん印度西洋にまでも販路を拡張すると共に學理を応用して原料を製造するに至れば、ただに県下の利益のみならず我國に取りて大なる利益あり。はたしてしからば政府もまたついに売藥を煙と同一視せずして營業税印紙税を全廢するに至るべし。ここに進ましむると否とは一に諸君の方寸に在るなり。要は學問を基礎として斯業を進歩せしめもつて輸入の超過を防ぎて國家の經濟に益せんことこれ諸君に對して希望して止まざるものなり云々。

講話後、午後五時半から華見橋畔八清樓において、一行の歓迎宴會が催された。同夜の來賓は、檜垣知事、並河警部長、沢原警視、第十二銀行取締役および各新聞記者等で、その他の會員は藥劑師會、売藥同業組合、売藥同志會、藥種業同盟會、売藥青年會の各會員約百五十余名に達し、地方稀に見る盛會であつた。歓迎委員長中田清兵衛氏は、開會に當り、「博士一行炎暑の時季をも厭わず遠路來富せられ、昨今兩日有益なる講話をなして下さつた。藥劑師一同、および売藥業者一同感謝にたえない。我々は將來博士の高説に隨ひ、益々斯業の發達に尽瘁せんことをちかいます……」云々と挨拶し、遠來の博士一行の勞をねぎらい會を閉じた。下山博士一行の歓迎の世話役の主な人々には、中田清兵衛、阿部初太郎、邨沢金広、日南田宇八郎、沢田金太郎、中田太七郎、安達周平、横江清太郎、堀大次郎、大久保秀民、松井伊平、寺田久蔵、島田治三郎、大菅昇平、水

上嘉平、村尾定保諸氏の名があった。

同三十六年八月二十九日、内務省衛生技師池口慶三の衛生事務視察のため来富せられた機会に、富山県薬剤師会、富山売薬同業組合、富山県売薬青年会、富山薬業研究会の四個団体合同発起となり、三十日午後二時から、同技師を始め、久保本県警務部長、黒田同衛生課長を富山ホテルに招待して、講話会を開いた。来会者約百七十余名であった。池口技師の話は大体つぎのようであった。「従来の売薬に対する世人の觀念から、従来の売薬当業者と現時および将来の当業者を論じ、進んで売薬そのものの必要より現時の状況ならびに改良方法の手段および富山の売薬業者に対する将来への希望等を述べ、その上、薬品の変敗、分析効無効論等に説きおよび」約一時間半をついやして熱心に多大の感動を与えられた。

三十一日には、李家知事および久保警部長、池口技師を富山ホテルに招待、慰勞された。

九月一日には、池口技師は、本県警察部、福島技手とともに薬業学校、広貫堂を視察した。

同四十一年十一月十一日、小松原文相は明石秘書官、真野実業学務局長を同道、県側からは、宇佐美知事、伊藤事務官、高松教育課長、県視学、その他県官、新聞記者十六名余が同行して、山王町の富山県立薬業学校の仮校舎を視察した。各教室の授業を參觀、実習室にて本科二年生の分析をことに注目して午後三時退出、ただちに県庁に向った。本校は、新校舎建築案が県会に提案されておる時であり、この視察は誠に意義あるものであった。同四十一年の県会で、薬学専門学校昇格の諮問案が提出されたのも、この視察をめぐっての文部省側、県側、学校側との内部的交渉があったことの結果のように思われる。もちろん、そのなかに、長井博士を中心とする東京大学の教授各位の支持後援のあったことがあづかって大いに力があったのである。

以上の外、内務省衛生局長高田善一（明治二十七年）、草野大軍医正（明治二十九年）、農商務省山林局長

原保太郎（明治三十四年）、文部省実業教育局長真野文二、文部省視学官中川謙二郎（明治三十六年）、大井玄洞（明治三十六年）、金沢医学専門学校薬学科主任桜井小平太（明治三十六年）等が視察のため来校されている。

九、対 外 活 動

売薬業界によって育てられた学校である。校長始め教師、卒業生達は、富山薬業界を育てるために、講習会あるいは研究会を開き、また同窓会、校友会を通じて研究を発表し、啓学と研究を怠らなかつた。

また学校に試験部を設け、一般の試験の依頼に応じた。

つぎに、各種の会合を列記する。

明治二十七年五月 小杉の厚生師天堂では、売薬の改良のため金沢病院副院長医学士逸見綾九郎に調剤方の改良を托した。

同六月 八尾町の天地竹太郎が和漢医同盟会を主催し、傷寒論の研究を始めた。

同二十八年 病院医員、市吏員有志者、薬剤師、市医等の発企で、衛生談話会の開催。

同三十年三月十四日、薬学講習会開催、日野五七郎（薬学校教諭）講師となる。

同三十二年五月二十三日、帰省中の小倉衛戌病院勤務の陸軍三等薬剤官武庫川光寧（元薬学校教員）ならびに東京医科大学第一病院模範薬局員若林常太郎（共立薬学校第一回卒業生）を招き、富山薬学校楼上において薬学奨励の演説を請うた。

同三十二年 日野藥学校長、富山藥劑株式会社創立式に参列し、売藥の營業人に藥劑師が必要であり、行商人に資格者を採用することが必要であると説いた。

同三十三年、日曜講話会

富山市会が市立藥学校の廃校決議を行なったとき、反対運動のために結成した富山売藥青年会は、同三十三年末頃から、日曜講話会を開催し、藥学校教師、藥劑師の講話を聞き、また売藥振興策を論じた。毎回多数の聴講者があり、明治三十六年ごろまでけいぞくしたことを当時の日刊新聞が報じている。

日曜講話会における講演題のうち専門的なもの二、三例をかかげる。

硝蒼、デルマトル及びその処方就て、安息香酸ならびに植物の奇効に就き、阿片の説明外に処方、改良売藥と藥学応用処方談、重曹の精粗鑑別に就てならびに健胃劑、沃度の製法効用ならびに化学的作用及び肉類の鑑別法実験ならびに緩下劑処方談、石炭酸の性質ならびに衛生上の鍋有毒金属及び肺病の特効藥処方例、クレオソートと肺病について、次撒里失兒酸蒼鉛について、磷酸コデインについて、デルマトールの性質・効能・処方附銀箔丸衣の試験法、喫煙の有害なる理由、新藥アイロールの性状及び処方、沃度製劑の注意及び衣服汚点等の除去法、強壯藥と鉄劑について、消毒藥としてのフォルマリンの効力ならびにその実験談、温泉についてその分析及び効用、ナフタリン、黄連の医治効用及び塩化アンモニウムに就て。

同三十四年 岸田吟香（精椅水本舗主、東京）の來富を機に、富山市売藥家および藥学校校長堀大次郎の発起で同氏から「清韓両国における売藥談」を聞いた。

同三十六年十月十七日、富山売藥同業組合においては、組合顧問である金沢医学専門學校教頭製藥士桜井小平太を招き、講話会を開く。演題は売藥製劑の改良について。

同三十六年十月二十四日、富山売薬青年会では、薬業学校堀大次郎を招き、薬業講習会を山王町薬業学校に開催。

同四十二年五月二十九日、売薬青年倶楽部（東水橋町）では、富山県立薬業学校校長中西司馬、堤從清教諭、日野五七郎教諭を招待し、「薬学の意義、薬品の撰択、調剤装置法、製薬」等につき講話をきいた。

薬学校の試験部開設

明治三十三年、富山市参事会で、富山市立薬業学校に試験部を設け、衛生試験、化学試験を行なわしめるところにした。

つぎにきめられた試験料表をかかげる。

種 別	程 度	試 験 料 最 低 円	範 囲 最 高 円
化学的及工業的ノ製品	製造並に精製	一・〇〇〇	一〇・〇〇〇
	定量分析	一・〇〇〇	八・〇〇〇
	定性分析	五〇〇	二・五〇〇
飲料水及氷雪	飲用適否	二〇〇	五〇〇
	定性定量分析	一・〇〇〇	四・〇〇〇
	飲用適否	六〇〇	一・〇〇〇
乳 類	定性定量分析	一・五〇〇	三・〇〇〇
	定性定量分析	一・五〇〇	三・〇〇〇
酒 類	定性定量分析	一・五〇〇	三・〇〇〇
	定性定量分析	一・五〇〇	三・〇〇〇

鉍	泉	定性定量分析	一・〇〇〇	五・〇〇〇
酢。鉛。醬油。茶。絵具。柔料等			一・〇〇〇	五・〇〇〇
炭酸瓦斯	定性定量分析	七・〇〇	二・五〇〇	
鉍物類	右	同	一・〇〇〇	五・〇〇〇
化粧類	右	同	一・〇〇〇	二・五〇〇
警察裁判ニ関スル試験			一・〇〇〇	八・〇〇〇
日本薬局方薬品	適	否	三・〇〇	五・〇〇
証明書			五・〇〇	一・〇〇〇

第十節 薬業諸団体の活動

広貫堂を始めとする各売薬会社の尽力はもちろんであるが、さらに各売薬業関係団体、薬剤師会、薬種業関係団体が薬学校の創立、学校の維持、生徒の募集、生徒の激励、校舎の再築、市移管、市会廃校決議の復活、県移管等にたいして払った努力は、前述の歴史の中に記したところであるが、ここにそれらの団体名をかかげる。

富山県薬剤師会（明治二十三年十月設立）会長中田清兵衛、副会長松江房雄、翌二十四年横江清次郎が副会長となり、大いに貢献した。

富山売薬改良組合（明治二十八年一月設立）
薬学研究会（伊達組の佐伯権三郎、布上亀太郎、松井元次等により明治三十年一月設立）

富山売薬同志会（中田清兵衛、阿部初太郎、邨沢金広、沢田金太郎、志波久次郎、横江清次郎等発起のもとに、明治三十年一月設立）

富山薬学会（薬業会？）（明治三十一年頃）

富山売薬倶楽部（売薬有志により明治三十一年十一月、覚仲町蓮照寺にて発会）

薬学夜学会（売薬行商人の薫育のため、明治三十二年、市内売薬業者によって設立）

薬業組合矯正会（明治三十二年二月設立）

富山売薬青年会（富山市会の薬学校廃止決議にあたって結成、明治三十三年）

富山売薬同業組合（明治三十四年一月八日発起認可）

富山薬業倶楽部（明治三十四年頃設立）

富山売薬行商会（売薬業者の向上改善を計るために、明治三十五年八月三日、市内梅沢町妙国寺にて設立）

富山売薬協会（中田太七郎等により、売薬同業組合だけに頼っているのは、売薬の発達ははかれないと、明治三十五年九月三十日に設立）

富山薬業研究会（明治三十六年八月一日、富山ホテルにて発会）

その他売薬行商地域別の最寄会など多数あって、協力した。

第十一節 新聞と薬学校

薬学校、薬業学校の設立並びに育成については、富山日報、北陸政論、薬業誌、富山薬報等の新聞が、機に

応じて論説を掲げ、社会を啓蒙し、世論の高揚に努力した。

明治二十九年二月四日、富山日報が「鉄道と売薬」と題する社説をかけた、売薬研究の急務をといっている。

「富山地方に鉄道敷設成功が眼前に迫っている。富山の主要産物である売薬は、鉄道の敷設とともにますます販売の便を開き、ひとり内地のみだけでなく、海外にも大いに伸びることになる。しかしこの交通運輸の便によって、他県の売薬もまた大いに発展することであろう。したがって、わが富山の売薬が旧慣を守り改善の実をあぐることがなかったならば、他に圧倒せられることになるであろう。と前提し、されば鉄道敷設の進歩に連れて地方の特産も着々品位を高むるの策を講じ同じく行李を担うて売薬の鑑札を持するにもすこぶる敏活の手腕を持せざるべからず、しかしてわが富山売薬家の有力者はすでに大勢を看破し、売薬改善の一着手として薬学校を設立したりといえども、売薬家の父兄いまだ迷夢のさめざる者あるがため進んで入学する者少ない。もちろんにわか多数売薬家の子弟を駆って高尚なる学科を修めしむるは至難のことなれども、まず、手近き学科を修め、製薬のよろしきを得せしむるまでのことは売薬家の責務として是非とも実行すべきなり。もし今日のままにて過ぎ去り、自ら薬を製し薬を売りながらその名称を知るに苦しみ、その効能を説くに窮るがごとき行商人もあるに至らば、交通運輸の便なるにしたがい、とみに恐慌をきたすことなきを求むるも得べからず。今に至って売薬の改善を説き薬学研究の急を説くは十分陳腐のことなりといえどもそのことの陳腐なただけに実際売薬の改善を認むるあたわず、同感の士幸いに努力するところなかるべけんや」

同三十三年三月二十一日、富山日報は、「薬学校を復興すべし」と題し、富山市会の廢校決議をつよく非難している。

同三十三年四月二十四日、富山日報は、「薬業学校をして薬学校たらしむる勿れ」と題し、売薬業者の子弟

の入学を促し、かつ、薬剤師の養成をつよく要望している。

同三十六年四月一日、富山日報は、「売薬と薬業学校」と題し、薬業学校卒業生は、特に製薬の改良に努力せよ。さらに、学校内に、清国内地行商人養成所とでも名づくる夜学部をつくれと要望している。

同四十年二月、富山薬業時報四十七号に井黒義正が「富山薬界の前途」と題する中で、「富山県立薬業学校内の一部に、模範売薬研究所を設けられんことを望む。

1、研究所は薬業学校在勤の職員諸氏ならびに薬学の知識を備え、斯業に実験あるもの若干名をもって組織す。

2、他府県有名売薬はもちろん、欧米の最新売薬を蒐集し、その製剤法より容器、包紙、体裁等に至るまで綿密詳細研究すること。

3、時々斯界の大家ならびに医学博士等の意見をきき、これを参考に供し、実験研究の結果、模範売薬をつくり、もって当業者に示すこと。

4、該所員の手当並びに該所に要する経費等はすべて同業組合または有志の寄附金をもって支弁すること。右の設備の一日も早からんことを切望している。

この時代に刊行された薬業関係雑誌には、次のようなものがある。新富山（明治二十三年創刊）、富山薬学誌（富山県薬剤師会刊、明治二十五年刊）、富山の礎（広貫堂刊、明治二十九年二月十二日創刊）、富山薬報（富山売薬青年会刊、明治三十七年七月五日創刊、明治三十八年四月、富山薬業時報と改題）、薬業誌（薬業誌社刊、明治四十三年三月十四日創刊、富山県立薬業学校の教師であつた高畠清、日野五七郎、高津武治の三氏が編集顧問として活躍した。）

第四章 富山県立薬学専門学校時代

第一節 専門学校昇格

売薬業者のながい間の念願であつた薬学校も創立されてから十六年、薬業界の協力と学校当局の努力にもかかわらず、経費難と生徒募集難に加えて、明治三十二年校舍類焼という不幸さらに廃校という人災をかさねてきた。しかし売薬業界の不断の努力は、明治四十年ついに、富山県立薬業学校となし、同四十一年全国で初の公立薬学専門学校昇格の決議にまでこぎつけた。

注：専門学校令は明治三十六年三月二十七日、勅令第六十一号を以て公布せられたもので、その目的は、第一条に「高等ノ學術技能ヲ教授スル学校ハ専門学校トス」と定められている。

明治四十年の県会において、県立薬業学校の新築案が否決され、ようやく四十一年の県会において改築ということで通過したような空気の中で、しかも県会の最終日の十二月十四日に、突如として宇佐美知事から、専門学校昇格の諮問案が提出された。

諮問案 二号

「富山県立薬業学校を明治四十三年度においてその程度を高め、専門学校令により薬学専門学校にその組織を変更せんとす」

県会議事録によると、簡単に満場一致可決されたことになっており、ここに全国で始めての薬学専門学校創

立の決定を見たわけである。

この決議がなされるまでには、払われた県当局の苦心もさることながら、薬業界、学校当局、特に薬学専門学校の初代校長となることを前提として就任を懇請されたといわれる中西司馬校長、薬学専門学校の設立を切望し、陰に陽に力添えしていられた長井長義博士を始めとする東京大学医学部薬学科の教授などの相互の連絡と協力には、並々ならぬものがあつたのである。ことに、教育費の増加が県財政を圧迫し、破たんに導く恐れがあると、県会ごとに県当局に迫っていた県会の状況の中でこの専門学校昇格案の通過は、特筆に価することである。

富山日報の明治四十一年十二月十七日の記事の一端を見よう。

某当局者の語るところによれば、

「……本県立薬業学校のごとき中学程度の学校は全国中ただ本県にあるのみにして、しかして、その目的とするところは薬剤師を養成するにあるも、現今の程度は小学校卒業者を收容するものなれば、高尚なる化学・数学を教うるも、これを理解せしむることあたわず。したがって卒業するも当然薬剤師の資格を有せず、あたかも売薬業の徒弟学校のごときものなるをもって、現今の組織にてはほとんど同校を存置するの必要は認められず、よって実業学校令による薬業学校とするか、あるいは専門学校組織にするか二者その一を選ばざるべからざる羽目にありたるをもって、川上前知事時代山村事務官が第二部長たりし時より、これが処置につき文部省と交渉し、同省においても全国に類なき学校なるをもって、その処置につき苦心するところありたる由にて、過般小松原文相の来県したる際も県当局者は真野実業学務局長と協議し、更に高松課長が金沢薬学専門学校に出張して種々調査したる結果、ついに専門学校組織に変更することに決したる由」

さらに富山日報の明治四十二年十二月二十日の「論壇」——「富山県会の議決」の中で

「……実業教育及び中等教育の旺盛なること、実に他に誇るに足るに至るべしといえども、實際良好の成績をあげて県民の希望を満足せしむるを得ると否とは全く別問題にして、これ一に、当局者経営の適否如何に在るを忘るべからず。殊に実業学校に在りては、良好の成績をあげて地方の実業界に貢献するところあらしめんとすること、すこぶる困難にして、現に県下における諸学校中その成績の他に誇るに足るを得るは、ひとり高岡工芸学校のみ、薬業学校のごときは、他府県下に比類無き特殊学校なりといえども、その産出するところのものは、「帯には短くたすきには長き」どちらつかずのものにて、今回専門学校ていどに高むるも、なお依然として吾人を満足せしむるに至らざるや必せり。故にその校舍を建築し、ていどを高むるは可なるも、それと同時に、その実質上の価値を充実せしむるに努めんことを特に当局者に希望し置かん」とす」

この新聞の論壇はよく当時の学校の状況をあらわしているといつて過言ではなからう。

第二節 設置と維持

一、概 史

明治四十二年七月十七日（一九〇九）文部省は告示第二百十三号をもって、全国にさきがけて専門学校令による薬学専門学校を県立として富山市に設置し、同四十三年四月から開校することを認可した。

同四十二年八月六日富山県は県令第三十五号をもって富山県立薬学専門学校を同四十三年四月より開設し、富山県立薬業学校を同年三月三十一日限りこれを廃止する旨通達した。かつこれと同時に、富山県立薬学専門

学校規程を定め、また富山県立薬業学校在学生徒は薬学専門学校別科の相当学年級に編入することとなった。

ここに本校の設立にあたって、無試験免状下附の手續きがとられた。すなわち公立薬学専門学校の設立は本校が始めることから、明治四十三年三月二十六日法律第二十四号をもって、「薬品営業並に薬品取扱規則第四十六条中を改正し、官立公立薬学専門学校（指定私立薬学専門学校）の卒業生は無試験薬剤師免状下附の件が公布せられたことであつた。

同四十三年四月一日（一九一〇）本日をもって、薬剤師を養成する学校として、しかも無試験免状の与えられるわが国初めての公立である富山県立薬学専門学校が開校せられたのである。

初代の校長には、さきに富山県立薬業学校長として赴任され、県立薬学専門学校への昇格のため、文部省との交渉、東京帝国大学医学部薬学科教授達へあっせんの依頼、また県側との接渉等に苦心努力せられた中西司馬薬業学校長が任命せられ、創業の大事業にあたられた。同時に、薬学士高畠清、日野五七郎、梶原高四郎、今野秀輔、末谷三郎、稲田叡三郎、高津武治、石井則義、の諸氏が職員として任命され、翌二日には、湯沢幸吉郎、伊東豊之の二氏が任命された。

同五日には、本科志願者三十一名（県外人十七、八名）別科志願者七十五名が入学を許可された。

同年四月十一日富山県立薬学専門学校としての初の始業式を行なつた。しかしこの時は、まだ校舎建築中のため、富山市山王町の仮校舎（県立薬業学校の校舎）で行なわれた。

中西校長の訓辞のあと、つぎのような知事の告辞が行なわれた。

告 辞

本県立薬学専門学校は新設の企画ここに成り本日をもって始業式を挙行す。

思うに本県の売薬たる実には米穀に次ぐ重要物産にして、全国到る所行商の跡あらざるはなく、殊に近時国運の発展に伴い遠く満韓地方にその販路の拡張を見るに至れり。かくのごとくその商況いよいよ盛運におもむくとともに調剤製薬の改良を促すことまた極めて切なるものあり。しかしてこれが改善を期し発展を計るの途一にして足らずといえども、けだし薬業に関する高等の學術技芸を修得したる人材を輩出せしむるより先きなるはなかるべし。これ本県が従来、の県立薬業学校を特に専門学校のていどに進め本校を創設するに至りたるゆえなり。

そもそも全国におけるこの種の公立学校は本校を以て始めとす、しかしてこれがため政府において薬品営業並に薬品取扱規則の改正を行なわれたるがごときはすなわち本校の基礎を永遠に確立したるものにしてまことに慶賀にたえざるなり。

在学生諸子、諸子はすでに中学校の課程を終え、さらに高等の學術技芸を専攻せんとするものなれば意志固より堅実にして牢乎たる信念を有するはまた疑うを要せず。しかれども本校と共に生まれたる諸子の行動いかんは直ちに校運の消長に関すべく、ことに本校は県下学校の最高に位するものなれば、諸子は思いをここにいたし、精勵學を修め謹嚴身を持し、もって他校生徒の模範たらんことを期せよ。式にのぞみ一言希望を陳べて告辞とす。

明治四十三年四月十一日

富山県知事 正五位勲四等 宇佐美 勝 夫

同年六月二十八日 県立薬業学校になった明治四十年十月に校長として赴任され、校舎の建築問題、薬学専門学校の昇格と相つぐ重要問題のために、席の温まる間もなく、活動かつ苦勞された中西司馬校長はいよいよ

念願かなって、これからという時に脚氣病のため二十七日、赤十字病院に入院し翌二十八日逝去された。

校友誌に

「——何たる事ぞ、人命危浅、朝に夕を慮るべからずとは言え、今さらに驚かれぬるよ。数日前まで温乎たる顔容に接し居たるわれら、さながら夢路をたどるがごとし。

先生はさる四十年十月薬業学校長として来任せられてより今に四年、孜孜として子弟の教養、薬学の普及につとめられたりき。その人を待つや寛にして、しかも狎るべからず、温にしてしかも犯すべからず。情意敦厚一度接したるもののひとしく忘るるあたわざるところなりき。しかるに今や亡し、悼しい哉」

葬儀は七月一日光厳寺で行なわれ、ついで遣がいは午後七時半の列車で故郷名古屋にかえられた。

同年八月三十一日、中西校長と同期、すなわち明治十四年東京大学卒の製薬士であり、陸軍一等薬剤正従四位勲三等功四級平山増之助薬学博士が校長兼教諭に任ぜられ、同九月四日着任され、五日、新任式が行なわれた。高松教育課長、高畠教諭両氏は高岡まで出迎え、富山駅には、職員生徒一同、県参事会員、阿部県売薬同業組合長、横江薬剤師会副会頭、中田徳次郎、内藤薬局長、大菅売薬青年会長、狩野富山県警視、その他薬剤師、薬業家等百五十余名出迎え、心から先生の来任を歓迎した。

九日、富山ホテルにて薬業団体の歓迎宴会があり、二十五日には、平山校長による、清話と懇親をかねた招待会が開かれた。県知事を始め県下のおもな官庁の長、薬業関係者約六十名の人々が招かれた。

同年十一月二十二日 新校舎落成、明治三十二年に薬学校々舎が焼けてから十二年目である。

同年十二月四日 専門学校としての晴れの開校式が行なわれた。（別項参照）

同四十四年七月十七日 富山中学校へ編入試験をうけ入学した本校別科生徒四十三名のため、告別式を行な

った。

同年十月一日 寄宿舎を開設した。

大正元年十一月 政府の指示があったとかで、明年度県予算の削減が行なわれ、このとばしりとして、蚕業学校廃止案が提出された。この案をめぐる県会では論議が活発に行なわれ、蚕業学校を廃止するならば、同じ商船学校、薬学専門学校をも廃止せよという意見さえもとびだした。

大正二年四月二十六日 県立薬学専門学校としての最初の卒業式が行なわれた。

同二年十月四日 富山市で全国薬業大会が開催され、平山校長の講演があった。

同三年一月十日 平山校長病氣のため本日退職せられた。

中西司馬校長のあとをうけ、専門学校の創業にあたり、とくに地方薬業界のためにつくされ、とくに外国売薬を収集して、売薬業者のためにつくされ、また売薬業のために、しばしば講話会に出席して指導せられた。

校友誌に、

「先生始めて本校に就任せられしは、本校が専門学校となりしより間もなき明治四十三年八月の終りなりき。爾来三年有半の間先生が若き本校の前途に深く意を用いられ、日夜その健全なる発達に念慮を悩まされし事は吾人の意想の許すところならず。われ等はひたすら先生の滋衣に頼りてもって薬学を治めその教えを受くるの日の一日も多からん事をのみ祈れり。しかるにわれ等先生の御指導を忝うして喜び居る間、先生の熱誠はかえって先生の健康と相いれず、先生は病床を守らるるに至り、われ等またその高教を拝し得ざるの不幸を見たり。吾等はせつに先生の温容に接する日の近からん事を願いしも、神通川畔の朔風はこれをいずれ、ここに先生と生等とを離別せしむるに至れり。

大正三年一月二十八日黎明白雪乾坤を埋むる北陸の野を後にして先生は東に旅立ち給へり。西風静かに子弟別離の情を

送る。生等涙を払って仰げば鉄路固く凍りて六花霏々たり。

吾等固より先生を学んで尽すあたわず、ただその幾分にも近きを得て斯道に造詣する所あらんと希うのみ。これ先生に対する唯一の至情なればなり」

大正三年六月二十九日 前校長平山増之助先生、久しく病氣のところ二十九日午前四時東京青山北町五ノ四五の自宅で逝去せられた。県立薬専の創業の困難な中に、学校の整備充実に力を注がれると共に生徒に対しては、懇切丁寧に指導され、また地方業界に対しては、外国売薬の蒐集をはかるなどして、よくつくされた。

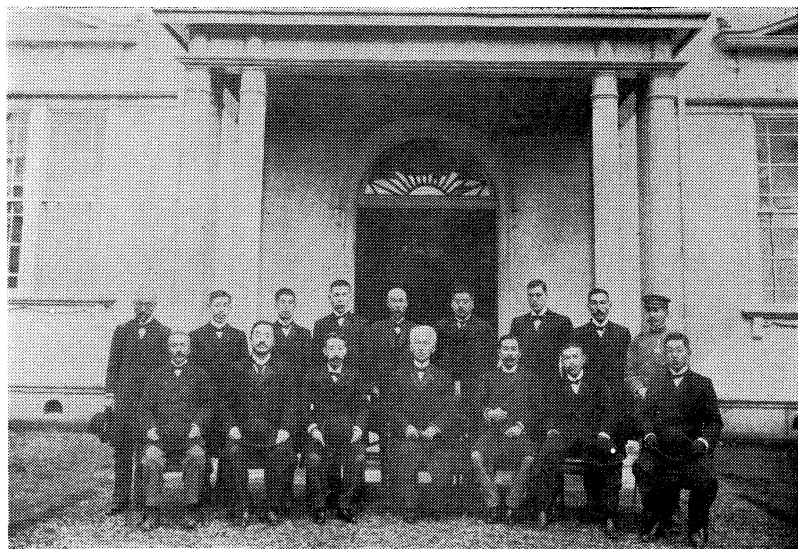
同四年九月二十五日 平山校長退職のあと、ながらく野副教頭が校長代理をして、校務に尽粹せられてあったが、二十五日付を以て、愛知薬学長、愛知県技師であった従五位勲五等薬学博士小野瓢郎を新校長として迎え、十月五日新式式を行なった。

同五年四月十五日 第四十回日本薬学総会が富山市で開かれ、本校がその薬物展覧会場となった。

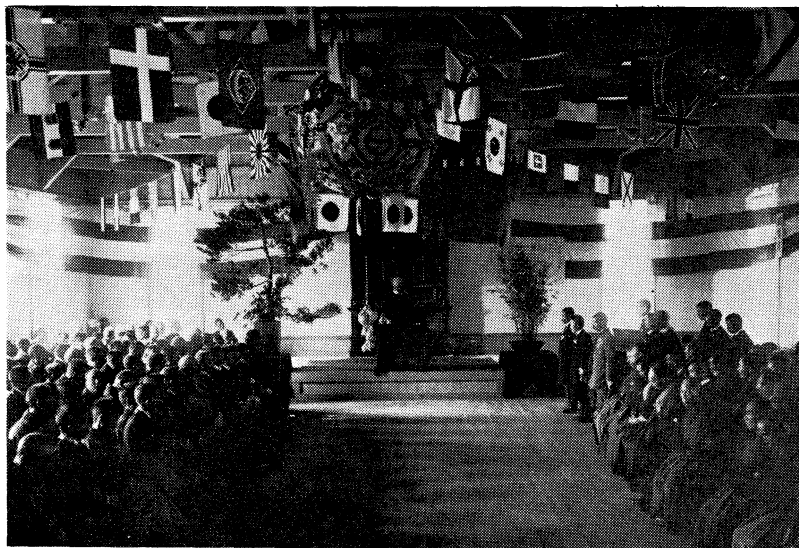
同五年、六年 北海道に薬科大学が設立せられるといううわさがつたわり、薬業界の人々が心配し、各方面と連絡し、調査したところ、単にうわさだということがわかった。この頃から官立移管の運動がようやくつきたが、設立経費を全額地もとで寄附しなければむづかしいという話で、ちゅうちょされてあったが、ついに同六年末に官立移管が文部省において決定した。

同九年二月一日 文部省告示により、富山薬学専門学校と改称することになった。

同十年三月三十一日（一九二一） 本日をもって、明治四十三年に創立せられた富山県立薬学専門学校は廃校となった。県立薬学専門学校の生徒にとっては、最高の学校であったが、学校そのものからいうと、官立の富山薬学専門学校へ進むための準備時代であったのである。



開校式に臨まれた長井長義博士（前列中央）歓迎記念



開 校 式 式 場

二、開 校 式

明治四十三年十二月四日（一九一〇）「昨日までの雨はいずこへやら、雲消え風やみて十二月四日の太陽ははなやかに立山の上にあらわれぬ。嗟々たる鳥声ののどけきかな」に夜はあけ、「実に本日はわが富山県立薬学専門学校が開校の盛典をあぐる日にぞありける」にその日はきた。

新しくできた校舎は「門前には根附きの杉及び檜にて造れる緑門に瀟洒たる菊花の裝飾を施し大国旗を交叉したり。——この杉はあとに校庭に移植して記念樹たらしむるものなりという。——本館正面の各窓は交叉したる小国旗をもっておおわれぬ。門を入り万国旗を左右に見、玉砂利をふんで進めば玄関は紫の幔幕をもって」飾られ、喜びの人々を迎え、

一百の生徒は「……なんたる光景ぞ——四月以来軒傾き瓦破れて、いながらにして日月をも拝みぬべき不完全な校舎にだにたえて、つゆ不平の声を漏らさざりしは、今日この講堂——この新築校舎をまちたればなりけり。みよ、各自の顔面にはおさえんとして、おさうるあたわざる喜悅の情のあふれんばかりにたうるを」と喜びあって今日を迎えた。

多数の来賓をむかえ、式は厳しゆくにすすんだ。

平山校長の式辞、浜田知事の告辞、小松原文部大臣の祝辞（代読）がおわると、長井長義博士登壇祝辞をのべらる。

「白髪霜のごとく親しむべくして犯すべからず、近づくべくして狎るべからざるの慨あり。これぞ現代薬学

界の泰斗として名声遠近にとどろく、大日本薬学会々頭薬学博士理学博士長井長義閣下なる。閣下は齡すでに耳順をこゆといえども、鑠鑠^{かくしやく}壯者をしのがんばかりの英気をもって滔々^{とうとう}陳べつくす数千言、大いに本校の過去を賀し将来を祝せらる」

博士は、本校の将来を祝したいと万才を主唱せられ、一同たからかに和した。

校友誌形容していう。

「声天地を震撼す。神祇必ずや感應する所なかるべからず。已に見よ。陰雲凝閉、霖雨霏々として朝暉夕暎日に亘りて影だに見せざりしものを、今日の此の好晴ノ天濤氣清、晃々たる日光は旭旗にきらめくにあらずやノ所謂「葉專日和」の名空しからずというべし。

已に天の眷顧を得たり。況んや地の利を占め加ふるに人の和を得て此の盛典を挙ぐるを得たるに於てをや。本校の前途や洋々として卜すべきなり」

つぎに根尾宗四郎富山県会議長、井上政寛市長、安藤秀雄師範学校長、阿部初太郎富山県売薬同業組合長、山田信昌富山商業会議所会頭、横江富山県薬剤師会副会頭、島田留之助薬業誌編集主任それぞれ祝辞をのべ、ついで高島教頭による祝電の披露があった。最後に平山校長の答辞と生徒総代の答辞をもって終った。

式が終ろうとする時、平山校長三度びたって、来賓及び保証人一同にたいし、感謝の挨拶をのべた。

本日の出席者三百五十余名に達した由。

長井博士の祝辞

知事閣下及び満堂の諸君ノ

本日は富山県立薬学専門学校の開校式にあたりまして私よりも一言の祝辞を述べる機会を御与え下さいましたのは私に取りまして光栄かつ欣喜の至りであります。

薬学専門学校という名称はわが国において本校が始めて作りたる名称と信ずるのであります。直接薬学に関係のない方に取りましてはこの名称もさ程の感じはないかも知れぬが、私のごとき一身を薬学にゆだねている身に取りましては誠に無上の感情を与えるのであります。そしてその土地は富山県富山市、この地の薬業は今を隔たる二百四十年の昔より年を追うて盛んになりつつあります。当時有志の諸君が寄り合つて明治二十六年に極めて小さい一つの教授場を設けられたのが始めて、それが基となりてついに今日わが国未曾有の薬学専門学校の作られた事が校長の式辞によってわかりました。

さて私はこれから本校の開校式の祝辞を申し上げようと思いますが、凡そ祝賀なるものには二つの区別があると思います。すなわち一つは過去の経歴を賀するのと今一つは将来の発展を祝するとの二通りであります。一例を申せば古稀の祝賀は過去の経歴を賀するので、戦の門出は将来の成功発展を祝するのであります。

本日の富山県立薬学専門学校の祝意は、少なくとも私の祝意はこの雙方を兼ねたるものと御承知を願います。

過去の祝意は校長の先刻述べられたごとく、小さいものが段々と大きくなってついに本日の古来未曾有の薬学専門学校となりましたのは大いに祝さなければなりません。ことに私のごとき薬学者はなおさらに祝さなければなりません。将来の事については諸君と共に祝意を表したいと思ひます。

薬学専門学校が始めてわが国に設けられましたのはいささか奇異の感が起こります。当地は二百四十年前より薬品製造をもつて名高い事は私どもは幼い時から聞き及んで居ます。薬と富山とはほとんど同一に考えられて居ました。すなわち富山が本位で薬が次か、薬が本位で富山が次か、子供の頭には判断が出来なかつた程富山の薬は日本全国に知れ渡つて居ました。それが二百四十年以来年毎に進歩したが、それに学校はなかつた。しかるに現今はただ薬業学校と云うのみでなく、わが国で未曾有の薬学専門学校を要するのであります。とにかく日本で一番薬業の盛んな処、薬業学校のあつた所に薬学専門学校の出来たのはいささか奇異の感が起ります。数万金を投じても学校を要する次第の解釈は、われわれの将来

に向つて大いなる教訓を与ふること存じます。

その解釈によつて専門学校にたいする奇異の感も解けまた我々に与ふる教訓もわかる事と思います。しからばその解釈はいかんと云うに、一言をもつてこれをおおえばこの変遷は維新の賜物でもし維新の大業がなかったならば今日のごとき薬学専門学校を要するような事はなかつたらうと思います。

ところが今を隔る五十余年前浦賀にペルリ大將がわが門を叩きましたそれ以来、わが国における万般の変遷は私から今さら述べる必要はありません。それまでは外国からわが国に一品も薬品の輸入は有りませんでした。ただ支那のみは特別でそれ以外の国から日本に薬品を輸入する事はいまだ聞かないところであります。しかるに現今は薬品のために数百万円 of 金を外国に出して居ますが、その薬品なるものはいかなるもの、また、これを製造するの道はいかん、またその薬品を使用する医師はいかなる風に養成されたかと言ふに、皆学理にもとづき学識を考究し学識を積んだものが製造しかつこれを使用するのである。その薬のためにわが国は数百万円の金貨を海外に流出せしめて居るのである。御当地のごとき年々数百万円の薬を製造して不幸なる病者を救いつつありますが外国よりの輸入は年々増加して居ります。

この薬品にたいして勝ちを制するには同じく学理にもとづき学識を考究し学識を積んでもつて薬品を製造する必要が生ずるのであります。その結果学校なしに年々多くの薬品を製造してきた富山も学識をそなえて薬品を製造するにあらざれば薬品にたいして勝を制する事は出来ないであります。

しからば日本で始めての富山県立薬学専門学校も何時迄も専門学校に止らずして現今は県立の薬学専門学校であるが本校の前身における歴史の示す如く段々と膨大發展して官立の薬学専門学校となり、次に富山薬学大学というように漸次盛になることは火をみるより明かなことと私は確に信ずるのであります。諸君も私と共にそうなる事を信ずるようにと私はこの席から御勤め致します。

しかしながら現今までは御当地の薬品業者はただわが国の需要をみたせるほか、わずかに外国に輸出して居るのみであります、わが隣邦清国々民は我々と同種族でもありかつてはわが国も医学薬学をこの隣邦からその教えを受けたのであ

りますから、今度はその恩に報ゆると云う点から考えてもわが国の医学薬学を彼に伝えて彼等を救わねばならぬと思います。のみならず支那の病者を助ける趣意によって薬品を彼の国に送ることは往昔よりもはるかに容易であります。

されば将来は薬学専門学校が御当地に始めて起こりたるごとく薬学大学が御当地に始めてできる事をひとえに希望します。この事は学事に關係する事でありまして私もその学界の末席をけがせる一人でありますから、私の力の及ぶ限り私の命のあらん限りは応分の援助を与える事を光榮と思つて居ると言う事をこの席で述べて置きます。

この学校の前途についてこの開校式を機とし、以上希望として祝しました。必ず達する事ができると信じます。

井上政寛市長の祝辞の一節

「事少しく既往に属するも前年市立薬業学校を県立に移さんとするに際し当路において全国内に国立薬学大学二ヶ所を設立せられんとするの議あり、しかしてその一校の位置はわが富山ならんとの説を洩れ聞けり。その後その経過を知るによしなしといえども薬学の進歩に伴い早晚事実となりて発表せらるるは理数の見易きところならずや、はたしてしからは専門学校の前途その責任愈々大たるものありと言ふも不可なし。ねがわくば将来専門学校の発展により薬学大学もまた必ず富山に設置せられ薬学教育の中心はすなわちわが富山に在る底の好果を収むるに至らんことを……」

横江県薬剤師会副会頭の祝辞

本日を下し富山県立薬学専門学校の開校式を挙げらるるに当り、不肖清次郎この盛典に陪するの光榮を有し欣喜に堪えざるなり。

おもうに本校の前身たるやかつて明治二十七年二月共立富山薬学校として創立せられ、越えて三十年十一月一日これを市立に移しついで四十年三月三十一日県立に変更し、さらに四十三年四月一日県立薬学専門学校として設けられたる歴史

を有す。

これよりさき二十六年九月単独奮勵發起して薬業家に説き、売薬業者を歴訪しもって三ヶ年継続の寄附金を約し、他方においては富山市会の協賛を求め、補助をこい、または多数有志者の賛同を得、ようやく辛うじて創立を見るに至る。不肖の微衷たるや、逐次医術の向上進歩に伴い、薬学上にまたはわが富山市はた本県の重要物産たる売薬と言う上に於て大いに研究琢磨せざるを得ざる時なるとき、もって売薬家の子弟をして挙げて就学せしめ、薬品の何物たるの智能を啓発ししかして世運におくれず、改善に努めその重要物産たるの声価をして倍々国の内外に發揮せしむべく東西奔走日もまた足らざるの慨ありき。

しかるに内部の財政は当時頗る困難の状態なりしをもつて、時の市長等に頼りて市立に移せしため、一部議員の反感を招き身は殆んど犠牲に供せらる。ついで、三十三年三月不幸病中に市会においてついに廃案にきしたり。ここにおいて身の病苦を冒し市会に出席し簡単な課目にあらため復校の建議を提出し、余議なく市会の容るるに至れり。これもとより市政財政の上に困難の事情ありしに由るべしといえども、世論はすでに姑息的設備に甘んぜず、当局及び有志者も相ともに県立に努め、且夕今や進んで専門学校となるに至りしは知事閣下ならびに諸士の貢献せられし熱誠なる尽力の賜と言わざる可からずあえて不遜を顧みず梗概を述べもつて祝辞に代う。

明治四十三年十二月四日

注・横江清次郎の祝辞をとりあげたのは、共立富山薬学校から富山市立富山薬学校への移管と富山市立富山薬学校の廃校
富山市立富山薬業学校への変換にまつわる裏面史の一端をしめすものとしてとくにとりあげたのである。

開 校 祝 賀 会

富山県売薬同業組合の發起で、四日午後二時から富山ホテルに開かれ、長井博士は、独逸製薬工場の模様を

詳細に紹介し、わが国の製菓事業の今後のゆくべき方向について話された。出席者二百五十余名。

長井博士歓迎宴会

五日富山ホテルで、博士の歓迎会が富山県売薬同業組合、薬剤師会、薬種商組合の三団体の発起で催された。出席者二百余名で、長井博士は独逸漫遊談を試みられた。

ついで阿部初太郎三団体を代表して深く感謝の意をあわされた。

長井博士講話

満堂の諸君、今日多数御集まりありてここに盛大なる会合を催されたるは、実に、余に取りて光榮とするところなり。御当地の同業者諸君は、あらゆる階級をもうらして多数なるが、万障を繰り合せて本席に、かくも多数に集会せられたるは、業務に熱心なる証拠にして、わが業界のためにもまた喜ぶべき事なり。文明の風潮は日進月歩の有様にて、底止するところなければ、社会すべての方面の事業は、これと併行して進まざるべからず。されば、吾人は、今や他の諸文明国に譲らぬよう考究し、実行するのやむを得ざる時勢を見るに至れり。諸君の御承知のごとく、いかなる業務にかかわらず、自己の力量の多き程、また多き力量にて勉強努力する程、社会の上位を占むることを得、これに反して力量少なきか、または努力を怠らば、社会の一段下層に沈淪する訳とならむ。ゆえに御同然業者中にも、種々の差別あれども、必ず権利利益の争奪ある可らず。各々その資産能力に依じて、分業的に業務を分担して業務の発達進歩を企図すべきものにして、あえて競争すべきにあらず。けだし吾人の敵は内国にあらずして、外国にあるがゆえなり。しかしてこの外敵との争いは寸時も止まずして永続せるものなり。しかるに、今夕は職務の異同あるにかかわらず、皆様御集会の上、私の話を聴講せんとするの心状は、実に喜ぶ可き次第なり。これ諸君は、私に告白の好期を与えたるものにして、余は今夕に限らず、総ての機会を利用して、幾回にても次の忠告を与えんとする情切なるものあるなり。この忠告は記憶のみに止めずして、こ

れを實行するの覚悟を肝要とす。私が余命最早長からず、され共、わが国藥業の現状を考うれば、天のわれになお数十年の寿命を与えん事を切願するものなり。されども天命なればこばむべからず。われもし他界せば、余に代りてわが帝国の藥業を欧米諸文明国の藥業と同等に發達せしむるよう企図すべき人才を欲して止まざるなり。しかして余は政府の命により、独逸國に十四ヶ年留学し、同國の大家に接し、また多数の學友を得、今に書信をもつて友情を結べるにより、身は今同國に在らずとも、思いははるかにベルリンの大學または工場に逍遙しつつあるなり。ゆえに、同國における工場藥業の發達は、常にこれを知悉せるなり。ひるがえつて、わが國藥業の現状を顧みれば、進歩の跡歴々たるものあれども、余はなおその進歩の速度遅々たるを痛切に感ず。

ゆえを以て、予はわが同業諸君に接する機会を得るごとに、必ずきたんなく、熱誠を吐露して、忠告せざるを得ざるなり。ゆえに今夕に限らず、從來幾回となく同様の忠告をなし来りしも、いまだもつて吾が意を満足するだけの効果を見ざるを恨みとするのみ。よつて予はなお屈せず撓まず、この席上においてもまた同様の忠告を試み、もつて諸君御自身の利益、おしてはわが國家の巨利となるべきことを告げんとす。諸君、必ずもつてわが言の偽りならざるを信ぜよ。諸君よ、欧米諸文明國に旅行を試みよ。彼らは諸君をいかに待遇し、また彼らの學校にてはいかなることを教授し、またその學理をいかに利用し、いかなる結果を奏しつつあるやを直接視察し試みよ。何事も百聞一見にしかざるなり。予輩独逸國に留学の際には万里の異郷に身命を賭する覚悟をなしたりしなり。氣候荒く言語通ぜずして、空腹を抱きしこともあり、はるかに郷國を慕い、両親同胞の安否を思い煩ひたり。學者は吾人を愛撫せしかど、常人は吾人を遇するに動物視し吾、人の肌色の黄色なる鼻梁の低き、目尻のつりあがれる、一として彼等の嘲笑の対象たらざるはなかりき。ゆえに、吾人少しも外出せず、一室に籠りて、ひたすら一日も早く歸國して両親に孝養し、國家のために尽くさんこ寸時も念頭を離れざりき。洋室はある点不衛生なるも、昼夜寢室して、字書は唯一の友たりしぞ哀れなる、試みにかの國人と應接せんか「御國の人口は何程なりや」「鐵道は敷設しありや」「瓦斯燈は点ぜられありや」等のべつ視せる質問にて、ついには「御國の人々はいかなるものを食するや」の質問に至りては、明かに吾人を動物視せることを証言するがときものなれば、無念

の余り時には、蜜音をふるいて、吾人の食物は人間の食物なりとどなることもありき。されば、心身共にすぐれず、中には肺病に罹りて異郷の空に空しくなりし者すらありき。ゆえに吾人の留学には実に生命を賭したりしなり。これかの国人もよく認め居れり。吾人はただみな国家のためなりと奮励努力せり。

しかるに現今の留学は、当時に比し、すこぶる便利なり爾來印度洋を廻航すれば一ヶ月半をも要せしかど今日はわずかに十五日にして到り得るなり。しかしして今日にては独国語に通ぜずとも伯林等の事情明かなれば、留学には往時のごとき大困難なし。とくに旅行、汽車、汽船、旅館内には英、独、仏語のみならず、なかには日本語をすら語り得るものあるなり。かつて予は当席に連り居る大日本製薬会社長日野九郎兵衛君にも欧米製薬事業の視察旅行を強いたることあり。君は元來（面前にてはばかれども）英、独、魯、仏、何語にも通ぜざりしなり。されども、同君は魯、独、仏、英の諸國を視察し、米國を経て歸來せられ、今ここに列席せらる。これすなわち、外國語を知らずとも、大困難なくして視察し得ることを証明せられたるものなり。日野氏独乙國ベルリンに居られし時、わが独乙人の友人はフリードリッヒバイエル工場に氏を案内し、なおその晩家族病氣のため予は帰宿せしも、友は日野氏に演劇を見せんと切符も買ひ与え、劇場に伴いたることありき。なお日野氏は單獨英國ロンドンに行かんとするや、このフリードリッヒバイエルの接待員は日本語は出来ざりしかど、万事日野氏のロンドン行きのことを引き受けたり。かれらは一人は陸軍中尉他は、商人と、工場員なりき。日野氏は迷児ともならず、今ここにあり日野氏元、髯なかりしが、今かくの如く美髯を貯えらる。外形と同じく、精神も大いに進化したるなり。百聞不若一見とは実に金言なるを確む。しかして、留学は諸君の一身上の利益のみならず、我日本帝國藥業界のためなり。予が元、十四ヶ年も滞留し居たるベルリンは、次回にまた到りし時には、あたかも他地に來りし感ありき。その進歩發達の大なること実に言語に絶す。歐羅巴の文明の進歩の急なることは、日本の進歩よりはるかに其速度大なり。わが日本國は今回の日露戰爭には勝ちたりしも、万一またかかる事あらばいかん、勝敗の数いまだ定まらざるなり。前途大いに案ずべし。たしかにわが國の進歩は歐洲各國の進歩より緩慢なり。これは實地視察せばたやすく悟り得ることなり。今日にありては視察旅行には費用も多く要せず、また歐洲各國には日本通の者も居り、中には日本語を

知れる者すらあり。外国においてはわが本国にてのいかなる階級の人たりとも、また以前敵なりし人たりとも、あたかも兄弟のごとく親しみ職務を放棄して案内するを見る。歐洲に行かばいたるところに日本人滞在し居りて、自ら求めずとも喜んで種々万端の世話をなす。これは自己に経験あることなり。予かつて、香港に至りし時、予が前方に歩みつつある同胞人ありしゆえ、後方より走り行きて「君」「君」と呼びかけ、「君は何時当地に來りしか」と尋ねしも答えず。よく尋ね見れば、何ぞ計らん、フイリッピン人なりき。ベルリンにてもまたかかることありき。外国にありて疾病にかかれば、一面識なき人にて、己が同胞なりせば親切に必ず助くることなども内地にあるとは大いに異なるなり。

要するに、諸君は自己の職務を愛し、自己の祖国を愛せば、一日も早く旅装を整えて世界を漫遊視察すべし。その旅程日数は多からずとも可なり。世界の大勢を達觀し、いかに自己の職業を進歩せしむべきかを感ずるには、半ヶ年にて充分なり。専門の学理を研究するには一、二年にてはなお不足なれども、世界の大勢を知らんには、多時日を要するに及ばざるなり。今日シベリア鐵道によらば、三ヶ月にて歐洲諸國を視察して歸り得べし。なお海外視察旅行の実行につき、詳細を知らんと思わば、書信もしくは上京して予を訪ねば、予は喜んでとくに時間を割きて旅行の注意を与え、なおまた必要なる場所には添書をも与えて紹介の勞を惜まざるべし。一日もすみやかに、成るべく多人数、海外旅行せられんことを欲して止まざるなり。旅行には年齢の高下無し。予の二回目の旅行は六十四才の時なりき。老者は老年の効あり、幼者は幼年の利あり。もし今晚の諸君中に近き将来においてこれを実行せられなば、予の喜びこれより大なるは無し。諸君よ、諸君は一致協同し、よく吾人の眞の競争相手たる者に打ち勝つ心して、必ず敗をとらざるよう、充分に予の希望を実現せらるべきことだこれ祈るところなり。

(文責在筆者)

歡迎の辭

今回富山県立薬学専門学校開校式挙行に際し、我薬学界の大家たる理学博士薬学博士長井東京帝国大学教授閣下來富せ

られ、ことに有益なる講演をたまわりたるは地方薬業者一同の大に欣幸としてかつ大いに感謝するところなり。ここに富山県売薬同業組合、富山県薬剤師会、富山県種商組合等の三団体発起し、本日を卜して歓迎会を開きたるに閣下には天候險悪雨雪こもごもいたるの時をいとわず貴臨せられたり、これ三団体無上の光栄にして閣下の厚誼はながく肺腑に銘して遺却せざるべし、ねがわくば席上設備の粗漏を寛恕し優に歓娛をつくされん事を。

明治四十三年十二月五日

三団体総代者 阿部 初太郎

注：長井博士の旅館であつた富山館（富山城の入口近くにあつた）の前には「東京医科大学教授日本薬学会々頭正四位勲二等理学士薬学博士長井義閣下御旅館」の立札筆太に記され、市民の注目をひいたとのこと。

それ以来、毎年十二月四日に開校記念行事を行ってきた。単に式典だけの場合もあったが、学校を一般に公開して、種々の実験をみせ、また化粧品も作って販売し、年中行事の一つとなって町の評判にもなり、科学知識の啓蒙に役立つことも多かった。

三、敷地と校舎

明治三十二年八月十二日の大火によって、富山市梅沢町の富山市立薬学校の校舎が焼失してから、富山薬業界はその再築について、再三、再四、富山市当局にせまったが、当局のいるところとならず、ついに明治四十年四月一日富山市から県に移管し、富山県立薬業学校と称するにいたつた。県当局は、実業学校の振興の重要性、とくに、有名な富山売薬業の振興をはかるために、薬業学校の新築費八千円（土地買入費）を同四十年

説明した。かくて、ようやく県会の承認を得て薬業学校の建築が決定した。

また、この県会で、石黒準太郎議員の提案による動議―薬草栽培の土地が不足であるから、隣接土地の買上を要望する―が採決され、同四十二年の県会において、継続建築費と共に、敷地取り括めの費用が提案された。

同四十三年十一月二十二日 富山市総曲輪三八九番地―元赤十字病院のあったところ（その以前には市立病院があった）―に本年二月起工（あるいは三月二十五日）し本日竣工した。今から思うと小さかったが、近代的な専門学校らしい、おちついた建物であった。移転は二十三日から三日間にわたって行なわれた（一覽には二十四日とある。）

敷地坪数 二、八九二・二六坪

建物総坪数 五五八・〇九坪

工事費 三七、三三七・六七五円

さらに四十四年度に蒸留室及び貯水塔等十七坪六合七勺が追加された。

注 後の学校一覽図面には、敷地二、八九四・二六坪、建物坪数五七七、二六一坪のように改められている。

四、経 費

予算および決算

第三節 組織

一、専門学校規程

本規程は明治四十二年八月六日富山県令第三号で定められたもので、要点はつぎのようである。

年 度	予 算		決 算	
	経 費	臨時 費	経 費	臨時 費
明 四 四	一一、八三一・〇〇 円	一一六 円	一〇、四六一・二六九 円	一、八四二・五二 円
大 正 四 五	一二、一四九・七〇	四二〇	一二、四三二・一八五	三三五・四九
二	一三、一七一・六〇	三七五	一一、五八九・三四	一一〇・八〇
三	一四、四七三・〇〇	二四二	九、六八三・七一	四一八・〇〇
四	一四、七八〇・〇〇		一一、四九二・三四	二八九・六五
五	一五、二六六・〇〇		一四、〇四四・四四	二二一・七〇
六	一六、四二八・〇〇		一三、六七六・〇五	
七	一八、〇三二・〇〇		一四、四八七・五七	
八			一一、七四七・四二	
九				

一、本校に本科と別科を置く。

二、修業年限 三箇年

三、生徒定員 九十名

四、授業料 年額 二十円

五、別科は薬業に従事する者に必要な教育をすることを目的とし、年限三箇年、定員九十名、入学資格は高等小学校二箇年課程卒業者もしくは、これと同等の学力を有するものとなっている。

その後変更せられた主な事項

一、明治四十五年三月二十九日、富山県令第三十二号をもって、卒業生は富山薬学校専門学薬学士と称することができることになった。同日別科が廃止となった。

二、大正二年一月三十一日に授業料年額三十円に改めた。

三、大正二年十一月七日、卒業受験生の制を設け、生徒定員百二十名に増員した。

四、大正九年二月一日より富山薬学専門学校と改めた。

五、大正九年二月十日、授業料年額四拾円に改めた。

別 科 問 題

薬学専門学校の設立をきめたときは、県立薬業学校を廃校とし、薬業学校の在校生の薬専入学の処置については考えていなかったようである。したがって、中西校長からこのことが伝えられると、生徒の間にかんりの問題となった。このことは、薬業家の間にも問題としてとりあげられ、県会においても、これをとりあげ、建

議を提出するにいたった。

第一回の建議は明治四十二年十二月十九日の県会において提案され、同四十三年ふたたびなされた。

薬学専門学校ノ義ニツキ建議

薬学専門学校別科ヲ終了スルモ専門本科ニ入ルノ資格ヲ具備シ得ザルハ当会ノ最モ遺憾トスルコロニシテ、昨年モスデニソノ希望ヲ建議セリ。シカルニ今ナオ充分コレガ設備ヲナシ得ザルガゴトキ、実ニ有為ノ青年ヲシテソノ向上發展ヲ阻害スルモノト信ズルガユエニ、スミヤカニソノ実力養成ノ方法ヲ講ゼラレン事ヲ望ムト同時ニ別科生ヲシテ徴兵猶予ノ特典ヲ得セシムベク主務省ニ稟議シ、モシ以上ノ希望ヲイレラレザルゴトキ場合ハ万止ムヲ得ザル義ナルヲモツテ、スミヤカニ附属中学校ヲ併置シ、薬学専門学校ニ入ルベク志望者ノ便宜ヲ与エラレン事ヲ望ム。

明治四十三年十二月八日

二、職

員

薬学専門学校においては、明治三十六年にさだめられた公私立専門学校規程によって、教員の資格が定められている。

一、学位ヲ有スル者

二、帝国大学分科大学卒業業者又ハ官立学校ノ卒業者ニシテ学士ト称スルコトヲ得ル者

三、文部大臣ノ指定シタル者

四、文部大臣ノ認可シタル者

創立当時、大学出身の教諭は、校長以外一人であったが、後には三人となった。（ただし、文学士を一人含む）教師の職名は、最初教諭、助教諭と称することになっていたが、大正六年教授、助教授と称するようになった。

県立専門学校時代には、教師の研究設備ならびに研究費用はほとんどないといってもよかった。

教師及び担当科目

・化学、薬化学、有機化学、無機化学

高島清（薬学士） 武庫川光寧（薬学得業士） 野副豊三郎（薬学士） 藤田直市（薬学士） 辻総吉（千葉薬学
士） 小野瓢郎（薬学博士） 伊藤慎一（薬学士） 望月直（薬学士）

・分析学

平山増之助（薬学博士） 武庫川光寧、志甫徳次郎（富山薬学士）

・生薬学、薬用植物学

日野五七郎（東大選科） 内藤堯宝（薬学士） 藤田直市（薬学士） 小野瓢郎、黄葉深造（薬学士）

・調剤学

武庫川光寧、吉田和平（薬学得業士）

・薬局方

中西司馬（薬学博士） 吉田和平

・衛生化学

中西司馬、内藤堯宝、石尾貞朝（薬学士）

・裁判化学

中西司馬、平山増之助、内藤堯宝、石尾貞朝

・薬品鑑定

中西司馬、辻総吉、藤田直市、小野瓢郎

・細菌学

内藤堯宝、石尾貞朝

・薬品工業、機械学

野副豊三郎、内藤堯宝、辻総吉、野島俊二郎（富山薬学士）

・鉱物学

武庫川光寧、内藤堯宝、辻総吉、石尾貞朝

・博物

稲田糸三郎

・地理、歴史

伊東豊之

・倫理学、修身

伊東豊之、梶原高四郎、湯沢幸吉郎、平山増之助、上西半三郎（文学士）戸田貞三（文学士）小野瓢郎、

飯沼竜遠（文学士）

・独逸語

今野秀輔（東京外国語学校）上西半三郎、内藤堯宝、戸田貞三、飯沼竜遠

・体操

三羽松太郎、末谷三郎（陸軍歩兵少佐）

・武道師範

石黒憲輔、古賀末次郎、中川政治郎、山本寿喜太、永田勝恵、谷田文雄、萩野啓之助

・助教諭

高津武治、桜井高之助（仙台薬学士）

・助手

安井五郎、吉森利男、坂下保太郎、北野豊二、志甫徳次郎、田中欣輔、沢田純、浅地宗旭、沖本兵作、中
沖太七郎、駒見又善

職員

・舎監

内藤堯宝、戸田貞三、三羽松太郎、石尾貞朝、飯沼竜遠

・書記

石井則義、武庫川光寧（兼）吉田和平（兼）三羽松太郎（兼）

・事務員 雇

林七次郎、佐伯稠隆、長谷川増之助、山崎弥次郎

・校 医

高田範国

事務分掌（創立当時）

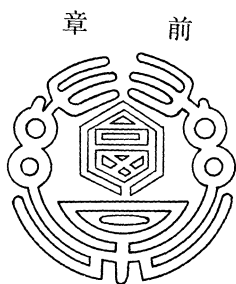
・教 務 課 教務係、監督係、図書係

・庶 務 課 庶務係、会計係

留 学

大正九年七月十日 望月直教授薬化学研究のために、満二九年瑞西、独逸国、英国へ留学を命ぜられた。

県立薬専徽章



制 服 釦



三、生徒—入学・卒業

創立当時は、別科生の進学問題—本科へ入れないことになっていた——で、県会の問題にまでなった。別科生は結局明治四十四年で廃止になった。この人達のうち、一部分は中学校の検定試験をうけて本科へ入り一部分は編入試験をうけて富山中学校へ入った。

かくて、薬学専門学校としては、すっかりとした形になったが、売薬行商人養成の問題はあとに残り、ふたたび薬業学校の設置となつて今日にいたっている。

専門学校になつて、著しくかわつてきたのは、生徒募集に困らぬようになったことである。つぎに入学生数の半数以上が県外生でしめることになり、県会でも、県内人の入学の優先の問題がとりあげられるようになったほどである。明治四十五年には、中華民国人の留学生をも受け入れ、日本の薬専となり、さらに、国際的な学校になつてきたわけである。

明治四十三年三月二十六日 従来、薬剤師の免状を無試験であたえられていた者は、「薬品営業並薬品取扱規則第四十六条」によつて、示めされていた。すなわち、「医科大学薬学科、若ハ医学専門学校薬学科、高等中学校医学科ノ卒業証書ヲ有シ、年令二十年以上ノ者」であつたが、本校が独立の専門学校しかも公立として設立せられる（熊本は同時に私立として）ことになったので、法律を改正して、官立及び公立の薬学専門学校、及び文部大臣の指定をうけた私立薬学専門学校も無試験で薬剤師の免状をあたえられることになった。

同四十三年三月二日 文部省告示第五十四号をもつて徴兵令第十三条の認定を与えらる。

同四十四年七月十三日 本校別科廃止の準備として別科生徒四十三名を富山県立富山中学校に編入せしめた。

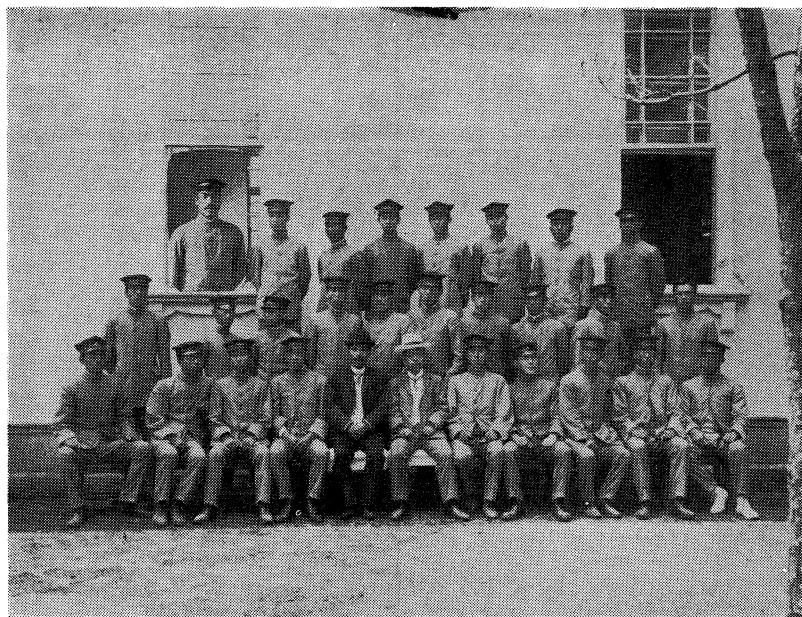
同年十二月二十九日 文部省告示第二百七十一号をもって文官任用令第三条第三号による認定を与えられた。

大正二年七月一日 本校卒業生は東北帝国大学理科大学の入学について、高等学校予科卒業と同等の学力を有するものと文部大臣によって認定された。

同二年十一月七日 生徒定員百二十七名と改めた。卒業受験生の制を設けた。

入学及び卒業生

年		入学		卒業	
年	月	志願者数	入学者数	回数	数
明治四三	三	三一	三一		三一
四四	四	四五	三一		四三
四五	五	二八	二八		四〇
大正二	二	七一	四〇	一	二五
三	三	七五	四一	二	一八
四	四	六六	四六	三	一九
五	五	一一七	三八	四	二五
年		入学		卒業	
年	月	志願者数	入学者数	回数	数
六	六	八七	三五	五	三二
七	七	一三三	四三	六	四三
八	八			七	四〇
九	九			八	三二
一〇	一〇			九	三七



第一回卒業生

卒業式

大正二年四月二十六日、第一回の卒業式が行なわれた。校友誌はつぎのように報じている。

「日本唯一の独立薬学専門学校の第一回の卒業生を出す事として天下の注目するところとなり、したがって大喪中にもかかわらず一大盛況を呈した。知事閣下を始め来賓列席者無慮数百名に達した。卒業の栄に浴せる新学士の得意思うべきのみ」

優等生には前田利為（富山藩主の子孫）から銀時計がおくられた。

当日の平山校長告辞及び卒業生の答辞をかかげる。

告辞

卒業生諸子。諸子が本校初度の卒業生として本日、知事閣下、その他来賓列席の式場に於て、卒業証書を授与せらるるは、独り諸子自身の光栄たるのみならず、本職等の共に欣祝する

ところなり。諸子。今日の光榮は、多年勉勵の結果に外ならずといえども、光榮の大なるは、やがて、責任の大なるゆえんたる事を自覺し、当初の志を屈せず、倍々精勵、もって世の期待にそむかざらむ事を期すべし。諸子夫れ勉めよ。

大正二年四月二十六日

富山県立薬学専門学校長 薬学博士 平山 増之助

答 辞

生等入校以来、諸先生の懇篤なる指導を受け、勉学研究する事三閱年にして正に制規の学科を修了し、ここに専門学校薬学士たるの特権を得たり。

本日卒業証書授与の盛典を挙行せらるるにあたり知事閣下親しく臨場して訓諭を垂れ、校長閣下また告辞をたまわる、生等の光榮、何者かこれに加へん。しかれども榮の大なるものは、責もまた大なり、いわんや生等第一回の卒業生たる者においてをや。西諺に曰く、雨滴石をうがつと。生等不敏なりといえども、知事閣下、校長閣下の高諭を服膺し、夙夜精勵勉めてやまざれば、こいねがわくは、大成を他日に期することを得ん。つつしんで答う。

大正二年四月二十六日

卒業生総代 光 沢 宗 道

第四節 教 育

一、学科目、実習、卒業試験

専門学校の教育は、倫理以外は全く専門課目とそれを学ぶに必要な語学であった。当時の高等学校（旧制）をへてくる大学と、今日のように一般教育をとものう大学とは違って、教養の点でかけるものがあつた。すなわち、専門課目の講義と実習、さらにドイツ語の演習で一日があけくれるのが専門学校であつた。しかし、今日と違って、課外教育、校友会活動（会長が校長、部長が教師）の中で、教師と生徒と一体になる面が多く、その足らぬところを補っていたといつてよからう。

さらに大切なことは、全国に始めての公立薬学専門学校であり、かつ日本一の学校であるという意識が教師と生徒との間に充分に意識されていたことが、当時の紳士の学風をつくり上げたのでなからうか。

学科目——本科生

独 逸 語	倫 理	学 科 目	学 年	第一学年 毎週教授時数	第二学年 毎週教授時数	第三学年 毎週教授時数
				八	四	六
				一	一	一

注：独逸語以外ほとんど教科書を使用せず、口述が主であった。

計	体 操	薬品工業学		機械学大意	薬化学	
		実	理		実	理
		習	論		習	論
二九	三					
三四		不定時	二	三		五
四〇		不定時	二		一一	

学科目——別科生

一般課目のほかに、物理、化学、博物及生理衛生、分析学、生薬学、薬化学、調剤学、薬局方、薬業法規が専門課目にはいつていた。

卒業試験

現在の卒業論文と異なり、一年生から三年生までの主要学課目全体の試験が行なわれた。今の薬剤師国家試験に相当するものであったろう。

一、試験課目

薬用植物学 化学 分析学 生薬学 薬化学 衛生化学
 裁判化学 調剤学 薬品鑑定 薬局方 薬品工業学

二、試験ハ口頭、筆頭及実地ノ三種トス
 三、実地試験ハ標本、検体、製煉原料、処方箋ニ就キ行ナイ特ニ論文ヲ提出セシムルコトアルベシ

実 習

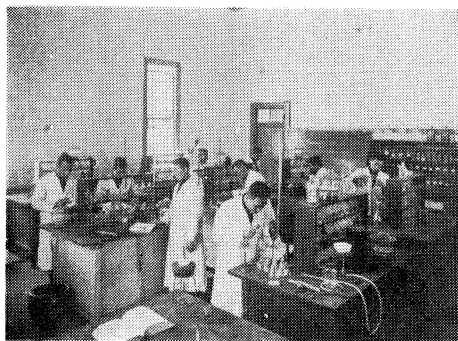
富山市の都市ガスが大正二年八月に事業を始めたので、それまでは、アルコールランプ、炭火コンロ、石油コンロ（ロシアコンロといつて硝子細工に使用）が使用された。創立後数年間の実習の模様がどのようなものであつたか想像されることであろう。

分析、生薬、衛生、裁判の実習は、ある程度、薬剤師として必要なものはやれたが合成化学が難問だららしい。設備も悪かつたかもしれないが、その当時の卒業生の体験談によると、

アスピリン、アンチピリンも合成できず、フーゼルの分留も一年かかつてできなかったとのことである。カ



タ ン ク



分 析 実 習 室

フエインも市販品で緑黄色の色がついていたという。

注：大正三年第一次世界大戦が起こり、薬品の輸入が減少し、薬品の価格は一日一日と上った。薬業界は大混乱におちいった。政府は、東京、大阪の衛生試験所に、臨時製薬調査試験をなさしめるに至った。——当時の薬品会社は多く外国から輸入して売っていたのである。

このような国情であったため、有機合成化学の実習が困難であったのも止むを得なかったのではないか。アルコールランプ、石油コンロだけの理由でもなさそうである。

しかし、さきにのべたように、わが国唯一の学校の生徒であるという誇りは、このような困難な実習状態にあっても、実に真剣にとりこんでいた。

また、分析などは比較的やりやすかったとはいうものの、天秤の数が少なかったので、その順番をまつのに時間がかかり、日のくれることもしばしばであった。

薬 草 園

明治四十二年富山県立薬業学校時代皇太子殿下行啓記念事業として薬草園の設立をきめたが、実現せぬまま県立薬学専門学校になった。総曲輪の赤十字病院あとに学校を建設しようとした際、県会で薬草園に要する土地を求めるようにと追加決議され、標本園程度ではあったが、薬草園ができた。

藤田直市教諭（大正元年着任）は、大正四年二月四日の校友会講演会で「薬用植物培養」についての指導的講話をなし、また先生指導のもとに「久二生」が校友会誌六号に「富山薬学専門学校薬草園栽培植物目録」——大正四年十月現在——をかがげ、植物一七〇種（下山氏薬用植物学第十四版の順に）を記載している。

藤田教諭はさらに県の依頼により、大正五年六月上新川郡堀川村元共進会場あとに県の薬草栽培地を選定し同夏朝比奈泰彦博士の出張をこい指導をうけ、秋季になって播種及び苗の移植を行なった。

大正六年五月三十日、東京帝国大学理科大学教授理学博士柴田桂太、岸田理学士来校、薬草栽培について講演した。

図 書 室

県立薬学専門学校になってから、少さいながらも図書室がおかれた。共立富山薬学校時代から保存されたわずかの図書の上に、和洋の図書が購入された。そしてつぎにかかげる種類のものが、官立薬学専門学校に寄附された。

富山県立薬学専門学校より国へ寄附された図書および雑誌

総 記（百科事典、全集等）	和 書	洋 書
哲学、宗教、倫理	七八冊	
歴史、地理	二一冊	
社会科学	四二冊	
社会科学	五六冊	
自然科学	一六二冊	八六冊
医学	六八冊	五三冊
薬 学（本草学を含む）	三一六冊	五七冊

工学・工業	六二冊	二七冊
産業	一五冊	
美術工芸	二冊	
語学	六七冊	二四冊
文学	一冊	一冊
雑誌	五六冊	一八冊
計	九四六冊	二六五冊

明治四十五年一月十三日から校友会学術部の仕事として、閲覧室に専門及び社会雑誌五種を購入して会員一般の閲覧に供した。

二、課外教育

午前講義、午後実習、しかも、ガスの充滿した実習室における長時間の学習は、おのずと課外活動を活発にさせたようである。ことにドラフトのない分析室における硫化水素攻めには、全くまいった。

しかも、当時は生徒の人数が一学級三十人―四十人の少数であったために非常にお互の間が親しく、また教官の人数も少数であったために、教官と生徒との間が親密であった。また校友会も校長が会長で、教師が部長であったから、校友会は、教師と生徒との共同社会で、そこにおのずと、親しく、楽しいふんい気もかもしだされた。

中西校長、平山校長、小野校長三代にわたる校長を中心とした県立薬学専門学校、しかも県下で始めての高等教育、地域社会の人々の学校にたいする厳しさと共に、尊敬も大きかった。

角帽をかぶり、インバネスをかぶった学生紳士も出現した。創立当時には、県外から相当年をとった人が入学したためでもあったのであろうか。このようにしてつくられた校風は、専門学校の生徒に温厚篤実の風をしみこませたようである。しかし、だからといって決して青年の若いはつらつさを失ってはいなかった。卒業生がよく、海外に活躍したのもその一つであつた。また講演壇上の雄弁、庭球、野球の対外試合になると、どこにその若い力が藏されているのかと思うほどであつた。

校 友 会

四十三年四月に創立した当時は、文芸部、運動部、庶務部からなっていたが、文芸部は四十五年に、学術部に変つた。当時は、会長は校長で、各部長は教官が委嘱されていた。

学 術 部

主なる事業は、講演会の開催と校友会誌の発行と図書閲覧室の運営とであつた。

講演会は春秋の二回開催し、大正九年には、全国学生の演説会に金沢と神戸に代表をだしたことがあつた。講演内容は、学術的なものの外、人生を論じ、社会を論じ、国家を論じ、青年の意気と覚悟をしめたものであつた。明治四十五年一月二十日の講演会の模様を校友会誌二号から拾って見よう。

「……上西先生立って開会を宣せられ、委員村田吉太郎君開会の辞を述べ、講演は菅沼竜一君「財力発展の基礎」より始まる。君のいわく、国家活動の要素は財力にあり、財力の充実に計るには実業の発達に待たざるべからず、しかしてこれ

吾人青年の責務なりと、今泉慶太郎君次いで壇上に現われ、「化学者には数理的頭脳を要する」事を各方より論じ意氣大に奮う、梅野友秀君、「薬学界の革命」と題して、薬学界の不振を慨し、その原因を擬してこれを治するは吾人を置いて他にあらずと、意氣さらに強し、次いで松本栄一君「我が校と吾人との関係」のもとに愛校論を吐く。

昼食後一時講演をつづけ、吉野修作君先ず表われ、「吾人青年の覚悟」と題し、わが国の不振は創造的人才が少ないことに依ると、その救済策として先ず人格の修養、努力の習慣を養うべしと述べ、光沢宗道君「主義」と題し、主義とは根底あるとの意義、吾人は根底ある人物たらざるべからずと説く、大山邦憲君「釣と網」の下に両者を比較し、前者よりも寧ろ男性的なる後者を採らんと人生を風刺し、神谷三男雄君「物質文明と青年の覚悟」と題し、物質文明の弊を説く事切なり、次に武庫川先生壇上に立たれ、軍隊勅諭の精神につき有益なる論告を与えられたり、これを以て第一部終わり、談笑裡に茶菓を喫して休憩す。

第二部講演、今任満君「飲料水に就て」統計的に論じ、村田吉太郎君は「本邦産二、三薬用植物に就て」述べ、河田鎌次君は「詩に就て」と題し、平家一門の美的生活より、詩と人生の關係に説き及ぶ、次に内藤先生は、液体ガスについて有益なる近世の学説を紹介せられたり、時に三時四十分、会長平山博士は、次いで會員拍手の中に壇上に現われ、温容、謹嚴なる態度を以て、學術部講演会の近き理想は會員一般の親睦を計るにあり、遠き希望はもって科学研究会とせんとするにありと将来について論告を給いたり。

部長上西先生これについて現われ、本会の盛大なりし慶賀を述べ、閉会の辞に代えられたり。余興に蓄音機あり、浪花節あり、大火鉢を囲んで、日の暮るるを知らず、散会せしは午後六時、外には木枯吹き荒れて往き來の人もまれなりき。

校友会誌は、明治四十四年三月十五日創刊号を刊行し、以後毎年一回宛刊行してきた。つぎに「発刊の辞」と平山増之助校長の「希望」をのせる。

發 刊 の 辭

「思う事言わぬは腹ふくるるわざなり」とは古諺の教うるところなり。われ等は固より何等の抑圧桎梏を加える事なく、念々の発作に任せてみだりに奇矯放縱の言論をたくまじゅうするの徒に賛成するものにあらざれども、この言いさか味うべきものなくんばあらず。

思うに我等はすでに同窓の下に机を並べ、一屋の下に学ぶ。仮に仏家の言をもってすれば、他生の因縁深しと言うべし。

されば年の弱きは弟と見るべく、長じたるは、兄に擬すべし。兄は弟を導き、弟は兄を助け融和協同して世に処するは人の道なり。

かつ弟の知るところ、兄必ずしも知るものにあらず。兄の知るところ、弟必ずしも知らざるにあらず。いやしくも心に惑うところあり、疑わしきあらば、直ちにこれを同胞に訴えて根本的解決を求めざるべからず。もしこれを等閑に附するあらば、その惑い、その疑いたるや終生解くる期なからん。豈腹ふくるるのみならんや。

加うるに学問の多岐なる、これを樹木にたとへし。枝に枝あり、その枝さらにまた枝を出す。古人に亡羊の嘆ある、むべなる哉。我等は幸いにも目的方向を一にすといえども、限りある命運をもつて限りなき岐路にあまねく達することあたわず。もし達せんと思うものあらば、そは痴人の夢のみ。見よ、孜々摺々全力を眇たる一動物の研究に集注して畢生なおかつ堂奥に達するあたわざるを。各自適當の題材を捕えて研究発表すると共に、他人の研究に耳を傾けざるべからざるゆえんここにあり。

されば大なる事業の裏面には大なる慰安なかるべからず。慰安を求むるの法、また多々ありといえども、吾人はここに高尚健全なる文学を進めんと欲す。樹下に憩い、石上に箕踞して天地の壮大、自然の真美を認めたる時、我等は必ずや心

中深く感ずる所なくんばあらず。すなわち一種の文学の萌芽を見る。この感たるや清浄潔絶、他我自他の念なく、人をして恍惚たらしむ。しかも何人と雖も、これを経験し得るにおいてをや。文学を進むるゆえんなり。

すなわち我等は互いに協力一致、談笑の間に各自の親睦を厚うし、智徳の研鑽を図らんとするもの、本誌の生まれたる要旨なり。

されど正宗の名刀といえども、これ三尺の童児にまかすれば、もって鶏をも割くべからず、禿筆書くに堪えざるものといえども、弘法の手握らるれば、万代不朽の名書を得べし。本誌をして、その目的を遂げ、光焰万丈の概あらしむると否とは、一に会員諸氏の手中に在り。

しかも正宗の刀は敵を切るべく、またわが身を切るべし。物その利用の法を得ずんば、人を害しおのれを毒す、滔々しからざるはなし。我等は本誌をもつて、ひたすら自利利他の機関として盛んに善用すると共にいやくも他の目的の下に供せざらんとす。ねがわくば本誌をして燦然たる光輝を放ち、有終の美を済さしめんことを。

希 望

校友会雑誌はたとえば庭苑のごときものである。常に栽培に勉むれば、春花咲き、秋実果を結ぶ。

然れどももしこれに反して、一たびその培養を怠れば、百花爛漫の境もたちまち化して殺風景の荒園となる。

我が校友会雑誌をして、華も実もある楽園たらしむると、雑草繁茂の穢土たらしむるとは、かかりて諸子の奮励如何にあり、諸子それつとめよ。

明治四十四年紀元佳節

校友会長 平山増之助

運動部

創立当時は校庭狭く、球庭コートしかなかった。また総曲輪に移ってから校庭は庭球ができるだけの広さしかなかった。したがって運動部の中で一番活発だったのも庭球であった。

庭球部

庭球は毎日行なわれた唯一の運動で、校内大会は毎年行なわれ、また市内の中学校、師範学校、商業学校生徒、および市内の庭球クラブとの間にもひんばんに試合が行なわれた。また大正二年からは、金沢医学専門学校およびその薬学科生とも試合をたびたび行なった。技術が非常に優秀で、それらの試合の中で、いつも優勝を誇っていた。

柔道部、擊劔部

総曲輪の新校舎に移った翌四十四年の二月に畳十八畳を新調して柔道部をつくったのが始まりである。擊劔部は四十四年十月につくられた。最初は余り活発ではなかったが、大正四年に武術教授として、石黒憲輔（柔道）古賀末次郎（劔道）が囑託せられてから、校内武道大会も開かれ、他校との試合も行なわれ、生徒の体育向上に貢献した。

野球部

四十三年十月に発足したが、県立時代を通じて校内グラウンドを持たなかったので、県内中等学校、金沢医学専とも試合をやり、また全国直轄専門学校の野球大会にも出場したが十分な成績をあげ得なかった。

相撲部

大正四年輕鍊主催の相撲大会に選手を派遣したのを機会につくり、土俵もつくり、校内大会も行なった。

漕艇

校友会には、漕艇をもたなかったもので、富山中学、師範の漕艇競走に選手を四十三年に派遣した程度で、振わなかった。

校友会々歌

大正六年末官立移管が内定した。その年十二月赴任したばかりの石尾貞朝先生が校友会誌上に、「移管を祝して」と題して詩をのせた。それを高橋謙（生徒）が補筆して、生徒に歌わせるようにしたものである。校友会で正式に決定したものではないようであるが、いつのまにか「校友会々歌」となり、校友会誌上に発表されたものである。

石尾貞朝 原作
高橋謙 補筆

一、荒波逆巻く北海の 雲紅るの色に染み
希望に満てる清新の 吾が薬専を君見ずや

二、東の空立山に 春尚千古の雪を積み
稜々として意気高く 雲にそびゆるその雄姿

三、薰風渡る初夏は 新緑匂ふ呉羽山
能越の昔忍びつつ 健児無限の慨ひあり

四、秋紅葉のそむる時 落日赤くはゆる時

神通の流れ滔々と 吾等が理想謳ふなり

五、六花粉々吹き来り 朔風荒ぶ校庭に

文武の道をはげみつつ いざや進まんひとすじに

六、嗚呼東洋の健男子 千歳が丘に雪積みて

アジアの天に覇をたつる その旗もとに我れ立たん

生徒の生活

学窓 一週間

A・W・生

五月二十六日 月曜日 晴

第一時間目に機械学の講義あり、独逸語の講義も済み有機化学講義があった。なかなか急速である。

衛生化学にて糖類の構造及びその反応について聴講した、午食後臭い臭い分析実修室に入った時、マルシュ氏装置の太気の充分に出きらざるものに点火して爆発せざる人もあった。予の検体は鍍と満俺とであった。鍍は特異の反応、満俺は球子の反応にて鑑識す。

五月二十七日 火曜日 雨

軒端に落ちる雨だれの音に目覚めて起く。今月今日は永遠に記念すべき海軍記念日である。

生薬学・衛生化学・倫理学聴講、野副先生休講せられた。午后硫化水素、アンモニテ、クロール、亜硝酸瓦斯、亜硫酸

瓦斯等あらゆる有毒瓦斯にてほとんど飽和されたる分析実修室に入り未知検体をニッケルと検定す。

五月二十八日 水曜日 晴

分析にて銀の定量法を教わる、独逸語、薬化・薬工の講義後に生薬実修あり、檳榔子の粉末を顕微鏡下に検す。

近所に御祭りあり雑踏を極む、行こうか行くまいかと思つたら行く方が勝つたと見えてぶらぶらと出て行つた。薩張面白くない、心の奥の方で「何故来た何故来た」と言う声がするようだ、ついに中途で帰える。薄志弱行の徒とは女の事なりと後から言わるるような気がする。縁日商人の呼び声さえあづけるかのように響く、急に家に帰えり小さい声で唯今と言いつつそりと格子を閉じた。

五月二十九日 木曜日 晴小雨

有機化学・機械学聴講、平山博士よりF. Mohr氏の銀の容量法を聞く、独文法は前置詞用法について、分析実修にて二つの未知検体を分析した。一は拔留謨と加爾叟謨とで他は加留謨、那篤留謨、麻佃涅叟謨とであった。加留謨と那篤留謨との焰色反応上の識別は少しく初学者には困難だが、試薬の水酸化加里と水酸化那篤留謨とを白金線耳につけて検体と等しく焰色反応を行ない両者を比較すれば加留謨と那篤留謨とを識別する事が容易だ、麻佃涅叟謨の確定試験の際に硝子棒にて試験管壁を摩擦しない方が良いようだ。実修中は各自非常に真面目である。しかしこの真面目は胃囊のふくれるたびに正比例し、時間の自乗に逆比例す、しかして声帯の振動数に逆比例するものである。

五月三十日 金曜日 雨晴

調剤学にてレセプトチンメル、ワッサアグラス等についての講義あり、つづいて機械学の後に薬化学の講義があった。実に早い、そのスピードはアクセレレーションでもあると見えて終りに近づくに従いますますます早くなる。隣友いかんを見ると腕をこまねて泰然としている。ひそかに予に曰く「後でかしてくれ玉へ」

薬品工業学実修 名称は立派だがやることは平凡だ。

下宿に帰える。夕食に大なる海老を食わさる。しかし予はこれを好かない。かれは外堅にして内柔のためである。予は外柔にして内堅を好む。

五月三十一日 土曜日 晴

土曜日は予にとりて一週中最も楽しき日である。おまけに明日は日枝神社の御祭りで一層うれしい。予ばかりでないと見えて行合う顔も皆ニコニコ顔で御早うと言う声さえ生き生きしている。講義が三時間あって実習にうつった。三時間、一の未知検体につき分析を行ない、ようやくにして加留謨、麻偏涅叟謨、加爾叟謨なる成績を得た。友人の宅を二、三軒訪ねたが皆留守だった。不平満々として帰える。按ずるに一週日の労苦を慰せんと下宿屋を飛び出せしもの少なからずと見ゆ。善なる哉否哉。家に帰えるも落ちつかず、ついに再び歩いて市内を散歩す。

六月一日 日曜日 晴

日曜だと思つて寝たためか目覚めれば日すでに三竿、目まばゆくして開く事難し。午前中薬工を画く。

懐友両三と日枝神社に参拝す。種々な階級の人のモデルが集まり雑聞また雑聞であつた。活動常設館を訪う、満場立雖の余地もない事もないようだが随分の見物人あり。

「良人の罪」の一郎の孝養に涙を注ぐ。燈火の下に修養論を繙く。「日誌の一節を録す」

寄 宿 舎

明治四十四年十月一日から寄宿舎を開いた。寄宿舎は、その当時どうであつたらうか、二―三の規則、細則をかかげて見よう。

富山県立専門学校規程

第十章 寄宿舎及生徒取締

第三十八條 生徒其ノ自宅ヨリ通学シ能ハザル者ハ寄宿舎ニ入ラシム
但シ設備ノ許サザルトキハ学校長ニ於テ便宜処分スルコト
同細則

第九章 寄宿舎

第二百五條 寄宿ハ主ニ通学ニ不便ナル者モシクハ監督上必要アル者ノ
為ニ之ヲ設ク

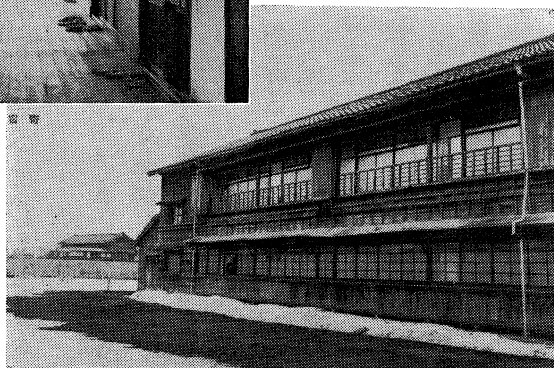
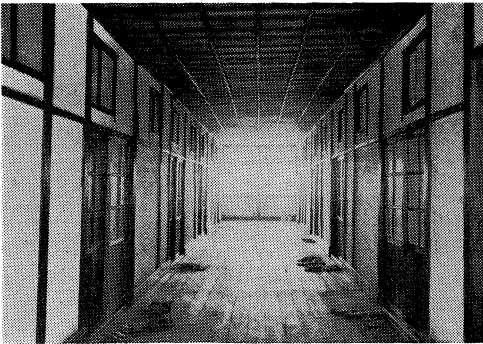
第二百六條 舎生ハ寄宿舎規程ヲ遵守スベキハ勿
論起居動作都テ舎監ノ指揮監督ニ従フモノト
ス

第一百十八條 起床、就寢、食事、外出、面会、
入浴、消灯ノ時限ハ舎監之ヲ定メテ校長ノ認
可ヲ受ク、時限ハ振鈴ヲ以テ報ズ

第一百十九條 起床、就寢ノ際若クハ臨時ニ人員
調ヲ行ナフ

第一百二十條 室ノ内外ヲ問ハズ制服ヲ着セザル
トキハ成ルベク着袴スベシ

第一百二十六條 舎内ニ於テハ総テ舎監ノ許可ナ
キ物件ヲ所持スベカラズ、又新聞雜誌等刊行



寄宿舎

物ヲ閲読セント欲スル者ハ予メ舎監ノ許可ヲ受クベシ
 第三百三十条 外出スルトキハ制服ヲ着スベシ若シ和服ノ場合ハ必ず正帽袴ヲ着スベシ
 第三百三十二条 外出ノトキハ舎監室ニ掛ケアル門鑑ヲ受取り之ヲ門衛ノ札掛ニ掛ケ置キ帰舎シタルトキハ之ヲ復スベシ

修 学 費 (大正七年十月一日調)

服 被	費 具 教	費 校	費		学 年
			目	金 額	
帽 夏 冬	文 実 参 教	校 友 会	授 業 料		
子 服 服	具 材 考 科	会 入 会 金	費 料		
二 二 三	一 一 八 三	四 二 三	五 〇 〇	〇 〇 〇	第一学年
〇 〇 〇	〇 〇 〇 五	〇 〇 〇	〇 〇 〇	〇 〇 〇	円
一 一 一	一 一 二 二	四 四 三	〇 〇 〇	〇 〇 〇	第二学年
〇 〇 〇	〇 〇 〇 七	〇 〇 〇	〇 〇 〇	〇 〇 〇	円
一 一 一	八 七 二 一	四 四 三	〇 〇 〇	〇 〇 〇	第三学年
〇 〇 〇	〇 〇 〇 五	〇 〇 〇	〇 〇 〇	〇 〇 〇	円

費				靴 服	
其				実 習	
ノ				費	
他				費	
寄 宿 費				食 費	
校 外 下 宿 料				舍 費	
修 学 旅 行 費				費	
歸 省 歸 校 旅 費				費	
				一三〇	九二〇
				五〇	二〇
				一六五	二五〇
				〇	二四〇
				一五五	二〇〇
				〇	二〇〇
				一五五	二〇〇
				〇	二〇〇
				一五	二〇〇
				〇	二〇〇
				〇	二〇〇
				不定	二〇〇

第五節 卒業生の活動状況

売薬業振興を目的としてできた薬学校も、薬学専門学校となり、卒業生の数もしだいに多くなると共に、活動範囲も拡まってきた。

あとに記載した一覧表で見らるるように、おのおの、自己の興味ある方面に、進出して、新しい天地に開拓せられている。ことに、第一回卒業生の海外発展の多いことが目につくのである。上海（今任満・梅野友秀）奉天（萱島猛雄）台湾（水上清蔵、田辺信太郎）大連（安井五郎）の諸先輩が、第一回という責任を肩に遠く外地に道を開いた。五人のうち、三人までが富山売薬業者の出店であった事を考えると、薬学校の創立を願った先覚者達もさぞ、満足であった事と思う。

さらに、この時代に記さねばならぬ事は、大正三年の売薬法の施行である。すなわち、売薬法の施行によつ

て、県下の売薬会社が—広貫堂はすでに明治三十五年に兼任薬剤師を雇い、明治四十二年に専任の薬剤師を採用している——新たに薬剤師を採用し始めたことである。これによって製剤に一新面目を期待したことはもちろんである。富山師天堂、富山薬業会社、中新川郡保寿堂、富国堂、北陸合資会社等の名が「薬学雑誌」の通信欄に報ぜられている。

さらにこの時代に売薬の原料薬製造工場の萌芽がでたことである。もちろん第一次世界大戦影響にもよるのであるが、売薬都の富山にとって重大なことであると共に、富山県立薬学専門学校の設立の意義の重要性を証明したといっても過言ではなからう。第一回卒業生横江宇三郎の富山化学工業合資会社の設立がそれである。

卒業生就職一覧

	一回(大正二、四)	四回まで(大五、四)	六回まで(大七、四)	九回まで(大10、六)
薬局開局	(薬業) 六	二三	三七	八五
官衙技術官	二	一一	二〇	五〇
会社技術員	一	一七	一九	四四
病院調剤員	六	八	一〇	一四
陸軍薬剤官	(兵役共) 二	一五	三	三
学校職員	一	二	二	一七
実業		三	一四	三五
兵役			九	五



外国売薬展示

第六節 対外活動

学校の対外活動は、きわだって活発になってきた。たえない種々の圧迫に鍛えられてきた売薬業界の真剣な

動きと、苦しい中に育ててきた薬学校が県立薬学専門学校となり、創立者達の意向をくみつつ大きく羽ばたこうと一層の努力を重ねてきたためである。

かくて代々の校長の地方業界へ貢献しようとする積極的な開発意欲と大学出身の教授の陣容は、しだいに母校の存在を社会に大きく浮び上がらせてきた。

外国売薬の紹介と研究

大正三年に富山県主催の一府八県連合共集會が開か

内 富山県人	計	海 外	研 究 生
三	四	五	一
八四	一五九	二二七	三
(七八)	(一三三)		

れた。そして富山県立薬学専門学校参考出品として「外国売薬」が展覧された。

さらに、また大正八年富山県工業会主催「売薬包装展覧会」にも参考品として出品された。

つぎにかかげたのは、この外国売薬を収集された平山校長の意図及び収集状況を述べた一文である。

外国売薬

平山増之助

わが校は創立わずかに三年で、県立学校中の最新前である。事業がようやく緒についたくらいの事だから、せっかく、本県が連合共進会の主催地となっても、遺憾ながら、わが校はこの絶好の機会を利用することができない。新店だけに、重代の歴史的参考品などあろう訳がなく、といって、新式の珍らしい器械や、装置があるでもない。また今年始めて卒業生が出たというほどの次第であるから、生徒の製作品などはほとんど皆無である。田尻先生の口ふんで言ったら、学校が芽（カイム）だからとでもしゃれるところであろうが、なかなかそれどころのさたではない。ここにおいて余輩の思っていたのが、外国売薬の事である。従来外国売薬などについて、うんぬんするものは、少数の売薬改良論者か、輸出売薬に従事する一部の人々に過ぎなかったのである。

しかるに近年、この事に注目する者がようやく多くなってきた。人智の発達か、好奇心か、とにかく一般公衆が、外国売薬を歓迎しはじめたのは事実である。税関の統計をみねば確かなことはいえぬが、外国売薬の輸入は、近年必ず激増しておるに相異なると思う。いわゆる処方公示の欧米式売薬が盛んに売り出されておることは、今日知らぬものはよもあるまい。新帰朝の専門の博士などが、堂々たる学会で、外国売薬の「デモンストラチオン」を行なうようになったのも、けだし偶然のことではなからうと思う。さればこの際あまねく欧米各国にわたりて、著明なる売薬を収集し、これを一堂の下に陳列して見たら、相互の特色も、被我の優劣も、包装標記の意匠、さては各国嗜好の存する所、一目瞭然、ただに当

事者の参考となるばかりでなく、一般公衆にも、薬に対する信頼心を増さしむる上において、必ず裨益するところ少なからざることと思う。これ今回わが校がせんえつを顧みず、外国売薬の出陳を企図したゆえんである。さて一口には欧米各国だが、実際には、多大の労費を要するひとかどの仕事で、はたして余輩が予期した目的の十が一も達し得なかったのである。しかし幸に多年当該国に在って、その道に精通した人々の同情と尽力とを得て、とに角、英、米、仏、独、露、支の六大国にわたり、無慮三百五十点、しかもおおむね各般の疾病にたいし、第一流の信用ある、所謂代表的売薬ばかりを収集し得たのであるから、外国売薬について、ひととおりの観察をとげるには、あえて著しき不足は感ぜぬことと思う。

年来済生家の宿題である、一般衛生思想の発達に伴うて、将来の売薬をいかに改良すべきか、と言う問題にたいして、いくぶんにも、これによって解釈を与うる事を得れば、余輩の満足これにすぐるものはないのである。各品についての子細な観察は、他日これを、国別、剂別、疾病別等に分つて試みるつもりだが、ここには単にその主なるものの名称のみを紹介して置く。終わりに臨み、余輩はとくに、在浦塩野村総領事、在柏林瑞西薬局員福原頭二、在紐育農商務省派遣員田中銀蔵、在上海日本薬業組合長篠田宗平、同副長荻原甚蔵の五君に対し、つつしんでここに深厚なる謝意を表するのである。

外国売薬目録

米国の部	七十七種
支那の部	四十四種
露国の部	九種
英国の部	七種
独逸の部	十四種
仏国の部	十四種

注…当時満洲、台湾及び天津、上海、漢口、仙頭等大陸主要都市に店舗をもち輸出売薬に活躍していたなかには、広貫堂、藤井諭三、高桑直助、寺田久蔵、重松在平、荻原甚次郎等多数の本県業界人があった。輸出入額八十万円で、品目の主なるものは、阿仙薬、薄荷を主要原料とした清涼剤で、輸出売薬中の九十五%もしめしていた。このような状況で輸出売薬業者の間には、外国売薬研究の必要が痛感されていた。

売薬処方研究

明治時代には、各種薬業団体が設立され、かつ、講話会程度のものがしばしば催されたが、県立薬学専門学校が設立された大正期になると、売薬の内容に亘る研究会が売薬業者自身の手によって主催されてきた。

・有効売薬と薬湯の選奨

大正二年二月、薬業新聞社主催で行なわれ、薬専教頭野副豊三郎が審査委員長となり、審査員には、内藤堯宝、藤田直市教諭の他、市内在住の前教員の薬剤師数名が選ばれた。

・売薬処方研究会

大正五年一月、富山薬業新報社内に本会が設立され、審査委員長に小野瓢郎校長、委員に内藤堯宝、藤田直市教諭が選ばれた。

・処方自究審査委員会

大正五年六月、配合審査委員長小野瓢郎校長、審査委員に薬学士加藤静雄、内藤堯宝、藤田直市、伊東慎一（教諭）堤従清（元薬業学校長）が選任され、二十五日に審査証状授与式が行なわれた。

・売薬改良調査会

富山県当局と売薬同業組合及び薬種商組合幹部と協議の結果、大正五年六月売薬改良調査会を新設して、内容の改良をはかることになった。すなわち一般売薬業者の要求によって、左記事項を調査考究して指示するよう売薬同業組合に示達された。そこで今後各業者は、富山県庁内衛生試験場または富山県立薬学専門学校へ、書面もしくは口頭にて申し出でて、その指導をうけ、本県売薬の向上発展をはかる事になった。

一、新規売薬の処方選定に関する件

一、売薬の調剤、製煉、製造方法に関する件

一、海外へ輸出及び移出する売薬の処方調製等の改良または輪移出先に適応すべき売薬の種類選定の件

一、その他本県売薬の改良または奨励上必要と認むる件

講演、講習会

明治四十三年九月十五日

富山売薬青年会主催によって、薬学講話会を開いた。薬専校職員日野五七郎は「調剤法」につき、高畠清は「製薬上の道徳」につき、さらに九月四日着任されたばかりの平山増之助校長は「家庭における簡易薬」についての講義があった。

同年九月二十四日

東水橋町の売薬倶楽部々々長直江重義の願いにより、平山校長は、日野五七郎、高津武治と共に出張、左の講演があった。

平山校長 朝鮮人参の状態及び富山売薬

高津武治 製剤について

日野五七郎 調味薬について

同年十月一日

滑川町薬業協会主催の第四回講演会開催

左の講演があった。

平山校長「簡易薬と売薬の前途」、高津武治「目薬」、高島清「業務の熱心と道德」、日野五七郎「薬業誌について」

同四十三年

東水橋町の売薬青年会主催の第四回薬学講話会（日野教諭の清涼剤、下剤等についての薬物学的、かつ調剤技術上の話）があった。

同四十四年六月十八日

富山薬親会（会長は元県立薬業学校教諭）主催の講演会を西別院で開催した。講師は、薬学専門学校の高島清、日野五七郎の外、高津武治、堤從清その他数名で、聴講者堂にあふれたとのこと。

同四十五年三月十七日

富山薬親会主催大講演会を市内梅沢町立像寺において開催した。

講師・平山増之助 薬学博士 「時世と売薬」

野副豊三郎 薬学士 「売薬改良時代」

日野五七郎（元教諭）「薬業道德」



富山薬学実修会記念

その他会員数名の演説があつた。

同四十五年七月二十一日——八月二十一日

富山薬親会主催の講習会を開催した。毎日三時間で、講師には薬専校長平山増之助、同教諭野副豊三郎、ほかに実業薬剤師、堤從清、高津武治、日野五七郎等が委嘱された。

同四十五年

四方町で、第一回薬学講演会、四方町薬学衛生研究会が開催された。

同四十五年七月十三日

富山薬親会主催、夏季薬学講演会を総曲輪小学校で開催、講師日野五七郎、高津武治
大正元年

「業業誌」社主催で例年春、夏、秋の三期に県下各所で、薬学講演会を開いてきた。本年は、野副豊三郎薬学士、山本梶手及び日野五七郎、高津武治両顧問、寺田主幹を講師として開催。

同二年七月二十一日——八月二十日

富山藥親会主催により、藥專校講堂において、毎夜二時間宛藥學講習会を開いた。学科は「藥品効用學」で講師は、野副豊三郎、堤從清、日野五七郎、本庶英猷、山本保太郎の五氏、病理担当は桜井正矩医学士で、受講生九十五名あった。

同三年七月二十五日——八月二十五日

富山県売藥同業組合の主催で、藥學講習会を開催、場所は、藥專講堂、毎日二時間宛開講した。

講 師 科 目

野副豊三郎 製劑法及び下劑

桜井正矩 病 理

山本保太郎 藥局方及び売藥法

堤 從 清 藥理一般

本庶英猷 健 胃 劑

吉田和平 調 劑 法

日野五七郎 生 藥 學

修了者八十四名あった由。

同五年五月

東、西水橋町で、第二回大成藥學講習会を開いた。講師には、学校側より内藤堯宝、藤田直市、伊藤慎一、吉田和平、県側より、黄葉深造、山本保太郎、本庶英猷、民間側より、館村五三郎等が依嘱された。

同五年

富山県売薬同業組合で富山薬学実習会を開催した。この講習は前期二ヶ月、後期二ヶ月に分ち、二ヶ年間に修了することにして、第一回を同年六月二十一日——七月二十二日にわたって実施した。

講師及び学科目

薬化学大意	薬学士	内藤堯宝
生薬学	薬学士	藤田直市
薬品鑑定	薬学士	黄葉深造
薬品製造学大意	薬学士	伊藤慎一
薬制及び売薬法	薬剤師	山本保太郎
薬用植物学大意	薬剤師	堤 從清
調剤学	薬剤師	吉田和平
配合禁忌	薬剤師	館村五三郎
薬物学大意	医学士	桜井正矩
衛生学大意	医学士	森尻麟之助
募集人員八十名		

大正七年二月十日——三月十日

富山市主催薬学実習会開催

その他

大正四年十一月二十九日

小野瓢郎校長、岐阜地方裁判所より血液鑑定依頼を受く。

大正五年

富山製産品々評会審査委員に野副豊三郎教諭委嘱さる。

大正五年七月十九日

富山日報紙上に小野瓢郎校長談として、富山売薬改良談がのる。主として配置の方法について述べられている。

大正六年

井水検査を富山市長より富山県薬剤師会支部に依頼した。薬専の志甫徳次郎、野島俊二郎、北野豊二の三人によって実施した。

同六年

富山県工業会富山部会所属工業試験所の技術員に薬専の小野瓢郎、望月直、吉田和平、志甫徳次郎、野島俊二郎を嘱託さる。

同六年

富山県工業会主催、輸出展覧会審査員として薬専吉田和平、野島俊二郎を知事より依頼。

第七節 全国薬業大会、日本薬学会総会

本県でこのような大会、学会が開かれたのは、全く始めてであったため、薬業都市として地もとの力のいれ

方は大変なもので、本県の薬業、薬学に大きな影響を与えた。

しかも、この学会に講演した柳沢秀吉は、薬業学校の出身。平山松治、高橋隆造は官立時代の校長になった人、薬業大会に長井博士と一緒に出席した金尾清造は薬業学校別科の出身であった。

また丹波博士は明治二十三年来富、薬学校の設立を強調した人、池口慶三博士は二度も来富、薬制について講演した人、長井長義博士また薬学専門学校の昇格に努力し、開校式にのぞみ、母校の将来を約束した人である。

全国薬業大会

大正二年十月四日 県会議事堂において、全国薬業大会が開催された。

校長平山増之助博士は、「輸出売薬」について講演した。

翌五日、小笠原悦三「製剤に就き」、長井長義博士「薬業家諸君に望む」の講演があった。

日本薬学会 第四十回総会

大正五年四月十五—十六日、富山県会議事堂において開催した。

富山市では、日本薬学会総会富山協賛会なるものを組織し、小野校長を会長とし、中田清兵衛、邨沢金広、金岡又左衛門、阿部初太郎の四氏総務となり、会員約五百五十名を募り、県ならびに富山市の援助のもとに実施した。すべての準備はもっぱら薬専の職員によってなされた。

・通俗講演会—十五日 午後

木間瀬知事、衛生局長中川望、稲垣市長、小野瓢郎の祝辞のあと、つぎの講演があつた。

薬学の進歩と売薬

薬学博士 西崎弘太郎

日本及び外国薬制の比較

〃 池口慶三

苦汁の利用

〃 平山松治

欧州戦乱の薬業上に及ぼす影響

〃 丹波敬三

学識は威力なり

ドクトル 薬学博士 長井長義

来聴者千五百名の多数にのぼり、講場一寸のすきもなく、長時立ったままのものが多かった。

・学術講演会——十六日

二三防腐剤の試験法について

薬学得業士 柳沢秀吉

フラボン誘導体と花の色について

薬学士 弘世弘三郎

重クローム酸カリウムに依るアドレナリンの呈色反応について

薬学士 緒方章

コカインの製法について

薬学士 村山義温

ラヂウムエマナチオンの測定法について

薬学士 衣笠豊

インデゴについて

薬学博士 丹羽藤吉郎

(代演 薬学士 高橋隆造)

炭酸クレオソートならびに炭酸グアヤコール製造試験成績

薬学博士 田原良純

特別講演

薬品の現在及び将来

内務書記官 長岡隆一郎

合成化学の進歩

・薬物展覧会

富山県立薬学専門学校で開催せられた。

理学博士
薬学博士

長井長義

第八節 売薬業界の支援

薬学校、薬業学校から県立薬専に移ると、学校は売薬業者の御世話になることが少なくなった。しかし今期では、官立移管という大事業が残されていた。開校式における長井博士は祝辞の中で、官立移管を言葉で尽してのべていられた。県会もしきりに国立を問題にしている、大正元年には、移管建議案を可決し、毎年県会でその後のようすを県当局にたずね、すみやかに実現するよう促していた。

薬業界は、大正五年北海道に薬科大学新設を聞き、にわかに動きだし、これが一つのきっかけとなって、大正六年官立移管に成功した。このかげには、薬業界のなみなみならぬ努力が蔵されている。

(詳細は官立時代にゆずる)

第九節 視察者

県立薬学専門学校になってから、視察者の数は急に増えてきた。とくにめだったのは、官立移管にともなう

文部省関係の学事視察であろう。しかしこの視察の結果は、設備が小さく官立移管にたいする難色となつてあらわれた。

大正二年九月二十九日

閑院宮殿下、同妃殿下本校を視察せられ、生徒の成績品及び前田則邦出品の前田利保編、本草通串を御覧になつた。

大正六年五月二十三日

閑院宮殿下本校において行なわれた県下中等学校武術競技会を御覧になつた。

大正三年八月二十七日

日本薬剤師会支部設置のため、米富のおり丹羽藤吉郎博士が本校を視察せられた。

大正九年九月二日

丹波敬三博士夫妻が米富され、官立移管建築中の奥田校舎を視察された。同博士は明治二十三年始めて富山薬業を視察され、大講演をなし、薬学校の設立を強調された人である。今日の視察、どんなにか感慨深く新校舎を見られたことであろう。その間三十年の歳月をかさねている。

第五章 富山薬学専門学校時代

第一節 官立移管運動

一、官立移管の声

県立薬学専門学校の官立移管の問題は県立薬学専門学校昇格の諮問案が県会に上程された明治四十一年頃（一九〇八）から県会において県当局との間に討論されていたもので、以後毎年県会毎にとりあげられていた。

同四十三年十二月四日（一九一〇）県立薬学専門学校の開校式に臨んだ長井長義博士は、その祝辞の中で「…日本で始めての富山薬学専門学校もいつまでも専門学校に止まらずして、現今は県立の薬学専門学校であるが本校の前身における歴史の示すごとく、だんだんと発展して官立の薬学専門学校となり、つぎに富山薬学大学というように漸次盛んになることは火を見るより明かなことと私は確かに信ずるのであります。諸君も私とともにそうなることを信ずるようにと私はこの席から勧めいたします……」と将来への希望をのべ、井上政寛市長またその祝辞のなかで、「国立薬学大学」になるよう切望されていた。

このように県立薬学専門学校の官立薬専への準備段階であるかのような状態で発足した。かくて大正元年の県会で、政府の三大臣訓令というようなことから、予算の大削減が行われ、八尾の蚕業学校の廃止が提案された。このことがきっかけとなり、県会の内外で同校を廃するなら商船学校、薬学専門学校も廃止せよという論

議も行われ、ついに、富山県立薬学専門学校を国庫支弁に移す建議となった。

一、薬学専門学校を国庫支弁に移されんことを望む

理由 県立薬学専門学校は全国唯一の専門学校にしてもより本県の売薬と離るべからざる関係を有すといえども、県経済上これが整備の完全を期する事困難なるのみならず、国家薬学上これを国庫支弁に移すの至当なるを認むるをもってその筋に建議せんとす。

その後毎年県会で文部省交渉の経過の説明がもとめられていたが県当局は内容を充実し時期を待っているように見うけられた。かくするうち、大正五年（一九一六）になると官立移管運動がおきる一つの問題がもちあがった。

二、北海道薬学大学問題

大正五年七月上旬、北海道札幌に薬学大学を設置するために文部省から専門学務局長等が調査に出張したというわさがつたわった。

富山市において県立薬専を官立に移したいとかねてから希望していた薬業者および市有志等は大いに心配し高桑直助、邨沢金広、藤井論三、中川久正の四氏を代表として県知事を訪問陳情せしめた。その後知事から文部省に紹介し、業者から東京帝国大学の長井長義博士に依頼し事情をたずねたところ、全くの誤報であったことがわかった。

これにたいして、木間瀬策三知事はつぎのように語った。

「北海道の薬学大学もけつして文部省において設置の方針と決定したるわけにはあらざるべし。本県の薬専校はすでに文部省より吏員出張して調査をとげ、官立の必要なる事は主務省もこれを認めおるところなるが、北海道の薬学大学は新しい問題にして、ただ今日文部省は設置の必要あるや否やを調査しおくに過ぎざるべし。現在札幌の農科大科にあわせてさらに他の大学を設置するとせば、北海道の状況ならびにわが国最高教育界の状態にてらして薬学大学をもって最も適當のものとするべし。本県の薬専を薬学大学に昇格することについては、単科大学を許さざる政府の方針なれば不可能なるべし。ゆえに本県の薬専校としてはただこれを官立とする外道なきが、これについては先日余の上京したる時も松浦専門学務局長に面会して来年度に官立実行のことを依頼したるが、政府の財政状態もあり豊かならざれば不幸にして好き返事を得られざりき、とにかく政府の財政のつごうつきしだい、本県の薬専の官立となるべきことは疑がうべからざるが、急速に実現をみることは困難なるべし。しかして新潟の医専創立の際は県市あわせて五十万円の負担をなしたり。本県の薬専が官立となるに際しても県市は相當の負担をなすを要すべく、それについて余も相當の案を有するが、今これを語るの時期にあらざるべし」

また小野薬専校長はつぎのように語った。

「薬専官立問題については木間瀬知事が非常に熱心なると、売薬業者もようやく熱中してきたる外、在京の長井薬学博士またたえず同情を表し、陰に陽に尽力せらるるは県のため善ぶべきしだいなるが、要するに同校の官立は文部省もその必要を認めおれども財政問題のため実行の遅延せられおれる事實はいうまでもなし。ことにそく聞するところによれば、欧州戦争の結果工業独立の必要痛切に感ぜられ、政府また工業思想の普及を奨励したるに伴い、全国の直轄実業学校はいずれも化学機械等の購入を要求し、その予算額非常に膨大に上れりと聞く。政府の財政の困難なる時期に際し、これら時代の要求に伴う必要品の購入をなさざるべからざる事情あれば官立問題もこの際容易の事業にあらざるべきか。要は奮発いかにあり。元来わが国のごとき常に財政に余裕なき国としては万やむを得ざるしだいなるべきが、従来医学専門学校設

立の際、設立地方が多大の負担をなしおれり。現に名古屋に第八高等学校設立の際のごとき地方より建物敷地を加えて約五十万円の寄附をなしてようやく設立を見たる有様なり。地方の要求にあらず、文部省の意向によりて建てられたる同校にしてなおかつしかり、いわんや地方の要求によりて行なわれんとするものにおいておや。ゆえに本県においても希望を貫徹せんと欲せば一大奮発が必要にして地方の負担を恐れてこれが実現を望むとも到底近き将来には目的を達することあたわざるべしと信ず。なお従来政府がしばしば苦き経験をなめたるは、かかる問題に際し当初地方人との間に契約したる条件が文部省にひきつがれたる以後において往々履行せられざるため非常に迷惑したることもありと聞けり。ゆえにこれが速成を期せんとせば要するに地方人が一大ふんばつをなし、しかしてかかる契約履行の保障を表明し、地方人の意気ごみを示めざるべからず。

官立は当然なり。自分が同校の官立を希望する理由は

第一 官立となりたる以上は設備その他完備し学校の信用を高むると同時に、ひいて富山売薬の声価を向上せしむるに至る事。

第二 官立と同時に県が年々負担する経常費一万余円が不用となるため、県経済上利益なるのみならず、その後富山売薬をしてますます改善を加え、時勢に應ぜしむるにはぜひとも相当の指導奨励を要するをもって、右経常費の約半額なりとも売薬奨励のために支出せばその効果決して少なからざるべし。

と信ずるが故なり。政府財政上の困難はさる事ながら、本校のごときは特殊の学校にして、現に蚕業地たる長野県上田に官立の上田蚕糸専門学校あるがごとく、売薬地たる富山の薬専校を直轄学校となすは当然なりと思惟す」

しかるに問題はこれだけに止まらず、こんどは「政府は全国に一カ所の薬専校を設置せんとの方針にて目下位置詮衡中なるが、岡山市にてはさきに高等工業の設置運動に失敗したるより今度こそはあくまで薬専設置の目的を達せんとし、猛烈に運動を開始したり」との報がつたわった。

このため薬業者等は、官立移管の目的を達せんとし、木間瀬知事、関野善次郎、野村嘉六両代議士等を代表として上京運動せしめんと陳情を行なった。富山市会またこれに呼応し、稲垣宗正市長と協議し、活発なる運動を開始した。

同年九月九日、木間瀬知事と相談の上、上京文部省に陳情した関野代議士は、本日帰富し知事に経過の報告を行なった。関野代議士談

「薬専官立問題については、余は過日上京の際、松浦専門学務局長を訪問し、かねて知事等と打ちあわせた結果にもとづき、県民が熱誠に官立を希望せる事などについて意見を開陳し、来年度には是非予算に計上されん事を陳情したるも局長は財政上の都合により、来年度にはどうしても発案の不可能なる事を言明せり、もっとも文部当局としては歴史ある本県の薬専校にたいし同情を有することはもちろんにて、ことに一方に國家が薬剤師をおくことを認めながら現在養成する機関としては、本県の薬学専門学校、熊本の私立薬学専門学校及び医学専門学校に附設せる薬学科あるのみで、独立の官立薬専は一つもなきをもって、政府は早晩官立の薬専を設置することの必要は認めおるも、その時期ははたしていつなべきやは当局も言明をさけおれり。とにかく明年度は絶体に駄目なりとの事なるが、余はせめて大正七年度にぜひとも本県薬専を官立に引き直さん事を懇請したる次第なり。局長は目下わが国には薬学に關し純粹に薬剤師を養成する学校と、薬品工業に關する研究をなす学校と二種の機関を設置することの必要なるゆえんを述べ、しかして薬剤師の養成を目的とする学校は、あえて位置のいかに重きをおかざるも、薬品工業の研究を目的とする学校は東京、大阪等の大都會が最適地なることを語れり。しかれども余の考えをもってせば薬品工業の研究には必ずしも東京、大阪等の大都會が最適地なるのごときは古き歴史を有する売薬業のあるあり、地価安くして藥草栽培にも都合よく、また高山高原多くして藥草の産出も豊富なるべきをもってかえって本県の適地なるべきことを述べおきたり。このごろ新聞紙の伝うるところによればわが国には今日なお二十五校の高等専門学校の増設を要し、その内には薬学専門学校も二校必要なる事を記載せるが、こ

れら記事の材料を思うに、文部省側より出でたるもののごとくこれを前記松浦局長の談話と対照せば、ほぼ当局の意中を察するに足る。要するに県立薬専の官立問題は果ただちに実現する事は困難なるも、早晚実現すべき問題なるをもって県民としては不断の運動の必要とすべく、木間瀬知事もきたる二十日頃には上京して文部省当局に同様陳情さるる筈なり」云々

右について小野校長はつぎのように談話した。

「薬剤師試験は大正十年度限り廃止する予定なるをもつて、十年度以後において薬剤師たらんとするものはぜひとも専門学校を卒業せざるべからず、しかしてこの薬剤師試験に應ずるには、少なくとも二、三年の準備を要するをもつて、大正八年以後において薬剤師たらんことを志す者あるも、もはや十年度の試験に應じて合格の見込みなければ八年度頃より必ず全国の薬専校志願者の数を増加すべく、その時においてはぜひとも現在の薬専校設備を拡張する必要があるをもつて本県の薬専校も八年頃には政府は必ずこれを官立にひきなおす必要を感じずべし……」

その後、十二月の県会においても質疑が行なわれたが、前途にやや明るい希望をもつて大正五年をとじた。

三、松浦専門学務局長来富と移管の決定

大正六年八月頃文部省松浦専門学務局長が薬専官立移管について下検分に来県した。県当局は他府県の薬専競争を防ぐためにこれを極秘にしていた。八月二十日どのような情報がいっただのか、飯尾藤次郎内務部長は矢郷属を伴っていそいで上京した。つづいて長井長義博士からも有力者二、三人至急上京するようにとの通知がはいり、また上京中の中田清兵衛からも邸沢金広等にあて、いまだ全く絶望すべき状態でないから、重なる関係有志至急上京するようにとの電報がはいった。

当時の文部省内における考えならびに経過を見ると、

松浦専門学務局長の視察によって、現在の施設は貧弱で、官立移管のためには他に移す必要があり、それに文部省の考えている製薬学科をつけるとすると六七十万円の創立費を必要とするということが明かにされた。しかるに富山県は多額の県債を有し、これらの経費を全額負担することがむづかしいとして、予算会議でとりやめることになった。

一方他の地方によっては、ほとんど経費全額を負担する条件で新設を願うところもあり、富山県側の要望はなかなかいれられそうもない状態であった。飯尾内務部長、長井博士、在京中の高見之通、野村嘉六兩代議士ならびに中田清兵衛等は協力一致熱心に運動を行なった結果、土地、建物、設備等の六十万円を全額寄附すれば可能の見通しがあるようなところまでこぎつけた。井上孝哉知事は県財政の困難なおりから、飯尾内務部長をして負担額の減額を交渉せしめた結果、校舎新築費および敷地等の費用として四十七万円の負担に減額された。かくて県参事会の賛成を得、また富山市の了解も得たのでそれをもって文部省に交渉せしめた。

註 稲垣富山市長は八月三十日、前代議士関野善次郎、県会議員高桑直助、富山県売薬同業組合顧問郷沢金広、同副組合長中川久正、富山商工会議所会頭田辺貫一代理小塚義太郎の諸氏を始め市会議員を市役所に招集し、市の負担額十四万千円の支出について協議した。重大な問題のため、一同熟考することとし、翌九月一日七万五百円は市で負担し、残りの七万五百円は薬業家その他の有志から寄附をあおぐことになって決定した。

かくしてついに九月十一日省議で官立移管に決定した。その後十一月に閣議において決定し、十二月の市会、県会で寄附の件がきまればほぼ移管のことが決まることになった。しかるに十二月の市会において、九月

の内議会で賛成していた富友倶楽部の反対にあい、切角の県民一致の努力もあわや水泡に帰せんとしたが、どうにか了解ができ、十二日市会を通過し、県会も十三日終了、稲垣宗正市長はただちに寄付募に集とりかかり、ここに薬専移管問題もようやくめでたく解決となった。

四、移 管 費 寄 付

薬学専門学校移転に関する地方の寄付金額は金四十四万二千円で、内、県は十分の七、すなわち金三十万九千四百円、富山市は十分の三、すなわち金十三万二千六百円を負担することとなった。外に同校敷地壱万坪買収費・排水費等の整理に要する費用についても、県および富山市は同一の歩合をもって負担することとなった。

結局、富山市は十四万一千円（敷地を含めた額を四十七万円としてその十分の三にあたる）を寄付することになり、半額七万五千円は有志等の特志寄付によることになった。

その結果予定額を超過し、中田清兵衛ほか六百二十三名で、八万六千六百九十九円九〇銭に達した。薬業家からだけでなく一般市民のなかからも特志寄付があった由である。

第二節 設 置 と 維 持

一、概

史

売薬の都、富山市の郊外。富山本草学の名をとどろかした十代藩主前田利保のつくれる薬草園……現在の日本海瓦斯会社の南隣り……に近き奥田村に、わが国にただ一つの官立薬学専門学校として、富山薬学専門学校が誕生したのである。

富山売薬が発生したといわれる元禄時代（一六八八—一七〇三）から二百有余年の年月、利保の薬草園がつくられたといわれる嘉永六年（一八五三）からおおよそ七十年、この地に近代の薬学の苗圃がつくられたのである。

これは薬都富山にとって、尊い苗圃であった。やがては、芽をだし、葉をだし、花を開き、実の結ばれる日を市民はこよなくも期待したことであろう。

大正九年十一月二十六日、勅令第五百五十一号をもって、文部省直轄諸学校官制を改正し、同年十二月一日（一九二〇）に富山薬学専門学校を官立とすることに定められた。さらに文部省告示をもって、同日より富山県上新川郡奥田村に事務所を設置した。

大正九年十二月一日、文部省令第二十九号をもって富山薬学専門学校規程を公布し、同月二十七日薬学博士小野瓢郎を校長兼教授に任命した。

大正十年三月十二日、富山県告示第四十二号をもって県立の富山薬学専門学校は同年三月三十一日限り廃校のことが通達せられ、生徒九十一名は文部直轄の富山薬学専門学校へ編入することになった。

大正十年四月一日（一九二一）、新築なった奥田の新校舎に移り、授業を開始した。

大正十年十月十九日、大正四年就任以来六十年、官民一体の絶大な期待と信望にこたえて、生徒の薫育、地方業界の発展さらに、官立移管の大業に骨身を削って努力された小野瓢郎校長は、大正九年來健康を害し、大

正十年八月一日より三重県富田一色海岸の別邸に病を養っていたが、ついに十月十九日他界した。
校友誌の哀悼の言葉をかかげて追憶の辞とする。

噫 小野 先生

大正十年十月十九日、そは何たる悪日ぞ、われらが多年教えの父と仰ぎし小野先生、われら幾百の教え児が、一日片時も早く病癒えたまいて、ふたたびあの温顔に接せばやと、神かけて願ひし甲斐も空しくて、黄泉の客と化し給いぬ。思えば先生がわが校に來任し給いしは、大正四年新緑薫る初夏、あたかも県下の有志薬専移管の叫び高き折りなりき、しかし先生の來任は、専らこれが実現のために外ならざりしは、あまねく天下の知るところなりき。爾來先生の一命はこの宿願にかけられ、雨降る朝も風吹く夕も、先生の努力はししとしてこの大業にそそれがぬ。さあれ、こはわが国最初の試みなり。その実現には莫大の経費を要し、狭小なる本県にてこれを支弁せん事、容易にあらず。世の人あるいはこれを絶望として悲しみ、あるいは無謀としてこれを笑う者すらありしに、先生あくまでこれが実現を期してやまず、有志を励まし大家を糾合し、当局に勸説し、隠約の苦辛実に慘憺たるものありしが、その効ついに空しからず、ついに大正六年度第四十一議會において、移管拡張の議は可決確定しぬ。爾來新校の創立に、旧校の経営に、寢食を忘らるることまさに四星霜本年四月目出度新校舎に引き移るに及びて、過労の余り得給いし病は、張り詰めし心の緩みとともに、急に革まりつ、手を尽くしての療養もついにその効を奏せず、また起つあたわずなり給いぬ。噫。工事数ヶ月にして完く終りを告げ、花々しく開校の祝典の挙げらるるも近き今日、そを見得ずして、世を去り給いぬ。まことに口惜しき極みなれ。さあれ、先生よ、先生の残し給いしその偉勲は、炳として炬のごとく、とこしえに薬学界を照らさん。ねがわくは泉下に瞭し給え。

略 歴

慶應三年十一月二十三日、東京小石川白山御殿町に出生、明治二十六年七月東京帝国大学薬学科ただ一人の卒業生とし

て社会にでられた。先生は私立愛知薬学校校長として、廃校寸前の苦境にも屈せず同校を育てられ、本校へ来任とともに官立移管という大任が負荷された。先生の一生は、薬学教育に捧げられ、多くの子弟を育てると共に、よき学校を残されたのである。

同年十月十九日、教授高橋隆造校長事務取扱を命ぜられ、同年十二月十日、内務省大阪衛生試験所技師兼内務技師薬学博士平山松治校長に任命。翌年一月十一日着任、十二日新式を行ない新校長の来任を心から歓迎した。

大正十一年三月二十三日、官立になって最初の卒業式が挙行され、同年五月十日晴れの開校式が行なわれた

(別記)

大正十一年十二月八日、本校卒業生および三、二年生より校旗が寄附された。

大正十四年四月二十四日、軍事教練のため将校が配属された。

大正十四年七月二十五日、平山松治校長死去せられ、同日教授高橋隆造校長事務取扱を命ぜられた。校友誌の哀悼の言葉をかかげて追憶の辞とする。

平山先生

大正十四年七月二十五日、悲しくも溘焉として吾等が校長は逝かれた。薬学の巨碩平山博士は逝かれた。

吾等は凡々と筆を染めて、炳ける遺緒をけがしたくはない、四とせの偉業はあまりにも明かである、聳ゆる薨すなわち校長である、賢実な丘すなわち校長である。

又吾等は大を述ぶ要もない。

ただ憶う、

四とせの昔は、いかに狂氣して迎えた事であらうか、吾等の校長として、いかに誇らしく迎えた事だらうか。ただ憶う。

計を手にした吾等の多くが、僅かに黙して冥を祈った事が、あまりにも口惜しく、あまりにも寥しかった事を。

略 歴

慶応二年八月二十日岐阜県大垣市田町に出生、明治二十三年七月東京帝国大学医科大学薬学科を卒業（最初の薬学士として）され、一生のほとんどを衛生試験所とともにこられた。ながい大阪衛生試験所長としての御体験が本校の経営にかされ、製薬工場は先生によって完成した。

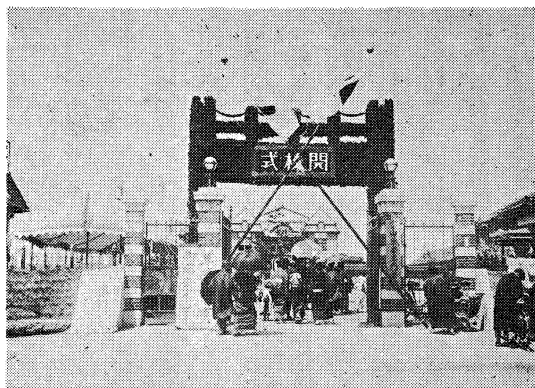
大正十四年十二月二十五日、教授高橋降造校長兼教授に任ぜられた。まさに三代目の校長である。県立薬専の初代中西司馬校長は創立早々に死去され、二代目の平山増之助校長は病気で退職された。官立になって初代の小野校長は早々にして病に冒かれ死去、二代目の平山松治校長は、就任四年でまた現職のまま逝去された。高橋校長は元氣そのもの、ながく健康であるよう校内外の人々に祈らないものはなかった。

昭和元年、創立以来神通河原、その他あちこちの運動場をかり不便を感じていたが、十三年以来整備してきた運動場がようやく完成し、生徒等はこの上もなく喜んだ。

昭和三年一月十九日、専門学校令改正、従来「第一条 高等ノ學術技芸ヲ教授スル学校ハ専門学校トス」となっていたところ、「専門学校ニ於テハ人格ノ陶冶及國體觀念ノ養成ニ留意スヘキモノトス」を追加す。

昭和四年、創立設計の際平日講堂を使用しない間、図書閲覧室として使用することになっていたところ、本年度に新たに図書閲覧室をつくり、昭和六年に一般に公開した。

昭和五年、神通川の河原を利用して薬草園としてきたが、昭和二年以来整備してきた薬草園が本年校舎の隣



富山薬学専門学校開校式

りにすべての施設をおえた。

昭和六年五月十日、開校十周年の記念式典ならびに記念祭を盛大に行なった。

昭和七年二月二十八日、県立薬学専門学校時代から行なってきた卒業試験を廃止することになった。

昭和十二年八月四日 生徒訓育補導の任にあたる生徒主事、生徒主事補が定員増として一名宛加えられることになった。昭和三年専門学校令改訂の一つの施策の表われである。

昭和十五年二月十一日 戦時態勢の強化にともない、富山薬学専門学校興亜青年学徒隊が組織された。

昭和十六年二月十一日、校友会を解散し報国団を結成した。さらに本年度から卒業期のくりあげが行われ、学校の戦時態勢化がいよいよはげしくなってきた。

昭和十九年四月二十八日、十八年余のながきにわたり校長として本校のためにつくされた高橋隆造校長が退任され、徳島高等工業学校製薬化学科長横田嘉右衛門博士が戦時下の大任を負うことになった。同十月五日、高橋前校長には名誉教授の名称が授けられた。

追 慕

先生は教授として来任せられてから、常に実験室にあって、こつこつと研究にいそまれ、校内に新しい学風を送られ

た。われわれは、その先生の姿にどんなにかうたれたことであろう。小野、平山両校長のあとをつぎ校長になられた先生は地味な守成の位置にたれたが、不幸にも先生の校長時代の大部分は戦時体勢下におかれ、非常に困難な時期でもあった。

けれども先生の学風……校長室の隣りには研究室があり、折りを見てはここに閉じこもり研究にいそしまれた様子はいまだに私達の脳裏から離れない……は、つぎつぎと教授のなから博士を生むことになった。また昭和二年に薬草園を設置、昭和四年に図書閲覧室をつくり、昭和五年地方業界にたいし図書館の公開を宣言し、産学協同の先鞭をつくられた。さらに、欧洲出張の際持ち帰えられた外国売薬を教授達に解説させ、地方業界に提供され、売薬の研究に供した。

富山県薬劑師会はこれを刊行し、欧洲売薬要覧と名づけた。また同時に持参された薬草の種子は薬草園にて発芽育成、研究に供された。

先生は、最も烈しい戦時下、学生動員のさなかに学校を退任された。二十年にわたる先生の学者として残された学風はますます発展しつつゆくことを祈りつつ筆をおく。

略 歴

明治十五年五月十六日埼玉県南埼玉郡菖蒲町の生誕、明治四十一年東京大学医科大學薬学科卒業、長崎医学専門学校、東京大学薬学科を経て本校に赴任、十八年のながきにわたって尽された。

昭和十九年七月、空襲時学校を守るために、富山薬学専門学校特設防護団が編成され、団長横田校長、副団長近藤教授となり万全の対策がたてられた。

昭和二十年四月、海軍糧品廠、陸軍衛生材料廠が本校へ疎開し、また科学技術員養成所も附設された。

昭和二十年八月一日（一九四五）、三月入学試験を受け四月入学すべき一年生は学徒動員のため、本日ようやく入学式を挙行した。

その夜であった。警戒警報が発せられ、例によって、横田校長始め職員生徒がかけつけ、所定の配置についたが、敵機の空襲ものすごく、ついに二日の未明午前三時頃、焼夷弾が雨霞のように降りそそぎ職員生徒の防火活動もついにおよばず、一同退去の止むなきに至った。少数の傷手を負った人はだが、全員無事避難し、御真影は横田校長、平田教授、梶川書記護って難をさけた。中沖太七郎教授また校旗を胸に巻き、退去し、さしもの校舎も、薬品庫と書庫をのぞいて全部焼失してしまった。重要図書、顕微鏡、天秤その他戸棚、机、薬品器具等の一部は新保、柿沢、音杉等の役場、学校に疎開されていたため難をまぬがれ、戦後の復興に役立った。

二、開 校 式

官立薬専開校式!! 薬学校経営に苦しんだ時代、夢にも描いたであらうその日―大正十一年五月十日―がやってきた。

「……この日、氣遣われた夜来の雨も名残りなくおさまりて青葉若草に風薫り旭日赫々としてわが校の盛典を祝せるもののごとく近來稀に見るの好晴にして早朝煙火冲天に轟くや市民いよいよ躍動し、県民挙ってわが薬専デー気分となり、これが祝福のため本校への順路へ華門万燈を建てられたり。

本校にありてはこの光栄ある式典に祝意を表せんと職員生徒の



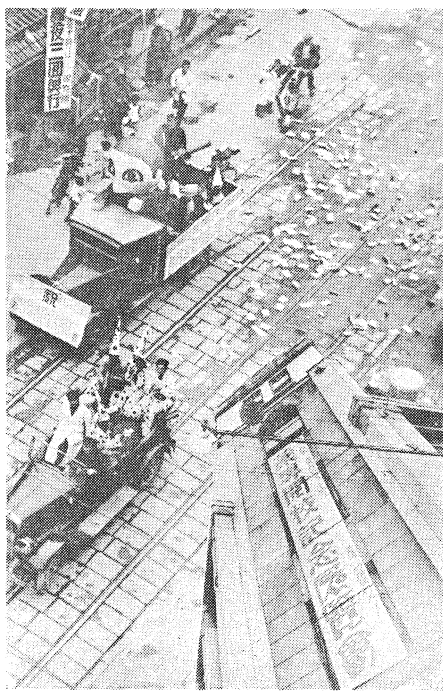
富山薬学専門学校開校式園遊会

かねての計画も着々と進み終わり、校内の設備意匠は斬新に教化参考を専らとし、一般藥学の解説に努め、世人をして興味を引かしむるを旨とし、校内散歩の大練門はすでに見事に建設せられ、電飾の美はさらに活氣を呈し、本校輪奐の美とともに壯觀たり。」

午前八時半続々と賓客が来校せられた。当日の来賓の重なる人々は、本校に恩顧深い長井長義博士、丹波敬三博士、丹羽藤吉郎博士を始めとし山田薫、池口慶三、朝比奈泰彦、高橋三郎、木村彦右衛門の諸藥学博士、文部大臣代理松浦専門学務局長、柴垣文部省建築課長、千葉医学専門学校教授平野一貫、金沢医学専門学校校長高安右人、金沢高等工業学校青木信賢の諸氏であった。

式は型のごとく工事報告、学校長式辞文部大臣祝辞、来賓祝辞等あつて終つたが参列者の感激はいかばかりであつたろうか、ここにはとくに、柴垣建築課長の工事報告をかかげる。

「富山薬学専門学校創立工事竣工致シマシテ本日開校式ヲ挙行セラルルニアタリ工事施行ノ顛末ヲ報告シマスコトハ誠ニ光榮ノ次第デアリマス。」



風景の宣街市

本校創立費ハ大正七年予算ニオイテ総額四拾四万貳千円ヲ七年度乃至九年度ノ継続費トシテ公布セラレ、ソノ校舍ヲ置クベキ地ヲ富山県ト決定致サレマシタ。シカシテ富山県ヨリ敷地壹万坪ト現金四拾四万貳千円ヲ寄附セラルルコトヲ申出デニナリ、ナオソノ倒補地ヲ選出具申セラレタルニヨリ、本省ニテハ実地調査ノ上現在ノ奥田村敷地ニ校舎ヲ置クコトニ決定シマシタ。

ヨッテ県ハ土地ノ買収地均工事ニ着手セラレ、ソノ竣工ヲマツテ建築工事ニ着手スルコトニナリマシテ大正七年十二月当敷地内ヘ文部直轄建築出張所ヲ開設致シ、文部技師山野繁樹氏ガ同出張所長ヲ命セラレ直チニ工事ニ着手致シマシタ。シカシテソノ設計ニツキマシテハ斯学専門ノ学者ニ意見ヲ聴ク必要ガアリマスノデ東京帝国大学教授長井長義君、丹波敬三君、近藤平三郎君、同朝比奈泰彦君、富山県技師小野瓢郎君ニ本校ノ創立委員ヲ囑託ニナリマシテソノ意見ヲ聴キ設計致シマシタ。

大体ノ設計方針ハツトメテ授業実験上ノ便宜ヲ図リ裝飾の設計ハ一切コレヲ避クルコトニ致シマシタ。シカルニ工事着手以來物価勞銀ノ暴騰ニ遭遇シ非常ノ苦境ニ陥リマシタ。現ニ各建物ノ建築費ヲ精算致シマスニ、講堂ノゴトキハ一坪当リノ予算百九拾円ノモノガ実費四百拾円ヲ要シタルニヨリマシテモイカニ物価勞銀ガ騰貴セシカヲ知り得ルコトト存ジマス。

幸イ予算ノ継続年度ヲ一ケ年延長サレカツ金參拾万円ヲ追加セラレマシタガ、尚建築費ガ不足致シマスノデ事務費ヲ節約シ建築費ニ流用シマシテヨウヤクコノ創立工事ヲ完成スルコトヲ得マシタ。ソノ竣工セシ建物ハ総延坪貳千貳百拾五坪余コノ工費五拾八万百九拾貳円ニシテコノ内主ナル建物ノ坪当リ工費ハ本館教室ガ參百四円特別教室ガ參百五拾貳円講堂ガ四百拾円実験室ガ貳百五拾參円ナインシ貳百九拾參円ニ当リマス。

マタ工事ノ設計監督ニ要シタル事務費ハ參万七千七百貳拾五円ニシテ工事費ニ対シ五分四厘余ニ当リマス。ソノ外設備費予算拾參万円ニ対スル器具機械圖書標本等ノ購入ハ本省會計課ト当校トニテ取扱ハレマシタニ付報告ヲ省キマス。

右工事施行ニ関スル顛末ノ概要ヲ報告致シマシタ。

終リニ臨ミ本工事着手以來何等ノ故障モ生ゼズ無事竣工ヲ告グルヲ得マシタ事ハ閣下ナラビニ諸君ノ多大ナル御援助ニヨルコトト深く感謝致シマス。

大正十一年五月十日

文部大臣官房建築課長

文部技師 柴 垣 鼎 太 郎

校内公開、各実習室では、それぞれの設備および試験、製造、反応等の実験説明をなし、また参考品を展列した。本館では、薬事展覧、美術写真、絵画展覧、生徒製造にかかる香粧品の販売等行ったが、当時地方ではかかる行事は珍らしく非常な賑いを見せた。

園遊会は前校庭で行われ、競うて数百の来賓を歓迎し、余興として奥田下新村青年団の獅子舞あり、園遊会に一段の興を添えた。

祝賀宴会場は雨天体操場で盛大に行われ、平山校長の挨拶、富山県知事代理の謝辞ありて開宴となり、丹波敬三博士の万才三唱によって感激の宴を閉じた。参列者はそれぞれ、ながい年月の思い出をかみしめながら、今日の一日を喜びに浸ったことであろう。

三、敷地及び校舎

大正七年度より三カ年の継続事業として、工事に着手したが、第一次世界大戦の影響をうけ、物価暴騰し工

事は困難を極め、請負を辞退するものさえ生じた。そのため工事を一年延期し、金三十万円を追加して大正十年度に建築を完成した。

創立費

内 訳	総 額		支 出		年 度	
	本校創立費	（当初予算額） （県寄附）	物品購買追加額 （政府支出）	計	支 出	割
設 備 費	20,000	40,000	100,000	70,000	大正七年度 96,000 大正八年度 144,000 大正九年度 192,000 大正十年度 200,000	大正十年度 200,000
建 築 費	35,000	11,400	36,560	57,960	大正七年度 96,000 大正八年度 130,000 大正九年度 131,000 大正十年度 338,560	大正十年度 338,560
事 務 費	2,000	1,200	3,400	3,400	大正七年度 96,000 大正八年度 144,000 大正九年度 192,000 大正十年度 200,000	大正十年度 200,000

創立時の敷地及び建物坪数

学 校 敷 地	一〇、一〇八坪
建物総延坪	二、二二五坪余
建物総面積	一、八八一坪余

右のような状況のため大正十年四月一日移転し、授業を始めたが、水道およびガスその他の実習に必要な設備、器具等の準備がなかったため、毎日講義だけがつづいた。第二学期の終わり頃になって始めて実習が行われた。

その後追加された施設はつぎのようである。

大正十年度 講堂、書庫、雨天体操場、倉庫等

大正十二年度 温室（一号）

大正十三年度 運動場 五二三坪（実際に使用できるようになったのは大正十五年）

大正十四年度 製薬実習室

昭和二年度 温室（二号） 薬草園敷地一〇、三八六坪

昭和四年度 図書閲覧室 一〇〇坪

昭和五年度 薬草園整備完了、薬草園用建物、生徒食堂、弓道場

昭和七年度 裁判化学実習室

昭和九年度 第三階段教室

昭和十四年頃の記録によると、学校敷地一五、四六七坪、薬草園一〇、四〇八坪、計二五、八七五坪の広大な敷地となっていた。

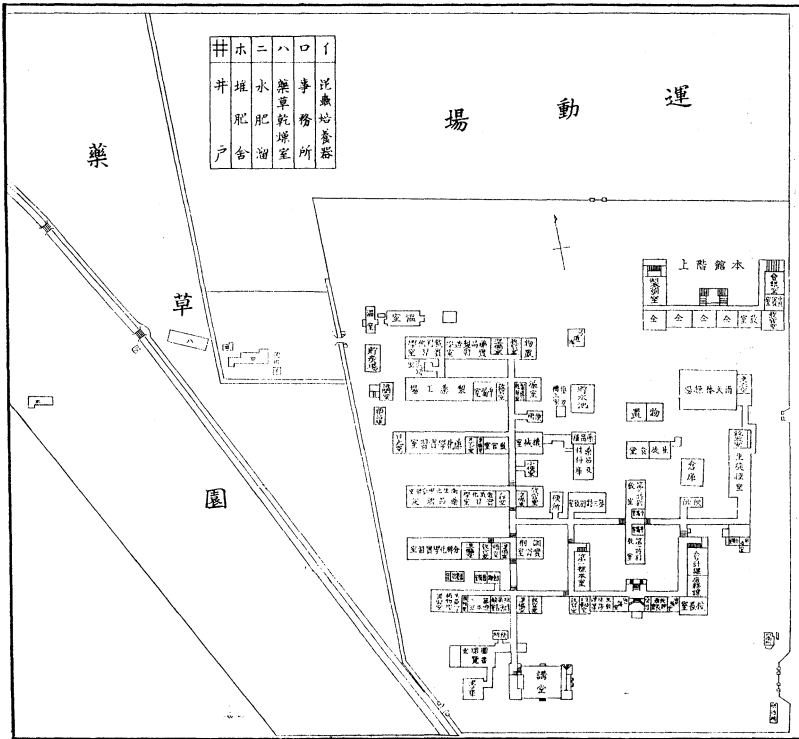
門 碑

昭和四年九月十八日、学校の門碑の書き換えにあたって、母校にゆかりの深い元富山市長稲垣宗正に依頼した。昭和十年、先年の木製であった門碑を青銅製—縦一尺八寸五分、巾四寸五分、重さ三貫八百匁—にとり換えることになり、ふたたび同氏に依頼した。同氏は、官立移管決定当時の富山市長をつとめ、移管のために非常に尽力された人である。同門柱は五福に移され、奥田の記念碑となることになっている。

四、経 費

県立時代にくらべて、生徒定員は倍、職員数は約五倍、敷地は約八・五倍、建坪は約四倍になっているのたいし、経常費は約十三倍に増加した。

このような状況であれば非常に豊かにやれたように思えるのであるが、実際はかなりやりくりに事務当局が苦労したようである。担当の職員が何かと理由をつけて追加経費の要求に文部省へよくでかけたことを覚えている。学校教育の陰にかくれてこのような苦勞をしていた庶務会計の人達のことを改めて思い起こす。



富山薬学専門学校平面図（昭和14年）

経 費 (予算額)

年 度	種 別	経 常 費	臨 時 費	計
大 正 九 年 度		、七、八七二・〇〇 _円		七、八七二・〇〇 _円
大 正 十 年 度		九四、七六六・〇〇		九四、七六六・〇〇
大 正 十 一 年 度		一四、〇五五・〇〇		一四、〇五五・〇〇
大 正 十 二 年 度		一三九、八六七・〇〇	一七、〇〇〇・〇〇	一五六、八六七・〇〇
大 正 十 三 年 度		一四〇、二六七・〇〇		一四〇、二六七・〇〇
大 正 十 四 年 度		一三九、二六七・〇〇	八七、二五〇・〇〇	二二六、五一七・〇〇
大 正 十 五 年 度		一三三、八八九・〇〇	三〇、二〇五・〇〇	一六四、〇九四・〇〇
昭 和 二 年 度		一三一、七八九・〇〇	二三、六二八・〇〇	一五五、四一七・〇〇
昭 和 三 年 度		一三四、七八九・〇〇	一、二三八・〇〇	一三六、〇二七・〇〇
昭 和 四 年 度		一三四、八八九・〇〇	二二、七五〇・〇〇	一五七、六三九・〇〇
昭 和 五 年 度		一三一、三九九・〇〇	一九、二三〇・〇〇	一五〇、六二九・〇〇
昭 和 六 年 度		一二六、〇七一・〇〇	一、九四〇・〇〇	一二八、〇一一・〇〇

五、戦災後の状況と復興

戦災後の状況

昭和二十年八月一日の米軍空襲による火災はながい歴史のなかにおける一つの大きな惨禍であった。大正十年以来多くの卒業生を送りだした奥田の校舎はこつ然として地上よりその姿を消した。残ったものは書庫と薬品庫、罹災前に疎開した図書、顕微鏡および器具の一部で、ほとんど全部に近い施設を失った。その被害は全国罹災高専中でも最大のもので、したがってその再建の前途にも容易ならぬものが予想せられ、一時廢校になるのではないかという悪いうわささえもとんだほどであった。

焼けた翌日から焼け残った書庫に学校事務所をおき、種々対策をこらしていたところ、たまたま本校の計画と県の幹旋とが一致し九月一日官立富山高専学校に仮住まいすることになり、同月十日始業式を行なった。

とはいうもの、実験器具はもちろん、机、椅子、バケツ、ぞうきんにさえ、ことかく始末、その上に住居を失った職員・生徒の岩瀬までの通学は、食糧不足に交通難を加えて全く目に余るものがあつた。また書庫は一時職員の住居ともなった。

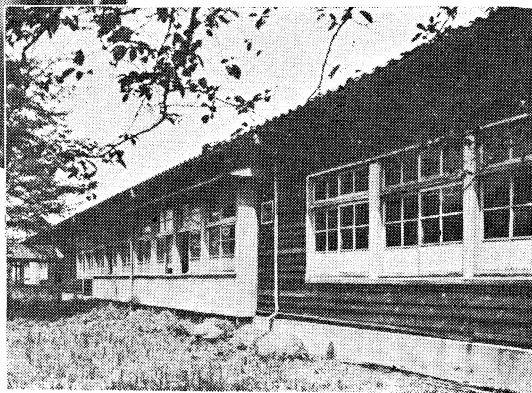
富山薬学専門学校復興促進期成会結成

横田校長は、戦火のなごりまださめやらぬ八月十五日、非常に困難な中を文部省に戦災状況を報告するとともに、戦後の指示を仰ぐため上京した。人影まばらな文部省の当時の情況を見た横田校長は文部省に頼っている、いつ復興できるかわからないだろうと考え、この時非常な決意をなしたもののようであった。

かくて横田校長と、ながらく学校を育ててきた薬都人および母校愛にあふれた卒業生達との間によりより復興についての相談がすすめられた。ついに機が熟し、翌年二月十六日、電気ビルで「富山薬学専門学校復興期成会」結成の運びまでこぎつけ、復興費資金三百万円の目標をたて第一に同窓会員全員にげきを飛ばし手固く募金に着手した。

寄附金の募集にあたっては、横田校長は交通、食糧等非常に困難なかを学校職員、地方薬業家とともに東京、大阪と、いわゆる鉄のわらじをはいての行脚をつづけた。同窓会員中井敏雄夫妻の四十万円の寄附は、勇気づけとともに大きな動因ともなり、また大日本製薬株式会

社滝野野社長および三共株式会社
の山科樵作常務などの親情あふれる助言援助、さらに大蔵省当局の快い理解による会社寄附にたいする免税措置の特令公布などにより、寄附行為は円滑にすすんだ。一方同窓会はよくこれを助け、学生はまた富山駅前に学生復興喫茶店を開業するなど、ほんとうに涙ぐま



しいまでの全校、全業界あげての努力がみのり、昭和二十二年四月十五日、実習室三棟、その他の竣工を得て奥田に復帰したのであった。その後校舎は寄附金と国費とによってつぎつぎと新築され、昭和二十二年十月五日復興記念式が挙行された。

募集にあたっては第一次募集目標三百万円、第二次募集目標額二百万円、計五百万円の目標をたてた。応募金の結果をつぎに記す。

区 分	第一次募集		第二次募集		合 計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額
会 社 有 志	六	二、八七、五七・四円	二	三、五〇〇・〇〇円	八	二、八五、五七・四円
卒 業 生	五	八七、〇〇・四四	三	二八、九六・〇〇	八	一、一五、〇〇・四四
生 徒 父 兄	一	一五、三〇・〇〇	四	五〇、五〇・〇〇	五	五〇、五〇・〇〇
職 員	四	一五、三〇・〇〇	一	一、一四・〇〇	五	一五、三〇・〇〇
合 計	一六	三、七〇、八〇・九四	一〇	三、七二、四六・〇〇	二六	四、〇〇、二六・九四

注 親情あふれた御寄附に対し、一々芳名を記すことができないのが残念である。

昭和二十六年三月には、第三十九回卒業生を世に送り、富山薬学専門学校三十年の幕をとじた。卒業式の当日は、薬専時代をしのび惜別の会が催され、とくに各年層の先輩がふるって会合し、いろんな思い出とともに巣立ちする新しい先輩のためにその前途を祝福し、かつ激励した。

第三節 組織

一、規程及び校則

本校の運営は、富山藥學專門學校規程を基本規程とし、文部省直轄諸学校官制、文部省直轄諸学校職員定員令、專門學校令等の諸法規によって諸般のことが定められ、さらに学校では、これらの法規をもとにして校則、その細則およびその他の規程をつくって学校運営を行なってきた。

專門學校令

明治三十六年三月二十七日に勅令で定められたものであって、最初に

第一条 高等ノ學術技芸ヲ教授スル學校ハ專門學校トス

とその学校の設置の目的を示しているが、昭和三年一月十九日の改正によって、つぎのようにかわった。

第一条 高等ノ學術技芸ヲ教授スル學校ハ專門學校トス

專門學校ニ於テハ人格ノ陶冶及國體觀念ノ養成ニ留意スベキモノトス

校則

校則は、一、総則 二、学科課程 三、学年学期及休業 四、入学在学及退学 五、授業料 六、成績考査

及進級 七、卒業試験 八、研究生 九、処分 十、服制 十一、図書及器械 十二、校務分掌 十三、教授会からなり、総則第一条では「本校ハ藥学ヲ教授スル所トス」とあり、専門学校令の第一条の改正の際にも変更されなかった。

その後度々改正され、昭和十四年には、一、総則 二、学科課程 三、学年学期及休業 四、入学及在学 五、休学及退学 六、授業料及実習料 七、修業及卒業 八、研究生 九、懲戒 十、服装 十一、図書となつた。

その内大きな変革は、最初に期待された製薬関係の学科の廃止と卒業試験の廃止である。

二、職員

官立時代にはいると職員の数は著しく増加し、県立時代（大正七年）の十七名にたいし、昭和十四年には六十余名におよんだ。戦争がはげしくなり、動員された人々の代りに採用された人々、終戦直後の変動の烈しい時に勤務した人々を加えると、この時代につとめた人々は非常に沢山になる。職務こそ違い、それぞれその職場において、働いていただいたお陰で、他に恥じない学校とし、立派な成績をあげることができたのである。しかも多くの人々は、何等社会的に名も知られることなく職場を守った人々である。できるだけ調査してその職場別に列記した。

職員 定 員

教 職 員

物 理 学

講義 大谷文昭 森田利一（嘱） 中島和雄 萩本義宗（嘱） 浅田八良（嘱） 塚本弘之（嘱）

電氣及磁気学

講義 深尾 貞（嘱） 吉岡寅吉

電氣化学及同実習

講義 吉岡寅吉 森田利一（嘱） 中島和雄 阿部一男（嘱） 金山政喜（嘱）

実習 志甫徳次郎 中川健造 瀬川久雄 山根栄次 山田秀夫

大正九年	大正十年	大正十一年	大正十四年	昭和二年	昭和七年	昭和十二年
三	一〇	三	三	三	二	二
一	五	五	四	四	三	三
					一	一
三	五	五	五	五	五	五
					一	
						一
生徒主事	生徒主事補					

無機化学

講義 山田正実 宮道悦男 上野 周 黄葉深造 野口敬身 橋本 亮 倉田軍一

実習 山根栄次 山田秀夫 直井正光

有機化学

講義 宮道悦男 近藤 薫 望月 直 高橋隆造 金岡好造

実習 桜井謙之助

無機薬化学及同実習

講義 黄葉深造 近藤 薫 望月 直 宮道悦男 三橋監物

実習 野島俊二郎 直井正光 大西静雄 網谷武雄 大橋清信 大田良雄 岡城伊三郎 長野 正

鬼頭信一 河本祐三 森尻文子 野村哲男

有機薬化学及同実習

講義 黄葉深造 近藤 薫 望月 直 野口敬身 宮道悦男 三橋監物

実習 野島俊二郎 直井正光 仲村吉一 大西静雄 網谷武雄 大橋清信 岡城伊三郎 河本祐三

森尻文子 野村哲男 長野 正 鬼頭信一

無機薬品製造学及同実習

講義 高橋隆造 近藤 薫 望月 直 宮道悦男 山崎高広 飯田武夫

実習 桜井善次郎 森永丈太郎 桜井謙之助 瀬川久雄 小西忠好 水口清水 野替行也 堀孫三郎

梶原順慶 慶山憲好 石尾庸三 佐藤久人

有機藥品製造学及同実習

講義 高橋隆造 近藤 薫 望月 直 野口敬身 山崎高応

実習 桜井善次郎 森永丈太郎 桜井謙之助 瀬川久雄 小西忠好 水口清水 広瀬隆成 野替行也

堀孫三郎 梶原順慶 慶山憲好 石尾庸三 佐藤久人

新 薬 論

講義 望月 直

有機藥品構造研究法並びに新薬論

講義 小野瓢郎

分析化学及同実習

講義 吉岡寅吉 志甫徳次郎 桜井善次郎

実習 江本力作 荒木栄吉 高島正市

生薬学及和漢薬論同実習、薬用植物学及同実習、植物分析法

講義 大谷文昭 高橋隆造 黄葉深造 中沖太七郎 宫道悦男 金岡好造 橋本 亮

実習 松本常重 細川喜義 土田卯三郎 黒崎正雄 太田良雄 緋田義人 熊木正芳 安田邦彦

松井英一

調剤学及同実習

講義 吉田和平 桜井善次郎 蛭谷吉造 桜井謙之助

実習 駒見又善 吉野喜久雄 河崎賢二 木村敏治 松本英太郎 小川宇三郎 堀田八郎

製剤学及製剤包装法

講義 内藤益一郎(嘱) 野口俊二郎 館村五三郎(嘱) 水谷友三(嘱) 野口敬身 乗松和義

日本薬局方及外国薬局方

講義 吉田和平 野島俊二郎

薬品鑑定

講義 吉田和平 桜井善次郎

実習 駒見又善 河崎賢二

薬理学大意(薬効学)

講義 酒井修白 鈴木博量 松井捨八郎 川井一 村沢昌人 庄司義宗

衛生化学及同実習

講義 石尾貞朝 上野周 望月直 野口敬身 倉田軍一 松本弘一

実習 森亮三 高田武雄 浮田一 藤田晋 河南実 吉倉正之輔 松本弘一 山本誠 小泉宏 山崎修

裁判化学及同実習

講義 石尾貞朝 上野周 野口敬身 倉田軍一

実習 森亮三 吉野喜久雄 桜井善次郎 仲村吉一 井上数平 栗倉八太郎 中川公海 荒川武雄

江田正六 半田和敬 飯田喜之助 水上良三 小瀬川正次 山本邦彦 狐塚重雄 関野清治

薬事法令及飲食物制度

講義 黄葉深造 倉田軍一

鉉 物 学

講義 宮道悦男 上野 周 近藤薰 志甫徳次郎

細菌学大意、醱酵学大意及同実習（微生物学）

講義 石尾貞朝 和田豊（嘱） 森 亮三 山内与三郎（嘱） 植木忠夫（嘱）

数 学

米田桂三

機械学大意、製図、製藥機械設計

講義 田淵京次郎 野島俊二郎 中島和雄

独 逸 語

飯沼竜遠 市野沢寅雄 近藤薰 飯島道脩 浅野成俊 栗山 武 山地英夫 清水忠治 平田一郎

英 語

浅野成俊 清水忠治 中塩清之助

修 身、公 民

飯沼竜遠 浅野成俊 清水忠治 杉本新平

法 制、経 済

栗山 武（嘱） 金岡 寿（嘱）

体 操

三羽松太郎 竹内儀三 若杉勇治 山田庄太郎 広田良平（嘱）

藥學概論

村上清造（兼）

生徒主事 黃葉深造 宮道悅男 野口敬身 清水忠治 三橋監物 平田一郎

生徒主事補 桜井善次郎 桜井謙之助 中塩清之助

軍事教練 配属教官 野崎欽造 山川復三 西蔭順 田中庄司 静川真淵 安藤忠一郎 門司昇一

補助員 長谷川光次 中村外寿 市川元治 小松安太郎 上野習二 小柴庄三
山田庄太郎 鈴木富太郎 中塩清之助 土井健次

武道師範

劍道 古賀末次郎 高橋明 篠原義雄 飯原藤一

柔道 石黒憲輔 舟崎清藏

弓道 徳田志武美

學校医

高田範国 三羽邦定 松井捨八郎 庄司吉宗

事務職員

庶務課

長 三羽松太郎 小森徳四郎 西森美二 森野重義 梶川米次郎 平田一郎

課員

佐伯稠隆 河本喜美子 野尻米松 柿下文子 若杉竹次郎 森田 弘 中島きくえ 今井一子
 芥藤千代子 島 正 紺道明子 沖タミ子 野村善一 桜井雅楽

會計課

長

山岡理吉 中西 実 植村 脩 宮崎誠一 梶川米次郎

課員

松田禎三 横山千太郎 和泉幸吉 富田四辻 黒田啓太郎 内山松次郎 二木勝俊 矢部きん
 町田サタ 酒井義光 岩城千鶴子 本田文治 川島勇次 高森恵己子 酒井 弘 石坂由蔵
 今井一子 中村甚英 沢崎成逸 林 調松 藤波佐九郎 前田美代 土地幸子 蘆原 懋 本田文治

教務課

長

飯沼竜遠 浅野成俊 野島俊二郎 三橋監物 金尾嘉八

課員

櫛田浜三郎 竹村芳一 森野重義 内山松次郎 林 調松 宮崎誠一 桜井雅楽 石坂敦子
 赤池万子 中村甚英 川島勇次

生徒課

長

三羽松太郎 竹内儀三 望月 直 黄葉深造 宮道悦男 野口敬身 清水忠治 平田一郎

課員

桜井善次郎 金尾嘉一 千石喜久 山田庄太郎 横山千太郎 若杉勇治 高見健一 林 調松
 柳田アイ 高木南州 野尻米松 森田 弘 河内美代 土井健次 金尾和子 尾島保子 三日月民子
 蘆原 懋 矢後ミサ 若杉竹次郎 野村善一 川又忠次郎

図書課

長

桜井善次郎 黄葉深造 上野 周 野口敬身 近藤 薫 倉田軍一 村上清造

課員 竹村芳太郎 富田四辻 宮崎誠一 永田佐一 内山松次郎 森田 弘 団野アヤ 杉谷寛之助

土肥睦子 榎 吉二 沢崎成逸 天野瑛子 大塚秀雄 天野璣子 山田庄太郎 山田和子

製 菓 課

長 宮道悦男 桜井善次郎 蛭谷吉造 桜井謙之助

菓 園 課

長 大谷文昭 上野 周 金岡好造 橋本 亮 中沖太七郎

課員 川端明七 高野嘉一 藤波佐九郎 早川助二 杉谷寛之助 高木南州 山本博一 山田庄太郎

伊藤外次郎 前川徳太郎 内山幸吉 新村敏郎 太田良雄

傭人(守衛、作業員、給仕)

盧原 懋 赤尾久太郎(守衛) 青山たき 浅井六右衛門 池田勝次郎(守衛) 井崎英子 石井茂男

石坂久次郎 市田タミ(タイピスト) 稲田平二 稲谷百合子 岩城忠治 今井一子 大久保松太郎

奥田与一 大谷誠二(守衛) 勝山ミドリ 加藤孝作 神谷祐子 河本喜美子 河本松造 梶川米次郎

久郷フサ子 葛島 保 黒崎恒次郎 黒崎きく 黒田為三(火夫) 小島シゲ 坂口タツノ 酒井鶴太郎

島 正(守衛) 菅田ナカ 城村嘉一(守衛) 関野善次郎 高見健一 高松松次郎(守衛) 橋 教順(守衛)

道正清五郎 恒田与作(農夫) 坪島平藏 土井祐二 中川弥一郎(守衛) 中川左近

中島きくえ 中島和子 中田宗太郎 中村甚英 永原与朔 中山富子 西村岩松(職工) 野尻米松

野沢勇次 林 調松(守衛) 浜子甚次郎(守衛) 平井森之助(守衛) 深川 菊 藤田友次郎

伏原八重 日南田善郎 本郷トシ 本田文治(守衛) 松木ヨ子 松野常春(農夫) 松原与吉(園丁)

宮越作次郎（守衛） 室井ヤイ 森田 弘 矢田幸造（守衛） 安井定次郎 山田清次郎 吉田タカ

吉野敏邦 若杉竹次郎 若林秀美 牛島作次郎（機関手） 池田勝次郎（守衛） 日南田鶴次郎

科学研究補助技術員

石坂敦子 金尾和子 土地幸子 三日市民子

雇 興津 斌 石田哲男 岩城千鶴子 牛島規矩雄 奥村英子 尾島保子 尾野良平 狐塚良三

佐藤啓一 長谷川芳子 皆川道人 森田文子 奥村英子

看護婦 大木公香 麦谷磯寿

電話交換手 山本豐子 室井ヤイ 沖タミ子

工務員 蘆原 懋 加藤昭作

教職員長期勤務者表彰式

昭和二十三年十二月十六日、二十五年以上の勤務者の表彰式が行なわれた。

教授 志甫徳次郎

” 野島俊二郎

” 中沖太七郎

講師 飯原藤一

事務官 金尾嘉八

” 梶川米次郎

三、生 徒

官立時代になると、生徒の入学定員が倍加して百名になったが、入学志願者は年々増加し、昭和七年には十倍にまで達したことがあった。また入学志願者の本籍地を見ると全府県にわたり、台湾、樺太、朝鮮からも多数の志願者を見、県外人の入学者数は、昭和十四年までに県内人の六〇％に達し日本の学校となった。

また昭和二十三年になって始めて女子の生徒が入学し専門教育の機会均等が女子に及び、戦後の民主化の一端をしめした。

年 度	生 徒	入 学 志 願 者	入 学 者	年 度	生 徒	入 学 志 願 者	入 学 者
大 正 十 年		一二四	九八	昭和 五 年		六二五	八一
十 一 年		一九四	六七	六 年		七〇二	八一
十 二 年		一六七	八七	七 年		九〇七	八三
十 三 年		二六八	八一	八 年		七三二	八四
十 四 年		二八二	八二	九 年		五四四	八二
十 五 年		三七四	八四	十 年		四四一	八六
昭和 二 年		四四一	八五	十 一 年		三九六	八七
三 年		五一九	八四	十 二 年		二九四	八三
四 年		五五六	八三	十 三 年		四六九	八三

北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬
四〇〇	三一	三三	五六	五五	一〇一	九二	四八	五一	八一
六	一	四	八	七	二	一	九	七	一
埼玉	千葉	東京	神奈	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野
六五	三八	一四一	七二	三五八	一、七九八	二七九	一九五	三六	一四九
一四	三	二一	一〇	五四	四六一	三三	三五	七	二一
岐阜	静岡	愛知	三重	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌
二九八	一一九	八一六	三〇三	九一	一五七	五二五	三八二	一八〇	二二三
二五	一六	一五三	六一	一三	二三	九〇	六〇	三三	三四

入学志願者及入学者府県別表

昭和十四年	昭和十五年	昭和十六年	昭和十七年	昭和十八年
四九七	四四八	四〇四	六一四	一、一五〇
八七	八五	八八	八七	八七
昭和十九年	昭和二十年	昭和二十一年	昭和二十二年	昭和二十三年
四六五	四八八	四七八	四一一	三五六
九〇	一〇八	九七	一〇一	八七
女男				

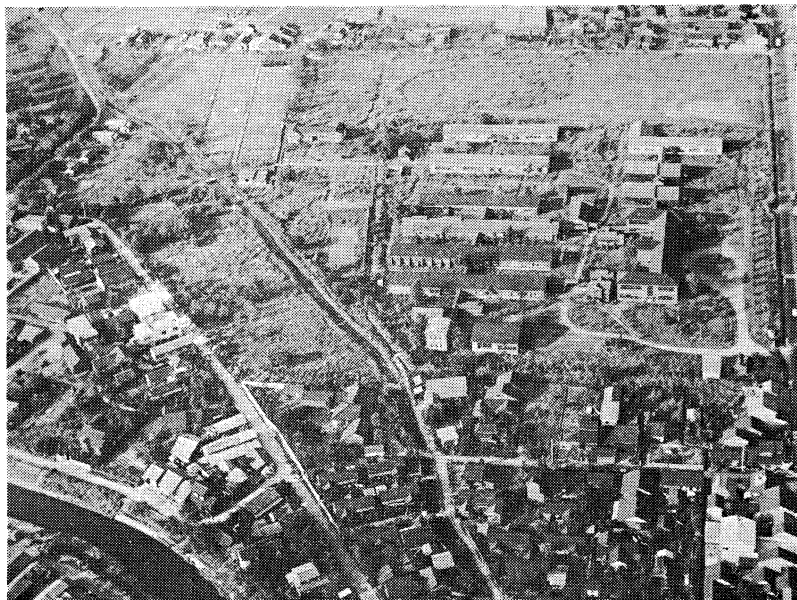
注 大正十四年から昭和十四年まで

第四節 教 育

一、環境と教育方針

ながい歴史をもつ薬都——地味ななかにもたゆまない努力をつづけてきた薬業者のすむ——の中に育てあげられた全国始めての、かつただ一つの県立薬学専門学校という誇り、その誇りをもって学んできた県立薬専時代の伝統的精神が、そのまま官立薬専時代にうけつがれ、小野校長、平山校長、高橋校長、横田校長を中心とする教職員と母校愛にみちみちた同窓会員との愛情の中に奥田学園はつくりあげられてきた。

鳥取	島根	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛
八五	六八	二二二	一八九	九五	一〇四	一一一	七〇
一九	一三	五三	四二	一七	一八	二四	八
高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島
四九	六〇	二七	一四	二二	四三	一三	二六
二	七	一	二	二	七	三	三
沖縄	台湾	朝鮮	樺太	満洲	支那		
八	一〇四	三三	一八	一	九		
一	一四	六	三	一			



奥田校舍鳥瞰図

大正七年官立移管を祝して、石尾貞朝教授により作詩された校友会歌、官立移管の開校式を前にして相馬御風によってつくられた校歌、それらの歌は、それぞれ生徒の胸の中に血となり肉となり、歌いつがれてきた。

校 歌

相馬御風作歌
小林礼作曲

(一) あしたに仰ぐ立山の

雄姿に夜の夢さまし

ゆふべにのぞむ神通の

ながれに昼の迷い去り

玲瓏きよき健児等が

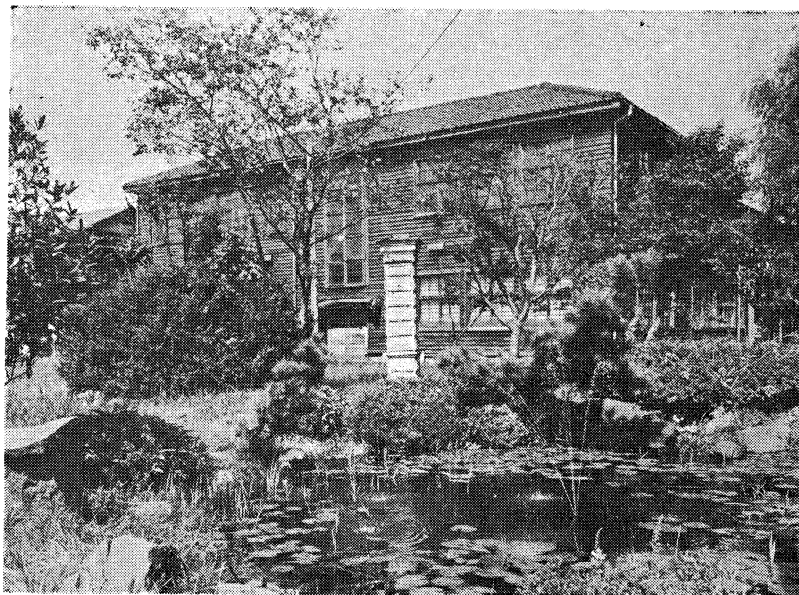
心境常に新たなり

(二) 歴史栄ある帝国の

榮都の北に聳え立つ

わがなつかしき学園の

高き甍を仰ぎ見て



戦災後の奥田校舎・中央の柱は富山県立薬学専門学校の門柱

誰かはそこに輝ける

使命の意義をおもはざる

岩をつらぬき地をくぐり

湧きてやまざる清泉の

それにも似たる自彊もて

科学の進歩きわみなく

未拓の広野かぎりなき

学びの道をわれ進む

(四)

ああ健児等よ東洋の

薬学界の權威たる

重き使命は誰ぞ担ふ

努めざらめやわが友よ

薬専健児の榮譽ある

わが名の実示すべく

注 昭和三十二年、歌詞の一部を富山大学大島文雄教授に依頼して修正した。

第二節 歴史栄ある帝国↓亜細亜の光日本の

第四節 薬専健児↓薬学健児

高橋校長は昭和十年に、以上の伝統の中に育った教育方針をつぎのようになるにのべている。

「本校の教育方針は時代に適應せる薬剤師の養成という一語に尽くると思います。

よく現在の教育は画一的であるという声を聴きますが、本校またしかりと言わざるを得ないのであります。ただその画一的教育に家庭的な潤いと情味とを加味せんとするところに、本校独自のものの無しとは申せませんが、要するにわれわれはこの平凡なる方針の下にこれをいかに生かし、これをいかに実現すべきかを念じ努力しつつあるものであります。

しかし時代に対応せる薬剤師とは？

いかなる方面いかなる場合に直面するともこれを咀嚼し、打開し、邁進しうる学理的基礎と底力の所有者たるべきことはもちろんであります。一面またその精神的方面においても相当鍛練されたる信念をもって事にあたりうる人物たるべきことは必然であろうと信じます。

さればわれわれはその専門學術の精進を督励することはもちろんさらに実習時間あるいは校友会等の行事を通じ常に生徒との接触と指導を怠らず、あるいは恵まれたる自然の偉力と相俟って

一、業務を楽しむ責任を重んじ忠実恪勤の品性を作ること。

二、廉恥を尚び誘惑をしりぞけ自強下息の志操を持すること。

三、自治独創の習性を養い協同連帯の精神を発揮すること。

四、正義人道の情操を養い寛容融和の実を挙ぐることを。

を標的として最善の努力を捧げつつあるのであります。これとりもなほせず専門学校令第一条の精神の發揚に思いを致すものに他ならないのであります。

近來薬剤師の活動範圍がますます拡大し社会また薬剤師にもとむるところ多きを見ますとき、われわれは一層この平凡なる教育方針徹底への努力と覚悟とを深めつつあるのであります。」

二、学 科 課 程

文部省は官立薬専の設置にあたって、薬剤師養成の学校のほかに、製薬科を主とする学校をつくる考えがあった。また県及び売薬業者の間においても製薬科設立を要望していた。

しかるに設置運動の過程——多分負担金問題のこと——で、製薬科の設置をやめ、製薬の課目を充分にとりいれることで話し合いができたのではなからうかと考えられる。その後、大正十三年になってさらに製薬に関係深い課目が廃止になったのはいかなる理由によるのであろうか。

しかし、平山校長が就任されてから、大阪衛生試験所の機械を譲りうけ、製薬工場の充実をはかった。この製薬工場こそが、製薬科新設の含みではなかったろうか、その後昭和十九年にも製薬科の新設の努力がなされたが、ついに実現しないまま終戦となった。

つぎに創立時の学科課程を示す。

学 科 課 程 表

修 身 語 独 逸	第一学年		第二学年		第三学年	
	前学期	毎週教授時間数	前学期	毎週教授時間数	前学期	毎週教授時間数
八 一	後学期	八 一	五 一	五 一	四 一	四 一

製藥機械學	同	衛生化學	同	生藥學及和漢藥論	同	有機藥化學	同	無機藥化學	製	同	分析化學	同	藥用植物學	有	無機化學	電氣及磁氣學	機械學	鉍物學
-------	---	------	---	----------	---	-------	---	-------	---	---	------	---	-------	---	------	--------	-----	-----

四 六 二 二 三 四 三 二 二 一

四 六 三 二 三 五 三 二 一

二 三 三 二 三 五 四 三 三

二 三 三 二 三 五 四 三 三

外日本藥局方	調劑學	調劑學	無機藥品製造學	有機藥品製造學	藥品製造學實習	電氣化學	同實習	裁判化學	同實習	細菌學大意	同實習	植物分析法	有機藥品構造研究法及合成法新藥論	藥理學大意	製劑學及製劑包裝法	製藥用機械設計及製藥工場設計	藥事法令飲食物制度
一	二	一	二	三	四	九	一	二	二	一	二	二	二	二	二	二	一
一	二	一	二	三	四	九	一	二	二	一	二	二	二	二	二	二	一

薬業経済						
体操	二	二				一
合計	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇

大正十二年十月には、つぎのように科目が変わった。

英語新設、電気及磁気学廃止、薬理学大意を薬理学と改む。有機薬品構造研究法及合成法廃止、新薬論廃止、製剤学及製剤包装法を製剤学と改む、製薬用機械設計及製薬工場設計廃止、薬業経済を法制経済と改む、物理学新設、日本薬局方・外国薬局方を薬局方に改む。細菌学大意、醗酵学大意を微生物学と改む、機械学大意を機械学と改む。戦後になってからは、修身は道義、人文となり後に公民とかわり、体操、軍事教練が体操、教練となり、後に体育とかわり、また衛生化学は厚生化学となり、新たに理数、物理化学が設けられた。二十二年になると、物理化学が理論化学となり、薬品製造学が製薬化学となり、薬理学が薬効学となり、新たに薬学概論（文献利用法）が設けられた。

三、実 習

昭和十年四月一日、奥田の校舎に移った当時は、ガス・水道工事が着工されていなかったもので、十月頃まで実習することができなかったが、その後はしだいに充実し、全国に誇る設備をもつようになり、実習も生徒一人一人が充分にやれるようになった。

実習室 第一棟 生薬学、植物学実習室、細菌醗酵学室、動物実験室

第二棟 調剤実習室、分析化学実習室

第三棟 衛生化学実習室、薬品鑑定実習室（始め本館の中にあった）、電機化学実習室、天秤室

第四棟 薬化学実習室、機械室、オゾン室、元素分析室

第五棟 製薬工場、炉室、製薬品乾燥室

第六棟 薬品製造実習室、裁判化学実習室（始め本館内にあった）炉室

本館内 二階に製図室、一階に生薬、売薬標本室があった。

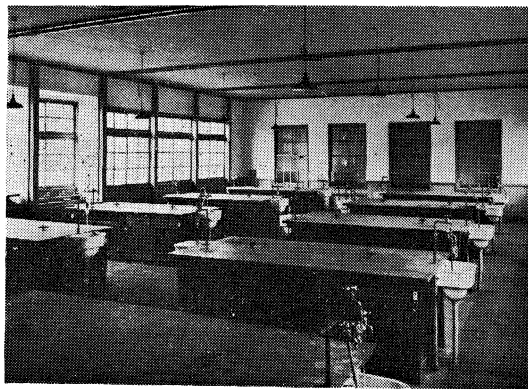
薬草園（標本園、栽培園）温室

製薬工場 硫酸キニーネ、モルヒネ、カフェインの製造が行われ、かつ、研究に必要な材料の抽出、蒸溜水の製造等を実施した。

四、課 外 教 育

校 友 会 ・ 報 国 団

官立移管とともに、校友会活動は広い校舎と校庭とを得て、のびのびと成長していった。ことに昭和元年神



実 習 室

通河原にあった仮運動場が廃止され、奥田の運動場に移ってからは、運動部は一層活発さをしました。

大正十年、運動部は柔道、剣道、庭球、相撲、学芸部は図書、編集、講演の各科で発足した。

大正十一年、野球、エスペラント会（部外）発足

大正十二年、陸上競技、弓道、蹴球（部外）、ピンポン（部外）、山岳、音楽部発足

大正十三年、スキー部発足、図書部なくなる。

昭和元年、山岳スキー部誕生

昭和二年、ピンポンが卓球となり、音楽部の中に洋楽、邦楽が誕生

昭和四年、音楽部にコーラス会、部外に植物同好会、キリスト教会青年会誕生

昭和六年、音楽部にハーモニカ部が誕生

昭和八年、乗馬同好会、射撃同好会、マンドリン部、植物同好会誕生

昭和十二年には、籠球同好会、レコード音楽部誕生

昭和十三年には、写真同好会誕生

昭和十五年時局の影響をうけて、校友会も、富山薬学専門学校報国団と改まって、左の綱領に示すように、教職員と生徒との親しみあう集いから大きな転換を示した。

「 綱 領

我等報国団ハ

大御心ヲ奉体シ

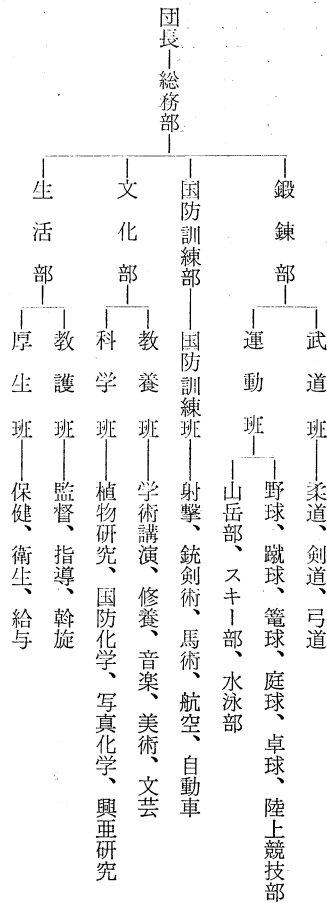
一致団結報国精神ニ一貫シ

文ヲ修メ 武ヲ練リ

勤勞ヲ尚ビ 実践ヲ重ンジ

誓ッテ負荷ノ大任ヲ全クセンコトヲ期ス」

かくて昭和十六年二月十一日結成が行なわれ、組織もつぎのようになった。



戦争が苛烈になるに及んで、昭和十八年八月報国団の組織が改組され、国防訓練部が、大きな変動をしめした。すなわち、行軍山岳、雪滑班、戦場運動班、射撃、銃剣道班、馬事訓練班、航空機甲班が誕生し、文化部に兵器科学班がうまれた。そして音楽班が廃止の声をえでたようであつたが、先生、先輩の温い理解でつづけられた。しかし、歌詞は、おのづと軍国調へと向けられていった。

昭和十九年は、勤労働員と勤勞奉仕にあけくれ、報国団誌も同年三月をもって報告を消し、ただ当時の卒業生の心の中に傷あとを残すだけである。昭和二十年八月二日、戦災のため大正十年以来のなつかしの奥田に校

舎の姿が消えてしまった。

九月十日、富山高校を借用し授業を開始した。翌二十一年四月再び校友会が発足した。昭和二十三年十月二十二日になると、生徒大会が開かれ、ながらく教師の指揮のもとに運営された校友会を解散し、自治会を結成し、同年機関誌「鍊金」及び「富葉新聞」を刊行した。

自治会結成声明書

歴史は必然的にわれわれに自治を要求し、われ等はまた自治に依らなければ自己および自己の属するあらゆる社会の進展、ひいては時代の進歩はないと認識し、また混濁の途にある社会状況と、混乱している思想のただ中に流転浮遊している現代人の現実を窺て、よく自己と自己の属する社会の正当な発展を願ひ、進歩を促進しようと過日自治会を結成した。われわれは学の道にある者として博愛、協同の精神のもと責任ある自由なる意志の行使によって、学の自由の確立と正しく明るい平和的学園の創造ならびに学生生活の向上充実によく自己の特殊性を生かして現実に応じ、時を得てよき将来を拓こうとするものである。

新校友会の部会活動では、柔道、剣道及び相撲部が姿を消し、他の運動部の種類は変りなく、学芸部は著しく変ってきた。すなわち、自然科学班(植物研究、写真、製菓、薬局、微生物、電気)、社会科学班、弁論班、外国語研究班(英語、独逸語)、美術班、文芸班、音楽班、演劇班、等の諸班で構成され、また新しく生活部が生まれて、当時の困難時に生活をいかに改善するかにとりくんだ。

部 活 動

運動部の活動は校内試合よりも北陸の高専との対校試合、全国的の試合に活発な動きを見せた。「北陸高専

大会」「北陸選手権大会」「北陸高専弓道連盟の大会」「全国高専剣道大会」「全国官公立高専弓道大会」「北陸学生競技連盟の大会」「北陸関西庭球トーナメント」「四帝大連盟東北ゾーン」等各種の大会に出場することも多く、また、「県下中等学校野球大会」「北信五県中等学校柔道、剣道大会」等の中等学校の試合を主催することもしばしばであった。

また一方それぞれの部の先輩と連絡をとり、残影組（剣道）薬球会（蹴球）あるいは富山薬専山岳会―会の事業として大辻山にヒュッテをつくった―等をつくって、部活動をにぎやかにし、楽しいものにすることも忘れなかった。武道部はまた毎年寒稽古をやって心身の鍛錬にいそしんだ。

講演部は全国的な雄弁大会に出席することもあったが、主力は県下各地はもちろん、隣県新潟・飛騨はいうに及ばず、三重、奈良、愛知、岐阜と各地に講演行脚することが多かった。また県下の中等学校の雄弁会を主催することもあったが、校内弁論会と同様に少なかった。

尺八、マンドリン、ハーモニカ、コーラス等をもつ音楽学部は、単独または他と合同でたえず演奏会を開き県民を楽しませることが多かった。このことが、戦争の烈しいさなかでも、先生方の理解でよく活動させた。

植物同好会は絶えず、採取にかけ、県内の植物分布の研究にも大いに貢献し、文芸同好会は、また文芸雑誌「三稜」を刊行して同人に配布、人生の探究に余念ない日を送った。

会 報

校友会誌は、富山県立薬学専門学校校友会誌として、明治四十四年三月二十日に第一号を創刊し、以後毎年

一冊あて刊行してきた。官立になった大正十一年二月には、第十二号を革新第一号として号数を改め、革新二号からは、大きさを菊版とし、大正十四年から鍊金（文芸号）と学報にわけて刊行した。六号（昭和元年）七号（昭和二年）と十三号（昭和八年）以後は鍊金と名づけ、文芸、学術を合併して刊行し、昭和十五年第二十号をもって終止符をうち、昭和十六年六月富山薬学専門学校の報国団の機関誌としての「報国団誌」を創刊した。この「報国団誌」も戦争終末のため第四号（昭和十九年三月）をもって終わり、戦後になって新たに昭和二十一年十二月校友会機関誌として復刊第一号「鍊金号」を刊行した。しかしこの号も三号（昭和二十三年）で終わり、昭和二十三年富山薬学自治会の機関誌「鍊金」を刊行、一方富業新聞（三号まで刊行、二号から富山薬学新聞と改称）を発行、昭和二十四年第二号を刊行し終止符をうった。

学術講演、文化講演

学校における毎日の授業のほかに、特別の講師による学術講演、文化講演を行なうことは、生徒の教養、学習に多大の効果を与える。つぎにそれらの講演題目をかかげる。

大正十一年五月十一日、富山薬学専門学校開校式の翌日、学術記念講演が行なわれた。

千葉医専教授平野一貫、三共株式会社重役薬学博士高橋三郎、東京薬学専門学校教頭薬学博士丹羽藤吉郎、東京大学教授薬学博士丹羽敬三、日本薬学会々頭薬学博士、理学博士、ドクトル長井長義、諸氏が講演した。

昭和二年四月二十三日、講堂において校友会主催のもとに薬学大講演会が開かれた。

最近の水銀化合物について

東京帝国大学教授、薬学博士 慶松勝左衛門

シノメニウム及びコックルス属アルカロイド研究概要

東京帝国大学教授薬学博士 近藤平三郎

ケキユレ博士ベンツオル核構造式の起原について 東京帝国大学名誉教授理学博士薬学博士 長井長義

昭和二年四月二十四日、薬業団体主催のもとに、県会議事堂において薬業大講演会が開かれた。

晩近における高圧化学工業について

薬学博士 慶松勝左衛門

晩近における化学工業の開始は薬剤師により

理学博士薬学博士 長井長義

売薬の将来

薬学博士 近藤平三郎

その他の講演

一、結核予防について 松井捨八郎（昭和八、二、二〇日）

一、訓話（演題なし） 文部大臣 鳩山一郎（昭和八、一〇、一六日）

一、滲透圧と生理溶液 東京帝国大学薬学科助教薬学博士 高木誠司（昭和八、一〇、一〇日）

一、活性炭について 東京帝国大学薬学科教授薬学博士 慶松勝左衛門（昭和九、一〇、一三日）

一、欧米各国における 海軍々医学校教官 清水辰太郎（昭和一〇、六、一四日）
防空防毒施設の概要 海軍薬剤中佐薬学博士

一、近代戦と化学 陸軍科学研究所々員 山口誠太郎（昭和一一、一〇、一〇日）
陸軍一等薬剤正薬学博士

一、わが国体の本義について 文部省普通学務局長 武部欽一（昭和一一、一〇、一〇日）

一、晩近における空気検査法の変遷 警視庁衛生検査所長 柿沼三郎（昭和一一、一〇、七日）

一、化学者の武器 東京帝国大学薬学科教授 朝比奈泰彦（昭和一一、五、一八日）

一、日本精神と世界平和 東京帝国大学教授 塩谷温（昭和一一、九、一六日）

一、国史上より見たる日本精神

九州帝国大学教授 長沼賢海（昭和一一、一〇、一四日）

一、科学と人生

東京帝国大学教授 永井 潜（昭和一二、一、二七日）

一、人類の天性

京都帝国大学教授 川村多実二（昭和一二、九、一七日）

一、日本文化の性格について

東京帝国大学名誉教授 吉田 熊次（昭和一二、一〇、一三日）

一、アセチレンの化学

大阪帝国大学教授 小竹無二雄（昭和一二、六、三〇日）

一、わが国当面の外交問題

前外務政務次官 松本 忠雄（昭和一二、一〇、二一日）

一、樟脳の生化学的研究

東京帝国大学薬学科助教授 石 館 守三（昭和一二、一一、八日）

一、亜西亜の情勢

前イラク公使 宮崎 申郎

一、南方薬用植物視察談

津村研究所技師薬学博士 木村雄四郎（昭和一二、二四日）

一、ニュウギニア學術探検談

南洋庁産業研究所技師理学博士 田山利三郎（昭和一九、二、二二日）

一、最近の薬学研究対象

東京大学薬学科教授薬学博士 秋谷 七郎（昭和二一、一〇、一六日）

一、免疫とアレルギー

東京大学医学部教授医学博士 緒方 富雄（昭和二一、一〇、一六日）

生徒の生活

創立当時、富山市の北陸線以北は、村の森が点在する全くの田園で、学生生活環境としては、校歌にうたわれているように恵まれたものであった。

朝に仰ぐ立山、夕にのぞむ神通、どれだけ学生の心に訴えたかはかり知れぬものがあつたと思う。その後し

だいに都市化していったとはいえ、季節ごとに、それぞれの花咲く整備された花壇、一万坪の薬草園、約五千坪の運動場は、一日一日の生活を楽しいものにしたことは、すべての卒業生の心の奥深くに、奥田の里として刻みつけていることであろう。

終戦前までは、寄宿舎はなく、県外学生は皆市内外の民家に下宿の生活をおくった。これもまた県外学生にとってはずきぬ思い出を残していることであろう。

また、黒部峡、称名峡、神通峡、庄川峡、大岩山、氷見海岸の遠足も、学生生活の中によきうるおいを与えてくれたことであろう。

修 学 旅 行

関西、関東方面への工場見学を中心とする修学旅行も、学校生活のなかで思い出多いものの一つであろう。ことに、大正十一年を第一回として行なわれた満鮮方面の修学旅行は、より多くの思い出を残したことであろう。図書館に残る満鮮に活動せる先輩との交歓風景写真は、いつまでも当時の喜びを伝えている。

開 校 記 念 祭

大正十一年五月十日、官立移管を祝しての開校式、翌年より毎年行なわれた開校記念祭は、楽しい行事の少なかった富山市民及び附近の人々にとって、毎年待たれる祭りとなり、奥田の村をいつしか賑やかな町としてしまった。音楽会、演劇、食堂、化粧品の販売、実習室におけるめずらしい実験、奥田の里と共にいつまで人

々の心の奥に残ることであらうか。

しかし、第一次大戦後の大正末期から昭和初期にわたる経済的不況、昭和十年代における第二次大戦の突入は、その頃の学生生活に大きな変革をもたらした。

「きけわだつみの声」などに残る出陣学徒の悲劇は、ながく傷跡となって卒業生の心の中に残っていることであらう。

五、研 究 生

校則のなかに、研究生制度がある。創立当時、研究科の設置が薬業界の一部の声として要望されたほどであったが、この研究生制後も活用されることがなかった。昭和十年代になってようやく活用されるようになり、昭和十五年から昭和十九年度の間に六名の研究生が在学した。

六、思 い 出 の 数 々

官立薬専時代は、大正十年から昭和二十六年の間、三十年のながい歴史を残している。ここにかかげた記録はいろいろとちがった記録の寄せあつめのようなものであるが、ながい間の学校生活に、なんらかのものを与えたもので、今にまでつづいて学生の心の中に生きているものもあれば、また卒業生の心の故郷にだけ生きているものもあらう。

校 歌

開校式にあたって校歌をつくったならばという声が起こり、幸いに職員中に相馬御風と知り合いの人―千石喜久―があり、その人を通じて依頼したところ、早速承諾となり、開校式にまにあつたことである。作曲者も相馬御風の知人で高田師範の先生によってなされた曲である。

随分たったある時、生徒達が友を送るために富山駅頭にたち、校歌をうたつていたところ、窓より顔をだした老紳士が学生を手招き、校歌を所望され、感慨深く東へ去っていかれたことがあった。おそらくは作者ではなかったらうかと。

富山県立薬学専門学校の間柱

大正十年四月一日、官立薬専となり、奥田の地に移ったとき、県立時代の思い出にと移したものである。ながらく奥田の里に総曲輪時代のおもかげとして、県立時代の卒業生になつかしい記憶を呼び起こさせたものである。今は五福の校舎の中庭に移されて、母校の発展をとわに見まもっていることであらう。

校 旗

大正十一年十二月九日、本校卒業生および三年生、二年生の寄附による校旗の樹立式が行なわれ、その取扱は「校旗取扱規程」によって本校を代表する標幟とし慎重に行なわれた。この校旗には昭和二十年八月二日空

襲の際、中沖教授が胴に巻いて避難された思い出深い挿話があるのである。

平山奨学賞

大正十四年九月九日、故薬学博士平山松治嗣子平山利英により、奨学資金として金壹千円寄附せられた。右金額より生ずる利子をもって賞牌を製し、生徒中成績優良の者および精勤の者または在学生および卒業生中とくに功労があつた者に授与されることになった。

武道場祭神鎮座

昭和二年十月十二日、武道場に神殿を設け、毎年記念祭を行なってきた。

大鷲岩と忠孝

昭和六年、七年度の卒業生が卒業記念にと寄せられた母校愛の結晶が高橋校長の配慮によって昭和九年四月二十八日大鷲岩となって、正門近くの校庭に据えられたのである。この岩は、安政五年（一八五八）の昔、大地震によって大鷲山が崩壊し、上新川郡流杉地内に漂着した口碑をもつ岩である。

「側らのプラタナスの並木が春の訪れに若葉をかがやかせ、秋風の流れにいち早く散りかかるともこの大磐石は遂ぞ語らず、黙々として朝な夕な吾等の往き来を凝視しているのであった」

遠久朶子はかくうたっていたが、昭和十二年十月十三日、国民精神総動員運動の週間実施の第一日に、高橋

校長の配慮により、この大鷹岩に「忠孝」の二文字が刻まれた。この二字は宋の忠臣文天祥の真蹟で、広島県賀茂郡竹原町所在の「忠孝石」の拓本によったものである。

今は五福の校舎の中庭に移されている。

御真影奉安殿

昭和十五年（一九四〇）、母校、校友会、同窓会の合同で、紀元二千六百年記念事業として御真影奉安殿を建設することになった。そして昭和十六年十一月三日落成式をあげ、昭和十七年五月一日奉遷式を行なった。

七、戦争と教育

官立時代は、県立時代を土台として築かれた県民待望の時代で、当時大きな期待をもって迎えた時代であった。たしかに立派な設備と人とを得て二千三百六十七人の卒業生を社会におくり出した。

一面、この時代は創立時において第一次大戦の影響をうけ、創立経費に大きな赤字を出し、設立初期は戦後の不況時代をすごし、いくらか安定し始め、充実しなかった頃に再び戦争に突入した。昭和二十年八月十五日以後平和に戻ったが、戦災の復興に苦しい日々がつづいた。かくみていると官立時代は苦難の時代であったように思える。

戦争と軍事教育、この面に焦点をあてて、官立時代をふりかえてみたい。

富山薬専軍事研究団の設立―大正一三、五月

本校生徒有志と富山六十九連隊長倉島大佐との間に話し合いが進み、精神修養、体育向上を主旨として富山薬専軍事研究団が設立された、この設立をつける校友会誌の報告記事中の一節に

「…軍事研究と言えば一部の人はただちに、軍国主義、軍閥…を脳裡に浮かべ、これにたいし大なる憎悪の念をもってむこうる人あり、しかしこの平和なる時、文化の偉大なる恩恵を受けつつある今日宜しく平和的たれ…予はしかしこの言にたいし、戦争は民族、あるいは国家の文明を促進せしめ、しかして、戦争によりて未開の世界は現在に至りたるなり。もし戦争なかりせばいまだ文明の恩恵の最微だに浴さざるは当然なり。

しかるに現在はいかん。すべての者は皆文明の燦然たる光を受けつつあるにあらずや。しかして文明は、武器と武器、人と人との戦によりて促進さるるものにあらずして両者のすべての物、工学、薬学、医学、経済、化学、農業、工業、民族的精神…すなわち質的、精神的の戦争なり。しかして戦争の結果勝敗、盛衰あり、しかして民族的戦争すなわち民族的、国家的試験はわれら学生における試験と同一視すべきものなり…」

軍事教練実施のため将校配属―大正一四、四、二四日

野崎欽造大尉が初めて本校に配属された。これから生徒の軍事教練が行なわれ、実地演習、軍事教練査閲、旅団長の軍事教育視察等が毎年実施されてきた。また昭和四年十月十四日、第九師団司令部の秦少将が教練査閲に来校、「満蒙問題と日本海を抱擁せる裏日本青年の使命」と題して講演を行なった。

満州事変起こる―昭和六、九、一八日

昭和八年七月満州産業建設学徒研究団が組織され、本校から生徒が一名参加した。昭和十年六月十四日には国防化学講演が行なわれた（近代戦と化学、欧米各国における防空防毒施設の概要の二講演）。同年十一月十四日、富山県国防化学協会による「防空防毒演習」が本校々庭で実施された。

日支事変起こる——昭和二二、七、七日

昭和十二年七月十日、校庭において防空瓦斯ページェントが実施された。同年九月二十五日、富山薬専門防化学研究会設立。同年十月十二日国民精神総動員運動の実施がきまった。昭和十四年五月二十二日、学校教練創設十五周年記念日に青少年学徒に勅語下賜。昭和十四年七月から八月にかけて、興亜勤労報告隊が結成され、北支蒙疆および満州に派遣した。桜井生徒主事補引卒のもとに生徒十名が参加した。その間、学内では夏期訓練を実施した。昭和十五年二月十一日、富山薬学専門学校興亜青年学徒隊が組織され、同年十月三日銃後奉公強化運動始まる。

校友会解散報国団結成——昭和二六、二、二一日

報国団には、新たに国防訓練部が加えられ、また集団勤労が重視された。同年の記録をたどると、五月から十月まで月に四、五回の勤労奉仕作業が行なわれた——農場除草、校庭除草、運動場除草、その他各種食糧増産薬用、植物収穫等——これらの作業は十七年、十八年へと継続実施された。また同十六年夏には、興亜学生勤労報国団隊学生義勇軍関西訓練および夏季訓練に参加し、同年十一月三日には富山薬学専門学校報国隊結成式が行なわれた。

卒業期くりあげ

昭和十六年度卒業生は三ヶ月、昭和十七年度卒業生からは半年のくりあげが実施された。

太平洋戦争起こる——昭和二六、一二、八日

かくて戦争はますます拡大してゆき、学校教育はしだいにゆがめられていった。昭和十九年、二十年になるとそれぞれ工場へ勤労働員として出向し、大部分の生徒は学校をはなれた。昭和二十年九月二十日の卒業生の

ごときは入学以来一年二ヶ月許りの授業をうけただけで、卒業の止むなきにいたった。この卒業生は自らを「未熟児」と称しているとのことである。

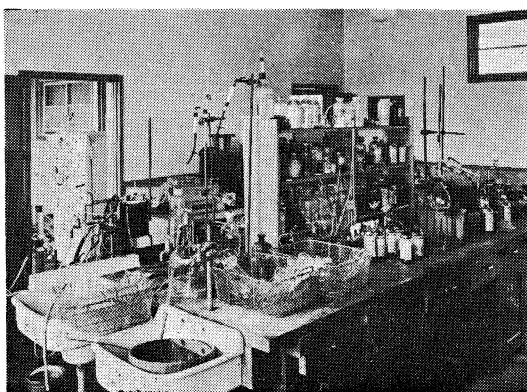
かくて昭和二十年八月二日未明、完備を誇った校舎は焼かれ、同月十五日敗戦詔勅となった。

第五節 研究

一、研究論文

官立の専門学校になって初めて、教官の研究に必要な施設、経費、便利が与えられたようである。これはあるいは、第一次欧州戦争の際の苦しい経験によるのかもしれないが、官立専門学校の経費の増大が大きな第一原因であろう。

つぎにその研究の成果の主なる題目をかかげるが、売薬界の一部には、もちろん学問に素人である人々の意見であるから、とりあげるのは及ばないかもしれないが、「薬学専門学校の先生方の研究はわれわれ売薬にあまり関係のないものが多いのではないか」という声が、当時ときどき耳にしたことである。基礎的な学問研究がどれだけ必要かということはその道の専門家にはわかっていることであるが、売薬の振興一途に考え、学校を支援してきた売薬業者の声も、あながち素人の



研究室

声として捨てることができないものがあつたのではなかったらうか。

研 究 報 告

- | | |
|---------|---|
| 橋 本 亮教授 | 地衣成分の研究 |
| 飯田武夫教授 | 撫順産頁岩油成分の研究 |
| 金岡好造教授 | 吉草根の成分研究 |
| 近 藤 薫教授 | アントチァン並びにアントチァニードに関する研究 |
| 倉田軍一教授 | 衛生化学的研究—清酒、上水、アルカロイドの反応、血液鑑識上の反応、薬局製剤および飲食物中の色素の証明 |
| 三橋監物教授 | フェナントリジン誘導体の研究 |
| 宮島悦男教授 | アミノ酸誘導体の研究、赤小豆の成分研究 |
| 森 亮三助教授 | 細菌学的研究—大腸菌のホルマリン水に対する抵抗力、フィロツルチンの細菌に対する作用 |
| 中沖太七郎教授 | フラボン属色素の研究、当薬、紫苑の成分研究 |
| 中島和雄助手 | ライマル氏反応によるサリチルアルデヒドの合成、蟻酸アルカリを用いてのフェノールカルボン酸の生成、ハロゲンアルカリの電解に際し添加せるアセトアミドの変化 |
| 野口敬身教授 | 繖形科植物の有効成分に関する研究—川芎、当帰、白芷、ハマボウフウ、芍、ヨロイグサ |

大谷文昭教授 麦角の人工栽培の研究

桜井謙之助教授 めくさ薄荷の栽培および精油成分の研究

桜井善次郎助教授 松葉、地黃、茯苓、猪苓の成分研究、カフェインの製造試験

高橋隆造教授 ポリオキシアントラヒノングルコシドの合成

上野周教授 甘茶の成分研究

著 書

石尾貞朝教授 「最新栄養品、嗜好品製造化学」 内田老鶴圃発行、大正十三年

「生物化学」 内田老鶴圃発行、大正十四年

宮道悦男教授 植物成分研究法 昭和一〇年

中沖太七郎教授 薬用植物攬要金原商店 昭和一三年

学 校 発 行 物

富山薬学専門学校彙報 第一輯（昭和六年） 第二輯（昭和十一年）

二、海 外 研 究

望月 直 薬化学研究のため滿二年間瑞西国、独逸国および英国へ——大正九、七、一〇発令。アメリカ合

高橋隆造

衆国追加、満期後大正十二年三月八日まで私費滞在の件許可。(大正一二、七、一六日帰任)

無機有機薬品製造研究のため満二年間、英国、独逸国及び瑞西国へ―大正一一、六、二三日発令、アメリカ合衆国追加(大正一一、九月出發―一三、一一、二二帰朝)

宮道悦男

一般化学、合成薬化学研究のため満二年間、英国、独逸国および瑞西国へ―大正一二、一二、一三日発令アメリカ合衆国追加。(大正一三、三、一七日出發―大正一五、五、一三日帰朝)

大谷文昭

生薬学、和漢薬および植物分析学研究のため満二年間独逸国、瑞西国および英国へ―大正一四、一、二六日発令(大正一四、三、三一出發―大正一五、五、一〇帰朝)

上野 周

植物化学、裁判化学研究のため満二年間瑞西国へ―大正一四、一二、一五日発令。独逸国およびアメリカ合衆国追加(大正一五、三、一八出發、昭和三、五、三〇帰朝)

近藤 薫

薬品製造学研究のため満三年間独逸国へ―昭和二、二、一九日発令(昭和二、三、三一日出發―期間短縮昭和四、八、一六日帰朝)

志甫徳次郎

分析化学研究のため満二年間独逸国へ―昭和二、一二、二三日発令(昭和三、三、三一日出發―昭和五帰朝)

野口敬身

薬化学、製剤学研究のため満二年間独逸へ―昭和三、一二、二六日発令。アメリカ合衆国、伊太利国追加。(昭和四、三、一一出發―昭和六、五、十五帰朝)

高橋隆造

欧米視察のため大正四、一二、四日発令(昭和五、二、二八出發―昭和五、一〇、二二帰朝)

金岡好造

生薬学、和漢薬および植物分析法研究のため満二年間独逸国へ―昭和一〇、二、二三発令。専門教育視察のため中部支那へ―昭和三、一一、一七日発令。

大谷文昭

三、内地研究

東京大学医学部薬学科へ左の人々が内地研究員として派遣された。

大谷 文昭 生薬学および薬用植物学の研究—昭和五、五、一七日

中沖太七郎 生薬学および薬用植物学の研究—昭和六、五、二七日

桜井謙之助 分析化学の研究—昭和一八、四、五日

三橋 監物 薬化学の研究—昭和二二、一、二二日

松本 弘一 厚生化学の研究—昭和二二、一一、一日

倉田 軍一 厚生化学の研究—昭和二三、八、二四日

四、研究奨励費および補助費

研究にたいして奨励費、または補助金が交付せられることは、少ない校費の補いとして好都合であると共にその研究が認められたものとしてよろこばしいものである。

宮道悦男 教授 文部省の自然科学研究奨励費交付さる—「アミノ酸誘導体の環構成」(昭和四年)、「石

南科植物の殺虫性成分の研究」(昭和八年)、「不飽和脂肪酸開裂の研究」(昭和九年)

金岡好造 教授 日本学術振興会の研究奨励金交付さる—「吉草根油成分の研究」(昭和九年)

近藤 薫 教授 日本学術振興会研究奨励金交付さる―「薑科植物の辛味成分の研究」(昭和九年)

野口 敬身 教授 日本学術振興会研究奨励費交付さる―「繖形科植物の有効成分の研究」(昭和九年)

「同研究」(昭和十一年)

橋本 亮 教授 文部省の自然科学奨励費交付さる―「地衣成分の合成的研究」(昭和十年) 「同研究」

(昭和十一年)

中沖太七郎 助教授 日本学術振興会研究奨励費交付さる―「フラボン系色素およびその配糖体に関する研

究」(昭和一〇年)

三橋 監物 教授 文部省自然科学研究奨励費―「石蒜の一成分リンコリンの構造研究」(昭和十二年)

五、学 位

富山県立薬学専門学校となって、学位を持った校長を迎えることができ、官立時代となって、先生のなかに学位を取得せられる人が出現してきた。

平山増之助 校長 明治四十年 受領

小野 瓢郎 校長 大正四年七月 受領

平山 松治 校長 大正二年五月二日 受領

高橋 隆造 校長 大正十五年十二月二十一日 受領

宮道 悦男 教授 昭和六年三月十一日 受領

上野 周教授	昭和六年九月十一日	受領
大谷文昭教授	昭和七年三月十七日	受領
近藤 薫教授	昭和九年四月二十五日	受領
野口敬身教授	昭和十年一月七日	受領
金岡好三教授	昭和十七年十月二十五日	受領
中沖太七郎教授	昭和二十年十月三日	受領

このことは、地方における薬専の誇りであり、また地方薬業界にたいしての貢献にも連るものであった。

六、学 会

従来薬学会といえは明治十四年（一八八一）に創立せられた日本薬学会だけで、地方には全く学会的組織はなかった。もちろん明治二十七年共立富山薬学校創立以来、校友会、同窓会、日曜講話会というような名称で研究会を開催してきたが。

昭和三年初めて、金沢医学専門学校薬学科教官と本校教官とが中心となって北陸薬学会を創設し、爾来毎年開催地を変えて学会を開いてきた。戦後では日本薬学会北陸支部と称し年二回開催し、昭和四十年では二十一回をかぞえる。

第六節 卒業生の活動状況

卒業の回数増加とともに、卒業生の数も多くなり、したがって、社会的活動のはばも広がってきた。別表のように各方面に活動しているが、そのうちでも開局と会社勤務がとびはなれた数をしめている。みなそれぞれに、自ら選んだ仕事にうちこんで自らを生かした社会に貢献している。なかには、志に反してさまざまな障害にぶつかり、いわゆる七ころび、八おきの苦勞した人もあるであろう。しかし、みな自己のなしてきた最善の努力にたいし、心から満足していられることと思う。

つぎに各自自己の職業以外に、各種の社会的な仕事に従事して活動しているのを見受ける。一々数えあげることもむづかしいが、拾い集めたものをあとにかかげる。

また、それらの職業、社会的な仕事の結果、学位をとり、あるいは、功勞賞、發明賞等を授賞された方も多いことと思う。一々ここにあげることができないのが残念である。

職業の種類

業局開設	創立時代	
	官立時代	創立、官立を含む
一一〇	昭和六年五月一日現在	昭和十四年十一月一日現在
一七〇		
四六二		

種商	二	四二
売業	二	四七
薬品製造業	一三	一一
その他自家営業	一三	二一
官公衙勤務	二一	一〇二
学校教職員	一八	五七
病院診療所勤務	二〇	一六〇
会社、商店勤務	三九	四二七
在学	一	八
研究	一二	一三
兵役	一〇	五四
その他	三七	一八一
計	二八〇	一、五八五

岐 長 山 福 石 富 新 神 東 千 埼 群 枋 茨 福 山 秋 宮 岩

奈

阜 野 梨 井 川 山 潟 川 京 葉 玉 馬 木 城 島 形 田 城 手

三 五 二 五 ^{一三三} 六 一 二 五 五 一 三 八 四 三 二 三

四 六 一 三 九 二 四 二 七 ^{四〇二} 三 七 九 一 六 一 七 一 一 六 五 一 一 四 六 五 四

四 九 一 八 九 二 六 三 二 ^{五三四} 四 三 一 〇 二 八 六 二 二 二 九 三 一 五 一 七 八 八 四

三 一 六 六 二 一 五 ^{二八五} 三 四 一 八 ^{一六〇} 七 九 一 〇 三 五 七 一 四 七 九 五

福 高 愛 香 德 山 広 岡 島 鳥 和 奈 兵 大 京 滋 三 愛 静

歌

岡 知 媛 川 島 口 島 山 根 取 山 良 庫 阪 都 賀 重 知 岡

一 一 二 五 一 五 一 二 二 三 四 四 八 五 七 八

六 二 八 二 一 七 一 一 三 五 四 一 九 一 四 三 一 二 八 五 一 八 〇 一 九 一 一 五 三 ^{一三二} 一 五

七 二 九 二 三 二 二 一 一 三 六 四 六 九 一 五 三 三 〇 五 四 八 四 二 三 一 九 五 八 ^{一三九} 二 三

七 八 〇 三 八 二 二 一 七 六 八 一 五 二 一 六 八 ^{一九八} 二 三 九 三 一 ^{一〇五} 二 二

職業以外の活動

佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	台湾	朝鮮	合計
二	二	二	六	四	二	八	三	三	二七
二	二	二	六	五	二	八	三	三	一三一
一	一	一	四	一	一	一	一	一	一五八
一	一	一	五	一	一	一	一	一	一五八
九	二	五	二	一	三	一五〇			一五八五

一、同窓会役員

二、薬剤師協会並びに各種業業団体の役員、委員等

三、地方自治体の長、議会議員、選挙管理委員、消防団役員、公安委員、労働基準審議委員、行政監察局相談

委員

四、教育委員会委員、教育長、社会教育委員、公民館長、幼稚園主事、文化財関係役員

五、民生委員、司法保護委員、家裁調停委員、国民保険運営委員

[illegible]

六、商工会議所を始めとする各種業種の団体、組合の役員

七、ライオンズクラブ、ロータリークラブ等の社交団体の役員

八、各種運動競技団体の役員

九、各種学会の役員

十、研究発表、著述、特許権の取得

第七節 産 学 協 同

薬業界と本校との関係は、今さら、語る必要もない位であるが、官立移管につくした薬業界の努力はなみなみならぬものがあつた。その人々は、官立薬専に何を期待していたであらうか。

「——製剤学及び製剤包装法その他製薬用機械設計、製薬工場設計等の学科のごとき、売薬を重要物産とする富山地方にては、とくにただ一つの研究機関を得たるわけにて、地方売薬業者がこの施設を実際的に利用することは同校新設上大いに歓迎するところなりと考える。この点については小野校長はつとに熱心に説きつつありて売薬の改善発達に資するところ大なるものとした。しかしして一步退いて薬学徒弟養成について現在富山市の薬学講習学校を同校に附設するの議につき市当局等は今少しく熱心に運動を持続するの必要ありと思う。なおきたんなくいえば、右官立校のごときも三ヶ年の修業年限において用ゆる薬学科を教授することは、まったくつめこみ主義になり、公然研究科の設置を見ざるを疑わざるを得ず。しかし教授上とくべつの方法を定むると共に、卒業者にして既修の学科目につき、さらに研究せんと欲するものにあつて、二年以内薬学研究に自由の道を開きつつあるにおいて多少その欠陥を補うにたれりというべきか。要するに薬学問

題に關していまさらかれこれ言及することをさくるとするも、教授上最もこんななりとすべきは、藥事法令の科目を担任する教師にしてこれが入選當を得ざれば實際に教養の目的を遺憾なからしむるあたわず。ただこの際吾人のくりかえさんとする事はすなわち富山売藥の改善を念とし、當業者は無遠慮に同校を利用するの觀念を増進せんことこれなりとす云々」

右はその一端を紹介したものである。つぎにこの時代における状況の一端をさぐろう。

一、売藥改良研究

大正十三年四月七日、富山売藥処方研究会

富山売藥同業組合では、大正十二年度の事業のなかに「売藥処方ノ改善ヲ図リ現代的ノ売藥ヲ調製シ、博ク需用者ノ信用ヲ得、生産額ノ向上ヲ図ル為処方研究会ヲ起シ、斯道ノ博士学士等ニ審査ヲ囑託シ優良売藥ニハ有効証明書ヲ附与ス」をうたっている。これが実行に移され、この日第二回、大正十四年に第三回、昭和三年に第五回授与式を行なったことが報ぜられている。審査委員には藥專教授が囑託され、平山校長が最初の委員長となり、平山校長のあと、高橋校長が委嘱されている。

昭和四年、大谷藥專教授、乗松和義藥学校長、本庶英猷県技師、館村五三郎賣藥試験場技師等によって富山売藥学会が創立された。主として一、藥理作用 二、剤形 三、配伍試験等について研究すること申し合わせその後数回にわたって研究会がもたれたが、成果の程不明である。

昭和四年五月十四日、山中恒三知事は本県売藥と他の内地売藥と比較し、富山売藥の發展をはからんと関係

職員を招集して第一回協議会を開いた。まず包装の問題をとりあげた。

昭和四年七月、山中知事はさらに売薬の振興をはかるために県内売薬の基本調査を行なった。

昭和四年十月九日、富山県主催で富山売薬批判会がもたれた。薬専からは黄葉教授、大谷教授が参加した。

昭和五年十一月十一日、売薬改良調査会

昭和五年は深刻な不景気で、懸金の回収が容易でない上に、県外売薬に蚕食される状態なるため、富山県売薬同業組合では、官民合同の売薬改良研究会を設置することとし、本日、富山市醸造試験場において、飯倉組長、堀事務長、橘富山支部長、竹島富山市勸業課長および富山県衛生課本庶技師、商工課松岡主事等協議打合せを行なった。その結果、売薬業者、組合本支部、薬剤師会、薬専、薬学校関係者、県衛生課、商工課、富山市勸業課、その他関係者をもうらして売薬改良調査会を設け、内容包装の改良、販路の開拓、濫売防止、中小売薬業者の合同経営等について研究調査することに決定した。

昭和六年一月二十七日、富山県会議事堂において売薬改良協議会を開き、山中知事より開催趣旨の説明あつて協議に入り、売薬改良調査会設置を決定した。調査事項としては、一、原料品に関する事項、二、製剤および装置に関する事項、三、販売方法に関する事項、四、本県売薬の広告宣伝に関する事項等を取りあげた。部会是一部…生産費各部門、二部…製品の科学合理化、三部…営業の統制の三部会にわかれ、薬専からは、高橋校長、望月教授が第一、第二部会に属し協力することとなった。

その後しばしば委員会を開き研究調査の結果を発表し、昭和九年頃まで、継続したようである。

昭和十一年一月十六日、売薬調査会

富山県売薬同業組合代議員、評議員、支部長で組織された売薬調査会の第一回委員会が開かれ、担当委員を

きめた。第三回委員会は二月三日に開かれ、薬専から野口敬身教授、桜井善次郎助教が出席した。その後二月十日に会合し、満州売薬進出の具体案を決定した。

昭和十一年十月二十二日、県売薬振興座談会

年額三千万円というはなやかな最盛期から、一転して半額の千五百万円という不振状態をしめたので富山県主催で売薬振興策を講ずるために各方面の人々をもうらして座談会を開いた。薬専からは校長代理に野口教授が参加した。いろいろ話しあわれたが、薬学については「一、売薬試験場を充実公開し、業者の試験研究に便ならしめること、二、県に売薬指導吏員を設置すること、三、わが国民の体質に最も適応している和漢薬方面に向って研究の歩を進める必要がある」等について話がだされた。

昭和十三年三月十七日、富山県売薬試験場では、大正会館において、試験成績報告にかね、売薬改良懇談会を開いた。本県売薬の北支進出にあたって、かの地の風土病に対応する薬剤の研究創製が必要だということから意見交換が行なわれた。当日の研究発表事項の主なるものは、一、内容包装紙各種の防湿試験比較、二、胃腸薬に含有せらるる「ヂアスターゼ」の水素イオン濃度による糖化力の減退試験、三、売薬着色料の試験成績四、原料薬品配伍禁忌の試験成績等。

昭和十三年三月十九日、富山県売薬振興会

「国民健康保険法案」問題が解決された機会に、売薬時局対策同盟会を解散し、新たに県下売薬界をもうらした有力機関をつくるため、県売薬同業組合において協議した結果、「富山県売薬振興会」をつくることにした。四月二十日総会を開き、五月に役員を決定した。顧問として高橋隆造校長が推薦された。

二、外国売薬研究

県立薬専時代に平山増之助校長によって、外国売薬が収集せられ、参考に供されたことがある。

大正十五年六月一日、商工省が売薬研究のために、外国の有名売薬を購入したので、富山県の売薬の参考資料にと、県売薬同業組合の名をもって、県をへてつぎのような請願書を提出した。

請 願 書

本県売薬は米につぐ生産を有し、大正十四年中の生産額は貳千万円以上に達し、その販路たるや内地一円、朝鮮、台湾、樺太、海外としては支那、布哇方面に搬出せり。当組合は将来海外輸出の有望なるを察知し、先年支那、南洋方面に視察員を派遣し彼地の状況を視察し、徐々に輸出の歩を進めきたるところ今や百万円余輸出するに至れり。しかれども欧米各国より支那南洋方面へ輸出せらるる額に對比せば甚だ微々たるをもって、従来種々の対応策を講じ奨励に努め欧米各国より支那方面の輸入せる内最も需要多き売薬の一部を購入し参考に資し研究指導しつつあるも、日進月歩の今日たまたま少数のものを蒐集研究するのみなるをもってその効果はなほだ少なきを遺憾とするが、幸い御省において近々海外へ旅商派遣に決定せられ、売薬も計画の商品内へ加えられたるについては、この機会において当組合員の製造に係る売薬を委託し、永久的の販路を開拓致し度、その準備に着手中にて本県売薬を世界的に発展せしめんには、内容の改善亦必要なるもなかならず包装意匠等の改良目下の急務なりと信ず。よって当組合は今回旅商の派遣の各国へ欧米各国より輸入せらるるものを参考料として購入し当業者に示し指導誘掖に努めたきものなり。

昭和五年高橋隆造校長は欧米各国視察の際、欧州の売薬六百三十一種を持参し、かつ、薬専の教官をしてそ

の内容について訳説をなさしめた。富山県薬剤師会はこれを「欧州売薬要覧」の名で刊行（昭和八年）し、県内売薬業者に頒布した。

収集した標本は薬専の標本室に陳列し、一般の利用に供した。昭和九年一月二十八日には薬専図書館において、県薬剤師会売薬業務調査部主催のもとに、座談会を開いた。会するもの四十有余名。高橋校長から収集の苦心談、原料の精選状況、外国売薬の医薬界における權威等についての話がいった。また調査にあたった教官は、専門的立場からそれぞれ説明があつた。

収集売薬の種類

独逸国 売薬	三四〇種	購 入
シェーリング社製剤	三〇種	同社寄贈
リーデル社製剤	一七種	同社寄贈
奥太利国 売薬	一四種	同国薬剤師会長シェーダー氏寄贈
チエコスロバキア国売薬	一四二種	ビンセニク・ポーサーク氏の好意により同国七製剤会社より寄贈
仏国バリー市カノーン薬店	二五種	購 入
独逸国ベルリン市カールパウ社	六三種	同社寄贈
合 計	六百三十一種	

注 収集にあたっては、ゲーヘ社出版ゲーヘ宝典（現在も新版刊行され薬学部図書館に所蔵）から見本として適當と思われるものを調査し、かたわら、丹羽藤吉郎博士の友人であつたベルリン市ドクトル・ベックストレーム氏等の援助を得てなされた。

三、講習会、講演会

本期においても薬専、富山県、富山市、富山県売薬同業組合等は、それぞれ長期にわたる講習会、または講演会を開催して、行商人の養成または、売薬業に従事する薬剤師の資質向上に努力した。薬専教官はたえずこれらの講習会、講演会に出向して協力していた。

富山県主催…昭和六年から毎年講習会を開いた記録がみえる。昭和九年には第五回の数字がみえている。一回四日～六日開いている。

富山市主催…元富山県売薬同業組合の主催であったものをひきついたのであるが、県立時代からつづいて行なわれ、昭和二年第十五回の数がみえている。半月～一ヶ月にわたる講習である。講師には平山松治校長、高橋隆造校長、石尾貞朝教授、黄葉深造教授、望月直教授、大谷文昭教授、上野周教授、近藤薫教授、浅野成俊教授、野島助教等の名をしばしば見うける。講義題目には、つぎのようなものが見うけられる「製薬学」「外国売薬」「薬品」「一般化学」「生薬」「和漢生薬」「薬業道德」「合成薬品」「行き詰まりつつある富山売薬の打開」「手数を忌む業者」「売薬研究に力を注げ」「和漢薬の新勢力」「冷笑されぬように」「包装改善はかくの如く」「小業者は合同せよ」「配置方法を研究せよ」等

富山県売薬同業組合主催…講演会、講習会が行なわれ、母校々長、教授は時々その名を連ねている。比較的単純な講習か、実業的なものが多い。四方支部、水橋支部、中田支部主催のものも時折り見られる。

富山県売薬試験場主催…昭和十五年頃の記録によると毎年各地で講習会を開いているとのことである。原料品の実物見本を見せたり、「咳嗽喀痰にたいする売薬」「利尿剤」等の具体的製剤に関する解説的な題目が

多く見うけられる。

富山商品陳列所主催 .. 昭和八年に、売薬資料展にかねて売薬講演会が開かれ、高橋校長、上野教授、宮道教授等が講師として出席している。

富山薬学専門学校主催 .. 大正十一年の開校記念祭に際し、東京大学教授による講演会を開催、昭和二年には薬学薬業大講演会を開催している。

四、図書館の公開

昭和六年、高橋校長の発意で、図書館を公開し、売薬会社、製薬会社、化学工業会社ならびに、地方一般人に気軽に利用せしめることにした。

五、薬業会の支援

官立移管に際しては、薬業界は全力をあげてその実現に努力し、多額の寄附をひきうけることによって目的を達した。また昭和十五年七月富山化学工業株式会社北川承三専務取締役の発意で、売薬会社、製薬会社、化学工業会社の中、母校図書館を利用している会社をもって、富山薬専図書館後援会をつくり、図書館の充実と利用をはかった。さらにまた昭和二十年八月の空襲によって母校が焼失した際、横田校長は、富山薬学専門学校復興促進期成会を設立し、復興にとりかかった。この時は、地方薬業界だけでなく、東京、大阪を中心とする多くの製薬会社、化学工業会社の援助をうけた。

第六章 富山大学薬学部時代

第一節 薬学部沿革

一、大学昇格運動

わが薬学部はあとに述べられているように、昭和二十四年戦後の新しい教育制度のもとにできたのであるが、わが富山の薬業家が大学を切望したのは非常に古く明治末期にさかのぼるのである。

明治四十一年（一九〇八）松原文部大臣が富山を視察したさい、新聞記者が富山の薬業家が薬科大学の設置を希望をしていることをつけたところ、大臣は「薬学の知識が不完全ならば、県立薬業学校の程度を高くすれば足りるのではないか、また金沢医学専門学校の薬学科を分離して富山に新設せんと望みもあるとすれば、それも無理なことだ」と答えた。

その後富山県立薬業学校が富山県立薬学専門学校に昇格し、四十三年十二月四日に開校式が行なわれた時、東京帝国大学薬学科の教授長井博士は、その祝辞のなかで将来大学への昇格を切望せられ、富山市長井上政寛もまた祝辞のなかで将来大学にまで、もってゆきたいと希望をのべていた。

大正五年七月十三日。富山県売薬同業組合富山支部では、役員会を開き、薬学専門学校を大学機構組織にすることに於いて協議し、代表として高桑直助、邨沢金広、藤井諭三、中川久正の四氏をして木間瀬策三知事を

訪問させ、意見をのべ、知事の意見をきいた。知事は「同問題は多年県民の熱望しているところであり、政府もまた異議がないようであるが、財政上の都合で実行にまで至らないしだいである。先日にも上京の折り、わざわざ文部省に松浦専門学務局長を訪問、意見を述べ急速に実行に移すよう希望しておいた。このようにたえず注意を怠らないのである。今後も促成に努力する」と答えた。代表等は知事の努力に期待して帰った。

大正十三年

北陸薬報の薬界時言の中で、広貫堂社長邸沢金広は薬専の単科大学昇格に批判的で、大学より、薬専に製造化学の学科併置がよいといっていることを見ても、この頃においても、大学昇格のことが薬業界及び県でも考えられていたと推測できる。

昭和五年六月二十二日

富山薬業同志会では、第二回総会において沢田佐一郎の緊急動議で大学昇格を決議した。

昭和八年

県下の業者によって母校の大学昇格の請願が帝国議会に提出された。

二、戦後の教育と新制大学

昭和二十年八月、太平洋戦争は日本の敗北をもって終結した。連合国総司令部は、昭和二十年十二月十五日「国家神道、神社神道に関する政府の保証、支援、保全、監督ならびに弘布の廃止に関する指令」を出し、さらに十二月三十一日に、「修身、日本歴史および地理停止に関する指令」を出した。これにより校内における

御真影、奉安殿、英靈室、神棚などの除去が指示され、二十一年五月、文部省の新教育指針は「人間性、人格個性の尊重」、「科学的水準及び哲学的、宗教的教養の向上」「民主主義の徹底」をかけた、平和国家、文化国家建設を高らかに歌ったものになった。

新憲法は昭和二十一年十一月公布され、教育面では、昭和二十二年三月、民主主義的教育の基本原理をおりこんだ教育基本法と、新しい六・三・三・四の教育組織の確立を規定する学校教育法とが制定公布され、この二つの法律は、富山大学を含めた新制大学を規制して現在に及んでいる重要な法律である。

三、富山大学の発足と薬学部への転換

文部省は戦後の大学設立認可に関する基準を定めるため、十名の専門家より成る「大学設立基準設定に関する協議会」を昭和二十一年十月という戦後の日なお浅い時期に発足させた。同年十二月に六・三・三制の上に設けらるべき大学は四年制の新しい制度によるべきことが決定され、建議されるに至った。昭和二十二年三月協議会の性格もC・I・Eの示唆により、文部省の直接の運営を止め、四十六名の大学の代表から成る自主的なものとなり、「大学設置基準」を作った。

昭和二十三年一月に大学設置審査委員会が作られ、前記の協議会から半数の人が参加し、計四十五名からなるもので発足した。C・I・E当局は大学設置に関する十一ヶ条を示し、文部省はこの原則に一部の修正を加えて、国立大学の実施計画を立てた。この中には従来、日本の大学が大都市にのみ集っている弊害を指摘してこれを是正するために一つの府県に一つの大学の実現を図ることと、各都道府県には必ず教養および教職に関



富山大学正門（左側 3 番目が薬学部）

する学部を置くという原則も含まれていた。

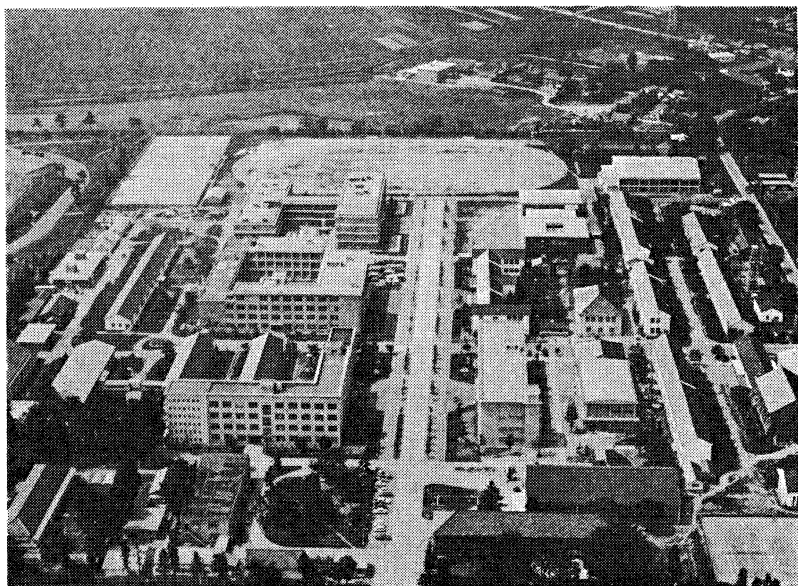
このような情勢は、中央においてのみならず、地方においても大学の設立の可能性を思わせるものであった。

地方では新制中学や新制高校の問題が、より大きく関心をよんでいたが、富山において大学を設立しようという声が漸く大きくなったのは昭和二十二年春ごろからであった。六・三・三の新学制では旧制の高等専門学校そのままの存続を許さないことが明らかになってきたからである。

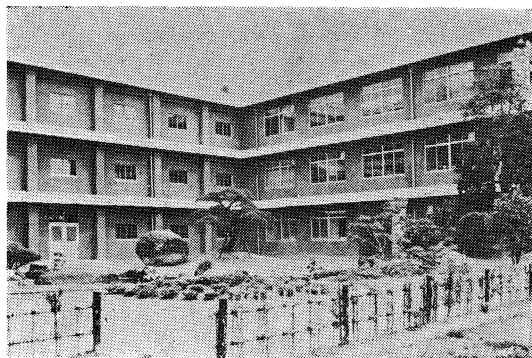
戦災で消失した富山薬学専門学校は岩瀬の富山高等学校に昭和二十二年三月まで間借りしており、二十二年四月に奥田に復旧した三棟の校舎に移った。この間、横田校長を先頭に、尽力した結果他の学校に先んじて、復興が進み、伝統ある母校も、かつてあった程度の校舎を建て、授業と研究が行なえる迄に復旧する事を急じた。しかも一方では、ながらく願いつづけてきた大学昇格への発展が望める場面にたちむかったわけである。

昭和二十二年七月頃から富山薬学専門学校、富山高等

学校、富山師範学校、富山青年師範学校、高岡工業専門学校の五人の校長からなる大学設置委員会を結成した。また各校から選ばれた教授一名と事務長をあわせて、大学設置委員会幹事会を、また各校から選ばれた二名の教授からなる人事内審委員会も発足した。これ等の委員の人達も伝統を異にする各校の利益代表者たる立場を超えることは容易でなく長い間の意見の調整が必要であつた。会合はしばしば開かれ、総合、連合、複合大学へと変わったが、昭和二十三年五月になって、ようやく四学部を有する複合大学としての富山大学という案に落着いた。大学全体の設置申請書を二十三年九月に本省に提出し、それに対し早くも昭和二十三年秋には大学資格審査委員会の一行を迎える事になった。書類審査と現場視察により大学として適性が決定されるのでまことに心中複雑なものがあつた。委員長は当時の一橋大学の上原教授であり、外数名の委員は国公私の大学教授をもつ



富山大学鳥瞰図



薬 学 部 中 庭

て編成され主に薬学担当は刈米博士であった。各高専を隈なく視察され最後の講評が高岡市延対寺旅館の大広間に於て行なわれた。他学部は教官人事、施設等についてかなり条件を附せられたが、薬学部に関しては、横田校長の努力が認められ、教官人事は難なくパスし、只内部設備について至急整備するよう注意をうけたに止まった。それに思いがけず上原委員長より戦災復興の實の挙れる事を賞讃され大いに面目を施した。

かくして昭和二十四年三月富山大学の設置が許可された。早速学生募集要項を作り、入学試験を実施することになり、富山大学各学部共通で行なう事になった。この際、文部省は富山大学は二期に実施すべきよう指示があった。そして富山大学設立の日付は昭和二十四年五月三十一日と決められた。しかし、実際上の開学とするには、事務的な機構と人事の決定があった。青年師範学校は師範学校と合併し、各校長は学部長に任命された。次に初代学長は第四高等学校長であった鳥山喜一氏に決まり、場所は、横田薬学部長等の英断により、母学本館二階全部が本部事務局となった。七月十五日に六百三十六名の最初の入学式が行なわれ、校長会、幹事会は解散の意味と今迄の労苦をねぎろう意味でささやかな祝宴を持ち、ここに富山大学は発足した。

四、記念の校庭と資料館

本館の前の植木、第一号館と第二号館の間につくられた和風の中庭

の樹木、石、垣のつげ等は、すべて奥田の庭から移したものである。またながく奥田の里にあった県立薬学専門学校の門柱、奥田の門内近くにあった大鷲岩も、この庭の中にあしらわれ、同窓生になつかしい昔を思い出させるものとなることであろう。

また近く、官立移管決定当時の市長で移管のために苦勞された元稲垣宗正市長の筆になる門碑のついた門柱も移されることになっている。さらに十月に完成を予定されている同窓会の記念館である資料館の記念室には薬専時代の校旗、共立富山薬学校以来の写真、図書、その他の資料を飾ることになっている。

第二節 薬学部の目標・組織・維持

一、教 育 目 標

昭和二十二年に制定された学校教育法は、その第五十二条において、新制大学の目的について規定している。それによれば「大学は學術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の學芸を教授研究し、知的、道德的及び应用能力を展開させることを目的とする。」としている。すなわち新制大学は、自ら専門の學芸について、研究開拓するとともに、學生に対しては、広く學術のすぐれた知識と方法を授け、かれらがやがて社會の営みと發展に参加すべき基礎を培う機關であるとした。これは大學令に規定していた明治以來の、旧制大學が目的としたところと、かなり異なつたものである。旧制大學は「學術ノ蘊奥ヲキハメ、兼ネテ人格ノ陶冶ニ資スル」といったのに対して、新制大學の目的は、はるかに具体的に学校教育法に示されている。具

体的ではあるがまた目的が拡大されていることも否定し難い。昭和二十三年一月文部省が刊行した「日本における高等教育の再編成」というパンフレットにも新制大学の特徴は次の点に要約されるとしている。すなわち一般教育の尊重、職業教育の重視、大学院に連なる学問研究の推進の三つである。

大学院の目的については、学校教育法第六十五条に「大学院は學術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめて、文化の進展に寄与することを目的とする」と規程し、研究を通じて社会に寄与し、貢献することを、たからかにうたっている。

二、学則と学部規定

初代学長、鳥山喜一氏の学長在任期間は、昭和二十四年七月より昭和二十八年十二月迄であった。学長就任当初の重要な仕事の一つは、学内の諸規定を含めて、大学の制度を整えることにあった。現在では六十余の学則、諸規定があり、内規は三十余あるが、重要な諸規定の多くは、当時に制定されたものであった。一例を学則にとってみると、昭和二十三年に文部省に提出した富山大学設立認可申請書には、学則の案も記載されてはあったが、鳥山学長はこの案に満足することができなかったと見えて、自から学則を起草して、大学の最高の審議機関である評議会に諮って検討し、相当の時日を要したが審議決定した。大学の評議会、協議会規定も昭和二十七年一月に制定された。開学当時の学生生活は一般に食糧難、住宅難、衣料難等の困難な事情のなかにあり、学生の厚生補導は極めて慎重を要する情況にあった。学生が守るべき守則を制定することは、学園の秩序を維持し、大学における研究の自由を確保するためにも、必要が痛感されたので、学生守則が、評議会や協

議会の規定にききだつて昭和二十四年十一月に制定された。附属図書館も新たな部局として発足し、いちはやく昭和二十四年八月に規定され現在に及んでいる。また薬学部規定は二十五年九月二十日に制定されている。以上のほか、学内における諸制度の整備について言及すべき事項は非常に多い。たとえば学長や学部長その他の部局長の選考に関する基準のこと、また名誉教授や教授・助教授等の選考基準、さらには各学部教授会の規定、その他事務組織規定、事務分掌規定、文書処理規定等々多くの規定を、大学運営の規範としている。それ等の諸規定による制度の整備についても、さまざまな沿革と経過があるわけであるが、しかしいまは、これらの諸制度が昭和二十四年の大学の発足から、昭和二十八年ごろまでの間に大体整備され終ったことを記すにとどめる。ただし時代の推移にともない、諸規定の部分的修正が行なわれていまに及んでいるということができる。

三、学 部 の 組 織

富山大学には薬学部・文理学部・経済学部・工学部・教育学部の五学部があり、薬学部には附属研究施設として和漢薬研究施設があり、教育学部には附属学校として中学校、小学校、幼稚園がある。別に夜間の経営短期大学がある。このうち経済学部は昭和二十八年、経営短大は三十四年に、他は開学と同時に発足している。

学部とは別個に事務系の事務局、学生部、附属図書館があり、薬学部の事務部は、これ等の所謂本部とは関連が深い。

大学発足以来十六年経過しているが、この間に薬学部勤務していた人および現在の常勤者を、教官の方は

講座別、事務部は係別、発令順にみると次のとおりである。

教官の移動

学 部 長 横田嘉右衛門(昭和四三、三、二日任命) 中沖太七郎(昭和四三、六、一日任命) 志甫伝逸(昭和四三、四、一日任命)

教 授

助教授・講師

助 手・技 官

薬化学講座

三橋 監物

山崎 高応

野村 哲夫

釣谷隆興一

吹沢 清治

薬品分析化学

志甫 伝逸

野村 敬一

永田 正典

塩谷 俊作

高島 正市

金岡 又雄

生薬学講座

(名譽教授)
中沖太七郎

志甫徳次郎

高林 昇

松瀬久仁子

田上昇一郎

吉崎 正雄

清水 岑夫

福田 昌子

三野 問治

森田 直賢

榎本 三郎

井上 正美

星野 重孝

薬品物理化学講座

横田嘉右衛門

大浦 彦吉

北辻栄太郎

飯田 武夫

吉井 英一

酒井 立夫

玉村 貞夫

谷口 貞子

宮原 竜郎

衛生化学講座

倉田 軍一

野島俊二郎

安立 準

薬剤学講座

桜井謙之介

安立 準

安立 準

安立 準

安立 準

和漢藥研究施設

薬剂製造学講座

山崎 高広

松本 弘一
上田 道広

井上 信

薬品生物化学

長谷 純一

永田 正典
松本 弘一

深井 三郎

佐々 久高

中井 昇

薬品作用学講座

北川 晴雄

岩城利一郎

岡田 竹史

木村 正康

小柴 洋子

和漢藥研究施設長

志甫 伝逸

木村 康一

教授

助教授

助手・技官

資源開発部門

木村 康一

吉崎 正雄

土岐 文子

野村美紀子

塚越 章司

生物試験部門

木村 正康(兼任)

金岡 又雄
長田永三朗

橋本竹二郎
室 郁子

深井 和美

栗山 政彦

臨床利用部門

大浦 彦吉

日合 奨

池田 浩子
中島 松一

浅木美基子

大田 洋子

塚田 欣司

事 務 部

事務長

梶川米次郎

若林 俊吉

田屋

世治

泉田

利享

係長

係

員

庶務係

桜井 雅楽

島 正

中島 菊枝

沖 タミ子

斉藤千代子

紺道 朋子

野島富美子

多村 節子

長崎 淳子

奥田 雅子

会計係

本田 文治

藤波佐九郎

高森恵美子

沢崎 成逸

金兵 和子

数見宇佐男

佐伯 光男

諏訪 利明

藤井小三郎

酒井 弘

民谷 順治

学 務 係 (看護婦・寮勤務をも含む)

林 調松

若杉竹次郎

川又忠次郎

河内 美代

麦谷 磯寿

野村 善一

矢後 みさ

松原 薫

川又 君子

宮腰 一男

高倉 弘一

佐藤 供枝

長沢 義男

大西 湊子

土肥 隆三

藤森 清一

警 務 員

日南田善郎

宮腰作次郎

池田勝次郎

矢田

幸造

奥田

与一

伊藤 信一

作業員室

青山	たき	日南田	鶴次郎	藤田	友次郎	永原	与朔	関野	竹次郎	坂口	タツノ	岩城	忠信
吉野	敏邦	山田	広	田中	秀二	田近	俊之	田屋	世一	沢田	義雄	真野	一雄
南	宗篤												

薬草園

内山	幸吉	伊藤	外吉	新村	敏郎	前川	徳太郎	藤田	梅次郎	高野	嘉一
----	----	----	----	----	----	----	-----	----	-----	----	----

元素分析

岩城	利一郎	石黒	寿子	本田	睦子	渡辺	倭文子	森腰	正弘
----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	----

薬学部専門図書室

分館長

係長

係

村上	清造	本田	善彦	天野	環子	山田	和子	大塚	秀雄	大畑	憲司
木村	正康			高杉	正範	牧野	公子	後藤	年生	梶原	和枝
森田	直賢			城石	孝昌	浜屋	節子				

四、校舎及び設備

奥田校舎

薬学部の前身である官立富山薬学専門学校は富山市奥田五番地に充実した研究施設と内部設備および広大な

敷地と薬草園を有していたが、昭和二十年八月一日深夜に戦災で全焼し、残ったのはレンガ造りの二階建て書庫一三二㎡と平屋建て薬品庫五十㎡に過ぎなかった。当時の横田嘉右衛門校長は、戦禍激しい中をただちに文部省に報告と対策伺いに出向いた。

しかし本省には文部次官他一名が登庁していたに過ぎず全く前途の見通しがたたなかった。富山薬業会の主要人と横田校長らは大阪、東京方面の薬業界に母校復興促進への支援を依頼して歩いた。昭和二十一年一月二十八日同窓生有志が復興促進期成会を結成、涙ぐましい努力がなされた。その結果、全国戦災校にさきがけて昭和二十一年度より次表の通り着々と復興が進行した。

このことは伝統ある歴史の力でもあり、大学昇格や大学院設置の基礎をなしてきたものと思われる。

建物新営の部

建物名称	敷地面積 (㎡)	金額 (円)	財源
昭和二十一年度			
衛生化学(中井記念館)	薬化学講座一、一三三	八三六、〇〇〇	寄付
圧力給水舎	二三	七、〇〇〇	〃
守衛所	二三	三四、〇〇〇	〃
雑屋	七九	六八、〇〇〇	〃
薬剤学講座	五七九	五六八、六二〇	国費

計			一、七六一	四、八九七、五〇〇	
昭和二十四年度					
藥品分析化学講座			四九二	一、六五五、〇〇〇	国費
図書閲覧室			二一八	一、一六九、〇〇〇	"
蒸留水製造場			二三	一四三、五〇〇	"
雑屋			一六	四七、五〇〇	"
計			八四九	三、〇一五、〇〇〇	
昭和二十五年度					
製薬学講座			四七三	一、八〇〇、〇〇〇	国費
生薬学講座			四九六	一、八一六、〇〇〇	"
計			九六九	三、六一六、〇〇〇	
昭和二十七年					
生物薬品化学講座			四六三	三、四三八、〇〇〇	
温室			一二六	一、〇四八、〇〇〇	
医薬資源研究室			二三八	二、三九七、三〇六	
計			八二七	六、八八三、三〇六	
昭和二十八年度					
薬草園管理室			九六	一一七、七〇〇	寄付

内部工事新営の部

昭和二十一年度

ガス、給排水

一五八、七三一

国費

昭和二十二年

電気、給排水

一二二、八三五

〃

昭和二十三年度

電気、給排水および寄宿舎施設費

四八四、四五一

国費および寄付

昭和二十四年度

電気、給排水

三四〇、〇〇〇

国費

昭和二十五・二六年度

一、八八九、七六四

〃

昭和二十七年

九〇〇、一九六

〃

昭和二十八年度

一、一一三、七二八

〃

その間、発足当時の建物のうち、薬化学、衛生化学、薬剤学講座の内部改装を行ない、昭和三十年に衛生化学講座の西側八十二 m^2 を放射性同位元素研究室として改装、薬剤学講座の一部に無菌製剤室、天秤室、有機微量元素分析室を設け、生物薬品化学講座の一室を赤外分光分析室として改装した、また温室の一部を動物舎に転用した。このようにして昭和二十二年以降、薬学部の建物延坪数二四六四坪に達し、戦前富山薬学専門学校の三〇五三坪に対して約八〇%の復興を達成した。

五 福 校 舎

富山大学発足当初からの念願であった五福地区学部集中計画が次第に再燃し、遂に昭和三十七年度および三十八年度の二カ年で五福地区に一部四階建、他は三階建、H型の鉄筋コンクリートの近代建築を総工費二〇〇、六六七、〇〇〇円で施工し昭和三十九年度にはアイソトープ研究室および温室が建てられた。

更に昭和四十年には薬系大学で初めての研究所である和漢薬研究施設が鉄筋四階建てで二号館の後部に建てられる予定でこれと並んで七十五周年記念事業による記念資料館八十八坪が建築予定である。

その概要は別図および次表の通りである。

一 号 館

二号館および共通棟

給排水ガス工事

電気工事

恒温恒湿内装など

一号館四階内装工事

一、一八九坪七二九九

一、〇四九坪五三五

九、七六四、七三〇坪

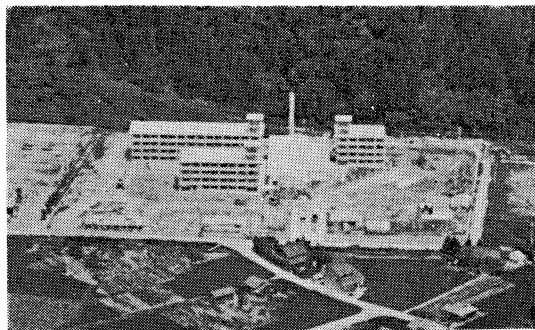
七一、一七九、四九二坪

九、四六五、六三七坪

七、六〇六、六九三坪

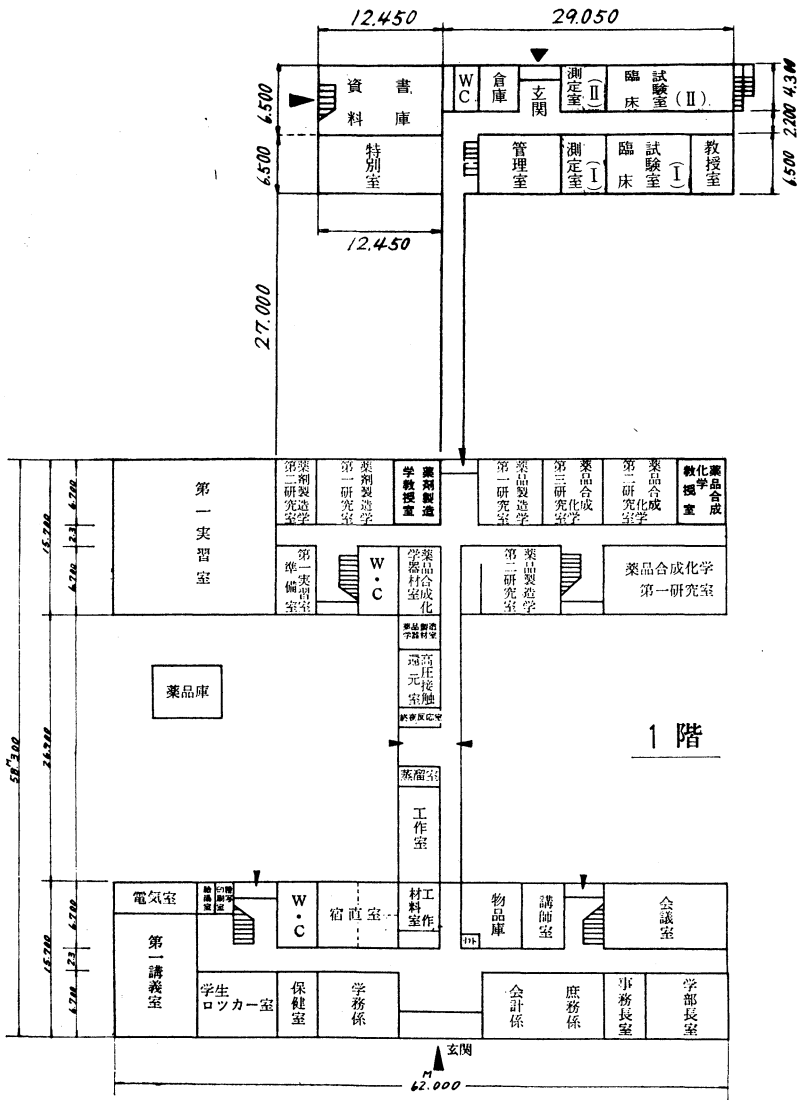
四、九一九、〇〇〇坪

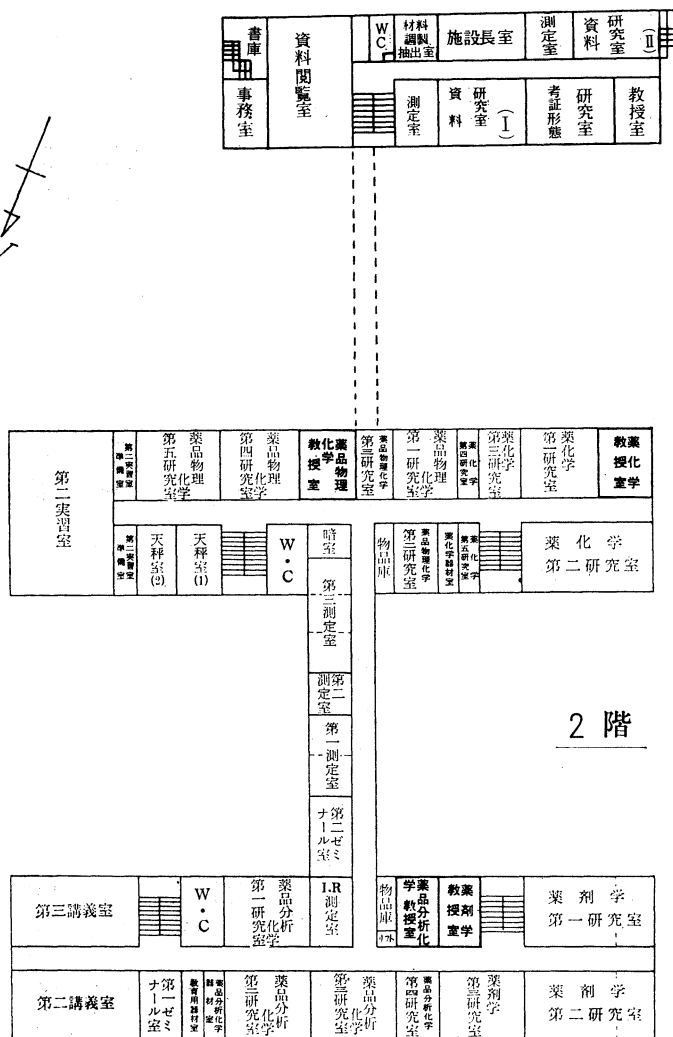
六、一五三、九六八坪



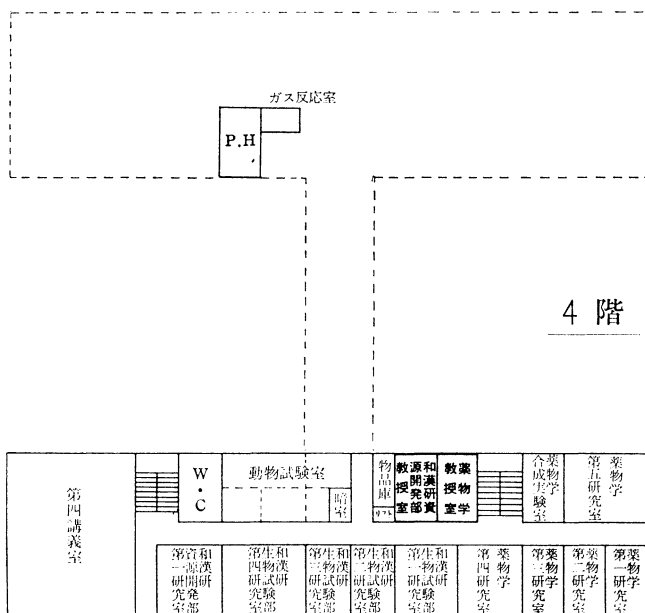
統 合 寮

同 給排水ガス工事	四三二、五〇八円
同 電気工事	一、五三八、八九三円
薬 品 庫	一、一三六、五四〇円
給排水工事	一二、八五五円
電気工事	七〇、四一四円
外 灯	六、五〇〇円
消 火 栓	二〇三、〇〇〇円
電気工事	一七六、四〇〇円
計	二〇〇、六六七、〇〇〇円
アイソトープ研究室（全学部共通）	六、九〇〇、〇〇〇円
給排水ガス工事	二、九三〇、〇〇〇円
電気工事	九七五、〇〇〇円
計	一〇、八〇五、〇〇〇円
同薬学教室実習室	七、〇〇〇、〇〇〇円
資 料 館	一〇、〇〇〇、〇〇〇円（寄付）
和漢薬研究施設	四八〇坪
	四〇坪
	九八坪
	未 定





W C	ゼミ ナール 室	器材室	脳波 室	測定 室	統計処理 研究室
	SPF 動物飼育室	SPF 実験室	生物試験 研究室	教授 室	



五、財政並びに援助

薬学部を経常費は別表の通りであるが、戦後の復興と経済的に困難な時代であったために、大学昇格以来十数年は学部にとって運営はなかなか苦しい年月であった。

そのために富山大学設置期成同盟会及大学後援会の設立は、学部の経理に多大の援助をなしてきた。

また、県または地方の薬業会社から、奨学研究費、教育研究の助成の名で多額の研究費が援助され、さらに図書館後援会からの多数の図書雑誌が寄付され、今日のごとき、全国稀に見る充実振りを發揮してきた。

富山大学設置期成同盟会は県知事を会長とし昭和二十三年発足以来、今日なお継続せられ、薬学部では奥田校舎の薬草園の中にあつた医薬資源研究室即ち薬物教室を始め、経済学部、図書本館、本部建物、体育館新築工事、各種備品および図書費を毎年供与され、この援助費は大学発足以来二億二千万円の巨額に達していることは日本の国立大学のなかで極めて珍しい事実であり、大学の歴史の中に特記さるべきであらう。

さらに富山大学後援会は昭和二十五年八月に発足して今日におよんでいる。本会の目的は、富山大学の運営に対する助成・教授の研究奨励ならびに補助・学外講師の招聘費補助・学生の奨学・公開講座の開設などであつて、会員は在学生の父兄を含む一般有志のほか法人や団体などであつて、県知事を会長としている。

富山大学設置期成同盟会が、大学発展の援助者であるとすれば、大学後援会は大学運営の援助者たる役割を果しつつ今日に至つたといふことができる。

昭和24年度以降の薬学部予算表

区 分		24	30	35	36	37	38	39	40
経 常 予 算	職員基本給	4,369,200	17,086,416	22,942,081	28,144,154	30,488,639	38,590,790	43,552,971	
	職員諸手当		493,200						
	超過勤務手当	271,313	133,300	254,211	302,544	391,466	477,609	543,302	438,054
	非常勤職員手当	41,150			220,715	227,700			
	諸謝金	10,400	7,200	16,754	32,631	22,009	21,243	20,522	21,760
	職員旅費	187,810	8,200	7,700	17,367	25,330	25,330		
	教育研究旅費		88,600	195,300	252,275	277,976	306,096	426,334	502,354
	講師等旅費			33,324	32,516	39,954		56,792	
	校所修繕	1,174,100	2,339,120	6,094,038	6,851,616	7,756,370	9,546,524	14,930,495	18,392,547
	計	6,053,973	20,156,036	29,543,408	35,853,818	39,229,444	48,967,592	59,530,416	(19,354,715)
特 別 予 算	特殊装置設備費			2,000,000	2,900,000	2,000,000	3,200,000	3,100,000	4,500,000
	新制大学設備充実費及 戦災設備復旧費	1,300,000	1,704,000	804,500	804,500				
	設備更新費				1,590,000	2,639,000	3,167,000	3,167,000	3,167,000
	大学院設備費						1,670,000	1,670,000	1,660,000
	新営に伴う設備費 (薬学部校舎)					4,771,000	9,439,000	4,000,000	
計		1,300,000	1,704,000	2,804,500	5,294,500	9,410,000	17,476,000	11,937,000	9,337,000

備 考 本表経常予算は年度当初予算とした。
但し職員基本給は昭和24年は当初予算を計上しその他は支給額を示す。

薬学部 教官当積算校費 学生当積算校費 比較表

区 分	教官当積算校費（教官研究費）			学生当積算校費	
	教 授	助 教 授	助 手	学 部 学 生	大学院学生
昭和	円	円	円	円	円
24年	134,000	81,000	29,000	4,000	—
25	200,000	120,000	33,000	4,000	—
26	200,000	120,000	33,000	4,000	—
27	200,000	120,000	33,000	4,800	—
28	208,000	125,000	34,000	4,800	—
29	202,800	121,895	33,150	4,565	—
30	192,660	115,782	31,493	4,342	—
31	192,660	115,782	31,493	5,400	—
32	212,000	128,000	35,000	6,480	—
33	226,204	136,576	37,345	8,800	—
34	274,040	165,700	45,400	9,395	—
35	329,280	198,840	54,480	9,395	—
36	388,700	234,700	64,300	9,400	—
37	447,000	269,900	73,900	11,300	—
38	741,000	430,000	117,900	13,600	29,300
39	779,100	469,400	128,500	16,300	35,000
40	857,000	516,000	141,000	17,900	38,700

備 考

1. 本表は本省積算額を示した。この5%を本省において留置し、残りを大学に配当する。残りの約18%を大学の共通経費等として差引き学部
に配当される。
2. 教官当積算校費は昭和38年度分より修士講座制の額としてある。

第三節 学生、学生補導並びに厚生施設附課外活動

一、学生部と学部学生係、補導協議会

大学の教務関係の事務と、学生の厚生補導に関する事務を総括的に行なうため、学生部が昭和二十四年大学の発足と共に新たな部局として誕生し、大学本部事務局と共に奥田の薬学部二階に事務室をおいた。学生部に学生課と厚生課があり、学生課には学生係に教務係、学生会館係、厚生課に厚生係と保健係とがある。また学生の生活にとつての悩みごとの種々のことに対する学生相談所も設けられている。学生部長は、大学の教授である人が併任されることになっている。薬学部内には学務係があり授業、試験、単位認定、集会、経済相談、各種証明書および旅客運賃割引証発行等のことを扱っている。学務担当の教官は一名で野島俊二郎講師、北川教授、山崎教授が当って来た。

また補導協議会があり、メンバーは学生部長、各学部から補導委員が二名宛と学生課長、厚生課長によって構成されている。奨学金に関する事項や、健康や保健に関する事項、学生守則や寮生補導などの審議にあたっている。

二、入学志願者と入学生

昭和二十四年大学第一回の入学試験を各学部は富山大学として同一問題で行なった。学力検査は国語、社会（一般社会・国史・東洋史・西洋史・人文地理・時事問題）、数学（解析Ⅰ・解析Ⅱ・幾何）、理科（物理・化学・生物）、外国語（英語・ドイツ語）の五教科について行なった。そして各教科は一科目ずつ選んで受験させることとし、六月十五日より実施した。

第一日と第二日は学科、第三日は身体検査である。薬学部として八十名募集したところ一〇二名の志願者があり七七名入学許可された。昭和二十五年は四月一日から入学試験を行ない、旧制の薬学専門学校卒業者のために第二学年に編入試験をも実施した。二十六年以降は三月に実施し志題者も飛躍的に増加した。二十八年は理科系は理科二科目となり、計六科目について試験し、二十九年から三十一年まで社会が無くなり、四科目となったため、薬学部の志願者は一六倍の高率になった。三十二年から五教科一科目、計五科目の最初の方法にかえり、三十九年から理科は化学を含めた二科目、計六科目となった。二十四年以降の志願者の倍率等は次に示すとおりである。男女別の入学者数は略々志願者数に比例している。

薬学部年次別入学志願者数

年度	志願者数	同倍率	富山県内				県外	
			男子	女子	男子	女子	男子	女子
昭二十四年	一〇二	一・二八	—	—	—	—	—	—
二五年	二四一	三・〇	九九	九	一二六	一〇	—	—
二六年	四八〇	六・〇	二六七	五九	一二七	三七	—	—
二七年	六一六	七・七	一三三	五〇	三四六	八七	—	—

二八年	二六二	三・二	七二	三一	一二四	三五
二九年	五八〇	七・三	七九	四四	三三〇	一二七
三〇年	一〇三九	一三・〇	九六	六九	六一〇	二六一
三一年	一二八六	一六・〇	一〇四	四六	八〇九	三二七
三二年	八六一	一〇・七	七九	三三	五〇九	二四〇
三三年	八八四	一一・〇	四五	四八	五〇六	二八七
三四年	六八〇	八・五	三六	二七	三四七	二七〇
三五年	六一七	七・七	二六	二九	三〇八	二五四
三六年	六七六	八・四	二二	二七	三三二	二九五
三七年	六六四	八・三	二五	二五	二八八	三二六
三八年	六三三	七・九	二四	三一	三〇一	二七七
三九年	四七九	六・〇	一四	二四	一九八	二四三
四〇年	五九九	七・五	一七	二七	二六二	二九三

三、学生の健康管理と奨学援護

薬学部では昭和二十一年以来保健室を設け、非常勤の校医日赤病院長米村長敏および常勤の看護婦を配置し職員学生の健康相談に応じたり、運動や実習中のけがまたは病気等の応急処置をする他、毎年春に学校保健法に基づき検査項目の定期の健康診断並びに臨時に寮生や運動部選手、要注意学生の健康診断、予防接種等を実

施してきた。病氣療養を理由にする休学者数は二・五％でありこのうち、半分は肺結核などの呼吸疾患であり神経衰弱または精神分裂症等の精神神経疾患が約四分の一を占める。

また医療費の負担を軽減することを目的に三十四年四月から富山大学学生健康保険組合を結成し、組合費は年額五百円とし入学時に四カ年分を納入し歯科および初診料、入院の際の食費などを除く総医療費の半額を給付する。ただし一年間の給付額は一万五千円までとした。

赤字になってきたので三十九年度入学生から年額七百万円、給付制限額は二百万円に引あげられた。

奨学金の制度には日本育英会のものでその他のものがある。昭和十八年十月創設された日本育英会の奨学生には薬学部学生が多数採用され貸与を受けてきている。二十四年度入学生は二十八名採用され、以後毎年採用があり、二十八年から三十七年迄の十年間における採用延人員は一千三百六十三名で、在籍薬学部学生の四割余の学生が三千七百三十二万円の奨学金の貸与をうけ、貸与金は戦後における学生生活の一支柱となっている。

学生の間から奨学志望者を募集し、補導協議会で育英会の推せん基準に基づき選考してきた。英才教育と教育の機会均等との二つの思想のいずれに重点をおくか、すなわち学業成績優秀か、困窮度かが論議せられ、この二点の調和をはかりつつ選考が進められ、適格者を推せんしてきた。

奨学金は育英会創立当初、必要にして十分な生活費および学費の全額を貸与する立前であったが、戦後の急激なインフレの進行に伴ない学生生活費は急に上昇したので数回におよぶ引上げが行なわれた。即ち二十四・二十五年頃は月額千八百円と二百百円であったものが二十八年度には一律二千円の他一部三千円の特別増額と変り、三十六年度から四千五百円と七千五百円となり、三十八年度入学生から貸与月額は自宅通学生と自宅

外通学生とに区別され五千円と八千円に増額された。

大学院学生は三十八年度入学生は五名、三十九、四十年度入学生共夫々八名が採用され一万円の貸与を受けている。日本育英会の他に戦前から育英奨学事業を行ってきた団体があったが、戦後は急激に増え富山県奨学金あるいは富山県母子福祉資金の貸与を受ける学生等があり、本学では二十七年度以降現在まで二十四団体二百十五名に達し、月額は三千円が多く一部五千円である。

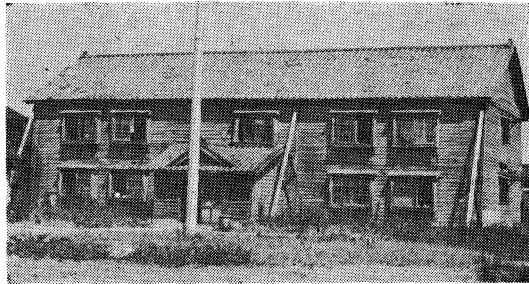
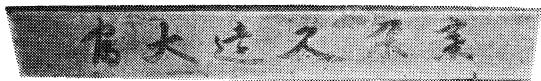
四、学生の厚生とその施設

終戦後の混乱とインフレの進行は、学生・生徒の生活を窮乏におとし入れ、生活必需物資の入手を非常に困難ならしめた。教職員と生徒が学校内に消費組合を結成して、学用品や食糧品、白衣、日用雑貨の共同購入を行なって安く分配することをはかった。富山薬学専門学校では、二十年十一月に教職員生徒をもって消費組合を結成した。出資金は職員が一口、百五十円、生徒は一口、百円で学務係の部屋で生活必需物資や学用品の供給を行なった。大学が発足して薬学部になってからは二十六年三月に職員のみ薬学部消費組合に切りかえて事業を続けていたが三十二年に解散した。

昭和三十七年四月文理学部が五福に移転するに際し、生活協同組合の設立をみ、三十九年三月薬学部も五福に移転したが、いわゆる生協は食堂、日用雑貨、書籍等の販売をしており、生協はいま創立四年目を迎え、七〇坪の食堂は昼食時には混雑を伴う位になり、売上げも上申し学生と教職員の福利厚生施設の中心的存在になった観がある。

つぎに学生の寄宿寮の歴史をたどりたい。母校も戦災で全校舎を消失し、蓮町の富山高校に間借りして授業を始めたが、生徒の下宿先を確保するため、二十年十月西の宮の日本海ドック株式会社の寮を借りて、ここに四十数名を收容し始めて遠久染寮の看板を掲げた。会社の都合で同社の草島の寮に移ったが、二十三年十一月に至り、東岩瀬古志町の保土谷化学株式会社の寮二三五坪を購入してここに移り、毎年六十名近くの学生生徒を收容してきた。薬学部にうけつがれ現在に至っているが、寮については想い出の深い卒業生も多いことと思う。

四十年七月に富山市寺町に寮が建築された。五福の校舎から二キロメートルの呉羽丘陵のテレビ塔の下の方にある旧軍の実弾射撃場跡に、学部別でない男子、女子三百十六を收容し得る鉄筋四階建の統合寮が完成し、学生部長・寮輔導委員、学生とにより寮の規則も定まり、九月より二人一室で入寮することになった。工事が完了すれば薬草園と隣接した五千坪の土地に、一千三百十一坪が建てられ、六百六十名を收容することが可能になる。



遠久染寮

五、就職斡旋と学生アルバイト

薬学部を卒業する学生の就職は、学部長、特別研究にある四年生の所属する教授と職業補導担当者である桜井謙之介教授および事務長よりなる職業補導委員会で、学生の種々の点を考慮して推せん配分されてきた。昭和二十八年後期は朝鮮事変休戦に伴い、民間企業の求人数が減少し学生就職対策富山県本部が設置され、求人開拓に努めていたが、その後薬業界は次第に活況を呈してきて、販売高は常に前期を上廻る傾向が続き、四十年に至るまで求人数が就職希望者より多い。

学生にとって一番大事なことは勉強であるから、どんな仕事であれ、アルバイトをするということは決して好ましいことではない。しかし家庭の経済事情で止むを得ずアルバイトしなければ学業の継続が難しい学生に對しては世話をしている。学生アルバイトの実情は三十三年に実施した調査の結果によれば、「アルバイトをしなければ学業が続けられない」という者は二一%、「アルバイトがあればするが、しなくても差支えない」という者は四二%、「アルバイトをしなくてもよい」という者は三七%で約二割の学生はアルバイトをしないと学資に困ると回答している。しかし六割位の学生が何等かのアルバイトをしているわけで、学生の生活上アルバイトが如何に重要な役割を果しているかがうかがわれる。アルバイト従事者の約半数が家庭教師であつて三十九年では一カ月（週二回）三千円〜四千円となっている。

卒業生就職状況

——昭和三十九年同窓会名簿による——

(現、昭三十八年十一月調査)

現	二一	一五	一二	二	二	三	一五	六	七六	二九
三六卒	一六	二三	一一	三	二	一	一〇	二	七四	三三
現	一四	二二	一三	四	二	一	一〇	二	七四	三三
三七卒	二五	一八	七	二	五	二	二	三	七九	四一
現	二五	一七	七	二	五	二	二	四	七九	四一
藥局	七八三	病院藥局	三一	官公庁	一二三	保健所	四三			
大學職員	六八	中・高職員	八〇	医師	二九	大學院	三〇			
實業	八六	製藥会社及医薬品販売会社	八四一	学位所有者	五〇	地方役員	五〇			
会社	三三四	外国人	二四	その他	二一					

六、学生の課外活動

学生の課外活動は、体育と文化関係の学生団体を中心として展開されている。大学全体のものとしては、富山大学・金沢大学・福井大学による北陸三大学学生総合体育大会が大学発足当初より行なわれ、会場は各大学持廻りとし四十年七月で十七回を数えるに至った。文化面では、北陸三県大学学生交歓芸術祭が二十七年より

行なわれ、参加大学は国立三大学の他、金沢美術工芸大学・金沢女子短期大学・北陸学院短期大学が加わっている。大学祭は大学発足六年後の三十年、開学記念日である五月三十一日を中心とした約一週間、学生の自発的意志のもとに各学部代表者によって運営委員会を構成し開催された。爾後回を重ねること十一回におよんでいる。

薬学部のものとしては毎年七月に開催されている関西薬学生連盟総合大会は年毎に盛大になり四十年は七月十五日より五日間にわたり富山で開催され、十三校が参加し約二五〇〇名が集まり、体育部門十五種、文化部門十三種が行なわれ総合で岐阜薬科大学が優勝した。五日間におよんだのは今回が始めてで発足以来十九回を数えている。金沢大学薬学部との交歓会は早くから行なわれ、春と秋の二回で日曜日に春は金沢で秋は富山で開催され、四十年の春は午前中は六会場で討論会、午後は体育部門で七種目について行ない総合で富山が勝っている。二月には四年生を送る予餞会が毎年あり、多彩な演劇が主体で四十年は三年生が一位であった。他に薬学部運動会、寮祭、新入生歓迎会等が恒例的に催され、三十八年十一月十日より奥田を離れる最後の意味の奥田祭が開催され学校を一般公開した。

第四節 講座学科目の変遷

一、学 科 目

専門学校時代より新制大学へ転換してからの学科目には大きな変遷がみられた。即ち専門学校時代の教育の



五福学舎の実習室

目的は生活に即した職業的な訓練を重視し、この目的に沿って教育がなされてきた。例えば大学に転換する際の専門学校時代の学科目については有機化学、無機化学、薬品分析化学、理論化学、生薬学、薬用植物学、製薬化学、厚生化学、裁判化学、調剤学、植物化学、微生物学、薬効学、化学機械、薬局方、薬学概論、薬事法令、電気化学、公民、外国語、数学、物理、体育等の二十三科目をもって薬学教育を行なってきた。

一般教育…新制大学になると教育目的も変わり、大学は学術の中心として広く知識を授けるとともに、深く専門の学術を教授研究し、知的道徳的および応用的能力を展開させることを目的とすることになった。いかえれば新制大学は第一に円満な人格を養い、国家社会の健全な形成者をつくりあげる目的をもって一般教養の獲得を重視するようになった。薬学生といえど、人文科学、社会科学および自然科学の広い基本的な科目を学ぶことは、専門的なせまい分野の研究と同じように重視された、それは自由でとらわれぬ視野をもちゆたかな人生観に立ち、正しい判断力をそなえた人間形成の上に必要欠くべからざることである。従ってこの目的にそって一般教養科目は次のように制定された。

一般教育科目、外国語および保健体育科目

科 目	系	列	単 位 数	備 考
一般教育科目	人 文 科 学 系 列	哲学、倫理学、心理学、史学、文学、芸術	十二以上	三科目以上
	社 会 科 学 系 列	法学、経済学、社会学、人文地理	十二以上	三科目以上
	自 然 科 学 系 列	(必修科目) 数学、物理学、化学、生物学	十九以上	数学四単位以上 物理学、化学および生物学五単位以上
	外 国 語 科 目	英語、ドイツ語 (必修科目)	十六以上	各八単位以上
保健体育科目	講 義、実 技		四以上	各二単位以上

専門教育・新制大学は職業的な訓練ということが、学術研究と同じように重視されねばならないとして、そのために必要な学力をそなえるように配慮された。このような見地から本学部では新制大学発足と同時に学科目を一応基礎と専門に区別し専門学科については、将来の発展にそなえて未公認の講座を設けて、夫々の講座で専門科目の教科を担当することになった。

基礎科目では物理化学、基礎医学、薬用植物学、醸酵学の五学科目を未公認の講座は薬化学、薬品分析化学、生薬学、製薬学、厚生化学、調剤学、生物薬品化学の七講座にして昭和二十五年四月一日に発足した。その後昭和二十五年十月には厚生化学講座を衛生化学に、調剤学を薬剤学の一部改正し昭和二十六年十一月一日に新たに薬物学講座が新設され、その後変動はなかったが、昭和三十六年二月十七日には製薬学講座の内容が膨大

となつたため、製薬第一と第二の二講座にわけられ次第に薬学部の内容も充実してきた。

しかし、近時著しく発展してきた医薬品に対し、薬学部は薬剤師養成ばかりでなく製薬技術者の専門的養成が必要となり、ことに富山県は全国屈指の薬業県であることから、製薬学科の設置は地方産業の進展に寄与すること極めて大であると考え、本学部は昭和二十四年頃より文部省に対し、学科の新設を要求してきたが、認可されず今日に至っている。しかし時代の状況に鑑み、未公認であるが昭和三十七年四月一日より、薬学コース、製薬コースの二コース制で進んでいる。

昭和三十七年十一月三十日に学則改正により薬剤製造学講座を新設、更に昭和三十八年十一月十二日に生物薬品化学を薬品生物化学講座に変更し十講座になった。昭和三十八年四月一日には大学院修士課程の設立と同時に従来の未公認の講座は完全に講座の体制をとることになった。また同じく四月一日に和漢薬研究施設が設立され資源開発部門の設立を見、昭和三十九年四月一日に生物試験部門、昭和四十年に臨床利用部門が設立され現在では十講座三部門を有する。

二、コース別科目

近年、化学工業製造工業の発達はめざましく、薬学出身者もこの方面に広く雄飛することは当然のことである。

しかし従来の薬学部薬学科のみの教育では不充分であるので、この点について本学部は昭和二十四年以来今日迄文部省に対し強く要求しているが、未だ認可に至っていない。しかし他薬系大学の状況からみても、化学

製造系新学科を設置するのは急務であるので、目下決定まで薬学コースと製薬コースの二コース別をとり行なっている。

必修科目			薬学コース			製造コース		
薬品物理学	物理化学		3			6		
	II	I		3		1.5	1.5	3
生薬学	生薬学実習		6.5					
	生薬学	生薬学	1.5	2.5	1.5			
薬品分析化学	薬品分析学実習		7.5			7.5		
	物理分析化学	分析化学	2.5	2	3	2.5	2	3
薬化学	薬化学実習		8			8		
	有機化学	無機化学	2	5	1	2	5	1
担当教官			榎本三郎			吉崎正雄		
			森田直賢			高林昇		
			志甫伝逸			田上昇一郎		
			三橋監物			野村敬一		

薬品生物化学			薬剂製造学			薬剂学			衛生化学			薬品合成化学				
薬品生物化学実習	薬品生物化学		薬剂製造学実習	薬剂製造学		薬剂学実習	薬剂学		衛生化学実習	裁判化学	公衆衛生	衛生化学	薬品合成化学実習	薬品合成化学		
	Ⅱ	Ⅰ		Ⅱ	Ⅰ		Ⅱ	Ⅰ						Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ
小橋泰一	長谷純一		山崎高応			上田道広	桜井謙之介		※川崎近太郎		倉田軍一		※水上喜太郎	飯田武夫	吉井英一	
6.5						5.5			7							
1.5	1	4				1.5	1	3	1.5	1	2	2.5				
4			6									7.5				
		4	1.5	3	1.5							1.5	2	3	1	

関連科目							特 別	薬品製造工学	生物薬品製造学	薬品作用学							
薬品試験法	薬局方概論	応用物理学	応用数学	病理学	放射化学放射線保健学	病原微生物学	解剖生理学	研究	薬品製造工学実習	薬品製造工学	生物薬品製造学	微生物薬品製造学	生物薬品製造学	薬品作用学実習	薬品作用学		
															Ⅱ	Ⅰ	
〃	松本弘一	※永原茂	※坂井昌一	※藤田秀一	榎本三郎	※久保田憲太郎	※米村長敏			※酒井信之	※根来秀夫、※前田謙二 大浦彦吉、森田直賢			木村正康			
1	1			2	2 (0.5)	2.5 (0.5)	1.5	6						6.5			
														1.5	2	3	
	1	3	2		2 (0.5)	1		6		3	5		3				
									1	2	1	2	2			3	

※印は外来講師

選 択 科 目	担 当 教 官	薬学コース	製薬コース
機 器 化 学	高 林 ・ 金 岡	1	1
推 計 学	木 村 正 康	1.5	1.5
有 機 化 学 概 論	三 橋 監 物	1	1
工 場 衛 生	※直井正勝	0.5	0.5
品 質 管 理	山 崎 高 応	1	1
薬 学 文 献 学	※村上清造	1	1
薬 学 史	※中 沖 太 七 郎	1	1
特 許 法	※山 田 正 実	0.5	0.5
化 学 療 法 剤	※前 田 謙 二	0.5	0.5
細 胞 化 学		1	
病 態 生 化 学	※山 村 雄 一	1	1
抗 生 物 質 学		1	
薬 品 合 成 化 学 II	水 上 ・ 飯 田	3	
食 品 衛 生	※小 林 寛	0.5	

薬 事 衛 生 法 規

※福 王

隆

1

※印は外来講師

薬事衛生法規	化学工業経済	電気機器	薬品作用学Ⅱ	薬品試験法	薬剤学実習	薬剤学Ⅰ	衛生化学概論	生薬化学	生薬学概論	薬業経済	薬剤製造学	応用物理学	応用数学	臨床医学総論	薬局管理論
※福王隆	※植村元覚	※高森三郎	木村正康	松本弘一		桜井謙之介	酒井立夫	〃	森田直賢	※日南田義治	山崎高応	※永原茂	※坂井昌市	※大山馨	※堀岡正義
										1	1.5	2	2	1	1
○ 1	○ 1	○ 1	○ 2	○ 1	○ 1	○ 3	○ 3	○ 2.5	○ 1						

備考 1 薬学コースの単位の履修方法

。印の必修選択単位5.5単位以上を含めて16.5単位以上を履習取得しなければならない。

2 製薬コースの選択単位の履修方法

イ、薬剤師の免許を必要とする者は国家試験を受験するためには。印の必修選択単位12.5単位を含めて19.0単位以上を履習しなければならない。

ロ、薬剤師の免許を必要としない者は19.0単位以上を履習取得しなければならない。

三、専攻科

薬学専攻科は薬学に関する精深なる専門技術者を養成することを目的とし、また将来大学院の準備段階として昭和二十七年から申請してきたが昭和三十年七月一日に文部次官通牒によって設置をみた。

初年度の昭和三十年度（第一回）男子一名、三十一年度（第二回）男子三名、女子一名、三十二年度（第三回）女子二名、三十三年度（第四回）男子一名、三十四年度（第五回）男子一名、三十五年度（第六回）男子一名、三十六年度（第七回）なし、三十七年度（第八回）男子三名で計十四名の専攻科生を生んだが昭和三十八年四月大学院薬学研究科の設立によって専攻科はなくなった。

四、大学院

大学院の設立については、学部発足以来多年の懸案であった。大学になっても、その教育目的は旧制大学お

よび専門学校の中間位にあり、専門学校時代の職業人を対象とした教育と、旧制大学の学術の研究を目的とした教育の混合で、学術研究は僅か半年間の特別研究に過ぎなかった。従って本学部が大きく発展するには、どうしても大学院の設置が必要であつた。

昭和三十七年横田薬学部長が薬系出身者で全国初の総合大学長に就任され、その後任に志甫教授が選出されて以来、横田、志甫両部長の並々な努力と、職員学生一体となつての運動が功を奏し、昭和三十八年四月一日薬系国立新制大学のトップを飾つて大学院（修士課程）が設立され、更に旧新薬系大学に初めての研究所である和漢薬研究施設が設立したことは、母校の歴史にとって特筆すべきことである。大学院修士課程は各講座定員約二名で、十講座で約二十名である。初年度の昭和三十八年度は十四名、三十九年度は十五名、四十年度は二十一名と更に増加の傾向にある。

大学院修十課程授業科目および単位数

薬化学特論	二	薬品分析化学特論	二	生薬学特論	二	衛生化学特論	二
薬剤学特論	二	生物薬品化学特論	二	薬物学特論	二	薬品物理化学特論	二
薬品合成化学特論	二	薬品製造学特論	二	薬学特別実験	一八	薬学演習	四
備考	。印は必修						

講義は、教官の指導により、四科目以上にわたり八単位以上、実験および演習は薬学特別実験十八単位以上および演習四単位以上を履修し、あわせて三十単位以上を修得しなければならない。

第五節 研 究

一、教官の論文

薬化学講座

教授 薬学博士 三橋監物

- (1) フェナントリジン誘導体の研究 (雑誌: 72, 344 (1952); 他6篇)

フェナントリジン核の新合成法とその化学に関する研究

- (2) シアザベンゾビサイクロ〔三・三・一〕ノナン系化合物の研究 (雑誌: 84, 1032 (1964); 他4篇)

非麻薬性鎮痛剤に関する一連の研究の一部であって、薬理試験の併用によって麻薬性の本体をも究明している。

共同研究者 塩谷俊作

- (3) α 、 β 環状不飽和ケトンとアジド類との反応に関する研究 (Pharm.Chem.Bull: 13, 951 (1965))

表題化合物の反応から生ずる転位を含む種々の反応の機構の究明およびその応用に関する研究

共同研究者 野村敬一

助教授 薬学博士 野村敬一

トリロビンおよびイソトリロビンの構造研究 (雑誌: 78, 1190 (1958); 他6篇)

構造解明の基礎研究を行ない、その結果を応用し、題記の植物塩基の立体構造をも決定

助手 塩谷俊作

シアザベンゾビサイクロ〔三・三・一〕ノナン系化合物の研究

三橋教授の項参照

薬品分析化学講座

教授 理学博士 志甫伝逸

(1) 窒素異項環化合物の合成化学的研究 (J. Am. Chem. Soc.: 82, 4044 (1960); 他10篇)

ピリミジン、ピリダチン、キノキサリン類の合成と化学反応性について研究

(2) 医薬品類の分析研究 (雑誌: 83, 8082 (1963))

解熱鎮痛剤の混合製剤や動物性と漢薬の成分の分別定量につき研究

(3) 異項環化合物の反応速度論的研究 (雑誌: 84, 1085 (1964))

分析的方法を用いて化学反応速度をはかり活性化エネルギーとエントロピーとの相互関係について

考察

助教授 薬学博士 高林 昇

(1) ピリダチン誘導体の合成研究 (その他) (Chem. Pharm. Bull.: 10, 107 (1962); 他16篇)

(2) 混合医薬品の定量研究 (雑誌: 雑誌掲載中)

助教授 薬学博士 田上昇一郎

(1) ピラチン関連化合物の合成研究 (J. Am. Chem. Soc.: 82, 4044 (1960); 他5篇)

(2) 異項環化合物の反応速度論的研究 (総説: 84, 1085 (1964))

助手 正橋昭子

高林助教授と共同研究

生薬学講座

教授 薬学博士 森田直賢

薬用資源の研究 (総説: 第1巻～第24巻; 他4巻)

広く天然物の植物成分を研究対象におき、特にγ-ピロン環を有するフラボン、ケラボノールおよびクマリン系の化合物に重点をおき、その他スチルベン系も行ない、それらの物質から植物の異同、位置の状況を確かめ、構造を解明し、薬理効果を見究めることを目的とする。

助手 清水岑夫

森田教授と共同研究

助手 福田昌子

森田教授と共同研究

薬品物理化学講座

教授 理学博士 榎本三郎

(1) アンモニア合成反応機構 (Proc. Japan Acad. Tokyo: 28, 493 (1952); 他2巻)

反応速度論による律速素反応の化学量数を実験で求め、反応機構を解析

(2) 重水濃縮用触媒について (媒触: 2, 126 (1961); 他2巻)

重水を気相および液相で交換反応によって濃縮、この時に使用する触媒としてニッケル・クロミアを見出し、活性と構造の関係を研究

(3) 制酸剤の研究 (日本化学会発表)

硅酸マグネシウムの物性および構造と制酸持続性との関連性を追求

(4) フェノールのメタアルキレーション

従来の触媒では完全にオルト・パラ位にアルキル化されるが、新触媒の発見により40〜60パーセントの収率でメタ位にアルキル化する。

助手 井上正美

(1) プロピレンのクロム酸酸化反応機構 (日本化学会発表4篇)

(2) 二元系共沈触媒の構造と活性 (日本化学会発表)

助手 星野重孝

(1) 析出銅を触媒とする選択水添反応 (日本化学会発表)

薬品合成化学講座

教授 薬学博士 飯田武夫

頁岩油成分に関する研究

(1) 撫順産頁岩油成分の研究 (Pharm.Bull.: 1, 211 (1953); 他2篇)

(2) 米国産頁岩油成分の研究 (薬誌: 82, 150 (1962); 他1篇)

頁岩油は世界各国に、石油に匹敵するほどの埋蔵量をもっているが、それを乾溜して得られる頁岩

油が経済的に活用されないの、まだ未利用資源として放置してある。頁岩油を人類福祉のために役立てるために、頁岩油成分の研究は第一に行なうべき利用研究の基礎である。いまだ上記論文に示したように数種の化合物しか究明されないが、今後さらに成分の研究をつづけ頁岩油工業の経済的発展に努力したい。

助教授 薬学博士 吉井英一

サントニン酸の構造研究 (Tetrahedron Letters: 1962, 311; 他5篇)

サントニンの光化学反応成績体であるサントニン酸の構造説明および生成機構の研究

助手 北辻栄太郎

教授と共同研究

衛生化学講座

教授 倉田軍一

キチンに関する研究 (蜜柑化学: 11, 46 (1965); 他16篇, 特許1件)

(1) 甲殻類皮殻から純粋キチンの分離生成法の改良

(2) 単量体組成と水解物成績体との同時定量法

(3) キチン構造の証明

(4) カタツムリ消化酵素剤のキチン誘導体数種に対する作用

(5) 数種の糸状菌セルラーゼ製剤がキチナーゼ作用を併有すること

助教授 薬学博士 酒井立夫

オキシテトラサイクリンおよび関連化合物の研究

(Chem. Pharm. Bull. (Japan) : 9, 451 (1961); 在 3 巻)

表記題名に関連あるオキシナフトエ酸誘導体の合成と立体化学的研究

助手 宮原竜郎

ビタミン_{B₁}拮抗物質に関する研究 (ビタミン_{B₁} 在 3 巻)

薬剤学講座

教授 桜井謙之介

医薬品の防カビ研究 (薬誌: 84, 1166 (1964); 在 3 巻)

錠剤丸剤または粉末薬品などの乾燥面に発生するカビの防止を目的とする。抗カビ物質として有機5員環ラクトン類を合成し著効ある試製品を得た。つぎにカビ侵害による医薬品の性状変化を知るため溴薬セソソに含まれるステロイドのガスクロマトグラフィーを行なって有効成分の被害異同をみた。

助教授 松本弘一

制酸剤の試験法に関する研究

スルピリンの定量法について

助教授 薬学博士 上田道広

(1) 医薬品の体内変化に関する研究 (薬誌: 84, 1104 (1964); 在 8 巻)

(2) 医薬品の防カビ研究 (薬誌: 20, 293 (1961); 在 1 巻)

薬剤製造学講座

教授 薬学博士 山崎高広

アザキノリチン類の製造学的並びに薬理作用学的研究 (薬誌: 79, 1003 (1959); 他9篇)

アザキノリチン誘導体は有機化学上、新しい骨格を有し、かつ自然界に存在しない植物塩基類縁化合物として特異な薬理作用を期待される。

講師 永田正典

アザベンゾ(C)キノリチン類の合成研究 (薬誌: 80, 1414 (1960); 他4篇)

助手 井上 信

アザキノリチン類の合成研究 (薬誌: 定稿中 (4篇))

薬品生物化学講座

教授 薬学博士 長谷純一

(1) 酵素阻害剤の研究 (Biochim. Biophys. Acta: 65, 380; 他11篇)

薬物の酵素反応に及ぼす影響および作用機構について研究

(2) 化学療法剤に関する研究 (Jap. Journal Med. Scien. & Biol.: 14, 45; 他5篇)

抗癌性、抗菌性物質の合成とそれらの生物活性について研究

(3) 天然色素に関する研究 (日本薬学大会 昭和 37, 206; 他3篇)

抗癌性のあるツルウメモドキの色素や、ウニの呼吸に関係のある色素を分離し、その構造を研究

助教授 薬学博士 小橋恭一

酵素阻害剤の研究

長谷教授の項参照

助手 中井 昇

天然色素に関する研究

長谷教授の項参照

薬品作用学教室

教授 薬学博士 木村正康

(1) 「薬物受容体結合系に関する分子薬理学的研究」 (Chem. Pharm. Bull. に多数掲載)

薬物の作用点を分子論的に追求し、理論的設計から新薬を創製してゆく方法論的研究。

現在まで、有機燐化合物 Dioxolane系化合物、Isocumarine系化合物等の新規活性物質を創製し得て、同時に機作解明に有力な武器として活用されている。

(2) 「単分子膜の生物物理化学的模型における薬物作用の研究」 協力者 室 郁子助手

細胞膜の模型を人工的に再現させて、薬理作用機構を物理化学的に追求しようとする意図の研究。

(3) 「アレルギー喘息発生機構の研究」 協力者 岡田竹史助手

喘息患者の家塵の空中産生物質の Ospanol に酷似した化合物を合成し得て、喘息研究の有力なる武器を獲得した。

(4) 「胆汁の腸肝循環調節機構の研究」

胆汁の腸肝循環の生理学的意義を新しい角度から把握し、特に胆汁の排出機構に重点を置き、利胆作用を究明。

助手 岡田竹史

教授の項参照

和漢薬研究施設・資源開発部門

研究施設長・教授 薬学博士 木村康一

和漢薬の生薬学的研究

(1) 本草、形態学的研究 (上野田隆三博士研究所蔵載: 61 (1939) 他56篇)

和漢薬の基礎的研究として漢薬の研究に構造生薬学的研究に本草学的研究を加味して正しい基源植物の決定を行なった。形態学的研究の手段として灰像法、スンプ法その他の方法に改良を試み種々応用し、また薬用資源の栽培研究についても検討を加えた。

(2) 成分、作用に関する研究 (瀬田隆三: 73 1200 (1953) 他24篇)

生薬成分を目標にした試験法の開発研究、改良法、有効成分の追求をタンニン含有生薬類、セリ科生薬、キササゲの利尿成分等多くの生薬類について検討した。

(3) 著書、綜説および報告

薬用植物学教科書のほか本草学、生薬学教科書、日本の薬用植物等の著書十四種および東南アジア

薬用植物管見記等の綜説、報告等六篇

助教授 薬学博士 吉崎正雄

和漢薬に関する生薬学的研究 (生薬学雑誌: 15 50 (1961) 他10篇)

助教授 薬学博士 金岡又雄

チオセミカルバジド関連化合物の合成化学的研究 (Chem. & Pharm. Bull.; 在 9 載)

助手 野村美紀子

教授、助教授と共同研究

助手 塚越章司

教授、助教授と共同研究

和漢薬研究施設・生物試験部門

兼任教授 薬学博士 木村正康

(1) 「和漢薬作用に関する薬学的基礎研究」 (「薬学雑誌」に数篇転載)

和漢薬を薬理活性の立場から追求し、病態実験動物を駆使して、病態薬理学の新分野を開拓する意図。和漢薬の開発検討に止まらず、新薬創製へのヒント獲得への方向に探索。現在主に動物性生薬を対象にして、複合作用の立場から検討。牛黄から新物質、麝香から新薬理活性を確得し得ている。

(2) 「実験的糖尿病動物における病態薬理学的研究」 協力者 長田永三朗講師

薬物的、免疫的、代謝的、系統的の各糖尿病動物を作成し、和漢薬作用を比較検討しながら、糖尿病治療の発見を目的とした研究。

講師 長田永三朗

教授の項参照

助手 室 郁子

教授と共同研究

助手 池田浩子

教授と共同研究

和漢薬研究施設・臨床利用部門

教授 薬学博士 大浦彦吉

(1) ミコン酸および類縁化合物の合成研究 (Chem. Pharm. Bull.: 6, 462 (1958); 他10篇)

結核菌成分である超高級脂肪酸ミコン酸の有機化学的合成研究

(2) ネズミ肝細胞RNAに関する研究 (Nature: 201, 264 (1964); 他3篇)

各種ポリゾームに結合しているメッセンジャーRNAの分離とその分子量の測定により Coding ratio の決定並びに細胞核RNAの研究と細胞質リボゾームRNAの合成に関する研究

助教授 理学博士 日合 奨

(1) 細菌の窒素代謝に関する酵素学研究 (J. Biochem.: 44, 839 (1957))

(2) 核酸に関する研究 (J. Molecular Biology: 11, 672 (1965); 他2篇および訳書1)

助手 医学博士 中島松一

(1) アルドニトロンの反応性に関する研究 (Chem. & Pharm. Bull.: 10, 461 (1962) 他1篇)

(2) 酵素を抗源とする免疫化学的研究 (生化学: 37, 276 (1965); 他4篇)

助手 大田洋子

教授と共同研究

二、機 関 研 究

昭和二十六年度 総合研究

医薬品製剤の防衛に関する研究

横田 嘉右衛門

四十万円

三橋監物、志甫伝逸、山崎高応、三ツ野間治、倉田軍一、飯田武夫、桜井謙之助、松本弘一、床司吉宗、

米山 穰（文理学部）

昭和二十七年度

同 右

横田 嘉右衛門

二十万円

三橋監物、志甫伝逸、中沖太七郎、大浦彦吉、桜井謙之介、長谷純一、松本弘一、庄司吉宗、米山 穰
（文理学部）、平本 実（金沢大学薬学部）、三浦孝次（金沢大学薬学部）、岡崎寛蔵（新潟大学）

昭和二十八年年度

同 右

横田 嘉右衛門

二十四万円

昭和三十五年度 機関研究

牛黄の生薬化学的および薬理学的研究

中沖 太七郎

三百七十五万円

北川晴雄、志甫伝逸、長谷純一、三ツ野間治、木村正康、米村長敏

昭和三十六年度 機関研究

同 右

中沖 太七郎

六十五万円

北川晴雄、志甫伝逸、長谷純一、三ツ野間治、高林昇、木村正康、米村長敏

昭和三十七年度 機関研究

同 右

北川 晴雄

五十万円

志甫伝逸、長谷純一、大浦彦吉、森田直賢、高林 昇、木村正康、小橋恭一、吉崎正雄、米村長敏
医薬品の防カビ研究 桜井 謙之介 五百八十万円

三橋監物、倉田軍一、飯田武夫、松本弘一、木村正康、上田道広、酒井立夫、吉井英一、塩谷俊作、

北辻栄太郎

昭和三十八年度 機関研究

同 右

五十五万円

昭和三十九年度 機関研究

同 右

桜井 謙之介

五十万円

飯田武夫、北辻栄太郎、三橋監物、野村敬一、酒井立夫、倉田軍一、木村正康、上田道広、吉井英一
和漢薬に特異な生物活性と構成成分との関連について 志 甫 伝 逸 七百五十五万円

高林 昇、山崎高応、榎本三郎、田上昇一郎、長谷純一、森田直賢、吉井英一、金岡又雄、永田正典、
木村正康、吉崎正雄

昭和四十年年度 機関研究

同 右

志 甫 伝 逸

二百八十八万円

上	松	松	松	松	松
田	本	本	本	本	本
道	弘	弘	弘	弘	弘
謙	一	一	一	一	一
之	作	作	作	作	作
介	夫	夫	夫	夫	夫
京大教授	東大教授	東大教授	東大教授	東大教授	東大教授
宇野	岡崎	岡崎	岡崎	岡崎	岡崎
豐	寬	寬	寬	寬	寬
三	藏	藏	藏	藏	藏
三五、	三八、	三八、	三八、	三八、	三八、
五一三六、	五一三九、	五一三九、	五一三九、	五一三九、	五一三九、
二	二	二	二	二	二

四、研究 費

文部省の化学研究交付金は次の如くである。

年度	種 別	担 当 者 名	研 究 課 題	交 付 金
二四	各 個	横 田 嘉右衛門	ジメチルアミン誘導体の研究	二〇、〇〇〇
"	"	中 沖 太七郎	駆虫生薬の化学的研究	三〇、〇〇〇
"	"	倉 田 軍 一	甲殻類皮殻成分の研究	二〇、〇〇〇
"	"	三 橋 監 物	フエナントリジン誘導体の研究	三〇、〇〇〇
"	"	飯 田 武 夫	撫順産頁岩油成分の研究 特殊構造を有するカルボン酸アミド誘導体の研究	三〇、〇〇〇
"	"	山 崎 高 応	日本民間医療における民俗学的踏査	二〇、〇〇〇
"	"	中 塩 清之介	含窒素異項環化合物の逆性石鹼	一〇、〇〇〇
二五	"	三 橋 監 物	砒素有機化合物の合成研究	一〇、〇〇〇
"	"	横 田 嘉右衛門	駆虫生薬の化学的研究	二〇、〇〇〇
"	"	中 沖 太七郎	フエナントリジン誘導体の研究	二〇、〇〇〇
"	"	三 橋 監 物	活性土類を応用してアルカロイド薬品の製造	二〇、〇〇〇
"	"	桜 井 謙之介	天然エメチン及びC ₁₇ ノエルエメチンバイマ	二〇、〇〇〇
"	"	山 崎 高 応	諸種の化学反応に関する研究	二〇、〇〇〇
"	"	飯 田 武 夫	頁岩油成分の研究	二〇、〇〇〇

二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
總合	各個	助成	各個	助成	各個	助成	各個	助成	各個	助成	各個	助成	各個	助成	各個	助成	各個	助成	各個
横田	山崎	倉田	三橋	横田	中沖	三橋	北川	山崎	志甫	三ツ野	大浦	高林	上田	飯田	北川	飯田	北川	北川	北川
嘉右衛門	高応	軍一	監物	嘉右衛門	太七郎	監物	晴雄	高応	伝逸	問治	彦吉	昇	道広	武夫	晴雄	武夫	晴雄	武夫	晴雄
医薬品製剤の防衛に関する研究	アザベンゾキノリン類の合成研究	キチンの化学的研究	水素化フエナントリジン誘導体の研究	医薬品製剤の防衛に関する研究	薬用資源の研究	水素化フエナントリジン誘導体の研究	窒素不含催眠性物質の研究	含窒素ベンゾキノリン類の合成研究	ピリダチン類含硫化化合物及びその誘導体の研究	地衣成分の微量化学的研究	α 及 ω —各種環状脂肪酸の合成	ピリダチン核置換反応について	抗微生物性燻蒸剤による医薬品の保存に関する研究	米国コロラド産頁岩油成分の研究	クマリン誘導体の薬品的応用研究	米国コロラド産頁岩油に含まれる窒素化合物の研究	クマリン誘導体の薬品的応用研究	クマリン誘導体の薬品的応用研究	クマリン誘導体の薬品的応用研究
四〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	二四〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	二〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	一四〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇

五、表彰

日本薬学会表彰

助教授 北川 晴雄 奨励賞 三二、四、七

クマリン誘導体の薬品的研究

助手 大浦 彦吉 奨励賞 三五、四、四

ミコール酸およびその類縁化合物の合成研究

村 上 清造 教育賞 三八、一一、一

薬学教育に対する多年の顕著なる功績

助教授 吉井 英一 奨励賞 三九、四、四

ホトサントニン酸の構造研究

富山県文化連盟表彰

教授 中 冲 太七郎 県文化賞 二五、一一、三

多年学徒を訓育し、植物採集、分類、生薬の研究に努め富山県家庭薬業界に指針を支え郷土の学術産業、文化への寄与貢献したによる。

村 上 清造 県文化賞 三一、一一、三

富山県図書館の普及指導につくした功績による。

日本図書館協会表彰

村 上 清 造

NDC賞 三八、一一、五

多年薬学文献利用法の研究と普及につくし薬学文献学上梓により斯界に貢献

富山県薬剤師協会表彰

教授 横田 嘉右衛門

協会賞 三四、四、七

多年教育に従事するとともに地方薬剤師会長としてその発展に尽瘁せられた功績顕著による。

教授 中 沖 太七郎

協会賞 三五、五、二五

多年薬学教育に従事し薬剤師の指導育成と薬学研究に精進せられた功績顕著

富山大学表彰（永年勤続による）

講師 志 甫 徳次郎

二六、一一、二三

” 野 島 俊二郎

”

梶 川 米次郎

”

助教授 桜 井 謙之介

二七、一一、二三

教授 三 橋 監 物

二八、一一、二三

若 杉 竹次郎

”

青 山 た き

”

教授 横田 嘉右衛門

二九、一一、二三

” 倉 田 軍 一

”

藤 田 友次郎	三三、一一、二四
内 山 幸 吉	”
藤 波 佐七郎	三四、一一、二四
松 本 弘 一	三五、一一、二二
桜 井 雅 楽	三六、一一、二二
助教授	

六、産 学 協 同

対 外 活 動

全国に多くの薬系大学があるが、その中で富山大学薬学部の特徴は一体どこにあるかを人に問われた場合、吾人はどう答えるであろうか。富山と問えば誰しも越中富山の売薬を口にし、さらに学校はと言えば富山に全国でも優秀なる薬学部があると答える。すなわち地方産業である家庭薬業界と本学部とは一心同体であり、ここに本学部の大きな特色が見出されよう。

薬学校、専門学校と長い歴史をふりかえてみると、その間絶えず業界と密接に結ばれている。大学時代になつてからも本学部教官および卒業生は地方薬業界の発展に力を注いできた。昭和三十八年九月十三日の新聞によれば家庭薬産業学術協議会が富山市の主催によって開かれ、協議の結果、新設された和漢薬研究所を窓口にして強く「産学協同体制」を固める一方、本学部発展のため業界をはじめ、市や県で後援会を組織すると報じている。この様に学校と業界とは絶えず密接に結ばれているが、次にその協力的一端を述べることとする。

昭和二十四年七月二十三、二十四日

薬用植物現地研究会（氷見、石動山、蛇ヶ島）

講師

中 沖 太七郎

昭和二十五年二月二十一日

新薬調剤に関して

桜井 謙之介

昭和二十五年七月二十九、三十日

薬用植物現地研究会（出町、大牧）

中 沖 太七郎

昭和二十六年八月十八、十九日

薬用植物現地研究会（大岩）

中 沖 太七郎

昭和二十六年八月二十一日

環境衛生測定法

倉 田 軍 一

昭和二十七年二月五、八日

環境衛生実地指導

倉 田 軍 一

昭和二十七年七月九、十日

薬用植物現地研究会（宮崎海岸、小川温泉）

中 沖 太七郎

昭和二十八年二月二十一日

参考文献について

村 上 清 造

昭和二十六年三月十六日

かび類に対する發育阻止物質

昭和二十八年七月二十一日

長谷 純一

薬局に必要な基礎化学

薬品および衛生試験法

志 甫 伝 逸

倉 田 軍 一

昭和二十八年八月二十二日～二十三日

薬用植物現地研究会（下梨、赤尾）

中 沖 太七郎

昭和二十八年十一月二十一日～二十三日

学校の飲料水検査の実地指導

倉 田 軍 一

昭和二十九年八月二十一日

薬局に必要な基礎化学

志 甫 伝 逸

昭和二十九年九月十八日～十九日

薬用植物現地研究会（小牧、青島）

中 沖 太七郎

昭和三十年八月十一日

簡易試験法

長 谷 純 一

昭和三十一年三月二十二日

処方用語について

桜 井 謙之介

昭和三十三年十月十二日

現代医薬の基礎知識

北 川 晴 雄

中 毒

倉田 軍一

昭和三十三年十二月七日
製剤について

桜井 謙之介

昭和三十三年十月二十七日
現代医薬の基礎知識

北川 晴雄

昭和三十三年十月二十八日
食品添加物

倉田 軍一

薬 局 製 剤

桜井 謙之介

昭和三十四年十月十二日

現代医薬の基礎知識

北川 晴雄

昭和三十四年十月十三日

医薬品工業

飯田 武夫

昭和三十五年九月二十二日

現代医薬の基礎知識

北川 晴雄

昭和三十五年十月十日

フラボンの化学

中 沖 太七郎

昭和三十七年二月十九、二十三、二十四、二十六日 三月一、三、五日

日本薬局方（各論）

桜井 謙之介

昭和三十七年二月二十日

化学名の解説

日本薬局方（生薬）

昭和三十七年二月二十一～二十二日

日本薬局方（通則、製剤総則）

昭和三十七年三月九日

最近の各種製剤、特に新剤型について

昭和三十七年九月十九日

最近の薬効基礎理論とその応用

昭和三十七年九月二十日

医薬品の比色ならびに分光分析法

昭和三十七年九月十四日

和漢薬研究の将来

昭和三十七年十月四日

和漢薬と二、三の研究例

昭和三十九年七月二十日

家庭薬における保健的見地からの和漢薬

上田道広

塩谷俊作

吉崎正雄

松本弘一

桜井謙之介

北川晴雄

高村昇

木村正康

吉崎正雄

木村正康

昭和三十九年八月三～五日

有峰ダム周辺の薬草調査

森田直賢

専門講座

薬学専門講座は一般成人に対し薬学に関する専門的学術的知識を習得させることを目的として昭和二十八年十一月七日より昭和二十九年二月十三日までの毎週土曜日に薬学部特別教室で開講された。受講者は合計九十四名で、男子六十九名、女子二十五名であり、その職業の内訳をみると薬剤師七十四名、医薬品販売業十一名、教員三名、公務員六名である。なお受講修了者には修了証書が授与された。

専門講座の内容は次のとおりである。

植物成分の化学	十時間	教授	中 沖 太七郎
有機化学における電子説の応用	十時間	教授	三 橋 監 物
有機電気化学	十時間	教授	志 甫 伝 逸
化学療法剤	十時間	教授	長 谷 純 一
公衆衛生学	十時間	助教授	倉 田 軍 一
最近の化学工業の進歩と製薬学	十時間	助教授	飯 田 武 夫
最近における医薬品製剤の進歩	十時間	助教授	桜 井 謙 之 介
生薬類の試験鑑識法	八時間	助教授	三 野 間 治
食を中心とした生活化学	八時間	助教授	松 本 弘 一

品質管理
化学と文献

八時間
六時間

助教授 山崎高応
助教授 村上清造

奨学援助

奨学のために薬学部に研究費を寄附された方々は次のとおりである。

昭和三十四年度

三〇〇、〇〇〇円

牛黄の化学的研究

中 沖 太七郎（富山県知事より）

昭和三十八年度

二四〇、〇〇〇円

顆粒剤の消化管吸収に関する動物実験

長 谷 純 一（富山県知事より）

昭和三十九年度

二六〇、〇〇〇円

長 谷 純 一（同 右）

長谷 純一

四〇、〇〇〇円（アルプス薬品工業より）

飯田 武夫 六〇、〇〇〇円（富士化水工業より）

長谷 純一

一四〇、〇〇〇円（富士薬品工業より）

岩城利一郎 七〇、〇〇〇円（富士薬品工業より）

山崎 高応

一〇〇、〇〇〇円（池田模範堂より）

酒井 立夫 一〇〇、〇〇〇円（同 上より）

吉井 英一

一〇〇、〇〇〇円（同 右より）

木村 正康 一〇〇、〇〇〇円（同 上より）

岩城利一郎

二〇〇、〇〇〇円（同 右より）

岩城利一郎 三〇〇、〇〇〇円（日本曹達工業より）

等である。

教育研究の助成

また薬学部の研究の助成ならびに設備充実のために寄附された会社は次のとおりである。

㈱広貫堂八〇万円、金剛化学㈱五〇万円、帝國化成㈱五〇万円、㈱池田模範堂五〇万円、富士薬品工業㈱五〇万円、アルプス薬品工業㈱五〇万円、全薬工業㈱五〇万円、久光製薬㈱五〇万円、第一薬品工業㈱四〇万円、共栄製薬㈱四〇万円、十全化学㈱三〇万円、内外薬品商会三〇万円、第一薬品㈱三〇万円、東亜薬品㈱三〇万円、中央薬品㈱三〇万円、日本全薬工業㈱三〇万円、富士化学工業㈱三〇万円、磷化学工業㈱三〇万円、大和薬品工業㈱二五万円、㈱東京広栄堂二五万円、大東交易㈱二〇万円、池田薬品工業㈱二〇万円、立山化成㈱二〇万円、富山化学工業㈱二〇万円、㈱成城薬局二〇万円、福寿製薬㈱二〇万円、前田実二〇万円、㈱池田義恵商店一五万円、㈱酒井大岩堂一〇万円で、合計九六五万円の多額の寄附金をいただき、さらに設備の充実を押し進めている。

第六節 研究室

一、医薬資源研究室

昭和二十七年に富山大学設置期成同盟会の寄付により旧敷地に並ぶ薬草園内に木造平屋建、室数八、建物面積二三八平方メートルの研究室が建てられ、薬物学講座がその一部を使用し、薬学部教官の多くが兼任の形で医薬資源の開発研究に従事してきた。

文部省からは年間四十五万円乃至五十万円の設備充実および維持費が出されてきた。

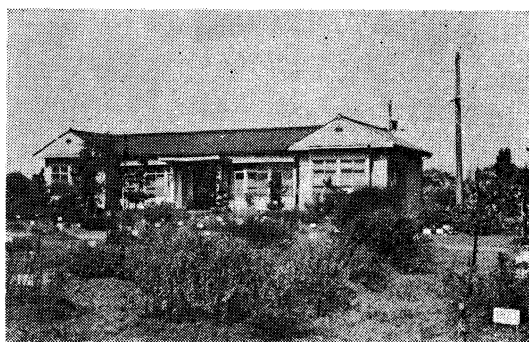
二、和漢藥研究施設

昭和三十八年に特徴ある大学と地方産業の特色を生かす研究方針が文部省により認められ「国立大学薬学部として初の和漢藥研究施設が認可された。五部門の申請に対して、初年度に資源開発部門として定員五名（教授一、助教授一、助手一、教務員一、雇員一）と設備備品費として一千五百万円の予算が許可され次の資源開発部門人員で発足した。

教授	薬学博士	木村正康
助教授	〃	吉崎正雄
助手	室郁子	
教務員	西条文子	
技能員	深井和美	

一方施設拡充のため地元県市から二年間にわたり一千万円相当の研究備品を寄付された。

昭和三十九年度に更に生物試験部門、昭和四十年度に臨床利用部門が認められ、京都大学薬学部より木栄康一教授を施設長並びに資源開発部門の専任教授として迎え、岡山大学医学部より日合助教授、大阪大学癌研究所より中島助手が着任され、更に近く米国より塚田助教授が着任される予定であり、活発な研究が行なわれている。



医藥資源研究室

現在の研究陣容は次のごとし

資源開発部門

教授 薬学博士 木村 康一

助教授 " 吉崎 正雄

" " 金岡 又雄

教務員 加藤 美紀子

" 塚越 章司

技能力員 橋本 竹二郎

生物試験部門

教授 薬学博士 木村 正康(学部兼任)

講師 長田 永三郎

助手 室 郁子

教務員 池田 浩子

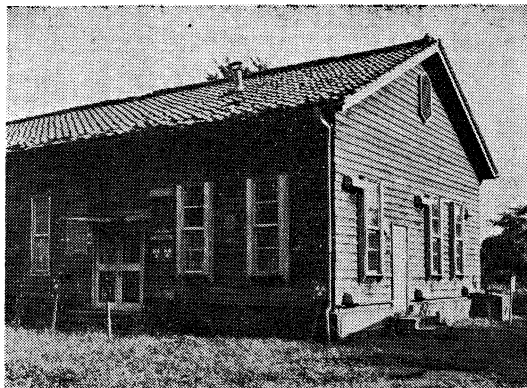
技能力員 栗山 政彦

臨床利用部門

教授 薬学博士 大浦 彦吉

助教授 理学博士 日合 奨

助手 医学博士 中島 松一



奥田における放射性同位元素研究室

教務員

太田 洋子

研究室は学部一号館四階の一部と二号館の三階の一部に設けられていて、昭和四十年四八〇坪四階の新建築が認められ、昭和四十一年三月に完成が予定されている。

更に今後徐々に部門の増設、拡大が計画され、その研究成果とともに研究所への昇格が期待されている。

三、放射性同位元素研究室

近年原子力の科学および産業利用化は進展めざましいものがあるが、昭和三十年、全国薬学部のカトリックを切って設立認可され、奥田の旧衛生化学教室の西側を改築して設置された。

アイソトープは薬学の分野に画期的な研究手段を提供し、薬学の進歩に大きく寄与しつつある。

その設備内容は次のとおりである。

建物総坪数	二十五坪	金額	九三六、〇〇〇円
間仕切り工事（昭和三十四年）	二四、〇〇〇円		

実験室	一二・五坪	測定室	三・七五坪	廊下	三五坪
シャワー室	〇・七五坪	管理室、倉庫、暗室	各一・五坪		

昭和三十八年、学部のカトリック移転に伴ない、全学的な施設として新

たにアイソトープ総合研究室が設立され、大学本部の直接管理下におかれ、鉄筋コンクリート六十一坪の近代的な施設として発足することになった。

更に薬学部は他学部とことなり、特に学生用実験室が必要なことから、昭和三十九年に薬学部専用のアイソトープ学生実験室が鉄筋コンクリート四十坪、予算七、〇〇〇、〇〇〇円で敷設された。

設備および建物の概要は次のとおりである。

アイソトープ総合研究室および学生実験室平面図（下記）

放射能ベーパークロマトグラフ自動測定装置

GMカウンター

2πガスフローカウンター

シンチレーションデテクター

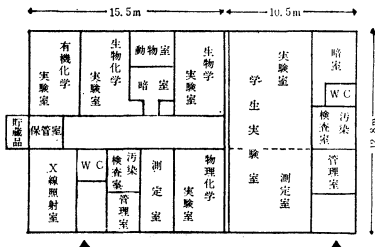
GMサーベイメーター

ローリツツェン検電器

一 三 一 一 二

四、動物舎

大学になって生物薬品化学および薬物学の講座が新設されると、その研究のために必要な動物試験が活発に行なわれ出すようになった。最初は医薬資源研究所内で飼育していたが、間もなく前身が温室の一部であった農夫小屋二十坪を改造して動物舎とし、家兎、モルモット、ラット、マウス、イヌ、ネコ、ニワトリ、ハト、



ガマ、食用ガエル、トノサマガエルの諸動物を飼育していた。

学部 の五福移転に伴って、二号館裏側に温室と並んでブロック建て三十坪の動物飼育室が完成され、冷暖房用としてパッケージが入ってる。これは他学部も含めた共通施設であるが、薬学部としては主にイヌ、ネコ、家兎を中心として、その他ラット、モルモットを飼育している。またこの建物の裏にはカエルを入れるコンクリート製池がある。前記動物飼育室が飼育を目的としているのに対して、一号館四階には恒温恒湿装置を付設した動物試験室がある。環境条件をより厳密にする必要のある長期にわたる試験や観察を目的として使われている。なおこの試験室はマウス、ラット、モルモット等の小実験動物を中心に飼育管理している。

五、研 究 設 備

施設建築の充実に伴ない、分析、測定機器の購入設置が行なわれ、本学部教官の研究の促進ばかりでなく、薬品会社の利用もあり、地方産業に大きな貢献をしている。

主要なものは次のとおりである。

購入設置年度	機 器 名
昭和三十年	島津QR五十型分光光度計
昭和三十四年	共和真空冷凍乾燥器
昭和三十五年	日本分光赤外分光光度計
昭和三十五年	コタキガスクロマトグラフ装置

- | | |
|--------|---------------------------|
| 昭和三十三年 | 佐久間冷凍遠心分離機 |
| 昭和三十六年 | 日立EP型自記分光光度計 |
| 昭和三十六年 | 日立チゼリウス |
| 昭和三十七年 | 島津高感度ガスクロマトグラフ装置 |
| 昭和三十七年 | 西独エルウェカー万能製剤機 |
| 昭和三十八年 | 理学電機自記X線分析装置 |
| 昭和三十八年 | 日本光電電子管式藥理実験装置 |
| 昭和三十八年 | 協和科学単分子膜表面圧力精密測定装置 |
| 昭和三十九年 | 日立パーキンエル・マー製回折格子自記赤外分光光度計 |
| 昭和三十九年 | ラジオメーター自記式タイトリグラフ |
| 昭和三十九年 | シバタBEET式表面測定装置 |

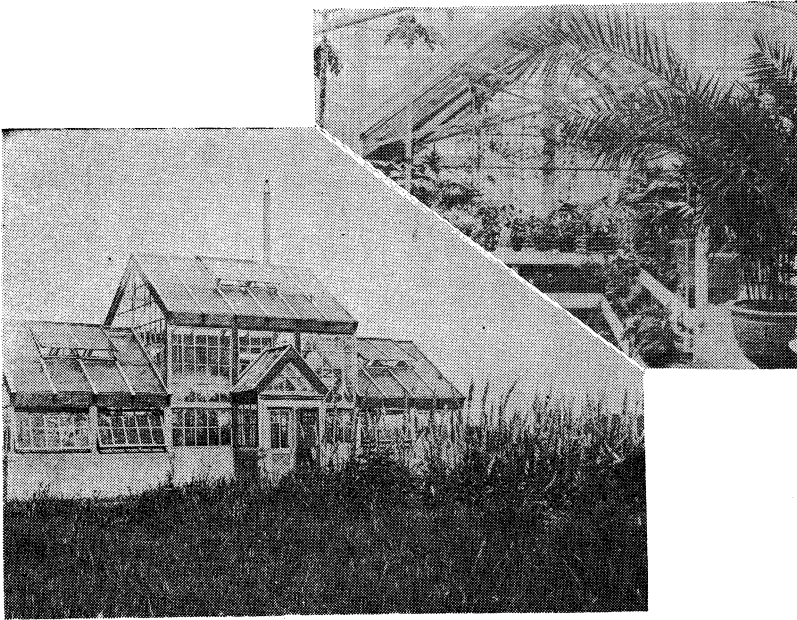
第七章 薬 草 園

第一節 藩政及び薬学校時代

富山藩主前田利保が嘉永六年（一八五三）に富山の郊外東田地方村に（現在、日本海ガス会社南隣り）薬草園をつくったのが富山における薬草園の始めと考えてよからう。明治元年をさかのぼること十五年である。利保が死去したのは六十才で安政六年（一八五九）である。利保の死後はしだいにおとろえ、かえりみる人もなくなり、間もなく明治を迎えたわけである。

売薬業者が明治初年以來売薬の改良のため薬学校の設立に努力し、明治二十六年（一八九三）に共立富山薬学校をつくったが、経費がわずかなため薬草園をつくるまでにいたらなかったので、和漢薬、薬用植物に詳しくかった日野五七郎講師は、薬用植物の実地授業のため生徒を引卒し、呉羽山その他へ植物採取にでむき、よく実地指導を行なった。明治二十八年には、武庫川光寧講師とともに生徒を引卒し、山田温泉、下茗温泉地方へ採取旅行にかけ、また、明治二十九年には単独で立山地方に採取登山し、研究を怠らなかった。その後も薬学校、薬業学校の生徒は、遠足をかねて植物採取を行なった。

薬用植物栽培の記録が見えたのは、明治三十九年が最初のように思われる。すなわち婦負郡役所が郡内各村に薄荷を栽培しようとして、富山市立富山薬業学校長堤從清に依頼した。堤校長は種々調査の結果その栽培法

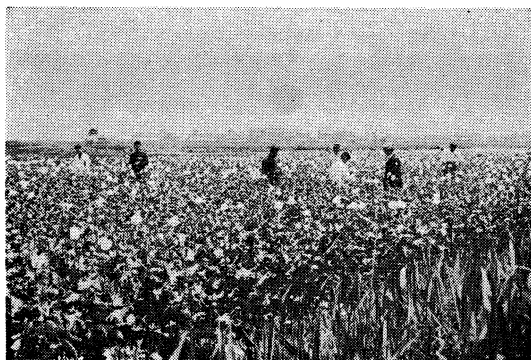


富山薬学専門学校の温室

及び製脳法を報告した。また野生薄荷の試験を行なったところ、成績良好であったので、婦負郡役所では一層善良なる種類のものを栽培せば前途すこぶる有望であろうと、岡山県及び東京育種場へ苗の注文をなし、音川、山田、卯花、室牧、野積の各村に栽培せしめた一方野生の薄荷をも採取し、各村に植えつけさせた。

富山県売薬同業組合では、同三十九年、薬草園を開き、薬草の殖産を決議した。しかしこれは実施したかどうか不明である。

富山県立薬業学校は仮校舎でせまく、かつ創立そうそうで薬草園設置するまでにいたらず、四十二年皇太子殿下行啓記念事業として薬草園の設立を決定したまま県立薬学専門学校へと移った。



薬草園（奥田）

第二節 富山県及び富山県売薬同業組合の薬草園及び薬草栽培

第一次世界大戦のため売薬原料の暴騰し、売薬業者の打撃大なるものがあつた。その対策の一つとして薬草栽培の急務なることがさげばれ、県は薬草栽培地の選定を薬専の藤田教諭に依頼した。かくて大正五年六月上旬新川郡堀川村元共進会跡に決定し、朝比奈泰彦博士の出張指導をうけ秋にいたつて播種及び苗の移植（二段歩）を行なつた。大正六年には、東京帝国大学理科大学教授柴田挂太理學博士の指導をうけさらに二段歩を拡張した。

大正九年二月、県売薬同業組合では、県立薬草園ではせまいから早く完全な国立薬草園を作つてほしいと、政府へ陳情した。また大正十年五月、県は薬草調査会をつくり、薬草栽培の普及について調査研究をなすと共に、また県立薬草園の国立移管を請願した。

大正十二年七月二十三日、県売薬同業組合富山支部では、富山市へ支部の薬草園設置のための補助を申請した。翌大正十三年にいたつて、呉羽山稲葉ガーデンに薬草園を設置した。その後薬専大谷教授の指導をうけ、事業を拡張していった。

国立薬草園設置陳情

富山県は売薬をもって主要物産となし、年に売薬原料として使用する薬草は代価百五十拾萬円の巨額に上りその多くは支那、朝鮮その他各地より購入し、富山地方の産出にかかるものわずか数拾萬円に過ぎず。これは遠隔地方に仰ぐこと多きがために自然高価を支払う事となり營業の不利尠からざれば、県當局また、ここに見る処あり、大正六年度より県下上新川郡堀川村地内に国立薬草園を設置したり。しかれどもその一ヶ年の経費はすこぶる小額にして栽培地積は六百歩に過ぎず、したがってその産出小額に止まり、依然支那、朝鮮等の各地より購入し、しかして古来本県の地味各種薬草栽培に適する箇所多くこれを農家の副業とするも収益鮮小ならざるべし。今や国立薬学専門学校はすでに国立となり完全なる薬草園の設備また急要なるにあたり、幸いに適當なる地所を選び国費を支出し規模大なる薬草園を設置することを得ば独り地方売薬業者の需要を充たしその不幸を排却するのみならず、ひろく他地方の需要に応ずる事難きにあらす。国産奨励の効また大ならんと確信するなり、よって大正九年度に於て本県に国立薬草園を設置することに決定あらんことを熟望して止まず。

第三節 富山農事試験場における薬草栽培

大正九年県立薬草園を農事試験場の管理に移した。昭和十三年まで、各種の薬草を栽培研究し、地方における薬草栽培普及に貢献した。

第四節 本校の薬草園

県立薬学専門学校では、県会の強い要望で敷地を拡め、狭いながらも薬草園——標本園程度——をつくった。生

薬学専攻の藤田教諭はもっぱらその管理にあたり、また県の薬草栽培に指導的役割をはたした。

官立移管の始めには、薬草園となる敷地がないため、大正十二年一時神通川の廃川地一万坪を使用した。翌年栽培技術員、川端明七を採用し、サフラン、ケシ、オウレン、ハマナス、アマ、ヨロイグサ、センキュウ、ウイキョウ、トウキ、ハッカ、モナルダソウ、アメリカアリタソウ、ジキタリス、ペラドンナ、ヤマジソ、アオシソ、ゴマ、スイカズラ、アケビ、シロバナムシヨケギク、カミツレなどを栽培した。

昭和二年富山県都市計画事業のため廃川地の使用ができなくなったため、その頃ようやく薬園として充実にできた薬草園敷地も返還の止むなきにいたった。かくて本校敷地の西隣りに一〇三八六坪の敷地を買収し薬草園とすることになった。この年新たに大温室をつくった。

さらに同年薬園課を置き、大谷教授を初代薬園課長として、その管理運営にあたらしめた。大谷課長不幸病床についたため、上野教授課長に就任、昭和六年、左記設備をつくった。

管理所（事務室、農夫室、農具室、肥料室便所） 二〇坪 一棟

乾燥収納室 三〇坪 一棟

堆肥舎 二一坪 一棟

百葉箱（気象観測箱）

昆虫飼育箱 三

薬草園は標本園、実験園、経済園、苗圃に区分し、多くの薬用植物を栽培してきた。

すなわち、ライムギ（バツカク接種のため）キキョウ、ゲンノシヨウコ、カノコソウ、ヨロイグサ、センキュウ、ペラドンナ、アサガオ、ウイキョウ、トウキ、ハッカ、モナルダソウ、ホップ、アメリカアリタソウ、

ケシ、カンゾウ、サフラン、クスノキ、ハゼノキ、キササゲ、ハトムギ、エビスグサ、ハブソウ、セネガ、オランダセンニチ、アマチャ、シオウなど六十余种が栽培試験され、温室では、レモングラッス、ビロウ、コーヒノキ、コカ、コショウ、キナ、ワニラ（メキシコ産のワニルラが開花レ、約一カ年後果実が成熟した。これはわが国で最初であつたとのこと）、ゴムノキ、アラビヤゴムノキ、パパヤ、アナナス、ロカイ多肉植物など千余种が試作栽培され教授資料にされた。薬用植物の成分研究のために、パッカクの人工栽培、ヨウシュハッカ、アマチャ、トウキ、センキュウ、オランダミツバ、シヤク、アミガサユリ、カノコソウ、シオウ、キササゲ、ヤマゴボウ、ヨロイグサ、ウイキョウ、サボンソウ、ゴマ、アサガオ、アマ、ムクゲ、ミソハギ、ハナスゲ、エニシダなどの栽培も行なわれ、さらに、標本園にはマオウ、スズラン、シラン、タチテンモントウ、イカリソウ、クララ、ヒキオコシ、ミシマサイコ、ツリガネニンジン、カラダイオウなどをはじめとして六百余种が栽培されてきた。

研究 状 況

大谷教授の麦角の人工栽培、上野教授の甘茶の研究、野口教授の川芎研究（成分少なく研究にあまり役にたたなかったが、薬園課としては参考になった由。）金岡教授の吉草根の研究、桜井助教授の地黄の研究、中沖助教授の植物色素の研究、その他教官の研究に多くの材料を提供してきた。

また高橋校長が昭和五年欧州から土産に持ち帰った、「ドイツ産ゲンチャアナ。薄荷、スペイン産甘草、唐大黃等多数のものが移植に成功し、なかでも、洋種薄荷は桜井助手によって主成分が確定された。

戦 後 の 状 況

戦後温室を修理したが、人手の燃料の欠乏で復活をはかることができなかった。また薬草園も人手不足のた

め荒廢したが、広貫堂の協力奉仕を得て耕作し、アサガオ、ウイキョウその他を栽培し、売薬原料に供した。

第五節 五福の薬草園

四十年近く育てあげてきた奥田の薬草園も五福移転と共に消えることになった。前田利保の東田地方村の薬草園とともに歴史の記録の中にだけ形をとどめることになったとはいえ、ながらくの業績は永遠にわが薬学界の業績として残ることであろう。

五福の薬草園は移った許りで機能發揮はこれからである。

目下のところ、温室が完成し、標本園一、〇〇〇坪が整備され、薬草園五、〇〇〇坪は整備最中である。今後「和漢薬研究施設」の活動と共に大きな貢献をすることであろう。

第八章 図書館

第一節 薬学校、薬業学校、県立薬学専門学校時代

現在「共立富山薬学校」「富山市立富山薬学校」「富山県富山市立富山薬業学校」「富山県立薬業学校」の印を押した蔵書、主として教科書および参考書は五十余冊保存され、県立薬学専門学校時代の図書、雑誌はやや多く所蔵されている。すなわち官立移管の時、国へ寄付された図書は和書で九四六冊、洋書二六五冊、計一二一冊であった。この中には、中西司馬校長、平山増之助校長の蔵書も含まれている。

第二節 富山薬学専門学校時代

一、初期

官立時代になると図書、雑誌の購入が急に増えたので、教務部に図書課をおき、大正十一年には専任職員を採用し、大正十三年には図書課を独立させ、図書課員を増員し二名とし、教授を図書課長に任命した。しかしこの頃は図書館学に素人の人々によってなされたため、図書の整備は欠陥の多いものであった。

二、基礎整備時代

昭和二年九月母校出身の村上清造が生徒の相談相手として図書課の事務にあたった。先にものべたように当時の図書館の状況は利用しやすいものではなかったので、これが改革の必要を感じ、昭和三年から着手した。

貸出方法の改善

当時七千冊の蔵書のうち、よく利用される図書約二千五百冊が教官とくに教授の室にあった。そのため助教授助手および生徒はそれらを利用するのに困難を感じた。すなわち図書館にいても読みたい本が多く教官の室にあり、しかもまた生徒の借り出しには一々主任教官の認印を要したので、図書館はあまり利用されなかった。そこで、教官への長期貸出を制限し、かつ認印を廃し、自由に利用できるようにした。生徒の利用は急に十倍にまで増加した。

図書の整備改革

図書台帳、図書分類、事務用図書目録の整備にとりかかった。先ず貸出中の全蔵書を図書館に集め分類の変更をなし、事務用目録カードの作製から始めた。

本館に採用された図書分類の変遷を見よう。

大正十年創立時代（桜井善次郎講師）

- 化学 一 藥品工業及化学工業 二 物理学 三 農芸・博物 四 薬剤師 五 文化
- 六 地理・歴史 七 辞典 八 法令彙纂 九 写真帳

大正十三年黄葉課長時代

- 総記 一 哲学・宗教・教育 二 法制・経済・社会・産業 三 化学 四 物理・数学・天文 五 工学・医学 六 生物学・植物・鉱物・動物 七 薬品学・調剤及局方 八 歴史・地理 九 文学・語学・美術

昭和三年村上就任翌年改正

- 総記 一 精神科学 二 社会科学 三 自然科学 四 薬学 五 工学 六 産業 七 美術 八 語学・文学 九 歴史・地理
昭和五年「日本十進分類法」発表につき採用
○ 総記 一 精神科学 二 歴史科学 三 社会科学 四 自然科学 五 工芸学 六 産業 七 美術 八 語学 九 文学

三、図書館の新築と図書館公開

従来講堂の一部を事務室とし、かつ閲覧室としていたのであるが、利用の増加とともに狭くなったので、昭和四年百坪の新館をつくった。昭和六年高橋校長の発意により薬業界ならびに一般に公開することとした。そして一般によく利用される参考書を閲覧室に接架式にならべることにした。

四、目録サービスと書誌学的研究

基礎的整備が終わったので、昭和七年薬学関係の雑誌記事索引を作り始めた。さらに昭和十年に辞書体目録

の作製にとりかかった。この目録は図書館の図書を著者名、書名、件名（主題名）のいずれからでも探すことができるようになっていた目録である。

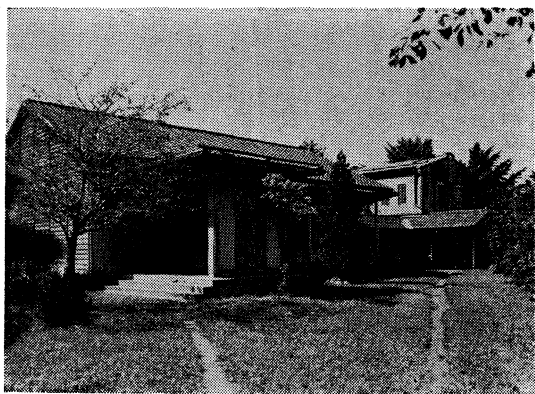


図 書 館（奥田）

参考書の利用法の研究をしていく間に参考書そのものの作り方の拙さに気がついたからである。

五、図書館後援会の発足

戦争が烈しくなるにつれ、図書の価格も高くなった。ことにドイツ書はおどろく程高くなり、したがって図

このサービスの開始によって大変喜ばれたが実際には閲覧者にあまり利用されず、図書館員がつかつて答える道具のようであった。利用の少ない今一つの理由は、生徒がこのような目録にないことと、教官の研究には主として雑誌論文が参考にされるからである。したがって目録よりも日本化学総覧、バイルシュタインスハンドブック、デアオルガニツシエンヘミー、ヘミツシエスツェントラルブラットのように、それらの論文の検索に必要な抄録誌や索引誌の方がよりよく使用されるのだということがついてきた。そこで、それら参考書の利用法を研究することが大切だということになり、研究はしだいに、薬学・化学参考書の書誌学的研究に向っていった。かくて昭和十四年に「邦文科学文献の欠陥と目録作製の不備」を化学工業時報に発表した。これは

書雑誌の購入もさしひかえなければならなかった。その時昭和十五年七月富山化学工業株式会社の北川承三専務が図書館を利用しての会社で図書館後援会をつくり、学校に必要な図書を購入して寄付したいという申出があり、喜んでそれをうけることにした。これが今日富山大学薬学部図書館後援会の前身である。この後援会にたいしとくに有難味を感じたのは、昭和二十年八月十五日以後の非常に困難な時期―校費でほとんど図書を購入することができなかった時代―をどうにか乗りこえることができた時であった。敗戦後大学になり、大学院が設置されるまでは、経費が少なく困難をした。終戦後だけで、後援会から約三百万円の図書、雑誌の寄付を受けた。

六、戦災復興と文献利用法の講義

村上清造は昭和十五年退職し県立図書館に入った。そのあと、森田弘課員召集うけ、図書館は一時戦時体制下におかれ、臨時的な人々によって維持された。昭和二十年終戦後、村上清造図書館に復帰し再び図書館活動が開始された。

すなわち図書館は昭和二十年春から重要図書を新保村に疎開した上、書庫が戦災の難をまぬがれ、焼失したのは、閲覧室備付の少数のものだけだったことは、誠に幸運といわなければならないが、事務室備付の台帳及書類、図書のカード目録等が全部焼失したので、その再整備が復興後の大きな仕事であった。そのため課長をふくめて四人が連日この整理にあたった。昭和二十四年には新館が講堂のあとに設立され、活動の拠点ができた。

昭和二十二年には村上清造は事務官兼教官となり、さらに図書課長には就任した。そして、ながらく研究し

てきた薬学文献利用法を「薬学概論」の名で生徒に講義を始めた。このような講義が正科となったのはわが国で始めてである。

八、大 学 時 代

富山大学が設置されると附属図書館が設置され、薬学部には分館がおかれることになった。村上清造は、事務官として初の専任分館長となり、大学の学生に課外的に薬学文献利用法の講義を開始した。さらに昭和三十一年薬学部の助教授に併任し、「薬学図書解題」を担当した。昭和三十九年度から「薬学文献学」と課目を改め、昭和三十七年四月退任した。

そのあと、木村教授、森田教授が分館長となり、本田善彦事務官が事務主任に任命された。

一方大学になってから活発になったのは、参考相談業務（レファレンスサービス）と文献複写サービスである。これによって初めて、昭和二年に開始した図書館改革が実を結んだことになったのである。

昭和三十八年五福に薬学部が移り、同三十九年に、薬学専門図書室と改称した。

薬学部図書委員会

大学附属図書館の発足にあたって、大学に図書館商議会、学部図書委員会がつけられた。委員会は、図書資料の選定、予算の要求、図書館の運営に多大の貢献をしただけでなく、委員長は図書館商議会の商議員として大学図書館の運営に参画した。

大学発足以来、薬学部の図書委員長に就任した教官はつぎの六氏である。

志甫 徳次郎 中沖 太七郎 三 橋 監 物 志 甫 伝 逸 長 谷 純 一

倉田軍一

九、蔵

書

県立の薬学専門学校時代は、学術雑誌といえは薬学雑誌だけであつた。官立時代になると、内外の学術雑誌の購入が著しく増加し、昭和六年頃には六十二種、（和三十二種、洋三十種）の学術雑誌を購入していた。

昭和六年度の経常費（全校費の約四％に相当）

図書	三九六円・九三	新聞	一二一円・二〇	雑誌	一二六八円・八七
----	---------	----	---------	----	----------

公報	一五七円・八四	その他	一四円・四五	計	五五五九円・三四
----	---------	-----	--------	---	----------

その外、創立以来雑誌のバックナンバーもつぎからつぎと購入された。今日所蔵されている多くのものはこの時代に購入されたものである。

第二次世界大戦後は、経費が少なく図書雑誌の購入に非常に苦勞した。富山大学設置同盟会寄付金による百四十三万八千百拾五円の図書、雑誌の寄付、薬学部図書館後援会による約三百万円相当の図書、雑誌の寄付によって、辛じて今日までになったのである。薬学部経費だけで内外の学術雑誌が購入できるようになったのは大学院ができ、和漢薬研究施設が設立せられてからである。昭和四十年三月三十一日現在の蔵書は和書一万二千三百六十五冊、洋書六千六百七十三冊、計一万九千三十八冊である。また昭和三十九年度の図書、雑誌の購入費は百二十八万円で、図書館後援会からは一年間三十万円の図書、雑誌が寄付されている。

第九章 同窓会

第一節 創立と経過

大正二年第一回の卒業生が母校を巣立ったのであるが、大正六年まで同窓会は設立せられなかった。同窓会の創立は、大正六年末官立移管に内定し、寄付金の募集が始まってからである。時の校長小野瓢郎の口吻をきいて、卒業生で母校に勤務していた志甫徳次郎、野島俊二郎の二人が相談の上、第六回卒業生の第三学年在学中、校の内外と連絡をとったところ急速に話がまとまり、同窓会の設立となったのである。（大正七年四月四日？）

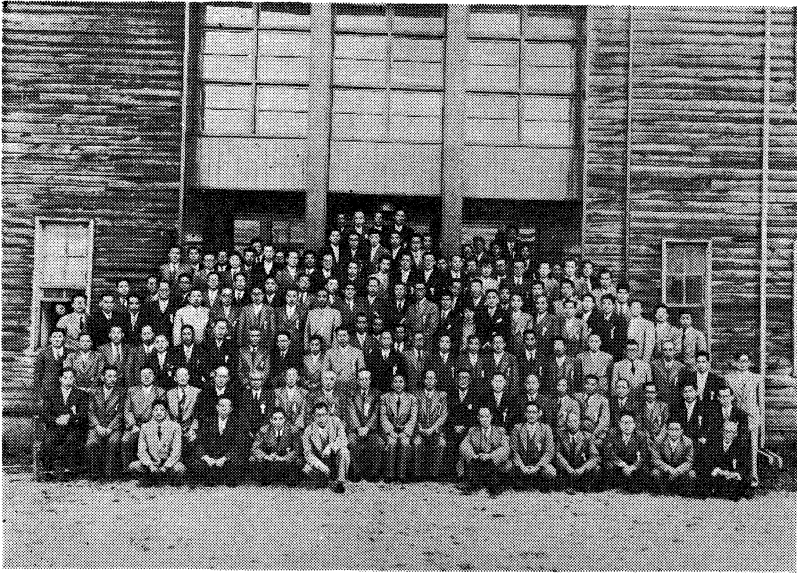
創立にあたって一番問題になったのは、「会の維持費を年々徴収してよいか、または一時制の会費にしたらよいか、そしてまたその徴収方法並びに不納者のあった場合はこれをどう取り扱うか、その他金額をどう定める」かということであった。

最初の役員にはつぎの会員が選ばれた。

会長	小野 瓢郎	副会長	横江 宇三郎
幹事	佐藤 与二郎	米田 信宗	志甫 徳次郎

第二回の総会からは、毎年卒業式の午後新入生の歓迎をかね行なわれた。

大正十一年五月十日、開校式後八清楼において同窓会懇親会を開催した。出席者は特別会員会長外六名、県



富山薬窓会全国大会（昭和29）

内外の会員五十名あった。

大正十一年三月二十三日 第五回の総会で会則を改訂し、「第十二条本会支部を設置せんとするものは、本部の承認を経るものとす」とした。すなわちこの年から支部設置のことが明確化し、同年大阪支部、静岡支部が結成された。

大正十四年三月二十日 第八回総会で大阪支部からの提案があり、会員の不幸にたいし弔慰を表わすことになった。

昭和四年四月十二日 幹事会において昭和五年度から総会を五月十日の母校開校記念日に行なうことにきめた。

昭和五年五月十一日 第十三回総会開催、従来総会に出席する会員だけで総会を開いてきたが、今後総会には委任状をとり、全会員の三分の一以上の出席によって総会成立するように会則を変更した。

昭和十一年五月十日 富山市で開催された日

満博記念に、第十九回同窓会総会と大懇親会を開いた。富山、大阪、東京、愛知、兵庫、新潟、台湾、宮城、奈良、福井、秋田、岐阜、京都とほとんどの支部から会員がはせ参じ、二百有余名の会員は、総会場にも、八清楼の大懇親場にも満ちあふれる大盛況であった。

昭和二十五年三月 同窓会報「遠久朶」の復刊第一号を刊行した。

昭和二十五年五月十日 母校は昭和二十四年五月、学制改革により大学に昇格した。同窓会をどうするかということが、すなわち官立薬専に移管したときと同様問題となり、官立薬専の同窓会と大学卒業生によってつくられんとする同窓会とを合体することが五月十日の総会で決定し、名称を富山薬窓会と称することになった。入会金は昭和二十五年度入学生より金壹千円に改訂し、一般会員は年額二百円の会費をとることにした。

昭和二十八年三月二十九日 大学になってから、卒業式は大学で総合的に行われるようになり、学部としては、はなはだ寂しいものになったので、学校と同窓会協催の形で、卒業祝賀会、新入会員歓迎会をかねた会合を開き、以後毎年開催してきた。

昭和二十九年五月四日 富山産業博覧会開催を機に富山薬窓会全国大会を開いたところ、全国各地―東京、大阪、兵庫、滋賀、長野、岐阜、栃木、愛知、京都、愛媛、山形、青森、和歌山―から百数十名の会員が参加し、盛大な大会となった。

第二節 経 理

第一回の基本財産設定

創立にあたって、校友会の規則を改正して卒業生寄付金の半分を同窓会にわたすことに決った。大正七年四月二十九日校友会々則をつぎのように改訂した

「第十五条卒業生ハ卒業ノ際特ニ金拾貳円ヲ寄付スルモノトス。但シ内金六円ハ同窓会ヘ支出スルモノトス」

同年に制定された同窓会々則には「第九条本会の経費は富山県立薬学専門学校々友会々則第十五条による寄付金の一部及一般の寄付を以て之に充つ」となっており、これによって会の経理を行なった。

大正九年七月五日 経常費は第六回卒業生からの寄付金によっているので、第一回乃至第五回の卒業生から一名につき五円宛寄付金をつのることにした。大正十一年末で四百十円（二百二十名分）集まった。

大正十年度卒業生から校友会へ、金二十円寄付することになったので、本会へは大正十一年度から一名十円宛の寄付金はいることになった。

昭和四年三月二十日 第十二回総会において、横江副会長より緊急動議として基本財産確立の件が提案され可決した。

理由 本会は最初校友会からくる金で（卒業生の寄付金）運営し、それを基本金としてその利息でやるという考えでやってきた。ところが経費が増大し、その利子だけではやれぬことが明かになったので本提案となった。そして一人拾円以上の寄付をうけることになった。

昭和六年四月二十七日 校友会の総会において、卒業生寄付金を三十円とし、内二十円を同窓会に廻すこと



同窓会賞

になった。

昭和七年五月十日 第十五回総会で基本財産設定を可決し基本財産規程を制定した。

昭和九年三月三十一日現在における応募状況を見ると、申込人員六二八人、申込総額六、八〇一・五〇円既納額六、六二三・五〇円となっており、昭和九年四月十二日現在における基本財産額面総額一三、二七一・八九円投資価額一二、一四七・三八円となっていた。

終戦後の状況

昭和二十年前の同窓会基本財産は約貳万円、その内訳は有価証券として公債額面で約壹万七千五百円、現金は定期、当座を合せて二千三百円であった。その頃までの年間経常費は事務費、会合費、事業費（名簿、同窓会報等）合計が二千五百円見当でこと足りた。また当時までの卒業生一人当りの同窓会への寄付金は金二十円であった。

しかし戦後の経済変動では、どうにもならなくなったので、二十一年度の卒業生五十円、二十三年度以降は二百円としたが、会の維持は困難になるばかりであった。

第二回基本財産設定

折りしも、昭和二十九年五月四日富山産業博覧会記念業窓会全国大会が開かれ、基本財産募集の件が上程、満場一致で設定にきまり、方法は幹事会に一任された。募金目標金三百万円、一口金壹千円（一口以上何口にても）とし、ただちに募金運動を展開することになった。

昭和三十一年十二月二十日現在では応募総口数壹千九百三十四口八五、応募総額壹百九十三万四千八百五十円となった。

現在經常費は新卒業生が卒業の際に入会金として納める会費（一人五千元）によって大体一年間の經常費にあてている状態である。

第三節 事業

一、大正六年母校官立移管決定にあたって同窓生から寄付募集を行なった。これはおそらく大正七年第一回総会で決定したものと思う。大正十年十一月十九日賞動局より同窓会の寄付金一千四百七十円にたいして褒状がきた。その後も寄付金が少しあてきていた。

一、三羽松太郎先生記念品資金募集 大正十年八月二十七日の評議員会で決定。大正十一年一月三十日応募額一七〇円になり、金時計金鎖一揃を贈呈した。

一、山崎弥次郎（小使）表旌 大正十一年三月二十三日の第五回総会で決定、ただちに慰藉金寄付勧誘状發送し、金六十円を贈呈した。

一、関東震災義損金募集 大正十二年九月十一日評議員会を開き、同窓生一名につき金壹円以上の義損金を募集することは決定した。応募総額二百九十五円に本会より百円を補助しそれぞれ見舞品、見舞金を送った。

一、退職職員に記念品贈呈 昭和四年二月二十二日評議員会を開催し、退職職員に記念品を贈呈することを可決した。

一、追悼慰靈祭 昭和六年五月九日、第十四回総会后追悼慰靈祭を行なった。

一、勤続者功労者表彰式 昭和六年五月十日母校開校十周年記念式閉式のあとで、表記の表彰式を行なった。

一、函館大火災見舞 昭和九年三月二十一日函館市の大火のため、赤坂猛、米道豊蔵、新沼一郎、木村真三の四氏に見舞品を送った。

一、風水害見舞 昭和九年九月、関西、中国一帯の風水害で、卒業生の多くが罹災したので、本部から見舞品を送った。

一、奨学賞設定 昭和十年四月二十五日の総会で、奨学賞設定の件が提案され可決した。基本財産中から金壹千円也を奨学資金とし、その利息で奨学賞を優秀者に贈呈することになった。

一、黄葉先生慰問金贈呈 昭和十一年母校に十有八年勤務された黄葉先生退職されたので、慰問金を募集した応募者六六一名で募金額千二百七十二円六十五銭となり、千二百十五円三十四銭を贈呈した。

一、出征会員慰問金募集 昭和十三年六月六日の近畿支部連合大会よりの提案に熟慮を加え評議員会において慰問金を募集することになった。昭和十五年四月二十日現在で、募金額千九百九十二円七十七銭に達した。

昭和十四年八月十四日までに第一回、昭和十五年四月二十日までに第二回慰問支出した。昭和十四年九月五日「遠久栄」を慰問号として刊行した。

一、御真影奉安殿造営募金 昭和十五年七月、母校、校友会、同窓会の三者合同し、皇紀二千六百年記念事業として奉安殿をつくることになり、募金に決した。建設基金一万二千九百七十三円四銭（内同窓会員の募金額八千二百十八円）集まり、昭和十六年十一月三日落成式をあげ、昭和十七年五月一日奉遷式を行なった。

一、母校復興促進期成会募金 昭和二十一年二月二十六日、期成会を設立し募金を開始した。同窓会は事実上中心となり協力した。総額四百八万円余りの内卒業生からは、百十六万二千円余寄付金が集まった。

一、志甫徳次郎、野島俊二郎、中沖太七郎三先生に記念品贈呈 昭和三十六年三先生に記念品を贈呈するため

資金募集をなし、昭和三十七年三月二十日記念品贈呈式を行なった。

一、創立七十五周年記念事業　昭和三十八年八月十二日母校の前身である共立富山薬学校在明治二十六年に創立されてから、七十五周年に（正確には七十三年）当るので、第一回準備委員会を開き相談した。九月九日第二回の会合を開き、実行委員会を設立し事業をすすめることになり、実行委員長に石黒七三、副委員長に東京、大阪、富山の三支部長をあてることにし、つぎの事業をきめた。

一　創立七十五周年記念式典　昭和四十年十月二十三日

一　富山大学薬学部七十五年史

一　薬窓会記念会館（図書室を含む）

第四節　会報及名簿の発行

会　報

会報は最初校友会誌第九号（大正八年三月号）に第一号が付録として登載し、その後毎号に会報を登載してきたが、昭和八年に「遠久朶」という名で単独誌として刊行し、年四回宛発行してきた。戦争がはげしくなった昭和十六年に二回、昭和十七年に一回刊行して休刊することになった。

戦後になって昭和二十五年に復刊一号をだし、昭和三十三年一月に復刊六号を改版特集号とし、昭和四十年一月号で改版八号となった。途中、母学図書館で昭和十七年号を発見し、一度通巻号数を修正し現在通巻四十三号となっている。七十五年史編集中に富山県立図書館に昭和十六年四月号（三十号にあたる）を一冊発見し

たので、現在の通巻四十三号は四十四号に直さねばならぬことになった。

名 簿

名簿は初め校友会特別会員として校友会誌に毎号掲載し、大正七年からは、校友会誌に付録としてつけた会報に掲載してきた。その後会員の増加のため単独発行されてきたが、今明かでない。(昭和八年、昭和十五年、昭和十七年、昭和二十五年、昭和三十五年、昭和三十九年発行)

終戦前後の混乱で、昭和二十五年度分の作製にあたり、移動不明者を明かにするために非常な苦心を払い今日のような名簿になった。

第五節 支 部

名 称	創 立 年 月 日
大 阪 支 部	大正一〇、一一、二二
静 岡 県 支 部	大正一一、八、一三
東 京 支 部	大正一五、三、二〇 承認
京 都 支 部	大正一五、三、二〇 承認
兵 庫 支 部	大正一五、四、二六 承認
新 潟 支 部	大正一五、八、二二
愛 知 支 部	昭和二、八、七

山形県支部	香川県支部	北支支部	徳島支支部	和歌山支支部	樺太支支部	関東支支部	満洲支支部	台湾支支部	三重支支部	秋田県支部	北海道支部	福井県支部	岐阜県支部	朝鮮支支部	富山県支部	宮城県支部	奈良県支部
昭和二四、一一、一三	昭和二四、二、三	昭和一二、一〇	昭和一二、一〇	昭和一二、六、五	昭和一二、八、二八	昭和一二、七、六	昭和一二、四、三	昭和一二、一〇、一一、二三	昭和一二、九、七、二三	昭和七	昭和七、八、二一	昭和七、五、八	昭和六、四、一二	昭和六、五、三〇	昭和四、七、七	昭和四	昭和四、一二、一九承認

滋賀県支部	大韓民国支部	石川県支部	福島県支部	国鉄支部	山陰支部	九州支部	長野県支部	広島島支部	群馬馬支部	神奈川県支部	山口県支部
-------	--------	-------	-------	------	------	------	-------	-------	-------	--------	-------

不明	不明	不明	昭和三四、一一、一四	昭和三一、九、二二	昭和三一、四、一一	昭和三一、四、一八	昭和二九、三、六	昭和二八、六、一	昭和二七、四、二〇	昭和二六、八、一三	昭和二六、四、一
----	----	----	------------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	-----------	-----------	----------

あ　と　が　き

編集委員長　梶　野　友　秀

本史の編集をお引きうけたものの、何分にも素人揃い、史料の収集および、とりあげ方、表現の仕方等全くむづかしいことばかりで、ご期待にそうごできたかどうか、また先人の業績や史実を正確に表現し得たかどうかを案じています。

ただ委員諸君の熱心な努力で、散在していた資料がともかくにも一冊に集められ、母学が大学として、大学院をもち、さらに他に例のない和漢薬研究施設をもち、新たな発展期に入りつつありますときに、すぎさったことを省みる資料ともなりますれば、これにまじは喜びはありません。さらに皆々様の御批判や新しい資料の提供によってつぎの歴史がつけられる一助ともなりますれば、これまた幸いとするところであります。

執筆にあたって引用した過去の文献の用語、用字はできるだけ、「当用漢字」「現代かなづかい、および送りかな」にかきかえました。

本史の担当は、大学時代は上田道広君、田上昇一郎君が受けもち、他は村上清造君が受けもち、桜井雅樂君は学部資料提供を受けもちました。岩城利一郎君は転任のため、小橋恭一君はアメリカ留学のため中途で退任されました。他の委員諸君は、編集全般にわたり、指示、助言、校閲の労をとっていただきました。その他事務局（事務長、庶務、会計、学務）の方々には資料提供で種々御力添えにあずかり、また母校職員ならびに旧職員、卒業生の方々には何かとお世話になりました。今回の多くの資料は、薬学部の図書室、富山県立図書館所蔵資料によりました。それらの館の方には大変お世話になりました。殊に県立図書館には、特別の便宜を

はかっていたいただきました。使用した参考資料はあとにかかげました。また校正にあたっては、編集委員の外、福田助手、宮原助手並びに学生諸君に助力を仰ぎました。

お世話になった方々に厚くお礼申し上げます。

昭和四〇年九月二十七日

編集委員

委員長 梶野友秀

副委員長 倉田軍一

委員 村上清造

高桑徳太郎

山崎六郎

上田道広

田上昇一郎

桜井雅楽

小橋恭一

岩城利一郎

参 考 文 献

一、学校関係

富山県立薬学専門学校一覽 明治四四、大正三年、六年、七年

富山薬学専門学校一覽 大正一〇—昭和一一四

富山薬学専門学校概況 大正一三、五、五調

富山薬学専門学校沿革史並概況 昭和六、五、一現在

富山薬学専門学校開校記念写真帳〔大正一一〕

富山薬学専門学校写真帳〔大正一四〕

富山大学十五年史 昭和三九

二、校友会関係

校友会誌 一号（明治四四年）—革新二〇号（昭和一一五）

報国団誌 一号（昭和一六）—四号（昭和一九）

校友会誌 復刊一号（昭和二二）—三号（昭和二三）

自治会誌 一号（昭和二三）、二（昭和二四）

富薬新聞 富山薬専自治会編一号（昭和二三）、二号から富山薬専新聞、三号（昭和二四）

富薬新聞 富薬新聞部編一号（昭和二七）騰写刷

薬 窓 薬学部薬友会新聞部一号（昭和三七）—一五（昭和四〇）

三、同窓会関係

卒業記念写真帳 一回（大正二）—昭和四〇年

同窓会々報（校友会誌附録） 一号（大正八）—一四号（昭和七年）

所 蔵

明治四四（県立） 大正三年、六年、七年（高岡）
昭和一五（県立）

一号、二号（県立） 一〇号（池田太吉贈） 革所一三、一六、一八（県立）

一号（遠野卓爾、米用栄七）

一号欠

富山薬専同窓会誌 遠久栄 一号（昭和八年）—四四号（昭和四〇年）

会員名簿 昭和八年、昭和十五年、昭和十七年、昭和二十五年、昭和三十五年、昭和三十九年

四、富山薬業関係

売薬同志会 富山売薬沿革概況 明二九

富山県売薬同業組合 富山売薬紀要 明治四二—

富山薬事新聞社 富山県売薬業者名鑑 二冊 昭和五年

小柴直矩 富山県売薬の開拓者 昭和六年

岸 政雄 薬都の売薬史—明治時代の売薬（薬都の産業）

高岡高等商業学校 富山売薬業史料集 昭和一〇年 三冊

富山県売薬同業組合 富山県売薬同業組合沿革史

佐藤種治 広貫堂史 昭和二年

中田清兵衛 中田家開祖三百八十年記念 昭和二六年

植村元寛 行商圈と領域経済—富山売薬業史の研究 昭和三四年

五、富山薬学関係

前田利保 本草通串 五六冊

前田利保 本草通串証図 五冊 嘉永六年

前田利保 万香園裡花壇綱目 五冊

飛見文繁 越中医薬史談 昭和二二年

六、薬業新聞

富山薬業時報（創刊富山薬報） 三八号（明治三九）—一五三（明治四〇）

薬業誌 一号（明治四三）、二号（明治四三）、一七号（明治四五）—二四号—三二号

（大正元）後に薬業新報と改題

北陸薬報 一五七号（大正一三）—一九九号（昭和二）

富山薬業新報 一七号（大正五）—三九号（大正一一）

三〇号（県立）

昭和八（県立）

県立

県立

広貫堂

第一薬品工業株式会社

県立

国立国会図書館所蔵フィルム

（県立）

三九、四〇、四二、四四、四五、欠

二四、二七、二九、三〇、三一

三二（県立）

県立（欠あり）

県立（欠あり）

富山葉報 一一号(大正一〇)―一五(大正一三)

富山葉事新聞 三七号(昭和四)―九二号(昭和一二)

葉都の産業 一二三号(昭和八年)―

七、日刊新聞

中越新聞(後に富山日報) 三〇一号(明治一八年)―

北陸政論 明治二五年―明治三二年

北陸タイムス

八、薬学薬業史関係

日本薬学会沿革史― 明治一三年―明治四三年まで 明治四四年刊

下山順一郎、池口慶三 日本薬制註解 大正一〇年

池田松五郎 日本薬業史 昭和四年

白井光太郎 本草学論攷 昭和八年 三冊

池口慶三遺稿 薬律改正案通過顛末史 売薬法通過顛末史 昭和九年

古賀惣五郎 明治大正日本薬学史 昭和一二

清水藤太郎 日本薬学史 昭和二四年

金尾清造 長井長義伝 昭和三五年

東薬史抄 昭和三三

熊薬七十五年史抄 昭和三五年

京都薬科大学八十年史 昭和三九年

金沢大学薬学部同窓会會員名簿 昭和三一年度

東京薬科大学東薬会會員名簿 昭和三五年八月現在

東京大学薬友会會員名簿 昭和三九年版

薬学雑誌―通信欄 明治一四年―大正六年

薬剤誌―通信欄 一号(明治二二)―三七号(明治二五)三四号(明治三四)―三六六

(大正五)

県立(欠あり)

県立(欠あり)

県立(大正初期まで調査)

県立

県立(問題毎に大正初期調査)

金沢大学薬学部寄贈
東京薬科大学寄贈

欠あり、一部は日本薬剤師会本部所蔵誌調査

九、富山県関係

富山県会議事速記録 明治四〇—四三三冊

富山県 越中史料 明治四二年 五冊

富山県 鶴駕奉迎記録

富山県主催連合共進会富山県協賛会 富山県案内 大正二年

富山県主催連合共進会事務報告 大正四

富山県 富山県誌要 大正一三

富山県知事官房統計課 富山県 昭和四

富山県 富山県政史 昭和二—二二 九冊

富山測候所 富山県災異史料 昭和一五

富山県農業試験場 富山県農業試験場史 昭和二八年

富山県報 明治二二—

富山県統計書 明治二四—二七、二九—三三

富山県統計摘要 明治三七—大七

富山県勢一覽 明治三八、四一、大正三一—二

富山県統計要覽 明治四二—

一〇、富山県学事関係

富山県教育会 明治三九年開催 富山県教育大会記録 明治四一

富山県庁 行啓記念教育一班 大正二年

富山県立富山高学校同窓会會員名簿 昭和三八

富山教育学会會員名簿 昭和三一年

私立富山県教育会雑誌 一号(明治二二)—三二号(明治二六)

富山県私立教育会雑誌 一号(明治三五)—六〇号(大正五)

富山教育 一〇七号(大正二)

富山学事年報 明治三三

県立

県立

県立

県立

県立

県立

県立

県立

県立

県立

県立

県立

村立

村立

県立

県立

県立

県立

富山学事年報 明治三十三年

富山県統計書—学事篇 明治三四—四四、大正一一—四四

富山県教育要覧 明治四二調査

富山県学事統計一覽 明治四五

富山県学事要覧 明治四五、大正二、四、五

富山県学事統計 大正元

富山県学事統計便覧 大正一—三

一、富山市関係

富山実業協会 富山市経営策 明治三四—四四

富山市史 明治四二—大正二 二冊

富山市役所 行啓紀念 大正元年

富山市史 昭和一年 二冊

富山市史 昭和三年 三冊

富山市統計書 明治三五年

富山市立星井町小学校九十年史 昭和二八年

二、他

高志入 六卷（昭和一六）

科学朝日 二四卷一—号（昭和三九年）

朝日ジャーナル 第五卷五号

文部省年報 大正一〇—

西岡虎之助 新日本史年表 昭和三〇

日本産業史大系

注 「県立」は富山県立図書館「高岡」は高岡市立高岡図書館の所蔵を示し、他は薬学部の特設図書室の所蔵である。

県立

高岡

県立

県立、高岡

県立

県立

県立

県立

県立

県立

星井町小学校より寄贈

県立

県立

県立

大学

県立

県立

県立

参 考 資 料

- 一、反魂丹額―前田正甫筆
- 一、共立富山薬学校敷地調査

同 同

- 一、共立富山薬学校長邦沢金広消像画
- 一、共立富山薬学校募集広告
- 一、富山市立薬学校長桜井勘六写真

- 一、桜井甚六、東京大学製薬科(別科)卒業証明資料

- 一、富山市立富山薬業学校長堤從清肖像画及履歷書

- 一、同窓会賞―懸額

- 一、共立富山薬学校印

富山市立富山薬学校印

富山県富山市立富山薬学校印

富山県立薬業学校印

富山県立薬業学専門学校印

富山薬学専門学校印

富山大学薬学部印

- 一、富山県立薬学専門学校、富山薬学専門学校開校記念絵葉書

- 一、富山県立薬学専門学校第一回卒業生アルバム

薬 学 部 記 録

其他薬学部の諸記録類、薬学部の専門図書室の諸記録類多数参考としたが省の略する。薬専戦災前の記録として残っているものは、県立薬学専門学校時代からの学籍簿、官立時代の職員履歷書が主であった。

広貫堂所蔵

富山法務局所蔵公図及び登記台帳(森利保氏調査)

富山復興都市計画事務所

県立図書館所蔵地図

広貫堂所蔵

北陸政論

桜井伝次郎所蔵(桜井雅楽君調査)

査)

東京大学薬学部図書室

遺族所蔵(中土哲郎君より)

会員武藤雲晴君遺族より

蔵書から

”

”

”

富樫利衛君卒業証書から

村上清造君卒業証書から

学 部

会員横江宇三郎遺族より

会員横江宇三郎遺族より

重要事項年表

年 月 日	西洋紀元	事	項	本文頁
明治 三、一二	一八七〇	大学東校売葉取締規則		一四
五	一八七二	洋葉授与願		一六
六	一八七三	舎密学校建設ノ儀ニ付願		一七
七、八、一八	一八七四	医 制 公 布		一八
八、三	一八七五	新川県権令山田秀典の告諭と藥学校設立計画		一九
九、一、一	一八七六	藥舖開業試験開始		一九
一〇、一、二〇	一八七七	大政官布告第七号「売葉規則」公布		二〇
一三、一、一七		藥品取扱規則公布		二〇
一五、五、二七		「藥学校通則」定まる		二二
一五、一〇	一八八二	太政官布告第五十一号「売葉印紙稅規則」公布		二二
一八、一一、一七	一八八五	売葉者大会において、藥学校設立を決議		二二
二三	一八八九	藥品營業並びに藥品取扱規則公布		二〇
二三、八、三〇	一八九〇	東京帝国大学丹波敬三教授來富——藥学校の設立を強調		二三
二六、八、三	一八九三	共立富山藥学校設立認可		二八

二七、一、二七	一八九四	郷沢金広（初代）校長となる	二九
二七、二、一		共立富山薬学校開校	三〇
二九、二、一	一八九六	第三回創立記念式挙行	三一
三〇、三、一三	一八九七	共立富山薬学校第一回卒業式挙行	三二
三〇、一〇、三〇		富山市立富山薬学校認可	三五
一一、一		富山市立富山薬学校開校、桜井勘六校長兼教諭に任命	三五
三一、一二、二七	一八九八	日野五七郎校長兼教諭に任命	三五
三一、四、一	一八九九	富山市立富山薬学校第一回卒業式	三五
三一、八、一二		市内中野町よりの大火のため校舎全焼	三六
九、一一		梅沢町円隆寺の堂宇を借り授業開始	三七
一二、一四		富山市参事会は、薬学校に化学衛生試験を行わしむ	三八
三三、三、一六	一九〇〇	富山市会において薬学校廃校の決議をなす	三九
四、二二		富山市会廃校決議を変更し薬業学校に転換をきめる	四一
五、二		県知事の認可を得て、富山市立富山薬業学校（富山薬業学校と改称したとする記録もある）と改称、堀大次郎校長に任命	四四
三四、六、一〇	一九〇一	市立富山薬業学校と改称？（市立薬業学校と改称したという記録もある）	四四
七、一〇		星井町にある富山南部高等小学校校舎の一部に移る	四四
八、一一		日本薬剤師会々頭下山順一郎来富、講演さる	九一
三六、七、二〇	一九〇三	山王町小学校跡へ移る	四五

八、二九	三七、三一	三八、四、一	四、二九	三九、一二、一四	四〇、三、二七	四、一	四、二五	一〇、二六	四一、一一、一一	四一、一二、一四	四二、七、一七	八、一八	四三、三、一二	四、一	四、一二	六、二八	八、三一
一九〇四	一九〇五	一九〇六	一九〇七	一九〇八	一九〇九	一九一〇											
内務省衛生技師池口慶三来富、講演	市立富山商業学校校長、長野恵太校長兼任を命ぜられる	五番町尋常小学校訓導兼校長稲垣茂校長心得を命ぜらる	堤從清校長兼教諭に任命	富山県立薬業学校設立の件県会通过	富山市立富山薬業学校最後の卒業式	富山県立薬業学校設置布告	開 校 式	製薬士中西司馬校長兼教諭に任命	小松原文部大臣富山県立薬業学校視察	富山県立薬業学校を専門学校令による専門学校に組織変更する諮問案を県会において可決	文部省、専門学校令による薬学専門学校を県立として富山市に設置、四三年四月から開校することを認可	専門学校規程定めらる	富山県立薬業学校々友会解散式	富山県立薬学専門学校開校、中西司馬校長に任命	始 業 式	中西司馬校長死去	平山増之助薬学博士校長兼教諭に任命
九五	四五	四五	四五	五一	四六	五三	五三	五三	九五	一〇三	一〇五	一〇五	八三	一〇六	一〇六	一〇八	一〇八

一九、四、二八	一九四四	高橋隆造校長退任、徳島高等工業学校製薬化学科長横田嘉右衛門博士校長任命	一八二
一九、七、		富山薬学専門学校特設防護団編成	一八三
一九、一〇、五		高橋前校長名誉教授の名称を授けられる	一八二
二〇、四、	一九四五	海軍糧品廠、陸軍衛生材料廠本校へ疎開、科学技術員養成所附設	一八三
二〇、八、二		空襲により校舎全焼	一八四
二〇、九、一〇		富山高等学校を借り、授業開始	一九二
二〇、一〇		遠久栄寮開始（日本海ドック株式会社の寮を借り）	二八二
二一、二、一六	一九四六	富山薬学専門学校復興促進期成会結成	一九三
二二、四、一五	一九、七	実習室三練竣工、奥田校舎に復帰	一九四
二二、一〇、五		復興記念式挙行	一九四
二三、一〇、二三	一九四八	校友会を解散、自治会結成	二一九
二四、五、三一	一九四九	富山大学薬学部設立、横田嘉右衛門薬学部長に任命	二五六
二五、四、一	一九五〇	薬学部講座数——七講座	二八八
九、二〇		薬学部規定制定	二五九
二六、三、三一	一九五一	富山薬学専門学校廃止	一九四
二七、	一九五二	富山大学期成同盟会から医薬資源研究室寄附	三二四
二八、一、七	一九五三	二十九年二月十三日まで、薬学専門講座開設	三二二
二九、五、四	一九五四	富山産業博覧会を機に、富山薬窓会全国大会開催	三四七

三〇、	三〇、	一九五五	放射性同位元素研究室設置（奥田校舎）	三二七
三〇、	七、一		文部次官通牒により専攻科設置	二九五
三七、	一、一六	一九六二	中沖太七郎教授薬学部長に任命	二六〇
三七、	四、一		志甫伝逸教授薬学部長に任命	二六〇
三七、	四、一		薬学コース、製薬コース制をとる	二八九
三七、			五福校舎の建築着工	二六八
三八、		一九六三	五福校舎にアイソトープ総合研究室設置	三二七
三八、	四、一		大学院（修士課程）設立	二九五
三八、	四、一		和漢薬研究施設認可資源開発部門設置	三二五
三八、	二、一二		講座数一〇講座となる	二八九
三九、	四、一	一九六四	五福校舎竣工、奥田より移転	
三九、	四、一		和漢研に生物試験部門認可	三二五
三九、			薬学部専用のアイソトープ学生実験室設置	三二八
四〇、	四、一	一九六五	和漢研に臨床利用部門認可、和漢薬研究施設長に木村康一教授任命、資源開発部門の教授兼任	三二五
四〇、			和漢薬研究施設の建物着工	二六八
			富山大学薬学部七十五周年記念事業実行委員会より資料館寄附工事着工	二六八

索引について

- 一、本索引は事項に重点をおいてつくった。人名は、学校教育に貢献した主な人々に限った。
- 一、五十音順配列にあたっては、清音のあとに濁音をおくことにした。
- 一、仮名遣では、長音の場合、ウ列では「う」を使い、お列では「お」を使った。コウシュウは「コオシュウ」とした。
- 一、人名は第一次に姓で配列する。
- 一、同義語、類似語には、↓をつけて「オ見ヨ」参照をしめた。
- 一、関係概念には「…」をつけ、「オモ見ヨ」参照をしめた。
- 一、頁数のゴシックは、前付の頁数を示す。
- 一、頁数が増加したので、索引を詳細にすることができなかった。

索引

- あ
アイソトープ研究室→放射性同位元素研究室
朝比奈泰彦 アート写真・一四一・一八六
阿部初太郎 二一・三〇・一二二
アルバイト 二八三
- い
移管運動 三四・四九・一七〇
育英会→奨学資金
池口慶三 アート写真・九五
石井義春 二一・二九
石尾貞朝 一四八
石黒七三 六
医制 九
- ..薬品取扱規則、薬品営業並びに薬品取扱規則
稲垣 茂 四五
稲垣宗正 一七六
井上孝哉 一七六
井上政寛 一一六
医薬資源研究室 三二四
医薬制度 九
う
内山覚仲 七
-
- え
円隆寺 三七
お
大久保秀民 二九
大菅昇平 四〇
大鷲岩 二二七・二五七
大間知円兵衛 四九
遠久衆 三五二
小野瓢郎 アート写真・一一〇・一六五・一七二
思い出の数々 一七五・一七八・一八六
か
海外研究 二三三・三一
開校記念祭 三一・二二四
開校式 五三・一一二・一八四
課外活動→課外教育
課外活動→課外教育 八四・一四二・二一六・二八五
課外教育
火災による焼失 三六・一八四
金井久兵衛 二九・三〇
官立移管運動→移管運動
官立移管寄附金 一七七
が
外国売薬 一五六・二四七

学位	二二六
学位 .. 研究・論文	
学術講演↓講演	
学生	二七七
.. 健康管理・厚生施設・生徒・補導	
学生アルバイト↓アルバイト	
学生復興喫茶店	一九三
学科課程↓学科目	
学科目	七一・一三六・二二二・二八六
き	
機関研究	三〇八
.. 研究	
寄宿舎	一五一・二六八・二八二
徽章	一三一
記念の校庭	二五六
教育	七一・一三六・二〇八
.. 大学教育	
教育研究助成↓研究費援助	
教科書	七三
教官↓職員	
教官研究費	二七六
.. 研究費援助	

教授↓職員	二八
共立富山葉学校	
ぎ	
技官↓職員	
く・ぐ	四〇
久郷米次郎	三〇
桑田安次郎	一八〇
軍事教練	
.. 戦争と教育	
け	
経常費	七〇・一二四・一九〇・二七四
慶松勝左衛門	アート写真・九二
研究	二三一・二九七
.. 機関研究	
研究室	三二四
研究奨励費↓研究費援助	二三五
研究生	
.. 専攻科・大学院	
研究設備	七八・三二九
研究費援助	二三五・二七六・三二二・三二三
.. 教官研究費	
研究費交付金↓研究費援助	
研究論文	二三一・二九七

健康管理	二七九
こ・こ	
雇員↓職員	
講演	九〇・九六・一六〇・二二一・三一八
校歌	二〇九・二二六
広貫堂	二八
校旗	
講座学科目↓学科目	アート写真・一八〇・二二六
講師↓職員	
校舎	アート写真・四七・六九・一二二・一八七 ・二〇九・二六三・二六八
講習会	九六・一六〇・二四九・三一七
コース別科	二八九
..学科目	
厚生施設	二七七・二八一
校則	五四・一二五・一九五
..薬学部規程	
校庭↓記念の校庭	
高等中学校医学部薬学科	一三
弘明堂	二八
綱目袖珍鑑	八
校友会	八二・一四三・二一六
校友会歌	一四八

校友会誌	一四四・二二〇
木間瀬策三	一七一
古山調次郎	二一
古山正人	二一
近藤平三郎	一八六
御真影奉安殿	二二八
さ	
佐伯権三郎	九九
裁判化学教授案	七五
作業員↓職員	
桜井勘六	三〇
佐多愛彦	二九
沢田金太郎	二四三・二五〇・三一七
産学協同	三五八
..對外活動・薬業界	四五
参考文献	
山王町小学校	
志甫伝逸	アート写真・四・二六〇
敷地↓校舎	
視察者	九〇・一六八
施設↓研究設備	
七十五周年記念事業	三五二

師天堂	二八
柴垣鼎太郎	一八七
下山順一郎	二九・九一
緒鞭会	七
修学費	八七・一五三・二八一
修学旅行	二二四
就職幹旋	二八三
賞↓同窓会賞・表彰・平山賞	
奨学援助↓研究費援助	
奨学資金	二七九
職員	六〇・一二八・一九六・二六〇
植物学教授案	七六
植物採取	七八
職務分掌↓職員	
処方自究審査委員会	一五九
資料館	二五六
..図書館	
志波久次郎	二一・二九・三〇
新聞と薬学校	一〇〇
自治会	二二九
実習	七五・一三九・二二五
助教授↓職員	

助手↓職員	
せ・ぜ	
精寿堂	二八
成績品↓生徒成績品	
生徒	六六・一三三・二〇六
..学生	
生徒主事	一八二
生徒成績品	八四
生徒の生活	八七・一四九・二三三
舎密学校設立の請願	一六
関野善次郎	三〇・四〇・一七四
設備↓研究設備	
専攻科	二九五
戦災	一八四
戦災後の状況	一九二
戦争と教育	二二八
全国薬業大会	一六五
そ	
卒業式	三三・四六・一三四
卒業試験	一三八・一八二
卒業生	六八・一三三
卒業生の活動	六八・八九・一五四
	・二三八・二八四

た	対外活動	九六・一五六・三二七
	.. 産学協同	
	高橋 謙	一四八
	高橋三郎	
	高橋隆造	
	高昌兵次郎	四〇
	滝野 勇	一九三
	田中清次郎	二九
	田村輔三郎	三〇
	丹波敬三	二九五
だ	アート写真・二三・一八六	
	大学院	二九五
	大学教育	一〇・二五七
	大学昇格	二五一
	大学東校	一四
ち	忠孝石↓大鷹岩	
著	書	二三三
つ		
堤	堤 從清	アート写真・四五・四六
て		
	寺田久蔵	三〇

と	図 書	八一
	図書室↓図書館	
	図書館	一四一・三三八
	図書館公開	一八一・二五〇・三四〇
	富山県工業会所属工業試験所	一六五
	富山県富山市立富山薬業学校↓富山市立富山薬業学校	二四六
	富山県売薬振興会	五〇・一〇〇・一六三
	富山県売薬同業組合	一〇三・一一〇・一七八
	富山県立薬学専門学校	一二六
	富山県立薬学専門学校別科問題	四九・五九
	富山県立薬業学校	二九・三九・四七・九九・二四八
	富山県薬剤師会	五二
	富山市―県への寄附	一七六
	富山市―移管寄附	三八・五〇
	富山市会―廃校決議	四一
	富山市経営策	三六
	富山市総曲輪小学校	三四・五九
	富山市立富山薬学校	三六
	富山市立富山薬学校―類焼	三八
	富山市立富山薬学校―廃校決議	四一・五九
	富山市立富山薬業学校	九八
	富山市立富山薬業学校―試験部	

富山実業協会	四二
富山家業談話会	四九
富山製産品品評会	一六五
富山青年商工会	五一
富山大学設置期成同盟会	二七四
富山大学附属図書館薬学部分館↓図書館	
富山大学薬学部↓薬学部	三四四
富山大学薬学部図書館後援会	四四
富山南部高等学校	四四
富山日報—論説	三九・一〇一・一〇四
富山売薬	四・六・一四
.. 外国売薬・売薬・売薬処方研究・薬業団体	
富山売薬学会	二四四
富山売薬改良組合	九九
富山売薬協会	四九・一〇〇
富山売薬行商会	四九・一〇〇
富山売薬倶楽部	四八・五〇・一〇〇
富山売薬処方研究会	二四四
富山売薬青年会	四〇・四七・五〇・九七・一〇〇・一六〇
富山売薬同業組合↓富山県売薬同業組合	
富山売薬同志会	四七・一〇〇
富山本草学	七
富山薬学会	一〇〇

富山薬学実修会	一六二・一六四
富山薬学専門学校	一一〇・一七〇・一九五
同	一八四
同	一八六・一八八
同	二二三
富山薬学専門学校彙報	一八二
富山薬学専門学校興亜青年学徒隊	一八三
富山薬学専門学校特設防護団	二五〇
富山薬学専門学校図書館後援会	一九二
富山薬学専門学校復興促進期成会	四八・一〇〇
富山薬業倶楽部	一〇〇
富山薬業研究会	五一・一〇二
富山薬業時報	二八
富山薬剤会社	一六一
富山薬親会	八八・三四五
ど	三五三
同窓会	三四八・三五一
同窓会支部	三五〇
同窓会費	三二八
同窓会事業	
動物舎	
な	
内地研究	二三五・三一〇
中井敏雄	一九三

中沖太七郎	アート写真・一八四・二六〇	は	
中谷善次郎	四九	橋本 孝	四九
中田清兵衛	二二・二三・二九・一七六	畑亀次郎	四〇
中田太七郎	三〇	反魂丹の額	五
中田秀太郎	四〇	ば	
中西司馬	アート写真・五三・一〇六・一〇八	売 菜	四
中村米次郎	二九	..富山売菜	二〇
長井長義	アート写真・三八・一一一・一七一	売菜印紙税規則	二四四
	・一七五・一八六	売菜改良研究	
長野恵太	四五	..外国売菜研究	
滑川薬業協会	一六一	売菜改良調査会	一五九・二四五
に		売菜規則	一九
新川県権令の告諭	一八	売薬業界の支援	一六八
日本薬学会―総会	一六五	..産学協同	
日本薬学会北陸支部	二三七	売薬研究	九六
..北陸薬学会		..富山売菜	
入学志願者	一三三・二〇七・二七七	売薬検査心得書	一九
入学生	六六・一三三・二〇六・二七七	売薬講習会↓講習会	
丹羽藤吉郎	アート写真・九一	売薬講演会↓講演	
ぬ		売薬者大会	二一
布上亀太郎	四〇	売薬処方研究	一五九
ね		..売薬改良研究	
年 表	三六四	売薬処方研究会	一五九

壳薬振興座談会	二四六
壳薬調査会	二四五
壳薬取締規則	一五
ひ	
日南田宇八郎	二九・三〇・四九
日野五七郎	アート写真・二九・三五・三六・三九・四四
表 彰	二〇五・三一五
平山松治	アート写真・一八〇
平山増之助	アート写真・一〇八・一〇九・二三五・一四六
平山奨学賞	二二七
ひ	
備品↓研究設備費	
ふ	
福島猪太郎	二九
復興期成会↓富山薬学専門学校復興促進期成会	
ぶ	
武道場祭神鎮座	二二七
文化講演↓講演	
分析化学教授案	七六
べ	
別科問題↓薬専	一二六
ほ	
報告団	一八二・二一六

報告団誌	二二一
放射性同位元素研究室	二二七
北陸薬学会	二二七
..日本薬学会	
保寿堂	二八
北海道薬学大学問題	一一〇・一七一
補 導	二七八・二八一
堀大次郎	アート写真・四四
本草学↓富山本草学	
本草通串	八
本草通串証図	八
ま	
前田正甫	四
前田利保	七・三三一
松井伊平	二九・三〇
萬香園	七
萬香園裏花壇綱目	八
万代常閑	五
み	
水上嘉平	四〇
水野正太郎	四〇
水橋壳薬青年会	一六一
水橋壳薬俱樂部	一六〇

水橋大成薬学講習会	一六三
光沢宗道	一三五
密田林蔵	二九・三〇
む	
邸沢金広(初代)	アート写真・二一・二三・二九・三二
も	
門 柱	二一〇・二二六・二五七
門 碑	一八九
文部省売薬取締	一六
文部大臣視察	九五
や	
薬学教育	一〇・一二
..教育	
薬学研究会	九九
薬学専門学校↓富山県立薬学専門学校、富山薬学専門学校	三二二
薬学専門講座	
..講習会	
薬学専門図書館↓図書館	
薬学部	二五一
薬学部規定	二五九
薬学部図書委員会	三四三
薬学夜学会	一〇〇
薬学校↓設立運動	一四・一八・二二

薬学校通則	一二
薬業界の支援↓産学協同	
薬業組合矯正会	一〇〇
薬業誌社	一六二
薬業団体	九九
薬剤師試験規則	一〇
..薬舗開業試験	
薬草園	七・七八・八一・一四〇・一八一・三三一
薬草栽培	三三一
薬品営業並薬品取扱規則	一〇・一〇六
薬品取扱規則	一〇
..医制・薬品営業並薬品取扱規則	
薬舗開業試験	九
..薬剤師試験規則	
薬律↓薬品営業並薬品取扱規則	一〇
山田 薫	アート写真
山田秀典	一八
山中樵作	一九三
山村弁之助	五三
ゆ	
有効売薬と薬湯薬選奨	一五九
よ	
庸人↓職員	

洋薬授与願	一六
四方町薬学衛生研究会	一六二
横江清次郎	三〇・三五・三九・四九・一一六
横田嘉右衛門	ア―ト写真・三・一八二・一九二・二五六
り	
留 学	二三三・二三五・三一〇
ろ	
論文↓研究論文	
わ	
若林常太郎	三三
若林元四郎	四九
和漢薬	六
富山本草学・本草通串・薬草園	
和漢薬研究施設	三二五
同	二六一
―職員	

富山大学薬学部七十五年史

昭和四十年十月二十三日

編集 富山大学薬学部七十五年史

編集委員会

(富山市五福)

発行 富山大学薬学部七十五周年

記念事業実行委員会

(富山市五福)

印刷 スガキ印刷工業株式会社

(富山市古鍛冶町五番ノ一)





七十五年史

年

富山大学薬学部七十五年史

昭和40年